RECONSTRUCTION

# 改造



## クロポトキン著作總評

自叙傳・パンの征服
戰爭論・相互扶助論

思想と研究

河田嗣郎
堀江歸一
室伏高信
賀川豊彦
森戸辰男
柳宗悅
山川均

評論と文藝

大杉榮
昇曙夢
谷崎潤一郎
岩野泡鳴
武者小路實篤
菊地寛
近松秋江

# 改造の第一聲

經濟學界の新研究現る

法學博士 ドクトル（經濟學） 森本厚吉先生新著 【即時送本】

# 生活問題

## 生活の經濟的研究

◇菊版全一册◇
◇定價金四圓◇
◇送料十二錢◇

## 忽再版

著者は生活問題の學術的研究として有數の權威であることは最近内外に發表された幾多の論文によりて證明されて居る。
本書は博士多年の研鑽によりて完成された生活の經濟的研究であつて普通の常識論に過ぎない、同種の著作とは全然其趣きを異にし學界未踏の境地を開拓せるのみならず刻下の急務である。生活改善問題の徹底的解決に對して社會の指南たるべき一頭地を拔いた新式の名著である。故に廣く之れを一般の讀書界に推奨す。

東京神田
株式會社 同文館
振替東京一三五

## 改造五月號目次



### クロポトキン著作總評

―（創作）―

發賣禁止を命ぜられたる本書は當局の諒解を得僅々一小部分を改訂し發賣を許可せられたり

堺利彦氏抄譯

# 理想郷

小形美本
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

モリスの藝術的自由社會とベラミーの國有的理想社會と英米二大ユウトピアの精髓を見よ。抄譯縮譯に特殊の技倆を有すと公評ある堺氏の筆が如何に其の流暢輕妙簡潔の極致を發揮せるかを見よ。理想の新社會は髣髴として眼前に浮び來らん。

◆貝塚澁六氏著　堺利彦氏序
**猫の百日咳**（五版）
滑稽百出機智縱横諷刺骨を刺すが如き日本一の名文。
定價壹圓四十錢　送料八錢

◆堺利彦氏　山川菊榮氏共譯
**女性中心と同性愛**（五版）
ウォードの新説とカアペンターの名篇を譯出せるもの。
定價壹圓六拾錢　送料十錢

◆與謝野晶子女史著
**激動の中を行く**（五版）
思想界の明星たる女史が社會問題に對する新論集。
定價壹圓六拾錢　送料十錢

◆前田蓮山氏著
**社會の黴**（四版）
皮肉の辛辣天下一品の稱ある著者の現代罵倒を見よ。
定價壹圓四拾錢　送料八錢

東京神田中猿樂町　合資會社　アルス　振替東京二四八八八番

来る五月十日開講の通信大學

# 文化生活研究

■新時代が我國で今日求め得る、新進の最高權威二十七大家を通して與ふる絶好機會

「文化生活研究」を必要すべき人は

- 舊い囚はれた生活を改善して新時代に適應する文化生活を築まんとする進歩的な一般の紳士、淑女。
- 所謂嫁入準備時代中にある高等女學校卒業程度の若き婦人。
- 健全にして樂しき家庭を作り現代の主婦たる大任を全うせんと努むる婦人
- 研究心に富みながら種々の事情の爲規則正しき高等の學校敎育を受けることの出來ざる篤志家。

主幹 ドクトル(經濟學)法學博士 森本厚吉・顧問 法學博士吉野作造 有島武郎

□學科目及擔當講師□

| 學科目 | 擔當講師 |
| --- | --- |
| 家庭生活と宗教 | 帝大教授文學博士 姉崎正治 |
| 生活と文學 | 有島武郎 |
| 家庭と美術 | 有島生馬 |
| 家庭細菌 | 帝大教授農學博士 半澤洵 |
| 家庭園藝 | 帝大教授農學博士 星野勇三 |
| 婚姻問題 | 帝大教授法學博士 穗積重遠 |
| 育兒法 | 女子大學家政部長 井上秀子 |
| 社會病理 | 賀川豐彥 |
| 家庭生活と財政問題 | 帝大教授法學博士 神戸正雄 |
| 家庭制度 | 帝大教授法學博士 河田嗣郎 |
| 中產階級者生活問題 | 帝大教授法學博士 河津暹 |
| 家庭敎育 | 早大教授 木村久一 |
| 家庭物理 | 女子高等師範教授 近藤耕藏 |
| 家庭生物 | 帝大教授農學博士 松村松年 |
| 國民生活改善問題 | 文學博士 三宅雄二郎 |
| 消費經濟論、生活の標準 | 帝大教授法學博士 森本厚吉 |
| 家庭經營 | 森本靜子 |
| 食物榮養論、家庭衛生 | 帝大教授醫學博士 永井潛 |
| 食物經濟論 | 營養研究所醫學博士 佐伯矩 |
| 住宅論 | 帝大教授工學博士 佐野利器 |
| 小兒衛生 | 帝大教授醫學博士 佐藤彰 |
| 生計費統計論 | 法學博士 高野岩三郎 |
| 家庭と音樂 | 理學士 田邊尚雄 |
| 家庭料理 | 女子大學教授 手塚かね子 |
| 都市生活論 | 帝大教授法學博士 渡邊鐵藏 |
| 婦人の自修自學 | 與謝野晶子 |
| 政治に及ぼす婦人の力 | 帝大教授法學博士 吉野作造 |

本「研究」は社會改造又は生活改善を叫んで止まない新時代の要求に迫られて生れ出たもので此方面に於ける本邦唯一の大學教育普及事業であります。授業學科目は文化生活を營むに是非心得て居なければならぬものでありますが多くは新しい科學又は研究で未だ他に公にされてないものであります。毎月一回約三百頁の立派な書册として出版します、全部完結した時には各科目別に美しく裝幀しまして約三千六百頁の一大叢書が出來ます。本會の趣旨を贊成して下さる名士は非常に多くありますが、能く普通に見る有名無實の顧問、贊助員、講師等を以て飾るやうなことをして社會を欺くことは一切致しません。其代り名前を出した人は全部責任を以て夫々其任務を盡されるのであります。

■會員募集■

東京京橋尾張町 警醒社書店内 振替五壹五五壹番

文化生活研究會

**體裁** 四六判約三百頁 紙質裝幀善美

**會費** 一ヶ年分拾五圓六拾錢 六ヶ月分八圓五拾錢 一ヶ月分壹圓五拾錢

入會金は即時申込者に限り半減

研究要覽 無代進呈

京都帝國大學法學部教授 法學博士 河上肇著

新刊

# 近世經濟思想史論

本書は現代に於ける經濟上の二大根本思潮、即ちスミス、マルサス、リカアドー等の建設せし資本主義辯護の經濟學と及び之に對立して起りしマルクスの社會主義的經濟學との根本主眼を通俗的に說明し、如何にマルクス主義が近世經濟思想發展の論理的必然の產物たるやを闡明せんと企てたる者、斯學の素養なき者も一讀して思想界の大勢竝に歸趨の一斑を看取するに足るべし。

四六判三五七頁
假製
定價壹圓五拾錢
送料內地八錢

前農商務省參事官 法學士 河合榮治郎著

新刊

# 勞働問題研究

著者曩に農商務省に在りて專ら勞働立法の局に當り、昨秋志當局と合はざるや自己の所信を枉ぐるに堪えず斷然官職を擲てり。本書は著者が學窓を出でてより官を辭するに至るまでの勞働問題の調査研究を收めたるものにして徒に外國の學說運動を紹介するに止まらずして我國當面の問題を捉へて之を逸せず、而も眼を高處に置いて一々之を批判す。況んや著者の勞働問題に對するや單に之を以て學問上の研究題目とするに非らずして實際生活に於ける信念を建設せんとするものにして冷かなる理論を語るものにあらずして熱情と感激とは楮表に躍如とす。敢て本書を堅實なる讀書界に提供せんとす

菊判七四三頁
ポプリン布裝
定價五圓
送料內地十八錢

東京市神田區南神保町十六
岩波書店
振替東京二六二四〇
電話九段二二八〇
一三八一

# 本邦唯一の勞働百科辭典

**寄稿大家**

堺利彦氏・賀川豐彦氏・安部磯雄氏・室伏高信氏・山川菊榮氏
山川均氏・荒畑寒村氏・生江孝之氏・増井光藏氏・山口弧劍氏
（外十數名）

勞働年鑑編輯所編纂

# 勞働年鑑

四六判三段
ポイント組六百頁
定價參圓
送料金貳拾錢

本書は時代の要求に依て生れた本邦唯一最初の勞働年鑑であつて、輓近に於ける日本及び歐米勞働界の大勢は勿論、勞働に關する凡ゆる知識と細大凡ての統計を網羅輯錄し、斯界の權威たる特別寄稿家諸氏が各專門の知識を傾倒して百般の勞働問題を解說せられたる空前の勞働百科辭典である。其の調査は周匝、其の數字は明確、其の說明は適切、其の文章は平易、勞働問題研究の指針本書を措いて無しと云ふも過言に非ず、資本家たると勞働者たるとを問はず、苟くも現代に生活する者必ず一本を座右に備ふべきである。

**內容一斑**

國際勞働法規○華盛頓國際勞働會議顛末○國內勞働法規○勞働組合の法制史的觀察○各國勞働組合法制○日本の職工組合法案○　洲勞働組合運動史○米國勞働團體○佛國CGT運動○戰時に於ける英國の勞働運動○英國勞働組合の組織○日本の勞働組合運動史○日本の勞働團體紹介○婦人の勞働運動○德川時代の百姓一揆○勞働組合に關する統計○勞資協調に關する各國の制度及機關○工業調停機關○産業革命史○社會主義と勞働問題○勞働運動の政治關係○近代科學に現れたる勞働運動○ギルドリシアリズム○同盟罷業○三角同盟○サボタージユ○ピツケツチング○勞働運動統計○勞働者統計○日本の勞働者狀態○主要工場の勞働者待遇狀態○各國の消費組合制度○勞働者の生計費調査○勞働者の救護○簡易食堂○小住宅供給事業○職業紹介事業其他○英國に於ける勞働保險制度と養老年金制度○勞働問題研究書目○勞働問題に關する最近一年間の日誌（其他數百項略す）

## 懸賞論文募集

勞働者の實際的經驗に基き勞働問題解決の資料に供する爲め次年度年鑑に載すべき懸賞論文を募る、詳細は本書に於て發表せり。

發行所　東京市神田區表猿樂町拾九番地　**實學館書店**　振替口座東京五〇〇〇〇番

未曾有の山水大長卷

世界的大景勝のパノラマ的圖卷

文學博士 内藤湖南先生序
文學博士 幸田露伴先生跋

福田眉仙畫伯著 文學士 久保天隨先生解説

# 支那三十畫卷

全部新たに描かれたる藝術的大出版

製本既成

▼南畫界空前の大力作
▼支那史蹟名勝大圖會
▼支那歷史地理大圖解
▼雪旦廣重以上の藝術

支那に遊ぶの畫人は珍らしからず、シカモ其山容水態を細さに究めて畫嚢に滿盈し胸中自づから蜀山吳江の山水布置圖を暗んず我が眉仙先生の如きは稀也。先生の前著「支那大觀」を見るもの誰か先生が滿嚢の畫材を傾けて前人未描の支那山水大畫軸を成すの日あるを想倒せざらんや。果然**山水長卷三十軸**成る。連綴すれば**總長壹百貳十丈**、吳淞燕京より初めて阿姆爾に到る鴻爪萬里の道程を描き

題跋諸家

南條文雄博士 萩野由之博士 狩野直喜博士 內藤湖南博士 幸田露伴博士 市村次郎博士 鈴木豹軒博士 日下鳴鶴先生 松平康國先生 長尾雨山先生 籾山衣洲先生 島田八洲先生 山田石叟先生 黑木欽堂先生 久保天隨先生 足達嘯邨先生

讀部

內容目次

| | |
|---|---|
| 一、猿聲畫影圖卷 | 二卷 |
| 一、巫山峽圖卷 | 一卷 |
| 一、瞿唐峽圖卷 | 一卷 |
| 一、巴水圖卷 | 二卷 |
| 一、自流片圖卷 | 一卷 |
| 一、帆江提勝圖卷 | 二卷 |
| 一、放生舍圖卷 | 一卷 |
| 一、三蘇祠圖卷 | 一卷 |
| 一、蜀相祠堂圖卷 | 一卷 |
| 一、浣花遺址圖卷 | 一卷 |
| 一、安瀾橋圖卷 | 一卷 |
| 一、大峨山上圖卷 | 三卷 |
| 一、西藏路上圖卷 | 二卷 |
| 一、河南途上圖卷 | 一卷 |
| 一、大華山圖卷 | 一卷 |
| 一、臨潼圖卷 | 一卷 |
| 一、西安圖卷 | 一卷 |
| 一、渭水圖卷 | 三卷 |
| 一、秦蜀奇勝圖卷 | 一卷 |
| 一、黃河圖卷 | 一卷 |
| 一、燕京圖卷 | 一卷 |
| 一、長城圖卷 | 一卷 |

（以下三十卷）

て、忽ちにして山容疊疊、忽ちにして江水汪汪、之を評ぶれば身親ら蜀峽棧道の間を行くの感あり。五山の詩畫僧が燕楚の勝を探りしに來幾百年間幾百千家の支那に遊びしものありと雖ども此の雄大探勝なる畫卷を作りしものは實に我眉仙先生なり。宜なる哉其の

# 東西兩京の華族會館及び大阪市公會堂に展觀せらるるや集まるもの三都の貴紳名流三千人、秦蜀の雲煙に包まれ峽江の嵐氣に咽ぶの心地して茫然として市塵の中に在るを忘れ、且上下二千餘年の歴史に出入し英雄聖賢美人の遺跡に綿々として感慨止む能はざりしや。

眉仙先生の畫は之を宋元明清の巨匠と比較して或は及ばざるならんが秦蜀長江の大自然を描盡する長卷三十軸一百二十丈の大努力に到つては先人も亦輸する處あるを云ふは先生の畫卷の出版人として敢て自ら阿るものならんや。先生は本と四條に學び更に南北兩派に造詣して後禹城に遊び、親しく南畫の藍本たる秦蜀燕楚の大自然に參尋して得る處あり先生の暈染皴法が法度に拘束せられずして自づから南畫の骨法と精神と合するものであるは以て其淵源の深きを知るべし。『支那大觀』に出て先生の畫壘の堅盛を知り且雲際片麟を窺ふの感あるは須らく此の『三十畫卷』を披ひて全龍の雄渾莊麗に飽滿すべき也。雪舟の山水長卷の神品には及はざるも其努力に於ては之に過ぎ廣重の色彩には如かざるも其氣品に於ては之に勝り、雪旦の細緻には一籌を輸するとも其藝術の匂ひ高きは同日の談に非ず。眉仙先生の此の『三十畫卷』は永く我が藝術史上に不朽の光輝を垂るるものならん。

## 菊二倍判（横一尺五寸 竪八寸）横卷全二冊一帙 正價金五拾圓

三方金羽二重表裝頗美裝

送料市內無料 地方八十一錢 滿鮮臺樺支那金壹圓

## 初版一千部限特價金參拾八圓

**注意！** 本書の特價は初版の一千部を限る。此部數を盡したる時は嚴正に金五拾圓の正價に復して絶對に釐毛を割引せず。且第二版の過半以上を盡したる後の最終部數は更に正價を以て引上げ金六拾圓以上とし其以後絶版とす。

市內に電話又は端書にて御申込次第即時現品持參御高覽に供し可申候

裝潢 長江舟行模樣緞布裂 外函峨眉山虎寺山門

表紙 羽二重表裝木版四十遍摺瞿唐峽白帝城巫山峽十二峰パノラマ圖二卷連續圖

見返し 塗山の春。瀘水の夏 蜀道の秋。長城の冬

木版極彩色 奉書摺十二葉

玻璃版 色摺三百二十八葉

解說 久保天隨氏 六六頁

內容見本 郵券十錢相添え御申込

發兌元 東京市麹町區平河町五丁目貳番地 金尾文淵堂

電話九段一〇八五番 長距離電話九段二九一番 振替東京三八一七番

新刊

◆文學士小林一郎氏新著◆

# 自由の生活

（著者最近苦心の大著）

## 現代各人必讀書

思想界の混亂は當に未曾有である。吾等は此間に處して如何に吾等の活路を開いて行くべきであるか。今は徒に樂觀するを許さぬ又徒に悲觀すべきで無い。之を過去の經過に徵し現在の情勢に照して今後の立場を確めなければならぬ。著者は此の見地から日本の文明の過去及び現在に對して自由なる批評を試みた。現代に處して意義ある生活を爲さんとする人々の一讀を勸める。殊に青年の人々と青年指導の任にある人々は必ず精讀すべきである

【内容目次一班】

萬事は是れからである▼誰が責任を負ふのか▼國は自分のものである▼武士と百姓町人▼武士の學ぶべき所▼自分の國は何といふ國か▼名譽心の犧牲▼忠義の觀念▼忠義を誰に盡すのか▼町人の意氣抱負▼自ら重んずるの心▼德川三百年▼事無かれ主義▼利用厚生の道▼流れぬ水は腐る▼町人氣焰の吐き所▼西力東漸の勢▼幸運に狎れてはならぬ▼眼を天局に注ぐ者▼國家の柱石たる覺悟▼國體の精華▼皮相なる西洋文明觀▼近世文明の特色▼功利主義の弊害

四六判最上製
美本全壹冊
正價金貳圓五拾錢
送料金十二錢

三並良先生新譯

好評四版

# オイケン人生の意義と價値

舊世界觀は倒れたりと雖も、新世界觀は未だ確立せず、思想界は紛亂し、人間はその歸趣に迷はんとす。是れ、實に、現代の煩悶にして、精神界一切の病源なり。オイケン博士が獨特の見地より、此大問題の解決を試みたるものを本書とす。由來博士の所說なりとの評ありと雖も、本書の如きは決して然らず。博士も亦常に、本書を最も平易の敍述と稱せり。譯筆亦平明流暢なり。オイケン哲學の眞髓を知り、人生問題を解かんとするものは、之を繙かざるを得ず。

四六判最上製
美本壹冊箱入
貳圓五拾錢
送料二十二錢

東京市神田區表神保町七　大同館發行　振替貯金口座東京八七貳番




——（改造五月號）——

# 低徊政策と國民の迷執

我國は國策のない世にも奇しき一等國である、國策のない珍しい正義の國である。使命主義のやうでそして平和主義だそうだ。であるから、國民は我國にいかなる國策があるかを知らない。尤も政府に其持合せがないのだから知らないのは當然である。かるが故に、一旦、西伯利とか、支那とかに外交事件が突發するとか、朝鮮や臺灣に不穏の兆候でも呈すれば、直に泡を喰つて政府を罵り合ひ、元老を非難し合つて、國民として負はなくてはならぬ自分の責任は棚に上げてゐる。甚だ虫のよすぎる話だ。かく自分の貴重なる國民としての權利を抛棄して、當路の昏迷、妄執の罪のみを糺彈するは、卑怯未練である。かくては面上吐唾すると同じく、自分の名譽、自負心を自ら蹂躪し去るものだ。頃來喧しい、西伯利事件に對して殊にその感を深くする。此秋、國民の斷乎たる覺悟と決心さへあれば、此問題の如きは易々として決するのだ。對支策、對米策悉く然りである。

現に我政府が執りつゝある彌縫策にせよ、人道主義や日本將來の大局より見て、過去に非違あるを發見したら斷乎として撤兵すべきである。かくまで財を糜し、人命を損しながら依然として低徊政柔を棄てざる政府の優柔も決して許すべきでないが、大多數の無自覺、入念の迷執振りの罪も一顧する必要がある。

我國の憂は外敵に非ずして、內患にある。國內の統一にある。國內さへ統一されて、鞏固なる國策が樹立すれば尼港事件や、哈府事件の如きが百起つても鎧袖一觸にも値せない、過日、政府の發表せる駐兵理由書を一讀せよ、その一讀したるものは其處に何等の感激をも起さないであろう。感激なき一片の辯解書で三軍の將卒が均しく喜んで死地に就くだろうか。

迷暗固執の國民は醒めよ。無爲の衰境に低徊せる原內閣も「小ブラ」の政治圈より脫出せよ、そして正義の一燈を東海の空高く輝かしめよ。

# 男子の賃金と女子の賃金

法學博士　河田嗣郎

## 一　はしがき

女子勞働問題の理論的方面に於て、最も困難な問題は、賃金に關する問題である。而して現今の實狀に於ては、女子の賃金は男子の賃金よりも低廉なるが普通であつて、我國の如きでは前者は大抵後者の四割から六割位の間に在るを例とする。此の狀態は企業家や男子勞働者の側よりしては、當然の事柄であるやうに考へられて來たのであるが、近時女子勞働問題が喧しくなり、女子の人格運動と女子勞働運動とが漸次熾に行はるゝに至つてからは、斯かる男女不平均の狀態は甚だ不合理のものとせられ、之が改革の必要が熱心に主張せらるゝに至つた。

私共のやうに學究的立場から一般婦人問題や女子勞働問題を研究して居る者に取つては、女子勞賃決定の理論を攷へそれが男子勞賃に比して低廉なる理由を探究することは寔に興味ある問題で、然かもそれは軈て實際に於ける女子勞働運動に對しても、何等かの貢献を爲すことゝなるものと考へらるゝ。曾て私は此の問題に關して經濟論叢誌上（第八卷第三號第四號及び第五號連載）に所見を陳べて置たから、讀者諸君の中には、或は讀むで下さつた方もあらうが、此所に又更に其の補論とも見るべきものを公にすることゝした。そして此論を造るに就いては、曩に英國に於て此の問題の爲めに委員會が組織されて討究の行はれた際、其の委員の一人たりしミセス、シドニー、ウエッブが少數意見として公にせられた所のものに負ふ所多大である。（Mrs. Sidney Webb, The wages of Men & women: Should they be equal?

## 二　無規律なる賃金決定

從來賃金の決定に關しては、男子の賃金に於ても女子の賃金に於ても、殆んど何等明確なる原則の立てられたるものなく、たゞ勞働は商品として市場に賣買せられ、其の賣買の行はるゝに就いて、需要と供給との折衝離合に依り、商品としての勞働の價格たる賃金の高が決定せらるゝに過ぎなかつた。然かも市場に於ける勞働の賣買は、賣手と買手との間に個人的に行はるゝを以て原則とし、勞働組合などの働に依つて、多少は集合的なる取引が行はるゝとも、それはまだ例外的たるに過ぎないで、原則としてはたゞ個人の間に於ける私的の取引として、需要と供給とが離合集散するまにまに、地方々々により、又職業々々により、時折々の賃金相場が出來上がるに過ぎないのである。洵に其の狀態はウエッブ夫人の言ふやうに、原則なき原則の行はるゝ有樣で、這間に之を制理すべき大原則の認めらるべきものはないのである。

此かる實狀の下に於ては、商品としての勞働の賣買取引上、買主に對して劣れる地位に在る賣主は、常に不利益を被らざるを得ないのであつて、經濟以外の幾多の事情も加はり、社會的にも、政治的にも、經濟的にも、買手たる雇主に對して薄弱の地位に在る勞働者は、賣手として常に安き勞賃價格を得て滿足するの外はない。而して此の意味に於ては女子勞働者は社會的にも、政治的にも、經濟的にも、因襲上男子勞働者よりも更に薄弱なる地位に居り、未成年の男子勞働者同樣に、取引上最も劣惡なる境遇に在るものとして、其の賃金は成年男子勞働者のそれよりも一般的に低く、前に一言したやうに、其の四割乃至六割位を得て滿足せざるを得ざる狀態に在るのである。此の狀態は、現時のやうな勞働に關する規律なき個人的賣買取引が行はるゝ制度の下に於て、女子が因襲的に男子よりも一般に劣れる者として、社會生活上に其の待遇を受けて居る限りは、謂はゞ當然の成行とせなければならぬ。

男子勞働者の間に在つても、現時のやうな無規律なる個人的勞働賣買制の下に於ては、組合其他に依る團結の力を以て賣買取引に臨む者等と、然らざる者等との間には、賃金決定上少からざる利不利のあるを免れ難い。團結の力に依つて賣

賣市場に勞働の賣手として强い地位を有する者は、個人的にバラ〳〵になつて居て弱い地位しか有し得ない者に比較して、常に多少有利な價格と條件とを以て勞働を賣り得ることは、賣買とそれに依る價格の決定とが賣手と買手との間に於ける力の競合に依つて行はるゝ限り、まことに止むを得ざる所である。此の事情あるが爲に、勞働者は卽ち組合を造り團體を結ぶ必要も認めらるゝ次第で、勞働組合の成立する理由は他にも色々あらうけれども、此の事情は就中最も有力なる理由とせなければならぬ。

事情右の如くなりとすれば、男子よりも一般的に劣れるものと見られて居る女子が、然かも從來殆ど多く見るに足るべき組合團結をも爲して居らぬ女子が、勞働の賣手として甚だ弱き立場に居り、常に低き勞賃價格と惡しき勞働條件との下に、雇傭勞働に從事せなければならぬことは、事實としては、洵に了解し易き事實とせなければならぬ。

## 三　最低賃金制と男女の賃金率

然し乍ら賃金の決定に關する斯かる不規律の狀態は、到底永く堪え得らるべきものではない。現時に於ては、男子と云はず、女子と云はず、總て勞働を商品として賣買するといふ事それ自體に就いて、大いに議論が行はるる次第で、勞働を商品と見ることも、商品として取扱ふことも、一切之を止めなければならぬとする考が、漸次廣く行はるゝに至つて、勞働の雇傭制度を廢止すべき議論と運動とが熾に行はるゝに至つたことは、人のよく之を知る所である。然し全然勞働の雇傭制を廢止すべきや否やに就いては、尙ほ議論の岐るゝ次第で、同じ社會主義的主張を爲す者の間にも、純然たる勞働自主制を主張するものと、又國家や其他の公共團體に依る勞働の雇傭は之を認めんとするものとがあるけれども、少くとも、勞働の私的雇傭制度と、個別的なる契約に依る賃金の決定とを以てする現制度に對しては、之が改革を行はなければならぬとする意見が一致して居るのであつて、何等かの道に依つて其の無規律の狀態を革め、之が制理を行ふの必要ある一事に至つては、最早多く議論のない次第である。

之を制理する道として、現今最も有効の方法で又實行し得べき方法とせらるゝ所のものは、彼の最低勞賃制の制定これである。即ち國家が法律を以て勞働に對する最低限度の賃金を定め、其の限度以下の勞賃を以て勞働の雇傭を爲すを禁止し、以て勞賃に對して一定の標準を與へんとする制度で、其の最低標準としては、或は所謂生活の最低限度（ミニマム・オブ・エキシステンス）なるものを以て、其の標準と爲さんとするものあり、又所謂生活の程度（スタンダード・オブ・ライフ）を以て、其の標準と爲さんとするものもあるが、要するに公權力に依つて一定の賃金標準を造り、以て一面には勞働者の生活を保障すると同時に、他面に於ては現時の全く無規律なる勞賃決定に對して、據るべき所を與へて、其の制理を行はんとすることは、此の制度の目的とする所と見なければならぬ。

最低賃金の制度が、制度として完全のものであるかどうかは、議論の餘地ある所で、それが決して終局的の制度でないことは、之を認めなければならぬだらうが、然し兎も角現狀に對する一の有力なる制理手段たり、多少不徹底の嫌はあつても、現今の賃金制度に對して少からず其の面目を革めしむるに足るべき實行手段たることは、之を認めなければならぬ。即ち現今の實狀に於ては、勞賃はたゞ單純に勞働の商品としての代金たるに過ぎないで、或は勞働の產出する生產物の量に從て定められ、或は勞働が雇主に對して有力なる働を爲すといふ意味より、之を其行はるゝ時間の長さによつて量つて、賃金が之に對する代價として支給せらるゝものなるに外ならぬ。即ち現狀に於ては、勞働が人に依つて行はれ、之を行ふ人の生存と人格とに對して離すべからざる關係を有するといふことは、賃金の決定に關しては、殆んど何等顧慮せらるゝ所はないのである。然るに最低賃金制に至つては、僅かながら兎も角も、勞働者の勞働と其の生活といふことを結びつけて考へ、勞賃はたゞ勞働に對する代價たり報酬たる以外に於て、勞働者其人の生存を維持すべきものたる性質を有するといふ事實を認め、勞賃の最低限度を定むることに依つて、公權力は少くとも勞働者の人としての生存を保障せんとするもので、此點は現制度に對する大いなる變革を意味するものとせなければならぬ。たゞ勞働の代價としてのみ定めらるゝ賃金は、單純に勞働價値に從つて定めらるゝに過ぎぬけれども、苟も法律に依つて其の最低限度が定

められ、然かもそれは生活の程度とか生活の最低限度とかいふことを以て標準とするからには、其の制度は勞働價値以外に、尙ほ勞働者の人としての必要を認むるもので、單純に勞働價値に從ふ勞賃の現制度と、最低勞賃制との間には其の立場の上に少からざる相違あると見るべきである。そして現今勞働問題が進み行くに連れて、勞賃決定の上にも漸次に人間味を加へなければならぬやうになつたことは、爭ふべからざる事實である。

　最後の理想ではなくとも、過渡的の一有効手段として、私は最低勞賃制を歡迎したいのであるが、たゞ一事の注意すべき點は、從來の經驗に於ては、最低勞賃制の制定に際しても男女勞働者の間に差別を設け、一方に男子を一列に置き、他方に女子を一列に置いて、女子に對する標準は一般的に男子に對する標準以下に置き、恰も自由競爭制による現狀に於て之を見る所を其儘に、最低賃金率に於ても、女子を以て男子より一段低く置かうとする風あること之である。併し之は大變誤つた考たらざるを得ない。女子の勞働を以て男子の勞働よりも、一般的に劣つたものと見るの風は、從來何れの所に於ても之を見る次第であるが、此事が已に捕はれたる見解より出づるものたるに加へて、最低勞賃制たるものが右述の如く、勞働の價値以外に、勞働者の生存の保障といふ意味を以て居るからには、其の最低標準を定むるに就いて、男子と女子と性の區別に依つて、兩者の間に異つた標準を置くといふとは、理窟に合はぬ話である。尤も或人々は、最低勞賃標準を定めるに當つては、其の勞働者の扶養する家族の數等を顧慮して之を定めなければならぬと主張し、その意味に於て、男子勞働者は普通に多く家族を扶養する義務を有するに反して、女子勞働者は多くかゝる扶養の義務を負はぬものだから、兩者の間には當然に最低生活費の額の上に相違がなければならぬ、從て最低賃金率を異にせなければならぬと主張する。けれども之は、後にも述べるであらうやうに、間違つた考である。已に男子と女子との間には、一列に之を考へて扶養の義務の多少を謂ひ得べからざるものあると同時に、最低勞賃標準なるものは、勞働者個人々々に就いての話で、決して其の一家經濟を標準とすべきものではないのである。

　されば苟も最低勞賃制が布かるゝといふからには、それは男子勞働者たると女子勞働者たるとに依り、性の區別より

して、差別を立つべきものではなく、男女同等に之を取扱ひ、人としても勞働者としても、之に對等の待遇を與ふべきものである。然らざる限りは、折角最低勞賃制といふやうな、人間味の深い制度を布くことそれ自身が價値なきものとならざるを得ない。依然として舊來の傳習に捕はれ、男女を人として同等に見ず、兩者間に區別を置く分では、勞働者を人として平等に取扱つて、其の生存を保障せんとする最低勞賃制の精神は、亡ぼされてしまうのである。從て男女の間に區別を設くる所の最低勞賃制は、甚しき自家撞着の制度と謂はなければならぬ。

## 四　物價の標準と男女の賃金

凡べて賃金は貨幣に依て授受せらるゝとも、之を以て勞働者が生活を營まんが爲めには、勞働者は必ず之を生活上現實に必要とする所の貨物に換ふるの必要あるものたることは、架說する迄もない。玆に於てか常に勞賃に關しては、名義勞賃と眞實勞賃とが區別されて考へらるゝ次第で、然かも前者は常に一般物價特に生活必要品の價格の高低と相適應すべきものなりとせられ、一般物價の騰貴する時期に當つては、勞賃も其の騰貴の程度に應じて增加せらるべきものとなつて居る。而して之は一般に賃金に就いてのことであるから、之に就いて男女間に區別の設けらるべき餘地はないのである。

然るに之を實際の狀態に照して見れば、此點に關しても亦、男女勞働者間に區別が立てられ、男子の賃金に就いては其高を物價の高低に順應して增減せしむるに努めらるゝけれども、女子の賃金に就いては殆んど其事なく、全く忘れられたるものゝ如き觀あるを例とする。之は寔に不條理な事で、苟も賃金が之を得る者に取つて生活の資料を得べき手段であり、貨幣賃金は眞實賃金を代表するものたるに外ならぬ限りは、物價の高低により貨幣の購買力に强弱の差の生じ來る場合には、男女共に同樣に、其の名義賃金をして變動せしめ、物價の高低の爲めに眞實勞賃が影響せらるゝことのないやうにせらるゝが正當である。其點に關して男子の賃金たると女子の賃金たるとに依つて、區別の設けらるゝべき

理由は毫末もない。然るにも拘らず、實際に於ては右に述ぶるやうに、男女の間に區別ある待遇のせらるゝといふのは、何故であらうか。

それはつまり一つには、男子勞働者の間には有力な勞働組合が出來て居たり、又其の組織の不十分な所に在つても、勞働者が一時的にでも團結して、賃金の値上を要求し、物價騰貴の勢の著明なる場合には、賃金をも之に追從するを得べきだけ增加せしむるに努力するからである。然るに女子勞働者の間には、英吉利のやうな勞働者組合の發達した所に於てすら、まだ十分有力なる組合が出來て居らず、其他の發達の後れたる國々に於ては尙更のこと、女子が一致して賃金の値上を要求することを敢てし得ないが爲めに、雇主は要求のないのを好いことにして、多く自ら進むで女子賃金の增給を行ふことをせないのである。而して又國家其他の公權力も、現今勞働賃金の決定は、原則として自由競爭による私的決定に委かされて居る所より、敢て之に干涉して、女子勞賃と物價との適合を圖らしめんともせないのである。

所が又今一つには、女子勞働者に對しては、一般的の彼等を以て永久的の勞働者と見ず、又生活の爲めに働く者とも見ず、嫁入前の小遣取りの爲めに暫時勞働に從事する者と見るの風あるが爲めに、女子の勞賃は必ずしも物價の高低に順應して增減せなくともよいと考へらるゝのである。卽ち男子勞働者は一生涯勞働者として然かも妻子一家の生活維持の爲めに働く者だから、其の勞賃は生活費の增減を顧慮して定められなければならぬけれども、女子勞働者は斯かる重大な責任の下に働く者ではなく、嫁入費用の足しの爲めに、又は唯單にポケット、マニーを得る爲めに働く者たるに過ぎぬのだから、一般物價の高低は多く顧慮せらるゝ必要はないと考へらるゝ次第である。此ういふ考は、現今尙ほ廣く雇主の間や男子勞働者の間に行はるゝ所だが、然し之は得手勝手の考たらざるを得ない。成程女子勞働者には、永久的の勞働者たる者が少くて、嫁入前に暫時勞働に從事する者の多いのは事實である。そして又自ら獨立して自己の生活を支へんが爲めに勞働する者の數も、比較的少いであらう。けれども苟も勞賃が勞働に對する報酬として支拂はるゝものたる性質を失はない限りは、女子勞働者が永久的の勞働者たると否とを問はず、又其の勞賃が直接に生活維持の爲めに用ゐら

る〻と否とを問はず、それは貨幣の購買力の減少の爲めに、影響せらるゝ所があつてはならぬ筈である。男子の勞貨も女子の勞賃も、勞賃としては同一性質のものであるから、此點に關して男女の區別が顧慮せらるべき理由はない。特に又女子には直接に自己の食や住の爲めに働く者は比較的に少くとも、多くは父兄の所得の足らざるを補ひ、一家としての生活を維持する上に貢献せんが爲めに働く者で、やはり之れ生活の爲めに働くものたるに外ならぬ。自己が獨立して生計を營むと、父母兄弟姉妹等と一緒に一家を造つて生計を營むと、共に之れ生計を立つるといふ點に於ては同一である。何れにしても、此の理由からして、男子の賃金と女子の賃金との上に、取扱上の區別を設く可き理論上の根據はない。たゞ因襲的に男子に對する待遇を厚うし、女子に對する待遇を薄うする習慣が、此所にも其働を及ぼすものと見るの外はないのである。然し理窟に合はぬ習慣の廢除せられなければならぬことは、言を俟たざる所である。

## 五　扶養義務の大小と男女の賃金

右と似たやうな考からして、やはり又男子の賃金に對して、女子の賃金を低からしむる所のものは、男子は通常一家の維持者として、妻子眷族を扶養する義務を負ふものだから、其の賃金は少くとも之を充すに足るだけのものでなくてはならぬけれども、女子はたゞ自己一個の用を充さんが爲めに金錢を得る目的で、勞働に從ふに過ぎぬのだから、其の賃金は當然に男子の賃金よりも低かるべき筈なりとせらるゝことと之である。之れ亦甚だ事情を審にせざる、一概の議論たるを免れぬ。

元來家族を扶養する義務の有無や、其の範圍の廣狹は、人一人々々の問題であつて、之を一般的に男子には其の義務が多くて、女子には其の義務が少いと謂ふとは出來ぬ。同じ男子の中に在つても、頗る廣きに涉つて家族を扶養する義務を有し、其の境遇に在る者もあれば、殆んど多く其の必要のない者もある。同樣に又女子の間に在つても、たゞ自己一個の事を爲せばよい境涯に居る者もあれば、或は勞働不能の夫を有するが爲めに、或は寡婦として多くの子女を有する

が爲めに、或は父兄の所得が少くて一家の生計を立て得ない結果之を補充するの必要を有するが爲めに、大いなる扶養の責任を負ふて居る者もある。決して一概には謂はれぬ事なのである。

されば扶養すべき家族の有無多少といふことを顧慮して、その理由の爲めに、賃金率を階級的に區別することは、男子勞働者の間のみに就ても行はれ難く、女子勞働者のみに就いても行はれ難い。まして男女といふ性の區別に依つて之を行はんことは、全く理由のないことである。此の扶養義務の輕重といふ問題は、彼の最低賃金制を定めるに就いても常に問題となる所だけれども、之に依つて賃金率が區別せらるべきものではどうしてもない。元來勞賃が勞働に對する報酬たる性質を有する限りは、それは勞働の効用に應ずべきもので、効用の等しき勞働は、それが男子の勞働であらうとも、女子の勞働であらうとも、何人の勞働であらうとも、それに對しては同一の報酬が支拂はるべきものである。縱令最低勞賃制の如きを採用して、勞賃を以て單純に勞働價値に應ずるものたらしめず、多少之を緩和して、生存の保障といふ意味を加ふるに於ても、それはつまり勞働の効用と生活の必要との兩者を、併せ見るものであつて、決して之が爲めに、勞働の効用といふ勞賃決定上の基礎が、除去せらるゝものではない。彼の共產主義の主張の如く、人は其の生存の必要に應じて社會から生活の資料を受くる制度が實現すれば兎も角だが、然らざる限り、即ち勞働に對する賃金制度が維持せらるゝ限りは、之に最低勞賃制の如きを加味するにしても、大體はやはり勞働價値が賃金決定の基準とならざるを得ない。

此の意味からすれば、男子勞働者たると女子勞働者たるとを問はず、各人は其の自己の生存に必要ある限度を最低として、その以上は各々其の行ふ勞働の効用に應じて、賃金を受く可きもので、扶養すべき家族の數の多少は問題とはならぬ。其の場合に生存上の必要といふ事は、それは勞働者其人々の一個としての必要を意味するものたるに外ならぬ。此事は個人主義的基礎の上に立つ經濟組織に於ては、當然のことであつて、各個人が單位として經濟組織を造り、各個人が一個の經濟主體として經濟行爲に與ふる組織の下に於ては、問題は個人々々に關するのであつて、家族團體に關す

るものではない。

斯るが故に、若し一家の家屬の數が多くて、一家を維持する父兄の賃金のみで、生活の出來難い場合には、苟も勞働能力を供へた者は、男子たると女子たるとに關係なく、皆出でて勞働に從事して各々勞賃を稼ぐ可である。勞働能力ある者が働かないで居て、そして生活困難なのならば、それは寧ろ當然のことで誰に訴ふべき由もない。たゞ各自が能力相當に働き額に汗して賃金を得、以て一家の生計を立つべきのみのことである。法律に依つて最低賃金制を定むるとも、それは決して徒食する者までの生存を保障せやうとする意味のものではない。

けれども十六才以下又は十八才以下の少年者は、男女とも、まだ一人前の勞働者たる資格のない者で、之等を勞働に就かしむるは、社會の爲めに之を見て、決して喜ぶべき事ではなく、此等の者はまだ十分に敎育する必要のある次第なのだから、斯かる獨立能力のない年少者に對しては、社會は其の生存を保障してやる必要がある。從て斯かる年少者を有する家庭に對しては、國家社會は其の年少者の數に從て、適當の支給を其の一家にしてやることとするがよいであらう。そして又老衰者や病弱者や不具者の如きも、社會に依て養はべきものなのだから、此種の勞働無能力者を有する家庭に對しても亦、國家社會は其の生活費を補助することとするの外はないのである。

然し此の種の者に對する生活の保障を爲すことゝ、勞働者が勞働を營むに對して受くる賃金に就いて、其の最低限度を定むるといふことは、別問題たるを忘れてはならぬ。されば男子たると女子たるとの別なく、勞働能力なき者は國家社會に依つて養はれ、苟も勞働能力ある者は、各自其の能力に應じて働き、然かも其の働に對する報酬としての賃金は各自生存を保障する程度を以て最低限度とし、其の以上各自の働に應じ、其の勞働の社會的効用に適合する賃金が支拂るゝことゝなるのが、最も合理的である。勞働の雇傭制度と賃金制度とが全然廢止せらるれば別問題だが、賃金制度の持續さるゝ限りは、右の如くする外はないのである。

果して右論ずる通りだとすれば、男子と女子との間に、扶養すべき家族の有無多少といふことを理由として、其の賃

金に差等を設くるの不合理たることは、疑ふべからざる所とせなければならぬ。

## 六　職業上に於ける男子の獨占的優越權

一般社會生活上に於てもうそであるが、經濟業務の上に於ても亦、從來とかく男子ばかりが有利の地位を占め、特に或種の職業は全く男子の專占する所となつて、女子には之に就く機會の奪はれたるものが少くなかつた。そして此の女子禁制の職業は、言ふ迄もなく、比較的優良な職業であつて、其の就職の爲めには一定の熟練を必要とし、從て其の賃金も比較的高いのを例とするのである。

何が故に斯かる種類の職業が、女子に向つて閉されたかと云へば、格別根據ある理由はなく、一口に言へば、女子は之に値せずといふ傳習的の觀念の存するが爲めたるに外ならぬ。即ち其の職業が社會の公職であつて、其の地位が尊敬を受くるに足るものなる場合には、女子には之に就くべき技術と威嚴とが無いとせられ、若し又其の職業が特別の技術を必要とし、熟練を必要とするに場合には、女子には其の必要なる技術的熟練なきのみならず、其の熟練を習得すべき能力もないとせられて、一概に無能力者扱させられるのである。そして又其の職業が一定の腕力や體力を必要とする場合には、女子は腕力なきもの、體力が一般的に大いに男子よりも劣つたものとして、全く其の職業は女子にはふさはしからぬものとして閉されてしまうのである。斯くて從來女子に對しては、比較的些細な事務や餘り熟練を要せない勞働やが開放されて、謂つて見れば、女子には職業勞働の上に於ても亦、一般的社會上の待遇と同じく、唯だ末席のみが與へられ、女子は纔かに男子の殘肴冷杯を嘗めて、我慢せなければならなかつたのである。

此の事情の爲めに女子は若し其の職業に就くの機會が與へられ、男子同様に熟練を積むの機會と時間とが與へられたならば、男子對當に、又は男子以上に、好く其の仕事を爲し遂げ得べき望のある方面に於ても、全く女子に對して其の職業の門戸が閉されたる爲めに、終に之に對しても不適者として男子にのみ其の地位を獨占せられ、職業及び勞働上に

於ても常に男子の下風に立たなければならぬやうになつて來たのである。從來兎角女子が勞働者としては不熟練勞働者たるに過ぎずとせられて、從て賃金も低安なるを以て滿足せなければならなかつたのは、右の事情に負ふ所の少からざるを忘れてはならぬ。尤も女子には從來永久的に勞働に從ふ者が少く、たゞ結婚前數年の間勞働に從ひ、結婚と同時に其職を捨てゝ去る者の多いが爲めに、終に其の勞働に對する熟練を積む暇のない場合が多く、新陳代謝が餘り急速に行はるゝ結果、終に女子勞働者全體としては、常に不熟練勞働者たるに過ぎず、不熟練勞働者として、低安なる賃金を得るの外はなかつた事情も、決して少くないので、此の事實は事實として、之を認めないわけには行かぬのである。

けれども、因襲的に女子を以て男子よりも一般に智識能力の劣れる者と見て、尊敬すべき又報酬の多き職業は、之を男子で專占し、女子には之に就く機會を與へなかつた事實も、事實として又之を承認せないわけには行かぬのであつて、之が爲めに女子の被る不利益は洵に莫大なものである。然し男女の間に斯かる差別的待遇の與へらるべき理由は毫もなく、女子を以て一般的に男子よりも智識能力の劣れる者と見るとも、たゞ之れ男子の得手勝手の臆斷たるに外ならぬ。人間として男女は對當平等であるべきは勿論のこと、職業及び勞働に關しても、男女間に平等なる機會が與へられ、社會生存の條件をして、性の區別を問はず、社會的階級の如何を論ぜず、又人種の異同を論ぜず、各人に對して一樣平等ならしむることは、現時の文明の要求する所と謂はねばならぬ。社會主義の主張が、社會の各人に對して職業と勞働の機會を均等ならしめ、社會に於ける各人の生存上の條件を平等ならしむることを、要求して止まぬものなりとすれば、其の要求に關して男女の間に區別の立てらるべき筈はない。而して現今婦人問題として論ぜられ、婦人運動に於て要求せらるゝ所は、畢竟するに社會生存上に於ける條件を、男女間に平等にするといふことに在るのだから、職業や勞働に關する男子の獨占的優越權はどうしても打破せられなければならぬのである。此の優越權が打破せられないで、因襲的に存續する限りは、男女間の賃金の差等も、依然として因襲的に持續さるゝを免るゝことが出來ぬ。

## 七　同一樣の仕事に對する同一樣の報酬

巳に男女が人間として對當平等のものであるからには、職業に就き勞働に從ふ機會の與へらるゝ點に於いても、男女は平等の待遇を受けなければならぬと同じく、勞働に對する報酬に於ても、男女は同樣の報酬を受けなければならぬ筈で、其の然らざるべからざる理由は、以上數項に渉つて縷說する通りである。そして此の意味の要求を言表はす爲めには、よく『同樣の仕事に對する同樣の報酬』(イクオール、ペー、フオア、イクオール、ウオーク)といふ標語が用ゐらるゝ次第で、女子勞働運動は賃金の問題に關しては、此の標語を目的として、之に向つて進み行く狀況である。

同樣の仕事に對する同樣の報酬と云ふことは、勞働が何人に依つて爲さるゝに拘らず、そが同樣の仕事たる限りは、同樣の報酬を得べきものなりといふ原則を示すものなのだから、其の原則は正當のもので、勞賃の原則としては、動かすべからざるものと謂はなければならぬ。けれども此の原則は其の意義の解釋上に於ては、多少異義の存せざるを得ざるもので、色々に之を解釋することが出來る。そして之が爲めに其の原則としての價値の輕減せらるゝものあるを免れ難い。即ちウエッブ夫人も之を指摘するやうに、同一の仕事といふことは、之を仕事を行ふ者の側より言へば、同一樣の精神上又は肉體上の努力を有し、同一樣に精力を消耗する仕事であるならば、それは同一の仕事と見なければならぬものである。從て其の努力の結果として表はるゝ所のもの、即ち仕事の効果に至つては、そが同一であらうと異つて居やうと、それは問題にはならぬことで、結果から推して仕事の同一不同一を謂ふべきものではないとせらるゝ。然るに之を勞働者の側より見ないで、雇主の側より見れば、同一の仕事たるべきものは、其の仕事の結果が同一であるか、然らざる迄も雇主が仕事の効果より推して其の仕事に對して同一の價値を認むる場合でなくてはならぬ。そして仕事の効果さへ同一樣であるならば、その仕事を行ふ勞働者に於て、その爲めに多くの努力を拂はうと、僅かの努力で之を爲し遂げやうと、それは雇主に取つては關係ないことである。

斯く一見何の疑問もないやうに見ゆる原則も、其の解釋上に於て甚だ意義を異にする所よりして、此の原則の適用に就いては、常に雇主側と勞働者側とに、意見の衝突を來たし、幾多の困難が這間に生じ來らざるを得ない。そして之は勞働の價値決定に關してばかりではない、普通の貨物の價値決定に關しても、起り來る問題である。即ち貨物の價値決定に關しては、彼の生産費説と效用説とが並び存して居て、前者は、貨物の價値を之を生産するに要する費用（即ち所謂生産費又は再生産費）を基礎として測定すべきものと爲し、後者は、貨物の價値はそが有する效用に依つて定められ、つまり人々が之に對して認むる效用に從つて、其の價値は決定せらるゝものなりと主張する。而してやゝ古き時代には生産費説が專ら行はるれども、近くは一般に效用説が有力の學説となつて居ることは、廣く認めらるゝ所である。

されば今勞働の價値測定に關しても、勞働が商品として市場に賣買せらるゝ限りは、その價値の決定は、普通貨物の價値の決定せらるゝ原則に從はうことゝなるを免れぬ次第だから、やはり其の效用が標準となり、然かも其の效用は、之を買ふ者が之に對して認むる所を主とすることゝならざるを得ない。蓋し現今勞働市場に於て有力なるものは、買手たる雇主であつて、賣手たる勞働者ではないのだから、買手たる雇主が勞働に對して認むる效用が、總て勞働の價値を決定する上の、最も有力なる基礎とならざるを得ないのである。そして同一の勞働たると否とは、つまり勞働の價値が同一なりや否やといふことゝなりと解釋せられ、然かも其の價値は雇主が認むる所に據ることゝなつて、同一の仕事に對する同一の報酬といふ原則はつまり、雇主に取つて同一價値を有する勞働に對しては、同一様の報酬が支拂はるゝといふことになつてしまうのである。又は同一様の報酬が支拂はるべきものなりといふことに、なつてしまうのである。

こうなつて來るといふと、雇主は何時でも女子の勞働に對しては男子の勞働に對するよりも、少い價値しか認めやうとせないで、從て女子の勞働に對する勞賃率は、男子の勞働に對する賃金率よりも、之を低くするを敢てして憚らないのである。雇主は好むで、女子の勞働は男子の勞働よりも、之を行はしむる資本的設備を多く必要とし、男子ばかりを使用する場合に比すれば、女子ばかり使用する場合には、同じだけの勞働結果を上げしむるに就いて、甚だ多額の資

本的設備を必要とするのである。そして言ふには、勞働を行はしむるが爲めに要する資本的設備が、多額なる限りは、たとへ女子の勞働が男子の勞働と同一量の生産効果を擧げ得ても、それは雇主に取つては、決して男子の勞働と同一價値を有し得るものではない。從て女子の勞働に對して、男子の勞働に對すると同一の賃率を定むることは、不公平たるを免れ難いと。此の主張からして雇主は、時間拂の勞賃に於ては勿論のこと、出來高拂の勞賃に於てすらも、女子に對する賃率は男子に對する賃率よりも之を低くし、その仕事が同一種類の仕事であらうとも、そんな事には頓着せず、價値の異る限りは同一の仕事と見ることは出來ぬとするのである。

尚又雇主は、女子勞働者は平時に於ては、男子勞働者と同一樣の仕事をして、同一の價値を有するやうに見へても、一朝有事の時に當つては、女子には臨機應變の能力が乏しく、やはり女子は勞働價値に於て、男子の勞働價値に及ばぬものだと主張する。更には又雇主は、實際に於ては、男子の勞働者と女子の勞働者とを、全然同一樣の仕事に從事せしむる場合は殆んどなく、似たやうな仕事や互に連續した仕事をさす場合にも、常に多少づゝ違つた勞働に從事せしむるものである。

總て斯の如くにして、彼の同一の仕事に對する同一の報酬の原則は、其の解釋の上からしても、既に男女勞働者の賃金率を同一樣ならしむるに足らないのに加へて、其の適用は常に男女の從事すべき勞働の種類を異にする手段に依つて、回避せらるゝを避け難く、折角原則としては正當のものであり乍ら、實際の効果に於ては、多く女子の勞賃をして男子並みたらしむるには足らないのである。即ち原則は一の空虛な標語たるに過ぎないことゝなつてしまはんとするのである。

此の弊害を除去せむが爲めには、此の原則の解釋上に、勞働者側より見た意味を入れることが肝要である。即ち勞働の同一なると否とは、たゞに其効果が同一であるといふばかりでなく、特にそれが雇主に取つて同一價値を有するといふばかりでなく、勞働を營む者に於て同一樣の精力消耗を見、同一樣の身神の努力を要するものは、之を同一の仕事と見る解釋を入れなければならぬ。されば男子たると女子たるとを問はず、勞働者が同一樣の忠實と勤勉とを以て、同一時

間勞働に從事する限りは、それは卽ち同一勞働を爲すものと見るべきである。そして此の意味に於て、同一の勞働に對する同一の報酬の行はるゝ原則を認むるに於ては、それはつまり國家が法律を設けて、男女の爲に區別なき最低勞賃制を布くの必要に到着する次第で、之によつて甫めて此の原則は、其の確實なる適用を見るを得る譯である。然らざる限り之を雇主の任意適用に委かせて置いては、何時までも雇主と勞働者との間に意見の相違を來たすばかりで、一般勞働運動や女子勞働運動をして、益々紛糾せしむるばかりで、其の解決を齎す曉は到來せぬ。そして現今のやうに勞賃決定がたゞ勞働市場に於ける、需要と供給の盲目的なる競合にのみ委かされ、所謂自由競爭制の下に、私的なる個人取引が行はるゝ分では、雇主は常に其の地位の强きを利用して、自己に都合のよい解釋のみを行つて、地位の弱い勞働者は到底頭の上がる氣遣はないのである。まして勞働者中でも男子に比して更に地位の薄弱な女子勞働者は、其の一般的待遇に於ても、其の賃金決定に於ても、常に最も不利益な境遇に置かるゝを避くることが出來ぬ。

　であるから私は、終局の理想としては、勞働雇傭制が廢止さるゝに至り、從て雇傭賃金の問題は跡を絕つに至らんことを希望するけれども、事情其域に達せずして、勞働雇傭の現制度が續く限りは、一日も早く、男子と女子とに區別なく、勞働者の間に有力なる勞働組合が十分に發達して、勞賃決定上に於ける、勞働者の地位が堅固にせらるゝの必要あるを見ると同時に、又國家の力に依る法令を以て、男女を一樣同等に取扱ふ最低賃金制が布かれて、勞働者一般の、特には女子勞働者の地位の、保障せらるゝに至らんことを希望せざるを得ない、卽ち法令に依る最低賃金制が布かるゝことゝなれば、勞働者は男子たると女子たるとを問はず、其の生活の必要に於ては、動かざる保障を得ることゝなり、以て勞賃はたゞ勞働の代價たりといふ以外に、勞働を行ふ者の、人としての生存を保障する意味を加へ來ることゝなる。そして其の最低賃金率以上に出づる勞賃部分は、卽ち之れ勞働者各自の有する勞働の技術上の熟練や、其他能率の多少に依つて生ずる勞働價値に適應して定まる報酬として、多き勞働能率を有する者の餘分所得として、彼を勞ふことゝなり得るのである。そして其の能率の多少は、勿論人一人々々に就いてのことであつて、決して男子と女子とが種別されて取

扱はるべき筈のものではない。何れにしても女子を以て、一列に男子よりも劣等の者として、其の社會生存上の待遇を異にする所の、何等正當なる理由のない、たゞ因襲に依る習慣は、速かに打破せられなければならぬ。人の人としての價値は、各個人々々に就て定まるべきもので、男女性の區別に沿ふて階級的に、先づ以てプレミアムの認めらるべきものでないと同じく、勞働者たる者も亦、勞働者として男女一樣にせられ、其の勞賃の決定に於ても、男女の性に依つてプレミアムが設けらるべきものではないのである。之は洵に現今文明の要求として、是非とも認められなければならぬ。此の大原則さへ認めらるれば、問題は刄を迎えて裁つことが出來るであらう。(終)

# 生産組織の社會化

法學博士　堀江歸一

## 組織的生産の條件

現代文明諸國に行はれつゝある生産組織は所謂産業革命の結果として、生れ來つたもの、發達膨脹に外ならない。人が一日の勞働で物資を生産し、斯くて生産された物資を自己の用に充てるなり、交換に依て、他人の用に供するなりして居つたならば、生産はあるが、生産組織として、認む可きものはない。人と云ふ言葉は複數と爲り、一家族に屬する人々や、他の家族に屬する人々の力を合はせて、生産に從事したとした所で、今日生産した物資を以て、明日の糧に充てると云ふやうな單調な狀態であつたならば、矢張り生産組織は實在しないのである。然るに斯る幼稚な生産狀態で、人の生活上に於ける欲望を充足することは、企及す可からざる所であつて、之を充足するには、生産を組織的にしなければならぬ。生産を組織的にすると云ふのは、要するに第一資本の力を藉り、所謂資本的生産制度の下に、生産の規模を廣大にすること、第二生産の規模の廣大と爲る他の一面に於ては、生産は其産出する物資の種類に依て、次第に特殊の性質を帶び、所謂特化的産業の狀態を生ずること、第三産業の規模を擴張するの必要に促されて、生産業は專ら株式會社の形式で經營され、會社が增資もすれば、他の會社と合同もするので、益々生産上に於て資本專制の狀況を出現すること、第四會社組織で、生産が行はれる今日の狀態では、資本家が同時に企業家であり、又勞働者であるが如きは、到底事實に於て望まれず、資本家は單に株式の形で出資し、企業經營の才能ある者が重役として、會社の事業を經營する衝に當り、經營の一方便として、勞働者を雇入れ、然も經營者自身の裁量で適當と認めた分量の仕事を勞働者に課する

こと、第五斯くて資本的生産制度と相對して、賃銀勞働者の制度が今日の生産組織に於て必要缺く可らざるものと爲り、一方に生産組織の擴張されるに隨ひ、勞働者の從事する仕事は分業で種々に細別もされるし、機械の利用の盛なるに隨ひ、勞働者は機械と共に、又或る場合には機械の運轉する方嚮に導かれて、仕事をしなければならぬから、勞働は勢單調と爲り、又無趣味と爲るのを免かれないことの意味であつて、以上の五點は要するに近代生産組織の特徴を以て目す可きものであつたのである。

## 生産組織に對する是認

從來の經濟學說は細目の點に就ては學者の間に異論もあつたらう、討議もあつたであらうが、大體に於ては、現在の生産組織を以て、國民生活上に有利なるものと認めて來たのである。卽ち生産組織が大規模で行はれる爲めに、物資の供給が豐富に爲り、其生産費が低廉であるを得るとか、社會多數の人々に職業を與へて、衣食の道を保障するとか、人をして一の技術なり、職業なりに習熟し、通曉するに至らしめるとか、資本家は事業に放下した資本を通じて、多額の利益を收め得ることに刺戟されて、益々資本の蓄積に勉め、斯く蓄積された資本は資本の運用に對して拂はれる所の代價である利子の步合を低廉にして、益々事業の發達を促すとか、色々の理由が擧げられ、而して是等の理由は多く實際の事實に依て、間違のないものと立證されたのである。如何にも分業の弊害は其利益と共に、多くの學者に依て、唱道されたし、資本集中の弊害とか、大規模工業の專制と云ふやうな問題に對しても、種々の方面から議論の出て居ることは、爭ふ可からざる事實であるが、大勢に就て概觀すると、世人は資本的生産組織に謳歌する傾の著しきものがある。卽ち一國の法制であらうが、行政であらうが、資本の集中とか、會社の合同聯絡と云ふやうな事柄には、色々の便宜を與へて、其實現を促して居るではないか。一旦或る人の手に若干の富が蓄積された場合に、其れが分割されて、小額のものに爲ることを制限する相續法が認められて居るではないか。此外會社の一般公衆に對する責任を有限とし、一方に

株式の賣買讓渡を極めて自由にしたことの如きも、資本集中の趨勢を助長するものである。由來競爭は人の生活に於て、進歩を齎す所以であると云ふことは、一般に認められた説であるが、一方に競爭には失費消耗の伴ふことを免かれない。昔から諺に鷸蚌爭ひて、漁夫之を並擒したりと云ふが如く、當事者が互に爭つて、各自の產出する物資の代價を低廉にしたならば、結局一方は能く他方を倒すかも知れないが、事の玆に至らざる間に、當業者は早くも妥協したり、聯合したり、合併したりして、各自の利害を保護する手段を取るのであつて、競爭の力に依賴し、或る事業の經營をして社會全體の利害に一致せしめやうとするが如き、當らざる説であり、假令ひ多少の効果があつたとした所で、頗る小なるものである。競爭の行はれつゝある一面に於て、事業家が聯合其他の手段で、事業の規模を廣大にして居るのは、動かす可からざる事實である。

產業革命以來產業の規模が擴張され、今日の如き生產組織の行はれつゝあることは、果して人民全體の幸福とする所であらうか。此點に於て、從來の經濟學は何を我々に敎へたか。多くの經濟原論や、工業經濟論には、必ず大規模(ラーヂ、スケール)生產(プロダクシヨン)の利益と題する一節が設けられ、其利益としては、或は大に機械を應用し得るとか、一般の費用を節約し得るとか、副產物利用の道があるとか、實驗を重ねて、其結果を實際に施し得るとか、種々の點が擧げられる例であるが、歸着する所、大規模生產の利益は富の生產高の增加に外ならぬ。日本の實例に就て考へても、紡績事業が今日大會社に依て、大規模に經營されて居ればこそ、綿絲綿布の產出高は非常の數量に上り、啻に內地の需要を充すに止まらず、遠く海外に輸出され、日本國民の生活に必要な物資を輸入する場合に、其代金の決濟に供される次第である。然し若しも綿絲にしても、綿布にしても、其事業の規模が狹小で、單に一地方の需要のみを充すのみに止まる、所謂地方的產業の範圍を脱しなかつたならば、生產の數量の小なるは勿論生產費も高く、海外に輸出する餘裕もなく、隨て外國から內國民の必要とする物資を輸入するのも、困難と爲る道理である。斯る點から考へれば、今日の生產組織で、產業の規模の擴張されるのは、富の增殖を招く所以であつて、世人が現在の生產組織を承認するのも亦同樣の理由に基くものと認めな

ければならぬ。然しながら斯く富の増殖することが果して社會に於ける幸福として、絶對のものと許すことが出來るや否や、我々の一歩を進めて、論究せんとする點である。

## 現在の組織に對する不滿

富の増殖は社會全體の上から見て、一個の利益であり、幸福であることは、論を俟たないが、同時に社會の利益は必ずしも其社會を構成する個人各自の利益であり、又各自に平等の利益を與へ得るとは斷言するを得ない。何故に斯く社會的利益と個人的利益との間に矛盾を生ずるかと云へば、是れが資本的生産制度の病弊の然らしむる所である。今日の生産組織に於て、資本又は之を所有する資本家が廣大なる勢力を持つて居ることは、何人も認める所である。生産物が今日の如く盛に生産されたとした所で、此生産物を如何なる數量に於て、又如何なる狀態に於て、産出す可きやを決定するのは、誰れであるか、又斯く産出された生産物を如何なる程度の收益を見積つて、幾何の代價で賣ることを決定するのは誰れであるかと云へば、今日の生産組織では是等の問題は盡く資本家なり、企業家なりの一個の裁量で決定されるのである。資本家には資本家的精神の動かす可からざるものがある。何を以て資本家的精神とするかと云へば、其れは今日自由競爭の許された經濟社會に於て、極度まで自己の才能力量を發揮して、自己の目的を達せんとするものに外ならない。從來の經濟學說に於ては「經濟的人間」なるものを假想して、一切の經濟的行爲の基礎を此經濟的人間の發動する利己心に求めたのである。之を實際の事實に就て見れば、人は必ずしも利己心のみで、行動するものでなく、程度こそ人々の間に相違あれ、博愛義俠の念もあれば、奉仕犧牲の考もあるものと認めなけばならぬ。然し何分にも自由競爭の酷烈な今日に於て、人が斯る篤行にのみ心掛けて居つたならば、或は生存競爭場裡に於ける落伍者たらざるを得ない。所謂宋襄の仁、尾生の信は當今に於ける處世上の禁物であつて、何人も自分の利益とする所に向つて、猛進すると云ふ資本家的精神を發揮し、而して資本家は資本を所有する勢力、殊に種々の關係に依て、集中された巨大なる資本

の勢力を運用したならば、經濟的文明の四民に與へんとする利益の分配に就て、如何なる結果を生ずるであらうか、我々の一考す可き問題であつて、是れが現在の生産組織に對する不滿の根元と爲るのである。

富の生産が盛に行はれつゝあることは、爭う可からざる事實であるのに、一方に現代の社會に於て、貧困なる現象の特に著しく吾人の眼底に映ずるのは、何故であるか。貧困に就ても、亦種々の解釋はあるが、要するに人が自分なり、又は自分の後繼者なりに文明國民に値する最小限度の有形的並に無形的生活を送らせるに足りるだけの所得を以て、貧困點の所得とし、所得の此點に達しない場合を貧困とするのは、貧困に關する特殊の研究者に依て、我々の數へられる所である。斯る狀態に於て生活する者が一國に於ける經濟的文明の進歩と共に、次第に減少し、遂に根絶する希望でもあるならば、私は直に現在の經濟組織を是認する次第であるが、事實は稍々此希望を裏切り、今日の社會に於ては、如何に終生勞働に勵んでも、壯年時の勞働力で收め得た所の收入に依賴して、老境に陷つた時の生活を維持することの出來ないものが頗る多いのみならず、壯年時に於て、如何に勞働の能力があり、又其意思があつても、自己の勞働力を應用するに足りる職業に就き得ざる者があり、又之に就いたとした所で、充分の所得が保障される譯でもなければ、職業の安定が保證される次第でない。職業の自由は一般に認められ、如何に卑賤の地位に居る者も一朝の風雲に乘ずれば、如何なる顯職に就くことをも難しとしない道理であるが、實際には名譽あり、利益ある地位は多く有産者階級に壟斷されて、無産者階級に屬する者の接近することを許さない。普通教育を終つて、中等教育を受け、更に高等專門の教育に進まうとする場合には、人の資力が非常な關係を持つのであつて、無資力者であつては、到底教育の恩惠に浴することが不可能であり、此不可能であることが何時までも人の處世上に於ける成敗を決定する原因と爲るのである。斯う論じると、社會進歩の結果今日は人の利用す可き機會は總て均等に爲つた、此均等に爲つた機會を利用したならば、人は其能力を發揮して、自分の利益を收め、斯く個人の利益とする所は社會全體の利益と一致すると云ふ風に、從來の多數の經濟學者が世人に説明して居つたのは、甚だしく事實に一致しない。斯る不調和を生じた有力なる原因は資本的生産制度

の下に、資本家が利益を壟斷するの一事であつて、我々は從來の如く上記の不調和を飽くまでも閑却して、資本的生產組織の助長發達を心掛け可きものであるか、又は資本的生產組織を改造し、富の生產と分配との間に公正なる關係を保たせることに力を致す可きものであるか、是れが今日經濟組織の根本問題であり、又實に國家と國民經濟との關係を律する分岐點を以て、見る可きものである。

## 資本的生產制度辯護の說

私が現在の生產組織に對して、滿足するを得ないのは、資本家の勢力が過重に認められる結果、資本家が自己の利益の爲めに、社會に於ける他の階級の利益を蹂躙し去るの一點に歸着するのである。卽ち資本家は既に述べたやうに自己の裁量で、物資を製造し、又自己の判斷で、物資を供給する次第であるが、資本家が利己的念慮を逞うしたならば、何ものも之を事の半途に遮斷し得べきではない。卽ち今日の生產組織が維持されて居る以上は、資本家は一方の手では、賃銀奴隸たる勞働者を遇するに苛酷の條件を以つてして、出來得る限り生產費を低廉にする、他の一方の手では、一般消費者に對して、彼等の負擔に堪へ得るまで、更に言葉を換へて云へば、自家に最大限度の利益の獲得されるまで、代價を引上げて、利益を貪らんとするのである。日本で勞働者職工が自家の勞働條件の苛酷である爲めに、之に對して常に傭者に向つて、爭議を釀しつゝあることや、資本家が事業を經營する場合に、大企業組織なり、事業の合同聯合なり、其好む所の手段を弄して、或は物資を買占め、或は物資を賣惜み、自ら暴利を貪りつゝ、他の一方に代價を法外の程度まで騰貴させて居る事實に徵したならば、前言の誤まらざる所以が理解されるであらう。斯る資本家專制の生產組織に對して、從來如何なる辯護が試みられたかと云へば、其一は國際間に於ける物資移動の自由であり、其二は內國に於ける需要供給の方則であり、其三は經濟上の自然的調節であつて、是等種々の作用ある以上は、資本家が如何に生產場裡に專制的勢力を逞うしやうとしても、彼等は內外の競爭に强要されて、所謂正常利潤に正當する利益を收め、又正常代

價を以て、物資を市場に賣却する、一方に勞働者に對しても、彼等の生活を支持するに足る賃銀を給與し、斯くて社會諸方面の利害關係は自然に調節されるものと考へられたのである。

## 勞働組合と消費組合

然し斯る樂天的調和論が實行的價値を有せざることの明瞭と爲つてから、論者は何を以て生產組織に於ける缺陷を補正しやうとしたかと云へば、其一ッは勞働組合であり、他の一ッは消費組合であつた。卽ち勞働者の間に團結を設け、殊に其團結を鞏固にしたならば、充分資本家に對抗して、勞働條件を維持し、又時勢の進步と共に、其向上を期圖することが望まれやうと云ふ此事が近年に於ける勞働組合運動の要點と爲つた。資本的生產制度の下に、分業が廣く行はれて、勞働者の爲す可き仕事が簡單と爲つて、仕事の上に何等の趣味を感じないか、人間か道具か、譯の分らぬ狀態で勞働しなければならぬと云ふやうな弊害も勞働時間を短縮し、勞働以外の時間を勞働者が休憩修養娛樂の用に供したならば、自ら之を除き去るを得る理由で、勞働時間短縮の運動が起り、勞働組合が專ら此運動を體現して、實際の效果を生ずるに至つたのであつて、勞働組合が現時の生產組織に對して、其弊害を緩和する效力のあることは、之を爭ふ能はざる次第である。而して消費者は勞働者と違つて、社會の各方面に散在し、集合團結の困難なる事情の伴うことを免がれないが、近年各國に大都會が發達し、是等大都會に住居する市民の多數は自己の勤勞に對する報酬を貨幣の形で受取り、之を諸般の物資に交換して、生活の目的を達するものであつて、物資の生產には直接の關係を有せず、純然たる消費者であると云ふ點に於て、漸次共通の利害關係に支配され來つた一方に、都會生活の酷烈なる事情の加はるに隨ひ、生產業者卽ち農業者、製造業者、卸賣小賣業者の橫暴なる處置又は奸惡なる態度に對抗する爲めに、消費者は消費組合の下に、各自團結を設け、此團結の力に依て、生產業者を壓倒するやうに爲つた。卽ち消費組合が聯合して、組合の定めた標準に合格した物資でなければ、組合員の爲めに、組合に於て販賣をしない、組合が聯合して、大規模で生產業者か

ら、此資を買入れる場合には、組合自ら適當と認める代價を指定し、生産業者をして之に服從させることが出來る、更に組合が自ら資本金を投じて、生産業を經營し、組合員の間に正常の價格を以て、品質の純良なる物資を分配することを根本の主義とし、此外に組合に出資した組合員に對して、金錢上の報酬を與へないことゝしたならば、營利を唯一の目的とする世間の生産業者に比較して、遙かに低廉なる價格を以て、民衆に物資を供給することが出來る譯であつて、此事は自ら製造業者其他の營利一偏から來る横暴の處置を抑制するに足りるのである。

## 團體結社は必要なり

歐米諸國に於て、勞働組合と消費組合とが並び起り、之に株式會社であるとか、又は株式組織で行はれつゝある諸事業の聯合團體であるとか、要するに資本家の團結とも云ふ可きものを加へて、三者鼎立の狀に立つに至つたのは、右の如き關係から來つたものである。消費組合を以て、單純に或る區域内に於ける組合員の爲めに、物資の配給をすることのみ職分とするものと思つたならば、大なる間違ひであり、又大量に物資を原産地で購入して、斯くて生じた割引料や、大量で輸送した鐵道運賃の割戻などに相當する金額だけ、廉價に物資を組合員に配給するに止まるものとしたならば、更に間違ひを重ねるものであつて、消費組合の重なる職務とする所又其眞使命とする所は自ら物資を産出し、以て生産業者の獨占的狀形を打破し、彼等の跋扈を制肘するとに存するものとしなければならぬ。私は此點に就てシドニー・ウェッブ氏の言を「ケンブリッヂ」近代史第十二卷第二十三章中の一節より引抄したいと思ふ。氏曰く消費組合の運動は屢々無識の人に依て分配に於て成効して、生産に於て失敗したと稱せられるが、妄も亦甚だしい。成る程最初は物資の配給を以て、出發點としたが、英國に於ける一千五百の消費組合は今日多種多樣の製造的企業に從ひ、又其内に牧畜業の如き農業を經營するものも少なくはなく、牛酪乾酪製造の如きは、消費組合の手で、次第に發達しつゝある。英國に於ける五個所の最大なる製粉所は二百萬人に年々食糧を供給して居り、又最大の製靴工場は一年一百萬足以上の靴

を製造するが、是等は何れも二百萬人を組合員とする消費組合に依て、所有され、又經營されて居るものであると。英國に於て今日消費組合が如何なる方嚮に向つて、動きつゝあるやは、此文字を通じて窺うことが出來る。消費組合は單純なる物資の配給所ではない、日本で頻に計畫される消費組合の如きは、單に分配式消費組合の形態に過ぎないのであつて、之を生產式消費組合の形態にまで、進めない以上は、到底世間に充分の効果を與へることを望み得ないのである。

## 世人は三者の鼎立に滿足するか

兎に角勞働組合と消費組合と二種の機關は從來資本的生產制度の下に律された生產組織を改造するか、又は少なくとも其弊害の極端に趨ることを抑制するものと認められて居つた。トレード・ユニオニズム(勞働組合主義)コオペラチーヴ・ムーヴメント(消費組合運動)は各國を通じて、其間の程度に多少の違ひはあつたとしても、如何に盛なものであつたかは、私の架說を要しない所であつて、私が近來頻に我國に勞働組合主義を皷吹しつゝあるが如きも、要するに外國の狀勢に刺戟された結果であることを自白するに躊躇しない。彼の「シンヂカリズム」と云ひ、又「ギルド・ソーシャリズム」と云ひ、「トレード・ユニオニズム」とは思想上の根柢に相違ありとしても、尙ほ勞働組合を以て、社會改造の基礎に充てやうとする事實に徵すれば、今日の社會に於て勞働組合が如何なる勢力を持つて居るかと云ふことの一斑を知ることが出來るのである。

右に論ずる次第であるから、私の如き從來、我國にも勞働組合を起し、又消費組合を設け、殊に其消費組合と云ふのは、是れまで日本に行はれて居つたやうな配給的組合でなく、生產的組合の形式を用ひ、一方に資本家の組合團結の存在するに對して、他の一方に勞働者の團結があり、又消費者の團結があつたならば、夫れで社會に於ける利害の平衡を保ち、調節を期し得るものと考へて居つた。今日に於ても大體同樣の考を以て、社會上の諸問題を解決しやうと努力し

つゝあるのであるが、唯平生思案に餘つて居るのは、右に論じたやうに、社會に三種類の團結を作り、團體の勢力を以て、互に相對抗させる場合に、三者の力が平衡を保つならば、或は此對抗が調和を得やうが、此事は容易に望まれず、三者が互に階級的利害の念を以て、爭ふ爲めに、社會の平和を害するの結果を生じはしないであらうか。資本家が獨り組織の力を掌握し、組織されざる勞働者や、消費者を壓倒しやうとする今日こそ、勞働者や消費者をして團結の勢力で、資本家に當らせやうとするのは、自然の勢であるが、三者の間に團結が成立した暁に、三者の間に於ける團結を無統制の儘に置いて、果して社會全體の調和を保てるであらうか、どうか、此點に就ては何人も大なる疑を挾まざるを得ない。斯くて上述の三種團體の對立から、今一歩を進んだ生産組織の改造を必要とするのである。

## 生産組織改造の必要

私は今最も簡單に所信を述べやう、生産組織を改造して、社會全體の關係を調和するに最も必要なのは何であるかと云へば、生産制度に於ける私人の利害を退けることに歸着する。言葉を換へて云へば、今日の如く私人が自分一個の利益の爲めに生産をするのでなく、社會の利益の爲めに、生産を行ふと云ふ状態に爲つて、始めて如上の目的を達するを得るのである。然し人間其ものゝ改造されざる限り、人が利己心を棄て、如何なる場合にも、社會の利益に殉ずると云ふことは望まれず、生産業者だけに此事を望むのも、亦無理である、此點に至つて、私は經濟生活を改善する爲めに、今日以上に國家の活動することを必要とする。現在の如き國家組織の下に、國民生活の上に生じつゝある扞格矛盾に對して、國家が傍觀者の地位に立ち、自然的調節の行はれることに依頼して、萬事の解決を得やうとするが如きは、沙汰の限りであつて、勢國家の活動に依らなければならぬ點が多々ある。就中生産組織改造の方面から觀察して、必要であるのは、國家が今日私人に依て所有され、經營されて居る財産並に事業を國家の所有に移し、國家自ら民衆の利益の爲めに、之を經營するの一事である。兩三年來綿布、綿織物、砂糖、米のやうな生活必需品の代價が暴騰して、國民の生

活に壓迫を加へつゝあることは、世人の知る通りであるが、此場合に或る人が紡績會社の株主であり、砂糖會社の株主であり、又若干の田地所有者であつたならば、どうであらうか。彼等は綿布、綿織物、砂糖、米の代價の騰貴すればするだけ、紡績會社や砂糖會社から受取る利益配當金なり、小作人から徵收する地代なりが增加するので、一方に失ふ所を他の一方に於て償ひ得るの道理と爲る。然しながら全國六千萬の同胞を擧げて會社の株主とし、又限りある土地の所有者とすることは事實に於て不可能であるが、之と同じ趣意を果すには、即ち國家自ら國民生活上に重大な關係を有する物資を生産する事業なり、又其生産に資する資本なりを國有に移し、民衆の爲めに、生産を行ふことを必要とする。斯うなれば今日の生産組織に於けるが如き競爭の失費もなければ、大資本家の獨占もなく、彼等が自己の利益を謀る爲めに物資の買占め賣惜みで、不當の負擔を消費者に加へる恐もなく、生産者と消費者との利害は自ら調和するを得るであらうし、勞働者の立場から見ても、從來の資本的生産組織の下に、當業者が自己の利益を貪る爲めに、勞働條件を壓迫すると云ふ弊の如き、自ら除却されるものと認めなければならぬ。

## 官業に對する解釋を一新す可し

之に對する反對論は無論起らざるを得ない。就中有力なる反對論は從來の國有國營事業の不成績を基礎としたものである。即ち我國の實例に就て見ても、鐵道と云ひ電信電話と云ひ、煙草鹽の專賣と云ひ、官業である爲めに、特に民衆の利益と爲つたものが一ッでもあるかと云へば、一つもない。官業官營と爲れば、必ず料金の騰貴、供給の不足、物資配給の不滿足、設備の粗惡と云ふやうな直接間接に、又有形無形に人民の負擔を增加することばかりが我國の官業に離る可からさる事相である。隨て今國民の生活に至重の關係を持つ物資の生産を國家の事業としたならば、益々從來の弊害を加重するのみであつて、何等の利益も伴はないと云ふ議論の生ずるのは、當然であるが、私は論者に向つて、二ッの注意を求めたいと思ふ。第一に從來の官業は其經營の衝に當る官僚が國庫收入の手段として、之を利用したのであつて、第二に議會も亦官業を通じて、民衆の利益を謀らうと云ふやうな至純の考はなく、政府と共に、官業を以て、收稅

機關に代るものと認めて居つたのである。然しながら民衆の利益に着目して、國家が官業を經營する場合に、幾ら收入が取立て易いからと云つて、官業を收税の用に供するが如きは、錯誤の甚だしいものであつて、斯くては負擔の中流以下の社會に偏倚するの故を以て、常に非難の聲を絕たない消費税の弊害を官業で上塗りするものに外ならない。民衆の利益を目的として、經營される官業は必ず公正なる代價で、廣く消費品を一般民衆に分配する、而して其物資を製造する場合に、勞働者に課する勞働條件も亦極めて之を公正にすると云ふことを主眼としなければならぬ。近來我國で砲兵工廠とか、製鐵所とか、政府直轄の大工場に於て、同盟罷業の盛に行はれるのは、何故であるかと云へば、其一原因は是等の官設工場に於ける勞働條件の民間工場に比較して、劣等であることに歸着する。煙草專賣局其他の官業に於ても、勞働條件は決して優秀であるとは稱されない。公平な見地から云へば、官業の經營者こそ民間の事業家に對して、模範的勞働條件を示さなければならないのに、却て勞働者を虐遇し、一方に官權に伴ふ獨占の横威で、專賣品に最高價格を徵して、消費者を苦しめつゝあるのである。故に今日の官業の如きは、事實經營上の惡標本であつて、一方に勞働者を泣かせ、他の一方に消費者を苦しめる點に於ては其横暴振りこそ、民間の資本家以上である。私は決して斯る種類の官業の擴張されるのを希望するのではない。私の主張する官業は要するに國庫收入の見地を離れ、廣く、民衆に對して、物資の供給を自由にすることを骨子とするものであつて、詰り從來の生産組織の下に、資本家の收めつゝあつた利益を代價低減、設備改良の形態で、民衆の利益としやうとするものに外ならない。

## 政治の改造亦急を要す

從來我國に於て右に述べたやうな亂暴な官業經營法が行はれながら、民間消費者の間に、多少の不平抗議の起れる外、根本的に之を革新する聲の少なかつたのは、何故であるかと云へば、畢竟民衆の利害から隔絕した官僚が政局に當り、又行政を監督す可き議會が毫も民衆の利害を代表しなかつた爲めである。随て私が曩に主張したやうに我國民の生活に必要なる物資を生産する事業を國有にしやう、其生産に關係ある資料を國有にしやう、斯くして生産組織を改造し

て、民衆の利害に調和させやうとするには、政治の改善を以て必須の條件としなければならぬ。普通選擧を實行して、從來議會が社會一部局の利害を代表するに過ぎなかつた狀形を一變し、名實共に完全なる國民的議會を造り、此國民的議會に勢力を得た國民的政黨に政權を託して、始めて國民の利害と一致した政治が行はれる次第であつて、此場合に於てこそ、我々は國家に向つて、國民全體の利害に適合する經濟的施設の一として、國營國有事業の擴張を要求す可きものである。今日の機運は正に之を目標として進みつゝある、此際に尙ほ資本的生產組織を過重視し、自由競爭や、自然的調節に未練を殘して、昔を今に眺めやうとする者の居るのは、私の怪訝に堪へざる所である。

私有財產權の廢止論は我國に於ては危險思想視されて居るやうである。斯う云ふ觀察の當否に就ては、私は今之を論ずることを避けるが、一應誤解を避ける爲めに、私の上來述べた國營事業擴張論と私有財產權との關係に就て、一言を費したい。私の議論を進めて行つたならば、結局土地は國有に移される、國民生活の必要品を產出する諸事業も國有に移　れ　、水力とか、電氣瓦斯とか云ふやうな今日の生產界に於て、必要なる物を國有か、公有かに移される、蒸氣鐵道電氣鐵道も國有か公有かの孰れに歸屬せしめられやう、生命保險業は勿論貯蓄銀行業の如きも、私人の營利事業から解放されることが必要であらう、而して斯く從來私有財產であつたものが國有公有の財產と爲つたとした所で、國家又は公共團體が以前の財產所有者に對して、買收代金として、公債を交付するとしたならば、事業の形態に於ける私有財產が公債の形態に於ける私有財產に變つただけであつて、之を以て決して私有財產權を侵したものと云へない、寧ろ或る點に於て私有財產權の鞏固を謀つたものとも云はれ可きである。北米合衆國は從來資本家跋扈の國と稱されて居つた。夫れが今日は決して彼等の專制を許さない、現に所得稅の最高率は六割七分に上つて居りながら、資本家や富豪は之に服從するの已むを得ない狀態ではないか。英吉利でも資本家は資本徵課金を課せられるか、然らずんば最高率五割一分に上る現行の所得稅に服するか、孰れかの一を强ひられる有樣ではないか。此時代に於て、我國獨り資本家專制の生產組織を續けて行かう、資本家階級を擁護する爲めに、普通選擧を遮斷しやうと云ふ議論や、運動の行はれるに至つては、私は唯筆を擱いて嘆息するの外あるを知らないのである。

# 勞働總同盟C・G・Tの研究

山川　均

## 七　C・G・Tの組織

以上によつてC・G・Tの諸要素が明らかになつた。即ちC・G・Tの基本團體はサンヂカであるが、C・G・Tに加入するものは直接サンヂカではなくて、(一)サンヂカの全國同業聯合及び全國組合)、(二)ブールス(又はユニオン)、但し地方同盟（ユニオン・レヂオナル）のある場合には地方同盟が加盟資格を持つ。即ち原則としては、個々のサンヂカは直接C・G・Tに加盟を許されない。C・G・Tに加入し、C・G・Tのうちに代表せられるには、個々のサンヂカは少くとも同業聯合かブールスかの、一つに加入しなければならぬ。而かも完全にC・G・Tのうちに代表されるには、縦横二様の聯合團體に加入しなければならぬ。此規約第三條の精神は、一面には聯合團體の發達を促進し、勞働階級の勢力を縦横二重の紐帯によつて集中するにあることは云ふまでもないが、更に之にも劣らぬ重要なことは、C・G・Tの内部に、黄色組合の侵入を防ぐといふ、周到なる用意が存して居る。黄色組合の運動は一九〇一年ラノアルによつて初めて着手せられ、主として一九〇三——七年の間に發達したもので、一八八二年乃至九〇年の間に盛んであつた混成組合（サンヂカ・ミキスト）(傭主被傭者共同の組合、加特力組合ともいふ)の系統に屬するものである。黄色組合は勞資協調を標榜し、大抵資本家の財力によつて支持せられ、戰鬪的組合運動攪亂の目的を以て、資本家の勢力下に組織せられたもので、固より階級的の自覺と階級鬪争の原則を基礎として居らぬ組合である。モンソー・レ・ミヌに初て此派の組合が設立された時、組合勞働者は憤激して、其事務所の窓硝子を悉く打毀はして了つたので、間に合せに黄色の紙を窓に張つたことがある。此時から此種の組合を黄色組合（サンヂカ・ジョーヌ）(Syndicatjaune)と呼ぶとゝなつた。資本家階級が其財力を投じ、無名無實の組合を多數に作り、是等の黄色組合がC・G・Tの大會に一票を有することになれば、組合運動は少からぬ攪亂を受けることは明らかである。幸にして是等の黄色組

合は何づれも孤立的のものであつて、ブールスにも聯合にも加はつて居らぬので、規約第三條は能く是等の組合に對してC・G・Tの門戸を固く鎖ざすことが出來る。

そこで個々のサンヂカは原則として加入を許さぬが、それには除外例がある。即ち(一)同一產業(又は職業)の組合間に聯合の組織せられて居らぬ場合、又は聯合はあつても、其れがC・G・Tに加入して居らぬ場合　此場合には單獨のサンヂカの加入を許すが、C・G・Tのうちに同業のサンヂカが三個以上となれば、直ちに聯合を組織しなければならぬ。

更に原則としては、サンヂカは全國聯合に加入し、且つブールス(ユニオン又は地方同盟)に加入して居らねば C・G・Tに參加することは出來ぬが、特にブールスの本部から隔たつた僻遠の地にある組合が、單に全國聯合にのみ加入する事を希望する場合には、特別の詮議をすることゝなつて居る。但し此場合には、一ケ年の猶豫期間内に、條件を滿たさねばならぬ。尙ほC・G・Tに加盟の資格として、共團體は機關雜誌『民の聲』を少くとも一部以上購讀しなければならぬ。

そこでC・G・Tの組合分子には、一方には組合の產業別（又は職業別）の聯合たる同業聯合と地方別聯合たるブールス（又はユニオン）とがある。C・G・Tは此組合運動の事實其儘を取つて其組織の根本として居る。即ちC・G・Tは二部に分かれ、第一部を產業又び職業聯合、並に單獨組合部(Section Fédérations d'industrie et de métier et des syndicats isolés 略して產業聯合部)と呼び、第二部を勞働取引所聯合部(Section de la Fédération des Bourses du Travail 略してブールス聯合部）と名づける。

この兩部は各々獨立の委員會(Comité des Fédérations d'industries et de metiers 及び Comité des Bourses du Travail) 略して聯合委員會と云ふ）を有し、完全なる自治權をもつて居る。聯合委員會は兩部とも、加盟團體(加盟サンヂカに非ず)より選出せられた一名づゝの代議員から成立つて居る。代議員は一ケ年以上組合員たることを要し、一人にて三團體までは兼任代表することが出來る。兼任を認めたのは、委員會の人員の過大とすることを防ぐ爲である。兩部とも幹事、副幹事、副會計、書記各一名、兩部共通の會計一名を置く。兩部は所屬組合より一定の會費を徴集して財源とする。

兩部の職分に就ては、規約第七條以下に次の如く定めてゐる。

『產業及び職業聯合並に單獨組合部は、是等の團體の行動を

調整する爲に產業及び職業聯合間の關係を處理し、經濟的鬪爭の領域に於ける、組合的行動を支持するに必要なる一切の手段を講じ、產業又は職業による聯合を創立し、若しくは之が創立を促進し、產業又は職業の部門に從つて、未だ聯合團體なき同職又は同一產業の組合を團結するにある。

當部は、其加盟同盟團體所屬の組合にして、未だ勞働取引所へ若しくは種々なる組合の地區（ローカル）、縣、又は地方同盟（レヂオナル・ユニオン）に加入して居らぬものは、組合同盟を完成する爲に、是等の同盟團體に加入せしめる。』

『勞働取引所聯合部は、勞働取引所の事業を調理し且つ簡易ならしめる爲に、是等の團體間の關係を調節し、未だ是等の團體の無い中心地、都市、又は地方に、新なるプールス又は種々なる組合の同盟（ユニオン）を創立し、若くは創立を促進すること、其加盟團體所屬の組合中、未だ產業又は職業によつて聯合して居らぬものを、各々其聯合に加入せしめるとを目的とする。

當部はプールス又は其他の有ゆる組合團體より提供する報告に基づき、佛國に於ける生產、消費、失業の統計、各地方の賃銀及び生活費の比較統計を定期に立て、之によつて無料職業紹介を男女一切の勞働者に普及せしめる。

當部は注意して勞働者に關する裁判の進行を監視し、總同盟加入團體に利益と不利益とを知らしめる。

當部は組合の管理、並に勞働者の精神上教育に關係のある一切の事業に携はる。』

この兩部の聯合委員會（コミテー・フエデラル）を合したものは、即ちC・G・T全體の委員會たる總同盟委員會（コミテー・コンフエデラル）となる。そこで總同盟委員會（コンミテー・コンフエデラル）は、加盟團體（加盟サンヂカに非ず）より選出せられた、各一名の代議員より成立つて居る譯で、此場合にも各加盟團體は大小の如何に拘らずC・G・Tのうちに、平等に一票の票決權を有することゝなる。即ち八十名の組合員より成る洗濯夫の聯合會も、二萬人の組合員を有する纖維業の聯合會と同じく、總同盟委員會に一名の代議員を出だし、組合員二十名の地方組合も、組合員四萬五千の全國鐵道從業者組合と同じく、C・G・Tの管理に同一の票決權を持つのである。

總同盟委員會（コミテー・コンフエデラル）は、規約第二十一條の云ふが如く、『兩部をして各々其得たる觀察を陳述し、團結せる勞働階級の最高の利益に關して、必要なる變更を提議し得られるように、三ケ月毎に集會する。即ち總同盟委員會は、兩部の意見を接觸せしめ、之によつて勞働階級の一般的利害に關して、勞働階級の職業上の利

害と地方的の利害とを綜合し、融和せしめることを目的とするものである。そこで組合的行動の任に當るものは、總同盟委員會ではなくて、兩部である。斯ように總同盟委員會は、組合的行動の焦點とはなるが、組合運動を支配し命令する中央權力ではないのである。

C・G・Tには總同盟委員會（コミテ・コンフェデラル）の外に、尙ほ三つの特別委員會がある。

(一)機關雜誌委員會（コミション・デュ・ジュルナル）、C・G・Tは一九〇〇年以來、機關雜誌民の聲を發行して居る。委員會は編輯經營一切の任に當るものであつて、編輯者は如何なる場合にも、機關雜誌を有害なる論爭組合間の紛議個人的の爭鬪と政爭の舞臺たらしめぬことを任とする。第一部の副幹事が、此委員會の常任幹事を勤めることゝなつて居る。此委員會の經營は、兩部に於て平等に負擔する。一九〇八年には『民の聲』の前金拂込は七千に過ぎなかつたが、此雜誌の勞働階級の間に於ける宣傳の力は驚く可きものがある。

(二)同盟罷工及び總同盟罷工委員會（コンミッション・デ・グレーヴ・エ・ド・ラ・グレーヴ・ゼネラル）。詳くは同盟罷工、總同盟罷工、及び八時間運動委員會である。此委員會の目的は、各國に於ける罷工及び八時間運動を研究し、罷工に當つては醵金を募集して、分配し、總同盟罷工の思想を勞働階級に徹底せしめる爲に、有ゆる宣傳を行ふ。委員會はまた、各地に總同盟罷工小委員會を設けて居る。總同盟罷工委員會は、是等の小委員會の手に集まつた醵金の百分の五十、兩部の徵集した會費の百の五とを受けて共財源とする。此委員會も財力に於ては極めて限定せられて居る。一九〇四年六月一日より一九〇五年九月三十日迄に、委員會は九百六十法五サンチームを受け、一九〇七年二月二十日より一九〇八年六月三十日迄に五千三十四法九十五サンチームを受けて、四千四百四十三法八十サンチームを支出したに過ぎぬ。又た罷工の基金としては、一九〇六年六月一日から一九〇八年六月三十日迄に、二萬二千七百六十五法二十サンチームを受けて、二萬三千三百二十七法三十五サンチームを支出した。

C・G・Tの活動期に入らんとした一九〇〇年を境として、同盟罷工の數は次の如き增加を示して居る。

| 年次 | 罷工數 | 人員 |
|---|---|---|
| 一八九五 | 四〇五 | 四五、八〇一 |
| 一八九六 | 四七六 | 四九、八五一 |
| 一八九七 | 三五六 | 六八、八七五 |
| 一八九八 | 三六八 | 八二、〇六五 |
| 一八九九 | 七四〇 | 一七六、八二六 |

| | | |
|---|---|---|
| 一九〇〇 | 九〇二 | 二二二、七一四 |
| 一九〇一 | 五二三 | 一一一、四一四 |
| 一九〇二 | 五一二 | 二一二、七〇四 |
| 一九〇三 | 五六七 | 一二三、一五一 |
| 一九〇四 | 一、〇二六 | 二七一、〇九七 |
| 一九〇五 | 八三〇 | 一七七、六六六 |
| 一九〇六 | 一、三〇九 | 四三八、四六六 |
| 一九〇七 | 一、二七五 | 一九、七九六一 |

罷工の增加が何の程度まで、C・G・Tの活動の結果であるかは遽かに測定することは出來ぬけれども罷工に關與した勞働者の中で、非組合員に對する組合員の比率の著しく增加して居ることは事實である。一八九〇年代には、組合の少い纖維工業に最も多く罷工が起つたが、一八九四年から一九〇五年の間には罷工に關與する組合員の割合は急速に增加した。一八九四年には組合を有する勞働者の罷工は、罷工總數の四割に過ぎなかつたが一九〇五年には八割一分となつた。同盟罷工の成績に就いて見ると、一九〇五年には、十七萬七千六百六十六人の罷工者中、約七割（十二萬四千人）は賃銀の增額を要求し、其八割五分は全部又は一部の勝利を得た。又五十三萬人の罷工者は勞働時間の短縮を要求したが、其四割は完全な勝利を得、五割一分は一部の勝利を得、僅かに百分の九・三五が失敗に歸して居る。

（三）監査委員會（コンミツシオン・ド・コントロール）。此委員會はC・G・Tの全體に亘り、財政上の監督を行ふ。

以上の三委員會の外に、一九〇六年には、クレマンソー內閣の組合鎭壓政策に應戰する爲に、臨時に宣傳委員會（コンミツシオン・ド・ラヂタシオン）を新設した此委員會は一九〇七年六月二十一日から一九〇八年四月三十日迄に、宣傳基金として五千百八十九法八十サンチームを受け、四千九百九十三法八十サンチームを支出し、殘部は罷工委員會に繼承した。

以上の委員會は何づれも十二名の委員より成り、兩部より六名づゝを選出する。委員會は各々一名の幹事を選任し、委員會の召集、議事錄の作成に當らしめる。

兩部の幹事局と、前記の四委員會の幹事とを合したものが、總同盟委員會（コミテー・コンフエデラル）の執行機關であり、從つてC・G・Tの最高の執行機關たる總同盟幹事局（ビユロー・コンフエデラル）となり。そこで總同盟幹事局は、兩部幹事局より五名づゝ、之に三委員會の幹事を加へて十三名から成立つて居る。そして第一部が即ち產業聯合部の幹事が、總同盟の幹事長となる。總同盟幹事局（ビユロー・コンフエデラル）は、總同盟委員會（コミテー・コンフエデラル）を召集し、其決議を執行する。總同盟幹事局はまた、C・G・Tの每大會後（二年每）に交迭するが、再任を妨げぬ。

大會は隔年の九月に開かれる。總同盟委員會は大會の組織に關する職分の一部を、開催地の組合團體に委任するのが常である。總同盟委員會は加盟各團體と商議して大會の議題を定め、少くとも三ケ月前に各團體に通知する。大會には、直接又は間接にC・G・Tに加入して居る勞働團體は、各々一名の代議員を送るの權利がある。即ち産業聯合もブールス及びユニオンも又た是等の聯合團體を通じて間接にC・G・Tに加入して居る。個々のサンヂカも、同じく一名づゝの代議員を大會に送るの權利がある。但しそれは大會開催以前、三ケ月以上C・G・Tに加盟して居り、且つ大會に提出する會計報告調製の當時に、會費納付の義務を完ふして居る團體に限られる。

斯ように聯合團體は大會に代議員を出だすの權利がある、實際に於ても代議員を出だしては居るが、是等の聯合團體の代議員は發言權を有するだけで、票決權は有しない。大會に票決權を有するのは、個々のサンヂカの代議員に限られて居る。そこで個々のサンヂカは、中間團體を通ほしてゞなければ、直接C・G・Tに加入することは出來ぬが、C・G・Tの最高決定機關たる大會に於ては是等の中間團體は消滅して、C・G・Tの基本組織體たる個々のサンヂカが直接に最高決定權を握つて居る。斯くの如く、C・G・Tの大會は、個々のサンヂカに取つての、組合員總會に均しいものであつて、此大會によつて全てのサンヂカは互に觸接し、其間に組合運動の雰圍氣を醸成し、全勞働組合運動に一定の方向を與へることゝなる。C・G・Tの大會は單に一片の形式的の勢揃ひをして氣勢を張る爲ではなく、組合界に於ける一切の思想と傾向とは此に反射し、組合運動の一般政策は之によつて決定せられる。

毎大會、地方代議員中より監査委員を選び、C・G・Tの會計報告を監査せしめる。代議員は一人にて、十組合までを兼任代表することが出來る。C・G・Tの大會は一九〇四年のブウルヂユ大會に至つて、初て政府又は市の補助に俟たずして獨立することができた。ブウルヂユ大會には一千百七十八のサンヂカが參加したが、それは四百名の代議員によつて代表せられ、内三百五十名は地方より來り、五十名は巴里在住者であつた。

大會の後で、必要に應じて兩部の會議を開く。

C・G・Tの財源は、加盟團體より徴收する會費である。一九一〇年一月より實施せられた改正會費は、次の通りである。

第一部。産業及び職業聯合、並に全國組合は、其所屬組合員百人又は端數毎に、一ケ月六十サンチーム。單獨に加入して居

るサンチカは、組合員一人に付き、一ヶ月五サンチーム（前年迄は一ヶ月四十サンチームであつた。又一九一二年のツウルウヌ大會は、八時間運動の財源を得る爲に、聯合團體の會費を組合員一千名に對して十法とした。）

第二部。ブールス及びユニオンは、所屬組合員一人に付き一年五サンチーム。（前年迄は加盟組合毎に一ヶ月三十五サンチーム。前記のツウルウヌ大會は縣同盟（ユニオン・レヂヨナル）の會費を、組合員一千名に對し七法とした。）

一九〇六年六月一日より、一九〇八年六月三十日に至る二ヶ年間の收支を見ると、第一部は會費二萬二千二百三十七法、其他の收入及び前年度の繰越金を合して、總計二萬七千三百三十九法となり、支出は二萬三千五百三十法であつた。同一期間中に第二部は、會費一萬五千六百四十法、總收入一萬六千四百法に對して、一萬八十法を支出して居る。C・G・T が財政的には甚だ貧弱であることは、右の數字を見ても明かであるが、佛國の組合主義者は、總同盟の實力を、財力によつて秤量することを肯んじない。『金錢を以て、C・G・T の戰鬪力の泉源と思ふのは間違である。C・G・T は財力を以て測ることを許さぬ膨脹の力をもつて居る。其裡から類ひなき革命的飛躍が發露する、活きたる行動の焦點であつて、其勞力と成業とは、全く其財力との比例を絶して居る。』C・G・T が斯ような貧弱な財政に滿足して居るのは、『豫算は管理上の必要と宣傳上の必要とを充たす可きものに過ぎないものであつて、團結の爲の豫算ではない』からである。斯くて同盟罷工が起つたとすれば、C・G・T は精神上の援助を與へ、代議員を現場に急派し、斯くて團結的行動を催進する。けれども C・G・T は直接、金錢上の補助は與へない。斯ような職分は、普通には產業聯合によつて果されるものであつて、產業聯合は或は罷工基金により、或は加盟組合から臨時の會費を徵集して、罷工者を救援するのである。

C・G・T の數量上の實力に至つては、精確な數字を知ることが出來ぬが、次表によつて其一斑を伺ふことが出來る。

| 年次 | 組合總數 | 組合員總數 | C・G・T加盟同業組合數 | C・G・T加盟組合數 | C・G・T加盟人員 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一九〇二 | 三、六八〇 | 六一四、二〇四 | 三〇 | 一、〇四三 | 一二〇、〇〇〇 |
| 一九〇四 | 四、二二七 | 七一五、五七六 | 五三 | 一、七九二 | 一五〇、〇〇〇 |
| 一九〇六 | 四、八五七 | 八三六、一三四 | 六一 | 二、五九九 | 二〇三、二七三 |
| 一九〇八 | 五、三二四 | 九五七、一〇二 | 六五 | 二、五八六 | 二九四、三九八 |
| 一九一〇 | 五、二六〇 | 九七七、三五〇 | 五七 | 三、〇一二 | 三五七、八一四 |
| 一九一二 | 五、二一七 | 一、〇六四、〇〇〇 | 五三 | 二、八三七 | 四〇〇、〇〇〇 |

右はレヴイン教授の『佛國の勞働運動』より拔萃したもので、

恐らく職業組合年報とC・G・T大會の報告とを基礎としたものであらうと思ふ。が此數字は的確とは云はれない。例せばパウロウスキーは、一九〇八年の加盟團體を七十一聯合、二十二單獨組合と算し、大會の報告は六十九と云つて居る。同年の組合員總數も、報告は二九四、三九八として居るが、ヴイヴイアンは三二二、〇〇〇と算して居る。又一九〇五年の加盟團體に就てもパウロウスキーは六十四聯合、二十一單獨組合とし、所屬組合總數二、三九九として居るが、大會の報告は二、四三五と云ひプウゼーは三、四〇〇と算して居るの類である。C・G・Tの報告によると一九一〇年には加盟聯合團體は五十七に減じて居る。此減少は聯合の合同によるものであつて、職業的聯合が漸次産業的聯合に變じて居るものである。

プウゼーは統計上の數字と、實數との間に非常の徑庭のあることを指摘して次の如く論じてゐる。一九〇八年にはC・G・Tの第一部には六十四聯合を含み、其會員二十九萬五千人となつて居るが、此報告は聯合團體からC・G・Tに對して實際會費の納付せられた人員である。佛國の組合は一般に會費の納付が不規律である、聯合會も成る可く所屬人員を内輪に見てC・G・Tに會費を納入する。そこで實際の組合員は遙に多いのである之はブールスに就ても同樣で、同年C・G・Tの第二部は百五十四ブールス、二千百四組合となつて居る。然るに百五十四ブールスに屬する組合實數は、少くとも二千六百組合であつた。斯くの如く、納入會費を基礎とする報告の數字は、實數よりも遙かに少いものである。更にブールスに加入して居る二千六百の組合の中には、少くとも九百組合は同業聯合を有しない組合であつてあつて、従つて第一部の計算から脱して居る。そこで是等の組合を加算したならば、數字は遙かに増加するのである。

C・G・T加入組合員と、組合勞働者總數との割合に就ても、プウゼーは次の如く云つて居る。政府の統計によると、一九〇八年の組合勞働者は男女を合して總計九千五萬七千人であつて、五千五百の組合に屬して居る。然るに同年に於けるC・G・T加盟組合數は三千五百であつて、第一部に屬する組合員は最少限度に見積つても、二十九萬五千である。之にブールスのみに加盟して居る組合の勞働者を加算すると、總人員は約四十萬となるそこでプウゼーは一九一〇年の總人員は、第一部に屬する三十五萬の外に、ブールスのみに屬する組合員を合して約五十萬人を算定して居る。C・G・Tの現任幹事長ジュオーは、一九一二年に於ける、現に會費を納付せる人員は四十五萬人であつて、實

數は六十萬人以上であると云つて居る。以上を綜合し、戰前に於けるC・G・Tの總人員は、六十萬前後と見て大過はない。

一九一〇年に於ける、佛國の有ゆる種類の勞働者は約一千一百萬であつて、其内組合を有するものは約一百萬人である。然るに此一百萬人のうちには、黃色組合をも含んで居るので、是等を控除すると、佛國に於ける組合勞働者の大部分は、C・G・Tの傘下に集まつて居ると云つてよい。然しながら六十萬の人員はC・G・Tの組織と抱負と、全世界の資本階級の眼に映じて居る大なる陰影とに比較して、寧ろ其數量上の貧弱を感ぜしめるものである。たゞ事實はコールの指摘して居る如く、C・G・Tが數量的に小なることは、佛國の組合勞働者全體が數量的に小なることを意味するものであつて、組合勞働者の裡に於けるC・G・Tは必ずしも小なるものでない。C・G・T以外にては、佛國には少くとも重大なる勞働階級の運動は存しないと云つても差支ない。けれども佛國の組合主義者によれば、數量上の大小すらも、必ずしもC・G・T の戰鬪力を代表するものではないのである。

三ケ月間會費を滯納した團體は、通告して回答がなければ脫退したものと見做す。但し滯納會費を全納して再入會することが出來る。右の場合を除き、加入團體は、大會の決議による外脫退せしめられることはない。但し緊急の場合には、總同盟委員會が假處分をして置いて、大會の決定を待つ。

C・G・Tは團結の表象として、又た加盟組合を黃色組合と區別する爲に、總同盟標（ラベル・コンフェデラル）を定め、加入資格を完全に具備するサンチカに專用せしめて居る。但し總同盟標は圓く世界地圖を現はし、左右から差のべた二つの手が海上で堅く握り合ひ、『萬國の勞働者團結せよ』の精神を表はしてゐる。そして其周邊に次の文字が入つて居る。BIEN-ETRE ET LIBESTE CONFEDERATION GENERALE DU TRAVAIL（幸福と自由勞働總同盟

## 八　C・G・Tの運動方法

C・G・Tの運動方法は、一口に云へば直接行動である。グリフユールによれば…………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………そこで規約は其劈頭に、C・G・T又は其役員の資格を以て、一切の選擧運動に

携はることを禁じて居る。

然しながらC・G・Tの運動は、…………………………………………………………………………包含するとも云ふことができる。假へば一九〇三—四年の私立職業紹介所反對運動の如き、一九〇三年の職業審理會に於ける勞働者の倍審權擴張の運動、一九〇六年の八時間法制定要求の運動の如きは、廣き意味では……………………………………………來る。そこで佛國組合主義者が、政治運動に對立して主張する經濟運動とは、英國往時の職別組合(クラフトユニオン)の經濟運動の如き狹い意味のものではない。何づれの國に於ても、勞働運動は狹い意味での純經濟的の運動として起つた。卽ち現在の經濟組織そのものに對しては、初から何等の疑を挿まず、現在の經濟組織の埒內にあつて、勞働條件の改善と生活の向上とを圖らうとする運動であつた。此時代の運動は純經濟的の運動であつて、政治は寧ろ其忌憚する所であつた。……………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………

然しながら此時代の×××運動とは、…………………………………畢竟するに狹隘なる議會運動、若くは選擧運動に過ぎないものである。C・G・Tは即ち此狹き意味での政治運動に反對する。然しながらC・G・Tは政治運動に反對するのは、再び狹き意味での經濟運動に復へらんが爲ではない。若しC・G・Tの最終の目的を………………………………………………………を主張するものであり、又たC・G・Tを以て、再び純經濟運動に復へらうとするものであると云ふならば、それは更に高き意義と高き階段に於ての純經濟的運動に復へらうとするものである。要するに、C・G・Tの最終の目的とする、勞働階級の全的解放なるものと、…………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………

つて目的を達しようとする。C・G・Tは必ずしも議會と立法とを利用することに反對せぬ。否な或種の改善は議會と立法といふ通路を經ずしては獲得し得られぬことを知つて居る。そこでC・G・Tの非政治主義は、少くとも當面の問題としては、議會に勞働代表を送らうとする政黨運動、選擧運動に對する反對を意味して居る。

C・G・Tが資本家階級に對する、行動の方法として公認して居るものは、同盟罷工、ボイコット、ラベル、サボターヂュ等である。

（一）同盟罷工。　佛國の組合主義者によれば、罷工は物質上精神上の二重の利益を齎らすものである。即ち一面には勞働條件の改善を得ると同時に、他方には勞働者の階級的自覺を喚起し、鬪志を旺にし、解放の途を備へるものである。同罷盟工には次の五種類がある。

（一）攻勢的罷工…………………………

…………

（二）防衛的罷工…………………………

……………

（三）名譽罷工…………………………

…………………………

（四）同盟罷工…………………………

…………………………

（五）部分的總同盟罷工…………………………

…………………………

罷工は普通には、工場の退去によつて行はれるが、時としては黄色勞働者の罷工破りを防ぐ爲に、現場に留まつてゐて、謂ゆる…………………を行ふことがある。此種の罷工の有名なものにはボルドウの瓦斯工罷工、一九〇九年の電信技手及び電話交換手の罷工がある。

（二）ボイコット及びサボターヂュ　ボイコット及びサボターヂュは、一八九七年のツウルウス大會に於て初めて問題となり大會は特別委員を設けて調査せしめたが、委員會は之を…………………………報告をした。一八九八年及び一九〇〇年の兩大會も……………………………………ソレルの如きペルトの如き、サンヂカリズムの理論家と目せられて居る人々の間には、サボターヂュを否認するものがあるにも拘らず、實際運動家の側では…………………………

（三）ラベル　組合標は組合勞働者の製品に附して、非組合勞働者の製品を區別する：……………………

…………………………………………………………

最後にC・G・Tの運動方法としては、總同盟罷工と×××主義運動を擧げなければならぬ。

## 九、C・G・Tの組織と行動との原則

『全組織の眞個の根柢たる最底部には、階級的に自覺した無產者を見る。彼は單に此組織を構成するの材料たるに止らないで此組織の第一の、そして最も大切な器官である。彼は直接には其職業の地方的團體たる、サンヂカの一員たるに過ぎぬ。そして此サンヂカの內部にあつても、組合員は其代表者の上に、適當の牽制を加へることが出來る。其サンヂカの組合員の範圍以外には、勞働者は何等直接の繫ぎをも有しない。次の階段に於ける單位は、サンヂカ其ものである。そして其れは地方的にはプールスの一部となり、全國的又は地方的には、產業聯合の一部分とならねばならぬ。此階段で吾々は、初て團體的行動の原則に當面する。全ての組合員が、其人物の如何に拘らず、其サンヂカのうちでは一つとして計算せられ、又た一つ以上には計算せられないやうに、全てのサンヂカは、其性質と組合員の多少とに拘らず、プールス又は聯合のうちに同じく一つとして計算せられ、一つ以上としては計算せられない。此場合にはサンヂカは卽ち一個體であつて、又た一個體として計算される。次の階段に往つても、原則は之と同じである。各プールス又は各聯合が、C・G・Tそのもの、若くは總同盟委員のうちに代表者を有する。唯だ每年の大會に於て、サンヂカは再び單位となり、各サンヂカは一人の代表者を送るの權利を持つ。』コールのこの言葉は、最も簡潔にC・G・Tの組織の原則を說明したものである。

C・G・Tの組織の第一の原則は、個體の權利と團體的行動の原則とを、巧妙に調和しようとする所にある。そして此精神はC・G・Tの組織の各階段を通じて一貫する、聯合主義に現はれて居る。第一の階段では、各組合員に最大の自治と自發的行動の機會を保障する。そしてサンヂカは其自然の焦點であり、綜合點であるに過ぎぬ。第二の階段でも之と同じく、個體たる各サンヂカに、最大の自治と自發的行動の機會とを保障する。そ

してプールス又は產業聯合は、其自然の焦點たり、綜合點たるに過ぎない。斯ように一面には、サンヂカを一個の個體と見做して、團體主義の精神を徹底して居ると同時に、此個體に對しては、大小と性質との差異に拘らず、同じく亦、最大の自治と自發的行動の機會とを保障する。C・G・T は英國に於ける勞働組合大會の如き散漫なものではなく、一個の統一ある組織體ではあるが、其組織は常に頂上から初らないで、底部から初まつて居る。サンヂカが個々の組合員の行動に取つて代らんとする機關でない如く、プールス若くは產業聯合は個々のサンヂカの活動に取つて代らんとする機關ではない。更にC・G・T そのものに至つては、プールス若くは產業聯合の手から、組合的行動を取上げて、之を一個の中產權力の下に集中しようとするものではない。C・G・T はまた、個々の組合の行動を整調しようとするものであつて、中和しようとするものではない。C・G・T の任務とするところは、是等の勞働團體の意思と行動と、の代りに、自己の意思と行動とを強課しようとするものではない。C・G・T は組合運動を指揮するものではなくて、組合運動を綜合するものである。C・G・T は佛國の組合組織の歸趨であつて出發點でない如く、勞働階級の思想と行動との凝集する所であり、蓄積せられる所であつて、立案せられる處ではない。

そこで個體の活動と潑溂たる行動の精神とを、活きたるまゝにて團體組織のうちに保存することは、C・G・T の組織の第一の原則であつて、個體の自發的行動に最大の機會と自由とを保障する。斯ような思想は、C・G・T の組織の各階段に於ける自治主義、聯合主義に現はれて居ると同時に、其代表制度の上にも現はれて居る。サンヂカ內の票決には、全ての組合員は人物才幹の如何に拘らず、平等なる一票の票決權を保障せられる如くC・G・T の管理には、僅々に百人の洗濯夫聯合も、四萬人の建築工聯合と同じく一票の票決權を持ち、C・G・T の大會に於ては、數千の組合員を有する大組合も、數十人の組合員を有する小組合と同じく、平等の一票を有するに過ぎない。此制度の結果として、C・G・T の支配は少數革命派の掌中に歸して居るとは、屢々聞くところであつて、C・G・T 中の改良派は幾度か現行の平等代表に代ゆるに、比例代表制度を以てすべき提議を試みたが、今日まで大會は常に大多數を以て否決した。一九〇四年ブウルヂュ大會の如きも、兩派激論の末に、三百八十八對八百二十二票を以て改良派の提案を否決した。C・G・T の內部には革命派と改良派との兩極があつて、絕えず爭つて居るが、嘗

て改良派のニールが僅かに一票の多數を以て、總同盟の幹事長となり、間もなく失脚して以來は、C.G.T の幹部は常に革命派の掌中に歸して居る。此兩派の間の間隔は、ポール・ルイの指摘して居る如く、資本家的集中の進行につれ、紳士閥的デモクラシーと無産階級との間の溝渠が益々深まるにつれ、實際上に於ては漸次に接近しつゝあることは事實であるが、少くとも從來は、C.G.T の大會は此兩派の論爭に大部分を費してゐたことは事實である。然らば改良派の主張するように、革命派はC.G.T 中の少數であるが、更に此少數の革命派が常に大會を支配して居るのは、果して右の如き代表制度に基因するものであるか、之は遽かに斷言することは出來ぬ。けれども一般に想像せられて居る如く、小組合は常に革命的であつて、有力なる大組合は、常に保守的改良主義であるかの如く思ふは誤りである。現に一九〇六年のアミアン大會に於ても、鐵道從業者の全國組合（當時組合員二萬四千）と印刷聯合（一萬）とは共に改良派であつたが、冶金工（一萬四千）と船舶勞働者（一萬二千）との二大聯合とは共に革命派に屬して居た。更に佛國最大の二聯合團體たる建築工（四萬）は最も革命的であつて、坑夫（三萬）は最も保守的であつた。

更に投票數より見ても、改良派の側では、印刷工は一萬の組合員に對し百三十五票を有するに對して鐵道從業者は二萬四千の組合員に對して、三十六票しか有しなかつた。同時に革命派の側に就て見ても、冶金工は組合員一萬四千に對して八十四票を有し、船舶勞働者は組合員一萬二千に對して、六票しか有しなかつた。そこで現在の代表制度の爲に不利の立場に立つて居るものは、必ずしも改良派の大組合のみでないことは明かである。況んや是等の改良派の組合のうちにも、革命派は少數者として陰忍して居ることを忘れてはならぬ。現にプウゼーは、C.G.T の總員中、其三分の二は革命派であつと云つてゐる。コールが、よし比例代表制度を採用したとても、恐らく其影響は改良派の豫想するが如く、C.G.T の大勢を動かすには至らぬであらうと云つたのは、根據なきことではない。

然しながら革命派の組合主義者に取つては、革命流がC.G.T中の少數者たると多數者たるとは、必ずしも現在の代表制度の價値を定めるものではなく、要は唯だ此代表制度が、C.G.Tの組織の根本原則に一致するか否かにある。そして現在の平等代表制度は、彼等の主張する『少數の權利』を最もよく保障するものだからである。

佛國勞働者の總數は約一千萬であつて、僅かに其十分の一が組合を有して居る。そしてC・G・T．に加盟して居るものは、約其半數である。若し俗學的デモクラシーの原則に從つたなら、一百萬の組合勞働者は、一千萬の勞働者の無自覺によつて支配せられなければならぬ。從つてC・G・T．の組合運動は、全く行動不能に陷入らなければならぬ。通俗の意味に於ける多數の支配とは、畢竟するに、無自覺なる多數の不行動を以て、自覺ある少數の行動の上に强課することに外ならぬ。新なる思想は先づ少數者によつて明確に意識せられ、先づ少數者の行動となつて現はれる。若し多數支配の原則に從つて、自覺ある少數者を無自覺なる多數者の水準に繫いで置くとすれば、勞働階級の解放は永久の夢である。そこで革命的組合主義者は、無自覺なる多數の手に勞働階級の運命を放任する代りに、自覺ある少數者が、自ら自己の運命を決定するの權利を主張し、多數の支配に對して少數の權利を主張する。そして少くとも佛國組合運動の實際に於ては、組合運動の生命は百萬の組合勞働者を以て、一千萬の組合なき勞働者を率ゐることであり、五十萬のC・G・Tを以て、百萬の組合勞働者を率ゐることであり、更に──バウロウスキーに從へば──十五萬の革命分子によつて、五十萬のC・G・Tを、否な一千萬の佛國勞働者を率ゐることである。

C・G・Tの組織の原則は、勞働者を階級的に組織することである。C・G・Tは一切の政黨政派の外に、……………………………………………………現行規約は其第一條に次の如く明言してゐる。

『此規約によつて管理せられる勞働總同盟は、次の目的を有する。

(一)精神上、物質上、經濟上、職業上の利益を擁護する爲に、……………

(二)……………………の自覺ある一切の勞働者を、全ての政派の外に團結すること。

政黨が意見の一致を以て、團結の基礎として居るのに對してC・G・Tは政治上、宗敎上、哲學上の、一切の意見の相異を離れて、……………………識とを以て、勞働團結の基礎たり、泉源たり、紐帶であると主張する。政黨は政治上の意見を基礎とするものであるから、其組織は階級の混合である。C・G・Tの組織は、……………………………………………………………………

る。人間生活の兩方面は、生存の爲の鬪爭と生存の爲の協力である。そしてC・G・T は生存の爲にする協力の組織であると共に、生存の爲にする鬪爭の組織である。……………………だ。
……………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………る。
…………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………『經驗の教訓は佛蘭西の勞働團體に、勞働者の解放は勞働者自らの事業たる可しといふ、萬國勞働者協會(インタナシヨナル)の格言を銘刻した……漸次に組合は其双肩に懸かる重大なる社會的任務を自覺したので、政治運動を卻けて經濟的の傾向を第一義とするようになつた……斯くて

議會に盜入せんとして精力を涸渇する代りに。…………………………………だ。議會に盜入しようとする結果は、個人的の競爭と議論の相異との爲に、職業團體の發達を沮止したのである……』(一九〇三年のダブリン萬國組合大會に提出したC・G・Tの報告書)。更に佛國組合主義の根柢となつて居る思想によれば、經濟上の組織は政治上の組織に先行するものであり、經濟上の組織は政治上の組織を決定するものである。故に社會組織の變化は、先づ其根柢たる…………………………………そこでC・G・T の行動は、嚴密に經濟上の行動に限られて居る。C・G・T は固より、勞働者の生活改善の爲に、立法と立法部とを利用することを否認せぬ。否な多くの種類の改良には、立法以外の手段によつては實現し得られぬものが少くない。けれども是等の立法獲得を目的とする場合にも、C・G・T の行動は、謂ゆる『外部よりの壓迫』であつて、常に經濟的の行動に限られて居る。即ち八時間法要求運動の如きは其著しい實例である。

C・G・T は規約第一條の前半に示されて居るように、一面には、勞働者の目前の生活改善を目的とすると同時に、一面には……………………………………………

……………………………………………………………………
………C・G・T が部分的の改良の爲に行動するのは、それが全的解放の一部分を意味するからである。『彼等（勞働團體）勞働時間の短縮、賃銀の増加、工場と職場との衞生、勞働者の精神上の獨立等によつて、日々に勞働者の目前の境遇改善の爲に努力する。そして彼等は、傭主から獲得した改良は、決して究極の到達點ではなくて、一層根本的な改善への首途であるといふこと、並に一切の改良が單に幻影に終らない爲には、それは、……………………………………………………………………………………………………………………搾取と人類の悲慘とに對する確實なる救治であることを確信する。故に彼等は其努力を目前の部分的改良に限らない……』（同上）

勞働者が資本家階級より獲得した勝利は、如何に些細なものにもせよ、其れは次の戰鬪を一層有効にする、新たなる出發點となるものであり、そしてC・G・T に取ては唯だ其故に意義がある。C・G・T に取ては、……………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………………斯くて C・G・Tの二樣の目的は、其行動のうちに融和せられて居る。

……………………………………………………………………………………な い。罷工は失敗した場合にも、成功した場合と同じく、意義ある解放の鬪ひである。罷工の第一義は、必ずしも物質上の効果ではなくて、勞働階級に與へる精神上、教育上の効果である。

然しながらC・G・T は、………………同時に建設の組織であると主張する。…………………………………………………………………………………………………………………………同じく自己の組織のうちに一致せしめようとする。新たなる社會が若し生まれるとしたならば、吾々は舊き社會の組織そのもののうちに、之に代る可き新組織が………………………………………………………………………………………………………………C・G・T は其日常の部分的勝利によつて、現在の經濟組織と政治組織とから、其職分の一部一部を繼承しつゝあるものなることを主張する。故に『……彼等は資本家的收奪に準備する。此時、職業的聯合とブールスとは、新たなる社會生活の焦點となり、萬人は各々全的發達を遂げることができ

る』(同上)。C・G・Tの抱負は○○○○○○○○○○○○○、C・G・T は黒き怪物の如くに、グランヂ・オー・ベル街の一角から今や其羽翼を、革命的傳統に富んだ佛國の全土に延べて居る。(三十七字削除)。C・G・T の志は、獨り佛國一千萬の勞働者の嚮導者○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○。英國の組合運動も、米國の組合運動も、其最近の傾向はC・G・T を度外視しては解すべからざるものである。以下三行削除

主として Emile Pouget; Confédération generale du Travail に據り、次の諸著を參照した。Pawlowsky; C. G. T. P. Louis; Movement syndicale en France. Levine; Labor Movement in France. Cole; World of Labor. Kritsky; Evolution du Syndicalisme. Pelloutier; Histoire des Bourses du Travail. Estey; Revolutionary Syndicalism.

## 新刊紹介

**勞働問題の研究**（河合榮治郎氏著　著者は曩きに參事官として農商務省に在り、偶々昨夏國際勞働會議に際し頑迷なる上司との意見の疎隔を生じ、毅然官を辭せるは世上周知の事實である。本書は、氏が其眞摯なる態度よりせる勞働問題に對する論文を蒐めたるものにして、氏は其序文に於て、「勞働問題の先覺が擧て急進の意見を懐く時、著者は今尚遲々として本案の途を辿りつゝある。然れども獨乙の法學者イエーリングが羅馬法の中に在て羅馬法の上に出ずとの言は著者が尠なからず共鳴する所である。我等は現實の中に在て而も現實を離れるを任としなければならない。」と言つて居る。之は單り著者のみならず凡て心ある青年の共鳴すべき點ではあるまいか。蓋し社會問題の研究に志さむとする青年の必讀すべき、有益なる著書であると信ずる。　定價金五圓、岩波書店發行）

# ギルド・マンの自由

室伏高信

（一）

コールが一九一三年その『勞働の世界』を著した時に、ニユー・エーヂ一派のナショナル・ギルドに對して與へた唯一の不滿は、それが建設すべき『新イエルサレム』について、殆んど何ごとをも敎えてゐないといふの點にあつた。ナショナル・ギルドもこの時代においては批評に專らであつて、その建設すべき『新イエルサレム』について明確な輪廓を示すことはできなかつたのである。ニユー・エーヂ一派のナショナル・ギルドの缺陷の一つは慥かにこの點にあつたとはいはなくてはならない。爾來七年、ナショナル・ギルドの創造的才能は、この點においての彼の地位を正反對にした。ナショナル・ギルヅメンは恐らくあらゆる社會の改造の提唱者の間にあつて、最も多く豫言者的であり、最も多く建設的である。『社會主義は理想を貫く力を缺いたために』最早や人々を感激せしめることのできないものとなつたとはギルド・マンの一人が宣言した言葉であつた。社會主義は唯物史觀を示した。階級闘爭を敎えた。そして資本主義の倒壞の必然を信じた。しかし彼れは未來における理想を貫く力をもつてゐなかつた。彼れは新社會の建築について殆んど何等の才能をも示すことはできなかつた。こゝにマルクス主義の『科學的基礎』が存在するといふかも知れない。しかし一切の宿命的音調に反對するギルド・マンにとつてはかくのごとき『科學的基礎』はたゞマルクス主義の才能の缺乏としてのみ考へられてゐるに過ぎない。ギルド・マンにとつては資本主義の倒壞が勞働階級の自由のための戰ひにおいてきたるべきものであると信んぜられてゐるごとく、資本主義に對する自由のための戰ひは、直に自由のための新社會の建築に結果しなくてはならない。ギルド・マンは決してサボーチユに對する反對者で

はないであらう。しかしそれが來るべき生産者の社會の建設に如何なる道徳的影響を與へるかについては鋭敏な注意を怠るものではないのである。彼れは必ずしも『新イエルサレム』を急がないであらう。しかし『新イエルサレム』は彼れが資本主義に對する反對の壁を揚げた瞬間から、明瞭にまたは朦朧と、彼れの想像のうちに往來しないことはなかつたのである。『共產黨宣言』の著者は『勞働階級を支配階級に組織すること』を敎えた。階級鬪爭の政治的方法を敎えたのである。しかし新社會の建設について敎えることをユートピアンであると考へた。新社會の建設について敎えることなくしてたゞ階級鬪爭の方法へ急いだのある。ギルド・マンの立場はこれとは正反對である。彼れは自由のための戰ひにおいて彼れの感激を見出したばかりではなしに、『新イエルサレム』の展望のうちに彼れの深い感激の泉を見出してゐるのである。マルクス・エンゲルスは中世ギルドの社會をもつてたゞ親方と職人との、壓迫被壓迫の社會であるに過ぎないと觀じた。ギルド・マンはその中世ギルドの社會のうちに彼れの建設せんとする『新イエルサレム』への大なる暗示を求めることができた。マルクス・エンゲルスに從へば、英國における社會主義運動の偉大なる先驅者としてのロバアト・オーウエンの共產主義は、フーリエやサン・シモン等のそれと同じく、『純粹に空想的性質』を有する、そして『空中に樓閣』を築かんとする『淺薄なる信仰』であるに過ぎないとされてゐる。しかしギルド・マンは『世はオーウエンの思想に歸りつゝある』と叫ぶものである。然り、社會主義が『ユートピアン』に復歸することを主張してゐるものである。『ゴート人がローマを奪略した時に聖オウガスチンは破壞された物質的現實の代り靈的希望を叙せる『神の都』を書いた。……ローマが寂しい茅屋の村落にと沈んだ時に聖オウガスチンの希望は活き、そして生命を與へた』——オーウエンの社會主義は唯物的社會主義の時代にたゞユートピアンとして斥けられてゐるのほかなかつたであらう。しかしオーウエンの革命的理想主義は、『未だ何ものも彼れの骨とともに葬られてはゐなかつた。』

『必要なことは到るところにおいてオーウエンの時代に勞働組合主義を動かした精神を再び捕捉すること——統制の革命的理想の復活である』

ナショナル・ギルヅメンはかくのごとくに宣告してゐるのである。オーウエンとモリスとはギルド・マンの父と母とである。彼等の生涯は寂しい生涯であつたかも知れない。彼等はそ

の手によつて何ごとも成就することはできなかつたかも知れない。しかしやがて新社會を造り出すべき偉大なる思想は、孤獨な、寂しい、そして現代的功業に多く心を痛めることのない人々、創造的才能の産物である。『思想と精神との靈火のみ未來の時代をわれ等が知り且つ愛した時代を生み出した死から救ふことができる』――ギルド・マンは新らしい希望を創造することに彼れの豊かなる才能を見出さなくては滿足することができない。よりよき社會を建設するためには新らしい希望が創造されなくてはならないからである。創造に缺けた社會主義！ギルド・マンは社會主義の傳説は弊履のごとくに捨てさせるであらう。彼れの建設せんとする『新イエルサレム』は『科學的必然』に委せらるゝのではなくしてユートピアンの想像のうちに畫かれたる偉大なる理想のうちに生誕するからである。彼れは實に『ギルド・ユートピア』の作者である。しかし誤解してはならない、彼れのユートピアは決して單なる空中の樓閣ではない。それは資本主義の倒壞後において、それに取つて代るべき『新イエルサレム』でなくてはならない。徒らにユートピアンといふこと勿れ、ウヰリアム・モリスは News from Nowhere の最後において次のように述べた。

『若し私がそれを見たように人々がそれを見ることができたなら、それは夢ではなくしてヴヰジョンであるといふことができよう』(William Morris, Newsfrom Nowhere, 1919, p. 247)

（二）

ギルド・ユートピアの指導的原理は自由である。『自由は凡てのものによつて幸福の第一條件であると認められてゐる』―それがナショナル・ギルヅメンの第一の宣言である。この自由の原理からして彼れの一切の大膽な批評と、そして彼れが畫きつゝある新ユートピアとが生れる。新ユートピアは中世ギルドの世界のうちに彼れの世界の建設についての最初の暗示をうけたであらう。ある種のギルド・マンは中世紀への復歸こそギルド主義 Guildism の樞軸であると主張して止まないであらう。しかしそは中世ギルドのうちに、モリスの謂ふところの『仕事において』の自由を見出だしてゐるからである。彼れは資本主義に對しては斷乎として反對するであらう。しかしそは貧困の救治のためではなくして資本主義に伴ふ新奴隷制度――賃銀奴隷制度からの解放の要求である。即ち自由のための要求であ

る。繰返していへば自由はギルド・マンの指導的原理である。前にも述べたとほり彼れは決して社會主義の傳説の忠實な信徒ではない。先づ唯物的歴史解釋について見よう。そはマルクス信徒にとつては社會主義の科學的建築の基本的必要條件であらう。ベルンシュタインはマルクス主義と唯物史觀との關係を解釋して、マルクス主義は唯物史觀とともに立ち、またそれとともに仆れるといつたことがある。この解釋は多くのマルクス信徒の卒直に承認しなくてはならないところであらう。しかしギルド・マンは資本主義からの解放を叫ぶとともにまた社會主義の傳説からの解放を叫ぶものである。彼れにとつては歴史の唯物的解釋とはたゞ歴史の誤讀 False reading of history であるに過ぎないとされてゐる。ギルド・マンは歴史の創造者としての人間の Ideology を信んずるからである。こゝにマルクス社會主義者とギルド・マンとの間に於ける相容るゝことのできない分裂の第一歩が生れるとともに、ギルド・マンの思想的原理が見出されなくてはならない。次に階級鬪爭の問題に就て見よう。そは唯物史觀とともにマルクス主義の一大柱石である。

『凡て從來の社會の歴史は階級鬪爭の歴史である』——マルクス・エンゲルスはこう述べた。ギルド・マンもまた階級鬪爭の事實を否認しないであらう。またこの嚴肅なる階級鬪爭の事實に面することに躊躇しないであらう。しかしギルド・マンはその階級鬪爭が自由のための戰ひであることを看破しなくては滿足することができないのである。

『過去百年間の歴史は資本主義制度によつて造られた狀態のもとにおける自由のための戰ひの歴史である』(National Guilds: An Appeal to Trade Unionists, p. 1)

ナショナル・ギルヅメンは人間の歴史をかくのごとくに解してゐるのである。自由のための歴史、自由のための戰ひ、自由のための新イエルサレム——プロレタリアンの失つたものは自由ではないか。だからプロレタリアンのために回復すべきものは自由でなくてはならない。ギルド・マンの立場は明瞭である。彼れの建設すべき社會は自由の社會であり、彼れの承認すべき國家は職分的の國家であり、彼れの社會における生産者の組織——ギルドとは自由の體現者である。繰返していへば Guildism の指導的原理は自由の原理でなくてはならない。

（三）

思想の自由から藝術と哲學との全世界が生れる——『自由人（フリーメンス）

の崇拜』の著者はこう述べたことがあつた。自由はそれ自身においては最善のものであるといふことはできないかも知れない。しかしこの自由から『藝術と哲學の全世界』が生れる。藝術、哲學、愛のごとき人間の最高の寳は自由の生活の産物である。そして自由によつてのみ産出しえられる寳である。ギルド・マンは藝術と哲學と愛において、彼れの理想郷を彩ることを求める。彼れのユートピアは決してトーマス・モーアのそれではない。モーアの『ユートピア』においては人間の創造とそしてその歡喜とを見ることができない。そは倦怠の無爲の世界である。ギルド・マンの求むるところはかくのごとき倦怠と無爲との世界ではない。また彼れの理想郷はベラミーのそれにおいて見るような行政的才能の都會ではなく、『ツドニイ・ウエッヴィキャリズム』のごとき Servile state でもない。彼れの哲學は生の哲學である。從つて創造の哲學である。生命の跳躍、創造の自由こそナショナル・ギルヅメンの自由の意義である。

私は既にオーウエンとモリスとがナショナル・ギルヅメンの父と母とであると述べた。モリスは彼れの理想郷が何を意味するかについて次のように述べたことがある。

『若しも私が文明世界における主要な義務が勞働を凡ての人々のために幸福にすることにとりかかり、不幸な勞働を減少することに最善の努力を致すにあるといふことについて諸君を說伏することができさへするならば、若し私がこゝに出席してゐる諸君のうちの二三人でも說き伏せることができさへしたならば——私は今夜の仕事を滯りなく終つたのであらう』(Clutton Block, William Morris, pp. 245—6)

ウヰリアム・モリスにおいては、理想郷とは無爲と倦怠の都ではなくして勞働の享樂においての田園である。勞働の享樂においてこそ創造の自由とそして生の歡喜とが與へられるのである。そこに新らしい文明が築かれるであらう。モリスは勞働者の手によつて寺院が建築されるごとくに新文明が建設されるものであることを信んじてゐたのである。モリスの信じてゐたところはまたギルド・マンの信じてゐるところである。コールはモリスの藝術と社會主義を論じた後にモリスとギルド・マンとの關係について次のように述べた。

『私がかくウヰリアム・モリスの社會主義を論じたのは他の如何なる革命の豫言者よりも彼れがナショナル・ギルヅメンと同じ血をもつてゐると思つてゐるからである。自己表現のための自由、仕事においても閑暇においても自由、奉仕にも享

樂にも自由――それが彼れの事業と生涯との指導的原理である。それはまたナショナル・ギルヅの指導的原理である。』(G. D. H. Cole. Self-government in Industry, 1918, p. 121)

繰返していへばギルド・マンの自由とは自己表現の自由であり、仕事にも閑却にも自由であり、奉仕にも享樂にも自由である。即ち生の歡喜であり、勞働の享樂であり、從つて創造の享樂でなくてならない。如何にしてこの理想に到達することができるか。私はこゝにも自由を答へなくてはならないであらう。自由なくしては生の歡喜、勞働の享樂を求めることはできない。勞働の享樂と生の歡喜とはたゞ生活の藝術化、勞働の藝術化によつてのみ到達することができる境であり、そして生活と勞働との藝術化は、生活と勞働との人格化でなくてはならない。それは一切の壓迫と干渉とから解放されなくてはならない。即ち完全なる自己表現 Self-expression の機會が與へられなくてはならない。そして勞働の果實においての正當な分前が絞取と盗奪とから保障されなくてはならない。ナショナル・ギルヅはこの機會と保障とを約束するのである。彼れの提唱する自己統制こそこの機會と保障とである。即ち產業上の自己統制である。ナショナル・ギルヅ・リーグはこの點を次のごとくに要約した。

『壓迫からの自由、自己表現の機會、仕事を撰擇し統制し、そしてそれの果實においての正當な分前を享有することの權利――これ等のものに對する要求がその鐵鎖を投げ捨てる幾度となき企てにおいて勞働者を感激せしめたのである』(National Guilds: An Appeal to Trade Unionists, p. 1)

產業の自己統制、生產者によつての產業の經營はギルド・デモクラシー Guild Democracy の樞軸である。『ギルド・マンにとつては凡てのことは第二義である。第一の仕事は勞働階級の產業統制の思想を進めることである』――ギルト・マンの一人の論述したところはたゞ一人の私論ではなくして凡てのギルヅメンの等しく一致することのできる點である。即ちロバアト オーウエンの『勞働者によつての產業統制の理想』はまたナショナル・ギルヅメンの把握せんとする理想でなくてはならないオーウエンとモリスとはギルド・マンの父と母とであるからである。繰返していへば、彼れの第一に提唱するところのものは產業上のデモクラシイであり、產業上のデモクラシイを通して自由と、そして生活と勞働との藝術化に到達せんとすることである。

（四）

かくのごとき自由は可能であらうか。私はこの問題に面しなくてはならない。この問題に面することはまた如何にして Guild Democracyが組織されるかの問題に面することである。私は先づデモクラシイの問題から考へてゆくことが順序である。私どもは今日までの政治上のデモクラシイについて根本的な疑ひをもつてゐる。かくのごとき政治上のデモクラシイは可能であらうか。私どもの疑問は今日の大國家にデモクラシイを接續することができるかどうかの問題から出發する。この點はルソウを初めとして多くの人々によつて繰返されてきた疑問である。そして未だ何人によつても解決されるに至つてゐない問題であつた。いふまでもなく今日までの政治的デモクラシーの主張者は私どもに代議政治の方法を敎へたといふことができるであらう。しかし代議政治は果してよくデモクラシイを包含してゐるのであらうか？ 人民が代表者に委せられた瞬間に最早やデモクラシイは存在しないものであるとはルウソが早く吾等に敎えたところであつた。ギルド・マンの立場はまたルソウの立場である。彼れはその意思を何人にも賣ることを欲しない。彼れはその意思を何人にも豫約することを欲しない。彼れにおいてのデモクラシイとは自己表現の機會でありまた自己統制の精神である。自己統制と自己表現とは自己の發議とのみ一致するものであり、從つてそは直接的經營の要求でなくてはならない。『間接的デモクラシイはわれ等は奴隷制度として觀察する』――これがデモクラシイに對するギルド・マンの態度である。この立場はブルジョア・デモクラシイに對する反抗であるばかりではなしに、ソーシャル・デモクラシイに對してもまた同じように反抗の態度でくる。ソーシャル・デモクラシイはブルジョア・デモクラシイに反對して立つてきた。しかしそは生産機關の所有者の問題において彼れの特色を示すことができたに止まつてゐる。彼れの組織しまたは組織せんとしたデモクラシイはブルジョアのそれに比して何等の創意をも示すことはできなかつた。たゞそのコレクチヴヰズムをブルジョア・デモクラシイとしての代議政治とそして政黨的編制に接續することができたに止まつてゐる。私はこゝに繰返していふであろう。創造に欠けた社會主義！ 代議政治と政黨的編制とは何等のデモクラシイをも含んでは居ない。そは數百年間の經驗に於て私どもに示されたとほり、デモクラシイの具現ではなくしてオウト

クラシイの具現である。資本主義が機械の所有者においての自由であつたがごとくに、代議政治と政黨的編制とは政黨首領においての自由であり、そして人民においての奴隷制度である。人民は盲従を強いられるであらう。しかし彼れはその首領を支配すべき何等の方法をも與へられてはゐない。また彼れは四年五年に一回の選擧において、政黨首領の指名した候補者に投票するの義務を負はされるのであらう。しかし彼れにはイニシエチヴの何等の機會も、またその代表者の行動を彼れの意思に接續せしむべき何等の方法をも與へられてはゐない。ギルド・マンはかくのごとき組織をもつて奴隷制度と稱するに躊躇しないものである。彼れのデモクラシイとはかくのごとき盲従と機械とではない。『ギルド・マンはもつと哲學的な精神をもつてこの問題に接する』——ギルド・マンの一人はこういつた。彼れはデモクラシイの機械觀の信者ではなくして、『社會の道徳的基礎を愛することを要求する。即ち到るところに於いて社會を構成する人々の人格を表現すべきことを要求するのである。ギルド・デモクラシイは自由の體現であり、そして生活と勞働との藝術化の世界であるからである。それは可能であらうか。ギルド・マンは今日までの政治的デモクラシイの失敗から失望をもち來たすものではなくしてその失敗のうちに彼れの新らしい希望を接續することを企てるであらう。彼れはデモクラシイの信者である。デモクラシイにおいてのみ眞實な社會主義の存在するものであるといふことはギルド・マンが常に繰返してゐるところである。(Cole, Self-Government in Industry, p. 231)

然り、ギルド・マンはデモクラシイの可能を信んずる。デモクラシイにおいての人格の表現を信んずるのである。そはギルド・マンが直接的統制の可能を信んずるからである。即ち近世の大國家に對しても直接的デモクラシイの可能を信じてゐるからである。

しかしギルド・マンが近世の大國家において古代の都市國家におけると同じ形式において直接的デモクラシイの行はれることを信んずるものでないことは明らかである。ギルド・マンはかゝる不可能事を夢みるものではなくして政治的デモクラシイの失敗の教訓のうちに彼れの直接的デモクラシイを建築せんとするものである。そは古代への復歸ではない。ナショナル・ギルヅは復古的の如何なる意味をもつてはゐない。彼れは現代における生活の集中化の傾向に反對するものではなくして、それを是認し、そしてその是認のもとに彼れの直接的デモクラシ

イを接續せんとするものである。いふまでもなくこの點についてはナショナル・ギルヅと地方的ギルドの主張との間に分裂が存在する。ペンテイ一派の地方的ギルドは地方的自由の復活を要求する。彼れの要求するところは中世紀主義への復歸であるからである。そしてナショナル・ギルドをもつて地方的ギルドへの一過程であると觀測してゐるのである。しかしナショナル・ギルヅメンはかくのごとき復古的の何等の計畫をも希望をももつてはゐない。彼れは現代生活に於ける生活の集中化の自然的需要を卒直に是認するものである。彼れはその實例を勞働組合にとるであらう。英國における勞働組合は最初に地方的組合として生れた。そして國民的組合へと進んだ。このことはウエッヅの『產業民主主義』において遺憾なく說明されてゐるところである。Sidney Webbicalism の如何なる反對者と雖もこの事實を否認することはできないであらう。そしてそは決して何等の不自然な原因も働いたがためではなくして能率的需要の必然的結果であることを承認しなくてはならないであらう。コールは炭坑夫組合の場合についてこの點を詳らかに述べてゐる (Self-Government in Industry, pp. 247—51) 私はこゝにはこの點についての詳細な說明を必要としないであらう。そしてコールの說明からの一、二點を引用することに止めるであらう。彼れに從へば炭坑夫組合は集中において勝ち、分裂において敗れた。一九一二年のストライキはある一部分の地方的破產のために失敗に終つた。卽ち最弱の地方的組合 Weakest link の力が全組合の力として働くのほかはなかつたのである。こは中央的組織の缺乏のためであり、卽ち地方的組織の弱點の結果である。その結果は勞働組合の中央的大組織の要求とならなくてはならない。かくのごとくにして大英國炭坑夫組合の一大中央組織が需要されたのである。——コールはかくのごとくに說明してゐる。卽ちナショナル・ギルヅメンは勞働組合の國民化の傾向を自然的の事實として承認するものであるのみならず、それが必要を主張するものである。『今日の勞働組合から明日のナショナル・ギルドが生れる。』勞働組合についていふことはまたギルドについていふことである。ナショナル・ギルドは今日の勞働組合を國民化のまゝにギルドへと轉んぜしめることを求める。彼れの求むるところは今日の勞働組合の解體ではなくして今日の國民化せる勞働組合のうへに彼れのギルド——ナショナル・ギルドを建築せんとすることである。卽ち國民的組合に彼れの謂ふところの人格的表現、直接的デモクラシイを發見せん

とするのである。然り、ナショナル・ギルッの建設は國民的基礎のうへに立つものである。彼れは Local commune へゆくことを求めるのではなくして Nation state を支持するものであるからである。

## (五)

國民的基礎の上に直接的デモクラシイを發見せんとするギルド・マンの計畫は二つに分けて考へることが必要である。彼れの直接的デモクラシイとは二つの計畫の提唱であるからである。その一つは社會生活の二重組織である。ギルド・マンの國家哲學は Monism ではなくして Pluralism である。彼れは二重組織を提唱する。生產者の組織と消費者の組織の二つがこれである。前者がギルドであり、後者が國家である。私はこの點についての詳細な説明はこゝに避けるのであらう。こゝに必要なことはナショナル・ギルドの社會組織が二重組織であるといふことを承知してをくことだけである。卽ちナショナル・ギルドは單なる生產者の組織をもつて滿足しないとともにまた單なる消費者の組織のみをもつても滿足しない。ナショナル・ギルドの反對者は生產者と消費者との對立觀に反對するであらう。そして社會主義の社會においては凡ての消費者は生產者であり、生產者はまた同時に消費者であると主張するであらう。しかしそはギルド・マンの職分的觀察を解することのできない人々である。もとより未來の國家、社會主義の實現された時代においては凡ての人々は生產者であらう。ギルド・マンはこの點については何等の異論をもつてはゐない。しかし凡ての人人は生產者であり、そして同時に消費者であるにしても、そこには二つの論點が殘されてゐる。こゝに二人の人がある。彼等は何ものかの生產物について生產者でありまた何ものかの生產物について消費者であらう。しかしこの二人が生產者であり、同時に消費者であるといふことは、その二人の人が同一生產物についての生產者であり消費者であるといふことではない。既に同一生產物についての生產者と消費者とでないとすれば、その生產物についての二人の關係は決して同一であるといふことはできない。卽ち一人は甲の生產物についての生產者であり、乙の生產物についての消費者であるに對し、他の一人は甲の生產物については消費者であり、乙の生產物に對しては生產者である場合に、そして甲乙の生產物の價値が同一でない場合に、この二人の間に甲乙二つの生產物についての關係の相違が

生じなくてはならない。そこで第二の論點に進む必要がある。即ち生産者としての職分と消費者としての職分の區別がこれである。生産物は生産者の勞働の結果である。生産者はその生産物の生産について他の生産者よりも特種の關係をもつてゐる。その生産について彼れに特種の地位が承認されないとしたら、即ち生産者が彼れの生産についての自己統制の機會を與へられないとしたなら、その生産者は彼れ自身を自身によつて支配することの原則――デモクラシイの要求から妨げられてゐるものでなくてはならない。そこには生産者の自由はないであらう。また從つて勞働の人格化はないであらう。だから生産者はその生産によつて組織されなくてはならない。それと同じく消費者は消費者としての職分をもつてゐる。それは消費者として組織されなくてはならない。生産者が生産の職分によつて組織される時にその組織は初めて直接的デモクラシイとなりうるであらう。消費者が消費の職分によつて組織される時にまた初めて直接的デモクラシイが存在しうるであらう。ナショナル・ギルヅメンの組織はかくして職分的である。職分的であるが故に直接的デモクラシイであることができる。直接的であるがゆえに眞實なるデモクラシイであることができる。ギルドマンはかくのごとき組織の提唱者である。

しかしたゞ社會の二重的組織の提唱だけをもつてしては直接的デモクラシイの可能に對する保障は充分なる滿足に達してゐるといふことはできない。それだけであつては、大面積にデモクラシイを實現することができるか否かの問題についてはたゞ一部分の接觸があるのみであるからである。

そこでギルド・マンは第二の計畫を提出するのであらう。Decentralization の提唱がこれである。デセントラリゼーションは大單位の部分化である。それは決して地方的聯合 Local federation と同一ではない聯合(フエデレーション)の原理は小單位から原因することである。凡ての權力は小單位に發する、そしてそのある部分がより大なる集合體に分たれる時にフエデレーションが存在する。フエデレーションの原則はバクーニンによつて唱道せられたところであり、そしてサンヂカリズムによつて支持されてゐるところである。ギルド・マンはかゝる聯合主義の主張者ではない。彼れは國民的社會組織のもとにおいては國民的産業組織の必要であることを主張する。そしてこの國民的大單位から彼れの部分化が生れる。大單位は基礎である。その基礎のうへに部分化が組織されるのである。だからフエデレーションとデセントリゼーションとはその根本において區別せらるべきものである。ナショナル・ギルヅメンはこのデセントラリゼーション

の主張者である。大單位においてのデモクラシイの不可能はこれによつて救治せらるべきものであるとなすのである。既に部分化である。部分化であるがゆえにギルド・デモクラシイは部分的に分配されるのである。工場においての部分、地方においての部分、われ等の各部分にデモクラシイの分配されることとの提唱である。かくして國民的大單位がショップにおいて、ウオークにおいて、ジストリクトにおいて單位が發見せられるとすれば、『大面積においてのデモクラシイの不可能』についてのルソウの疑問は大部分解決されたといはなくてはならないであらう。各部分はみなそれぞれ職分をもつであらう。その職分に必要なる權力分配を受けるであらう。彼は部分的表現とインシエーチヴとの一切のデモクラシイの要素を與へられるであらう。そして彼の役員の選擧に就ては次の如き計畫が示されてゐる。

（一）Shop Committees はその Shop 内に於ける凡ての勞働者によつて選擧されるであらう。

（二）Works Committee は各 Shop 内における會員の投票によつて部分的に選擧せられるであらう。

（三）District Committee は (a) 各工場（Work）における Works Committee によつて選擧されたる工場代表者と (b) District 内における各クラフトの全員の投票によつて選擧された職業代表者とから成立するであらう。

（四）ナショナル・ギルドの中央行政部（National Guild-Executive）は (a) 各區において全員の投票の結果選擧されたる各區表代者と (b) 各クラフトの一般國民的投票によつて選擧された職業代表者とから成立するであらう。

（五）國民的代表者會議（National Delegate Meeting）は各區における各クラフトの會員の一般投票によつて選擧せられるであらう。

以上はもとよりギルド・マンの一人によつて考へ出された方法であるに過ぎないにしても、これによつてナショナル・ギルドの部分化の大體の形式に就て觀取することができようと思ふ。

（六）

ギルド・マンの自由について論ずるためには私は更に機械と自由との關係、國家との關係、生産者の自由と消費者の自由との關係についても述べなくてはならない。何となればナショナル・ギルヅメンは機械生産と國家と、そして生産者の自由と同じく消費者の自由とを支持せんとするものであるからである。ギルドに對する消費者の關係と、ギルド・マンの國家觀とについては一切を他の機會に讓るであらう。また機械と自由との關係については、ギルド・マンは機械の奴僕となることの提唱でなくしてそれの主人となることの提唱であるといふことの一言だけに止めてをくであらう。（九、四、一五）

# 室伏高信君に答ふ

## ――ギルドソシアリズムに就て――

小泉信三

室伏高信君が本誌前號所載「ナショナルギルドの建設」と題する有益なる長論文の中で同じ問題に關する拙稿「再論ギルドソシヤリズム」(三田學會雜誌本年二月號掲載の分)に言及し、その中の不用意と認めらるゝ一節を指摘して筆者の注意を促がされたのは私の深く多とするところである。併し乍ら指摘せられた點に就ては私は、室伏君の研究を尊重するにも拘らず必しも同君の言には服さないものである。室伏君の云はれる通りにしても好いだらうが、又私が書いた通りを其儘にして置いても必しも差支はないと思つて居るのである。

室伏君は私が「ギルドソシヤリズムが千九百十二年頃雜誌New Age 紙上で唱へ出されての方云々」と記したのは間違で「オレージが最初ギルド社會主義を提唱したのはNew Age においてではなくしてContemporary Review において」なる事、而してその年時は千九百十二年ではなくて千九百六年だと云はれるのである。成程 Orage は "National Guilds 1914" 序文の始めに the idea of the Guilds as applied to modern industry の起源を尋ねれば、千九百六年に遡ることを得べしとて、その「現代評論(コンテンポラリイレビユウ)」に寄せた一文を擧げて居るのは室伏君の云はれる通りである。併乍ら、New Age 紙上にギルドソシヤリズム論、賃銀制度論が連續掲載せられ始めるより、飛び離れて先だつ事六年にして右の一文があると云ふ丈けで、ギルドソシヤリズムは千九百六年以來唱へられて居るものだと云ふのは如何であらうか。之はギルドソシヤリズムの先驅又は萠芽と見るべき說は既に千九百六年に公にされた文章の中に之を認めることが出來ると云ふに止まつて、人が通常此運動を以て千九百十二年以來のものとするのが必しも間違だとは云へないと思ふのである。それも室伏君の記される通り「オレージは一九〇六年から一九一二年に至るまで引續き彼れの主宰する週刊雜誌 The

New Ageにおいてギルド社會主義の建設と宣傳とに努力」し、「一九一四年オレーヂの名によつて出版されたNational Guildsはこの時代の產物である」ならば兎も角もであるが、私はオレーヂが千九百六年以來同十二年に至るまで引續いてNew Age紙上でギルド社會主義を宣傳し、且つ、その期間に發表したものを纏めてNational Guilds一卷を成立したと云ふ事實のある事をまだ御知して居ない。之れは——卒直に云ふと——室伏君が記憶違ひをして居られるのではないかと思ふ。The substance of the following chapters appeared serially in the New Age during the years 1912-13. と上記「ナショナルギルヅ」の序文の而も最初の一行に明記してあるからである。右に述べたやうな譯で、通常ギルドソシャリズムが千九百十二年この方唱へられて居るもの丶樣に記されて居るのは必しも間違だとは云へないと思ふのである。

序に記すと右のContemporary Reviewに寄稿したオレエヂの文章なるものは、室伏君も未だ見ては居られないやうであるが、實は私もその內容を全く知らない。たゞ併乍らこの文章に現はれた主張は、今日のギルドソシャリズムなるものと或重要の點に於て趣を異にして居るのではないかとひそかに推測する。何故と云ふに、そのNew Age一派に依て唱へらる丶とNational Guilds Leagueに依つて唱へらる丶とを問はず、一般にギルドソシャリズムの基調の一は之を具體的に云へば英吉利勞働黨もつと一般的に云へば勞働者の議會政策（パリヤメンタリズム）に對する失望不滿であるのに、英吉利勞働黨が出來たのは千九百六年の總選擧以來の事であるから、オレエヂが右の文章を書くときには勞働黨はまだ出來てゐないか、或は出來た許りであるか、兎に角是に對してまだ失望も不滿も感ずる遑はなかつた事であらうと思ふ。從てこの點に於て後のギルドソウシャリズムと論の趣きを異にしては居なかつたのであらうかと推測される次第である。

もう一つ序に記して置けば、右の拙稿中ギルド社會主義者の國家觀、コオルとホブソンの立場の相違に關しては私の書いた事に訂正を加へる必要が新たに生じた。併し之れは筆者粗漏の罪ではなくて、コオルその人の說が少し變はつて來たのである。併しこの事は三田學會雜誌四月號で加田忠臣君が詳しく書いて居られるから玆にそれを云ふには及ぶまい。

以上。　四月十日

小泉　信三

# 總選擧所感

法學博士　堀江歸一

私の住居して居る東京市の○區に於ては、今二名の衆議院議員候補者がある。一人は政友會所屬で、一人は憲政會員である双方共頻に名刺を配つたり、運動員を使つたり、競爭に餘念ないやうな樣子だが、一體彼等は何の爲めに斯うまでに選擧に狂奔して、議員たらんと欲するのであらうか。世間の噂に依ると政友會候補者は僅小の資本で、何年か前に、鍛冶屋同樣の鐵工場を開き、夫婦共稼ぎで苦勞したのが實を結んで、今日では長者鑑に載せらるゝ程の財産家と爲つたので、誠に立志傳中の一人物であると云ふ話であり、憲政會の候補者も奮鬪的經歷を持つ辯護士であると云ふことである。兩者孰れの人が當選した所で、今日の議員としては別に見劣りのすることもあるまいが、立憲政治の今日に於て、議員を選擧するには必ずしも人物の優劣を標準とす可き譯のものでなく、寧ろ其人の屬する政黨の綱領なり、主張なりが、果して國利民福に一致するものであるか、時勢に適合するものであるか、どうかと云ふことを以て決定するのを當然とするのである。

然るに我國今日の政黨に就て見ると、私は政友會と憲政會との孰れに與す可きものであるか、殆ど嚮背に迷はざるを得ない憲政會が大隈內閣の下に政權を握つて居つた際に、如何なる政治上の成績を擧げたであらうか、內治に外交に失策を重ねて國民の反抗を招いたのは、掩ふ可からざる事實であつた。然らば今日の政友會內閣は如何であると云へば、是れ亦批政の百出する點に於て、殆ど大隈內閣と異なる所はなく、寧ろ黨利の收拾に狂奔するの點に於ては、大隈內閣よりも甚だしきやの趣がある。斯う爲ると我々の如き嚴正中立の立場に居る者は如何に選擧權を行使す可きものであるか、政友會には今日の政治に於ける狀況を見れば、到底贊成し兼ねるし、左ればと云つて、憲政會にも感服することが出來ないし、殆ど取捨に迷つた果は棄權

するの外に、何等の道なきに至るのである。立憲國民として貴重なる選擧權を持ちながら、之を行使することが出來ない、之を行使して、賛意を表するだけの政黨がないと云ふのは、誠に一種の悲哀と云はなければならぬ次第である。

思ふに斯の如く選擧權を如何に行使す可きやに迷つて居るのは私ばかりではあるまい。傳統的に政友會なり、憲政會なりに信仰を持つて居る人の外は、何れも斯る狀態に在るものと見なければならぬ。斯の如きは要するに我國の政黨が一ツの理想に基いた政綱を持たず、時の都合に依て如何なる具合にも政見を一變さることを憚らない結果である。政友會の白紙主義とか是々非々主義とかいふやうなことにも、我々は愛想を盡かしたが、一方に憲政會に確乎たる政見があるであらうか。別に其見る可きものがなく、唯時勢の如何換言すれば世間の模樣一ツで右にも爲れば、左にも爲るのは過般の議會に於て、一問題と爲つた普通選擧法案に對して、憲政會の執つた曖昧なる態度で、之を知ることが出來るのである。今度の總選擧の如きは、横暴を極むる政府に對して、一痛棒を加ふ可き好機會であつて、在野黨の活動す可き秋であるに拘らず、憲政會の言論に活氣の見る可きものがなく、局外に居る我々をして齒痒き感に堪へさらしめるのは何故であるか。是は要するに日本の政黨が民衆の利害を謀らず、民衆と事を共にせず、又民衆の利益に適合する政綱を掲げて、民衆の賛成を博しやうともせず、却て斯うすれば元老の感情を害するだらうとか、斯うしなければ金權者階級の同情を失ふだらうとか、要するに社會少數者の爲めに政治を行つて居る結果である。現に通貨問題なり、物價問題なり、近年時論の焦點であつて、是等の問題に對して、原内閣が處理を誤まつて居ること、彼の如くであるとすれば、在野黨の如きは之を攻撃して經濟社會の健全なる發達を希望する人々の同意を收む可き筈であるのに、憲政會は都會に於ては兎に角地方に於ては通貨收縮論や物價調節論は全然封じ込めて、噯にも出さないと云ふではないか。是れでは到底世間の信望を繋ぎ得べき筈でない。隨て日本で内閣が更迭するのは、政策がドウのコウのと云ふ譯から來るのではなく、内閣の顏觸に對して、人心の倦怠を招くからであつて、是れでは太郎兵衛が大臣樣に爲らうが、權兵衛が相公に擧げられやうが、一向替り榮へもしない次第である。

政友會は今度の選擧で、絕對多數に爲るかも知れず、憲政會は今日以下に頭數が減るかも知れない。然し政友會内閣に對し

て、人心の倦怠を來したならば、幾ら衆議院に多數を擁して居つた所で、內閣は瓦解するの外なく、而して一旦解散にでも遭つたならば、不自然に膨脹した政黨は其常態とする所まで收縮し、一方に官權の下に選擧を爭つた政府黨が意外に發展すると云ふのが自然の約束であつて、是れが日本の立憲政治の常道であると云ふに至つては、驚く可き事實であると認めなければならぬ。隨つて一の政黨が衆議院で絕對過半數を占めた所で、夫れは槿花一朝の榮に過ぎず、又少數に爲つた政黨も深く悲觀するに當らない次第である。

斯う觀察したならば、總選擧は之を爭つて居る候補者に取つては、眞劍勝負であつて、血淚を絞るやうな苦しみもあらうが局外者に取つては、殆ど痛痒を感じない。政友會が勝たうが憲政會が多數を占めやうが、我々の生活には何の關係もなく、我々の利害に何の交渉もないとしたならば、國技館の勝負を見る位の考で、之に對するの外はなく、又一方の政黨が勝つたとした所で、國民の輿論に根據を置いたものでない以上は、其根柢は極めて薄弱であつて、何時少數黨に變ずるかも知れないとしたならば、一時の勝利の如きは、何等信賴するに足らないのである。何時に爲つたならば、日本の政黨が國民生活に同化するであらうか、否政黨自身が我々の生活の一部分と爲り、政治運動に對する我々の感情を眞面目のものとするであらうか、思へば望洋の歎なきを得ない。私が普通選擧の實行を要望して已まないのも。畢竟如上の機運の來ることを促したい微意に外ならないのである。

私は先年米國に客遊した時に、大統領選擧の時に出會つたし英國に於ては、下院の總選擧に遭遇した。公園や廣小路で候補者なり、其賛成者が演說をすれば、聽衆から熱心な質問が出る酒舖に行けば、必ず兩政黨の候補者の人物論から、政見の優劣に至るまで議論の種子と爲つて、甲論乙駁の狀と爲り、家庭の食卓でも、親子主客の間に議論が鬪はされ、眞面目に考へた末に、自分の選擧權を行使する風の著しきことを認めたが、是れは普通選擧で參政權が廣く一般に普及して居る結果もあらう、血を流した末に參政權を獲得した結果もあらう、政治家の國民に對する訓練の宜しきを得る結果もあらうが、要するに外國の政黨は國民生活に同化することを怠らず、國民も如何なる政黨を助けたならば、自分の生活の繁昌を得るかと云ふことに着眼して、嚮背を決するからである。日本の政治も此點まで發達しなければ、萬事が虛僞に過ぎないことは私の斷言するに苦しま

ない所である。私が政友會の候補者に投票するのは固より厭であるし、左ればと云つて憲政會も感心しないし、結局棄權でもしやうと云ふのは我國今日の狀態に於て、已むを得ざる所ではあるまいか。更に甚だしいのに爲ると、彼れは議院で彌次馬の大將株である、彼れを落選さしては議院が寂しく爲る、新聞の議院記事が面白くなくなると云ふ理由で、貴重な一票を卑陋な綽名で呼ばれる人に與へやうとする者すらある。我國の議院政治が重ぜられないのも、偶然ではないと言はなければならぬ。

今日改造は社會の通り言葉で、何事も改造されなければならず、又改造しなければならぬ世の中に於て、獨り政黨だけが少しも改造されず、依然たる舊式の人物が自分等に迎合し、自分の命令に甘んずる人間を集め、理想もなければ、見識もなく唯頭數だけ揃へて、政權を爭つて居り、世間も是れが政黨として當然の事のやうに考へて居るのは、何故であらうか。立憲政治の今日に於ては善惡とも政治の要道を定めるものは、議會であり又政黨內閣の組織されてる今日に於ては、內閣の素質の良否を決するものは、政黨でなければならぬ。然るに我々國民は政治家とか、政黨員とか稱して、政權を爭つて居る者と全然別世界の生活を營んで居り、總選擧の期日が近づかうが、內閣の餘命が旦夕に迫つて來やうが、何の誰が次の內閣を組織しさうであらうが、唯相撲の勝負付か、芝居の番付を見る位の感興しか起さず、殆ど仙人の氣分で、現實の政治に對すると云ふのは其罪が國民に在るか、政治家なり、政黨なりに在るか。私は日本に於て改造の急を要するものは政治であり、政黨であらねばならぬことを確信するものである。

# 咬豆茶話

△頃來、森戶事件、靴足事件の審判官として有名になつた。井野判事の判父は、新術將軍濱野茂の相棒として株。相場での飛將軍で「井野系」と云へば一時は飛ぶ鳥を落す概があつたそうな。

△何でも、日清役で一擧幾十萬の暴富を贏ち得、その後十年間フツト廢業し、日露役が始まつたら再び開業して百萬の富を贏ち得た變り者で、兜町や蠣殼町に關係して自分の兒童を大學に通はせたのはこの「井野系」が嚆矢だつた。

△井野判事は純粋の江戶ツで、撞球もやれば、寫眞道樂もやる、鐵砲打もやれば、文章もいおくる、なかなかの快男子でそして冒險旅行家でもあるそうだ。

△東京大學の白眉たる鳩山秀夫、穗積重遠君の森戶氏判決批評を紹介する、尤も茶話子が直接聞いたのではないからこの項に限り茶話子は責任だけは回避しておく。鳩山說に從へば若し科刑の必要があれば今度の判決は大體に於て妥當に近いのものであるが、井野判事は實質主義の把持者だけに森戶氏を重く處刑した。穗積君は之に反し、その責任は編輯發行者が學才あり、思慮ありて形式ばかりの發行編輯人でないから、大内君の責任が重くなければならぬと云ふ論だそうな。しかしその科刑の適否、科刑の種目については兩氏とも口を噤んでおる。

△社會問題では、我國で最大權威とまで稱せられておる、米田庄太郎君がいよいよ法學博士にならないので文學博士になつた。三月の法學博士推薦では、お役所の端々役人や自分の子供見たいな學者に先を越された米田君に取りては今更の文學博士も難有くはなからう。

△米田君は語學にかけては全くの天才で、英佛、露、獨、伊西班牙語は云ふに及ばず、ラテン語も縱橫自由であるそうな。君は六ケ月も一國語について研究すれば、飜譯位は譯のないものだといつておる。

△かく一面に西洋通であるかと見れば、氏は印度、支那哲學でもなかなか造詣が深く、梵語にかけても一通りの大家であるそうだ。今回はその哲學方面で博士號を授けられたものだ。

△去る廿八年、米國コロンビア大學に入り、社會學、經濟學、統計學を學び、卅三年再び渡佛して、タルド氏から社會學を學んで歸朝し、爾來同志社大學に教授となり、次で京大經濟科、文學科の講師として社會學を擔任した。

△米田君は社交嫌ゐて、京大の西田、河上氏等と共に一日の三分二以上は書齋にあると云ふ有名な男だが、最近の著書「晩近社會思想の研究」は、我國社會思想の收穫中優に異色の研究に屬するものだ。和田垣博士の如きは米田氏の學識に向つては大に敬意を表していた一人であつた。米田氏の面貌、髯の生え工合がソツクリ基督に酷似しておるといふので、和田垣氏は「イエス・クリスト」君とも稱していたゲナ。

△今年の花も名殘になつた。今回推薦された九名の文學博士のうちで、米田、金子兩氏を除く外は悉く骨董趣味を深くする人達ばかりだつたが、三月の法學博士會の悉くが官史臭味があるのと好一對で鼻持ちならぬものであつた。鼻持ちならぬ博士會も、しかしもう再び來ぬ名殘の推薦會であつた。

# クロポトキン著作總評

## クロポトキン總序

大杉榮

一

雜誌編輯者の無知と無謀とには今更ながら呆れる。クロポトキンの著書全部を、僅か數日の間にしかも數十枚の制限で、總評してくれないかと云ふ註文だ。

そんな馬鹿な事が出來るものぢやない。僕は卽座に『よし、よし』と答へながら、實はほんのちよつとした手引、それも丸つきりの素人の爲めの、位のものを書く事に內緒できめてゐた。

しかしよくよく考へて見れば、內緒でさうきめた僕の方がよつぽど無知で無謀であつたのだ。折角註文主が、えらさうな題目の下に、い丶加減に、えらさうな與太を飛ばさせようとしたのを、實際近來の無政府主義論クロポトキン論などと云ふものは皆んなさうなんだからね、それを眞面目にわざわざ小面倒なものを引受けて了つたのだ。

三四百ペエジ以上の大きな本だけでもちよつと十冊近くある。そのほかに小冊子が二三十はある。しかも其の小冊子と云ふのが、いづれも皆な、大きな本と同じやうに四五年乃至七八年の研究と思索との結晶であるほかに、それを非常な苦心の下に數十ペエジの中に書き縮めたものだ。クロ自身も實は此の小冊子の方がよつぽど骨が折れてゐると云つてゐる。學問には丸つきり素人の、そして大きな本なぞを讀むひまのない、勞働者

の爲め、と云ふ事がクロの此の苦心の目的であつた。從つて其のどの小冊子と雖も、一つとして、見逃がしの出來るものはない。其の大がいは大きな本よりも却つて重要な位なのだ。

片輪者の學者にとつては、學者と云ふ奴は西洋でも日本でも皆んな片輪者だ、殊に日本の學者なぞは其の片輪者の中にすらはいらんかも知れない、此の素人の爲めと云ふ事が何によりも面倒なのだ。クロだつてやはり其のお多分に洩れない。一時は學者になつて見ようかと云ふ馬鹿げた考へを大切にして、さう云つた片輪者にばかり教へを受けて來た僕も、やはり其の、片輪者の仲間にすらもはいれない片輪者に仕込まれて了つた。

クロの著書にもつたいをつければまだまだ幾らでもつくんだが、とにかく其の數十冊のもの丶總評、或は總解說、或は總手引を、僅か數日の期限の中の僅か一と晩か二た晩かでやつてのけようと云ふんだ。何にが出來るものか。まあ、諸君が僕のうちへ遊びに來て、『クロの本を讀みたいんだが、どんなものがありますか』と云ふ質問を出して、そして僕が『さうですな』と山羊髯をいぢくりながら舊い記憶をたどつて思ひ出すまゝにぼつ〱と喋り出す、位の事に想像して讀んでくれ給へ。

實際、隨分舊い記憶なんだ。

こないだも神戶で賀川君と會つて、僕の留守中に出た有象無象共の無政府主義論、クロポトキン論を十ぱ一そくにしてやつつけるつもりだと云ふ話しから、『それでも日本ではアナアキズムのオ、ソリテイなんだからな』と大に威張つて見たところが、『さうだ、少なくとも舊い事においてはね』と早速あべこべに一本やつつけられて了つた。

僕がクロポトキン大明神でおさまつてゐたのはもう十年も十五年も昔しの事だ。はたち前からクロのものを讀み出して、十年近い間クロかぶれしてゐた。少なくとも書物の形で出たクロのものは片つ端から買ひ集めて讀み耽つた。二度も三度も、四度も五度も、どうかすると六度も七度も、繰返し繰返し讀んだ。どんな事が、どの本の、どの邊に書いてあるか、と云ふ事までも大がいは知つてゐた。クロの著書全部のよほど詳しい索引が自然に、僕の頭の中に出來あがつてゐた。

僕は此のクロかぶれの爲めに、どれ程僕の知識的發達に、と共に僕の全人格的發達にも、利益を享けたか知れないが、それと同時に又どれ程損害を蒙つたか知れない。そして其の損害に氣がついたのは、漸く年二十七の時の、千葉監獄の獨房の中で

であつた。それ以來僕はクロの書物には一切目を觸れなかつた。クロのばかりぢやない。一切の無政府主義文書から出來るだけ遠ざかる事に定めた。そしてたゞ手當り次第に、範圍にも順序にも全くお構ひなしに、尤も主としては社會學と生物學との、諸學者に親しんでゐた。

先きに『一時は學者になつて見ようかと云ふ馬鹿げた考へを大切にして』と云つたのは其の時の事だ。クロから獨立しようと思つたのはいゝ。しかし其の獨立をやはり書物でやらうと思つた僕は大馬鹿だつたのだ。

が、お蔭で、クロの書いた事は大がい忘れて了つた。無政府主義も大がい忘れて了つた。大骨折つて買ひ集めた無政府主義文書も、水難、火難(これは本當の)、賃難、盜難(これはちよつと込みいつた陰謀の)、諸難に遭つて全部無くして了つた。

お役人樣々や世間のお利口者共は今でもまだ僕を無政府主義者だと思ひこんでゐる。僕も又そいつ等にはさう云つて嚇かしてやつてゐる。人の厭がる事や恐がる事を殊更に云つたり爲たりする事の好きなのが、僕の持つて生れた厄介な病氣なんだ。常に甚だ相濟まんとは思ひながらも、如何んとも仕方がない。で、せめての申譯に斯うして白狀して置くが、僕は決してクロ大明神のもうし兒でもなければ、又謂はゆる無政府主義者なぞと云ふ至極量見の狹い狂信者でもない。たゞちよつと氣違ひじみた一人の人間樣であるだけの事だ。

其の人間樣がお氣に召さずに、世間の奴等は、きのふまでは友人だとか仲間だとか云つてゐた奴等までも、寄つてたかつて撲殺しにかゝつた。殊に此の世間の奴等の阿呆と卑怯とを食ひものにしてゐる新聞雜誌共は、其の撲殺軍のお先棒に立つて騷ぎ廻つた。

其の新聞屋、其の雜誌屋がだ。圖々しいにも程がある。世態人情が少々變はり、物騷な無政府主義が流行りものになつたとなると、急にぴよンぴよン頭をさげて『どうぞ、先生‥‥』てな事でやつて來る。そして其のご本人がとうの昔しに無政府主義なぞを廢棄してゐる事はご存じない。忘れてゐる事はご存じない。

どいつでもこいつでも、僕の斯う云つた物の云ひかたに、怒る奴は怒れ、笑ふ奴は笑へ。破つて棄てたかつたら、こんな原稿は、勝手に何處へでもうつちやるがいゝ。又、讀むのがいやなら、こんな雜誌は、勝手に何處へでもほうつてやるがいゝ。どうとでも勝手にしやがれだ。

が、念の爲めに云つて置くが、斯う云つた物の云ひかた、少

々氣違ひじみた人間樣の言葉が、可笑しかつたり癪にさはつたりするやうでは、無政府主義の精神はとても分りませんよ。クロポトキンの著書の神髓はとても摑めませんよ。それから、これは殊に此の雜誌の發行者や編輯者に極く內々で云つて置くがたまには斯う云ふものを載せる方が雜誌がよく賣れますよ。そして、これは又、僕自身にとつては、いろんな奴等へのいろんな意味での多少の腹いせになるんです。實に一擧幾く得か知れません。

其の大がいは忘れて了つた舊い記憶を思ひ出す爲めに、二三日近所を遊び廻つて、漸くクロの著書の五つ六つを借り集めて來た。

それをたいねにして、殊に近日中出版される筈の大杉榮譯クロポトキン自叙傳『一革命家の思出』を盛んにひねくり廻して、此のクロポトキン總序を書く。それは、クロ自身をして最も多く語らしめる便宜と利益とを與へるほかに、自然の避雷針にもなる事だらうから。

不十分な點は、ご質問さえあれば、出來るだけの補ひをする。直接お會ひしてゞも、手紙でゞも、又雜誌の上でゞも、お互ひの都合のいゝようにして。

## 二

ダアヰンを本當に知るには、其の名著『種の起原』や『人間の由來』やを讀むよりも、何によりも先づ『一博物學者の航海記』を繙かなければならない。『種の起原』によつて有らゆる科學界から哲學界までをも一擧にして根本的に變革させた、ダアヰン地質學上の知識、と云ふよりも寧ろ其の全人格的基礎は、其の二十三歳から二十七歳に亘る處四ケ年の世界一週の間に出來あがつた。彼れは一博物學者として軍艦ビイグルに便乘し、南アメリカ、南洋、オオストラリアの諸國諸島を遍歷跋渉した。そして一人で各地の植物誌、動物誌、地質誌を調査研究した。此の自分一人での實地に當つての調査研究と云ふ事が後年のダアヰンを造りあげたのだ。現に『種の起原』の中のダアヰンも、『人間の由來』の中のダアヰンも、其の處女著『航海記』の中に、又それによつて始めて、其の萌芽と發達のあとゝを十分窺ふ事が出來る。若し此の航海がなかつたら、或はダアヰンは、至極平凡な一田舍牧師として世を終つて了つたかも知れない位だ。

クロポトキンを本當に知るのにも、やはり其の名著の『パンの略取』や『相互扶助論』やを讀むよりも、何によりも先づ其の自叙傳『一革命家の思出』を繙かなければならない。此の自叙傳に就いては、森戸君が詳細な紹介をする筈だし、それに追々僕の全譯が出る筈だから、別に解説はしない。

僕が此の自叙傳の飜譯をしたいと思つたのは隨分舊い事だ。明治四十一年の春、巣鴨の獄中から幸德に宛てゝ出した手紙の中にも、『兄の健康は如何に。「パンの略取」の進行は如何に。僕は出獄したら直ぐ多年宿望のクロの自傳をやりたいと思つてゐる。今其の熱讀中だ』(大杉榮著『獄中記』六五―六六)と書いてゐる。それが五六年前に漸く或る本屋と話しがついて、內務省へお伺ひを立てゝ見たが、どうしてもお許しが出ず、つい其儘になつてゐるうちに、一昨々年の暮れに例の有名な誤譯家三浦關造君に先をこされて了つた。僕は早速內務省へ出かけて、其の不信を責めて、僕の飜譯の出版許可を迫つた。內務省では『あんまり滅茶苦茶な飜譯なので、あんなものなら出さしても差支へあるまい』との事で許したのださうだが、『どうもあなたにあれをうまく飜譯された日にや』なぞとうまい事を云つて中々許してくれなかつた。が、とう〳〵お許しが出た。そして僕は、『多年の宿望』と、三浦君のクロに對する甚だしい冒瀆に對する憤慨とを、漸くの事で果たす事が出來るようになつた。

此の自叙傳の中で、僕が今特に御注意を願ひたいのは、其の第三章『シベリア』の卷だ。

ダアキンの世界一週は、主として一博物學者としての、今日は此處明日は彼處と轉々として移つて行くほんの通り一ぺんの旅行に過ぎなかつた。尤も其の間に、アメリカ・インディアンや東洋諸島の蠻人とも會ひ、メキシコの革命騷ぎをも見、チリの鑛山勞働者にも接して、人間の生活の上に純眞な人道的感情を養つてもゐる。しかし彼れは、其の感情を何處までも育てあげる事をせずに、寧ろ其の學說の『生存競爭』で晦まして了つた。

クロは其の十九歳から二十五歳までの五ケ年間をコサック士官としてシベリアで暮らした。が、此のコサック士官としてのと云ふのは、決して單なる一軍人としてゞはなく、寧ろ一行政官、しかも社會改良の一委員としてゞあつた。彼れは東シベリアの首府イルクウツクに着くと共に、總督コルサコフの下に、參謀長クウケルの副官となつた。コルサコフは其の部下に自由思想の人々を持つてゐる事を誇りとする程の人であつた。クウ

ケルはまだ年三十五にも達しない若い將官で、其の書齋にはロシアの最善の新聞雜誌と一緒にヘルツェンのロンドン版革命的文書の全集が揃つてゐた。

　クウケル將軍は其頃臨時にトランス・バイカリア縣知事の職にあつた。數週間の後彼れは縣の首府のチタと云ふ小都會にまで行つた。そして其處で彼れは、一刻の猶豫もなく、當時盛んに議論されてゐた大改革に身も魂も打ちこんで了つた。當時セント・ペテルスブルグの諸省は地方官憲に命じて、縣の行政や、警察の組織や、裁判所や、監獄や、追放制度や、町村自治などに就いて、極く自由な基礎に基いた根本的改革を施す事を求めてゐたのだ。

　クウケルはペダシエンコ大佐と云ふ聰明な且つ實際的な人と、誠實な數名の文官との輔佐の下に、終日、時としては夜の大部分までも働いてゐた。クロは二つの委員會――監獄と追放制度との改革、及び町村自治制の立案との――の幹事となつた。彼れは十九歳の青年の熱心を以てこれらの事に當つた。先づロシアに於けるこれら諸制度の歷史的發達や、又外國に於ける其の現狀に就いての多くの書物を讀んだ。しかし彼等のトランス・バイカリアでの仕事は決して机上の空論のみではなかつた。クロは地方の實際の要求と可能性とに通じた實際家に就いて、先づ大體の輪廓を論じ、次ぎに一々事實に就いて仔細に調べて行つた。

『猶其の外にも臨時のいろんな仕事があつた。地方の農業展覽會の報告書と共に、縣の經濟事情調査書をも書かなければならなかつた。其他いろいろと重要な調査をしなければならなかつた。「吾々は今重大な時代に生活してゐるんだ。働き給へ君。君は現在及び將來の有らゆる委員會の幹事だと云ふ事を忘れないやうにして。」クウケルはよく私に斯う云つた。私は益々精を出して働いた。』（大杉榮譯『一革命家の思出』二〇七―二〇九）

　クロの此の努力は、實際の上には、全く水泡に歸した。官僚政治の組織其物が邪魔をしたと共に、やがて中央政府に反動の波が來た。あらしが來た。クウケルは免職されて、二人の憲兵の護衛の下にセント・ペテルスブルグに送られ、セント・ピイタアポオルの要塞に幽閉されようとまでした。

　しかしクロの人間や社會に就いての理解は、そして又其の全人格的基礎は、全く其の間に築きあげられた。『私がシベリアで送つた五ケ年は、私にとつては、人間と人間の性質に就いての

純正な教育であつた。私は有らゆる性質の人々と、最善の人とも最惡の人とも、上流の人ともどん底の人とも、又宿なしや謂はゆる濟度すべからざる罪人とも、有らゆる種類の人々と接觸した。農民の日常生活に於ける風俗習慣の觀察にも十分な機會を得た。殊には又、政府者がよし最善の動機から行つた事でも其の農民に益する事の如何に少ないかを觀察する一層多くの機會を得た。』（『思出』二〇四―二〇五）

『私がシベリアで暮らした數年間は、ほかでは容易に學び得ない多くの教訓を私に與へた。先づ私は、行政機關の方法では本當に民衆の爲めに有益な何事をも絕對に出來ない事を悟つた。私は永久に此の妄想と別れた。次ぎに私は、人間と其の性質とのほかに、猶人類社會の生命の內的源泉をも分りはじめた。書物の中には滅多に出て來ない無名の民衆の建設的作用、及び此の建設的作用が社會の種々なる樣式の生長發達に如何に重要な役目を勤めてゐるかと云ふ事が、私の眼の前にはつきりと現はれて來た。』

『農奴使用者の家に育つた私は、當時の有らゆる青年と同じく、指揮や命令や叱責や懲罰などの必要と云ふ事を信じ切つた實際生活にはいつた。しかし私は種々なる大事業を取扱ひ、又多くの人間と交涉するに及んで、命令や法律の原則の上に行動するのとお互の理解を原則として行動するのとの差異が分り出して來た。前者は軍隊の檢閱などには立派に役に立つ。しかし實生活の事にかけては、そして其の目的が多くの輻合的意志の嚴格な努力を通じてのみ達せられるところでは、何んの値打もない。』

『斯くして私は、シベリアで、從來抱いてゐた國家的紀律の信仰を全く失つて了つた。卽ち當時既に私は無政府主義者となるべく準備されてあつたのだ。』

『發意の人は何處にでも要る。しかし一度いはづみが與へられた以上は、其の事業は軍隊式にではなく相互の理解に基づく自治團體式に經營されなければならない。國家的紀律の設計組立家等は其の國家的理想鄉を立案する前に先づ實際生活の學校を通過して來て欲しい。さうすれば、軍隊的、ピラミット的社會組織の案は、今日程までに聞かなくても濟んだに違ひない。』

（『思出』二六三―二六五）

クロが此のシベリアで書いたと云ふいろんな調査書や報告書が、今また何處かに保存されてゐるかどうかは全く分らない。

斯くして社會改良に全く絶望した彼れは、其後は主として、シベリアや滿洲の地理學的探險の旅行に日を送つた。

彼れは先づ、當時ロシアが占領したばかりのアムウル下流殖民地に食糧を送る爲めに、アムウル洲を數千哩下つた。其時にも、諸殖民地の地理的事情や經濟的事情に就いての報告書がセント・ペテルスブルグの政府に呈出されてある筈だが、どうなつたか。

次ぎに彼れは、滿洲の、こんどは本當に純粹の地理學的探險に出かけた。

アジアの地圖を一瞥すると、大體に於て北緯五十度に沿ふて走つてゐるシベリアのロシア境がトランス・バイカリアで急に北の方に曲つてゐるのを見る。此の國境線は三百哩の間アルゴン河に沿ふて行つて、それからアムウル河のところまで行くと東南に曲つて、アムウル地方の首都ウラゴエスチエンスクが丁度再び又北緯五十度のあたりになる。トランス・バイカルの東南端新ツルハイツとアムウル河畔のウラゴエスチエンスクとの間は、東西の距離僅かに五百哩であるが、それをアルゴン河とアムウル河とに沿ふて行くと千哩餘りになる。それにアルゴン河は舟も通はず、其の沿岸の交通も極めて困難だ。殊に其の下流では極く險しい山路があるばかりだ。

トランス・バイカリアは牛馬に頗る豐富な地方である。この地方の東南隅に占據して富裕な牛馬飼養者であるコサック等は其の牛馬の好市場たるべき中部アムウルとの直接の交通を求めてゐた。此のコサック等は從來蒙古人と交易してゐた。そして屢々彼等から、大興安嶺を越えて東に行けば容易にアムウルに達せられる、と云ふ事を聞いてゐた。東に眞直に行くと、興安嶺を越えて、メルゲンと云ふ滿洲町、スンガリの支流ノンニ河に通ずる支那の舊道に出る筈だ。そして其處からは立派な道が中部アムウルに通じてゐると云ふ。

『コサック等は此の通路發見の爲めに一隊を組織して、私に其の隊長になつてくれと云ふのだ。私は喜んで承諾した。ヨオロッパ人で此の地方に行つたものはまだ一人もなかつた。其の數年前にロシアの一地理學者が此の道を行つた事はあるが途中で殺されて了つた。たゞ曾つて唐の高崇時代に二人のジエスイト僧侶が南方からメルゲンまではいり込んで其の緯度を測定した事があつた。しかしそれから此の縱橫五百哩に亘る廣漠とした地域は全く絶對的に未知の世界であつた。私は此の地方に就いての有らゆる參考書を調べて見た。誰れ一人として、支那の

地理學者すらも、此の地方に就いては何んにも知らない。それに中部アムウルとトランス・バイカリアの聯絡はそれ自身重大な性質を帶びてゐた。ツルハイツは外滿洲鐵道の主驛になる筈であつた。斯くして私達は此の大事業の先驅者となるのであつた。」(『思出』二四三―二四五)

クロの一隊は難なく此の探險に成功した。彼等は其の目的の直通路を發見したほかに、大興安嶺の境界的性質や、其の山越えの容易な事や、又は久しく地文學上の謎になつてゐたウユン・ホルドンワイ地方の第三期火山などに就いての、多くの興味ある事實を發見した。

「それが濟むと、直ぐ又アムウル河畔を旅行して、其の河にと云ふよりも寧ろ入江になつてゐるニコラエフスクまで行つて、其處から更にウスリイ河を溯つた。

それから彼れは滿洲の中心であるスンガリを吉林まで溯つてもつと面白い旅行をした。

アジアの多くの河は同じ大きさに二つの河の合流したもので地理學者は其の二つのどれを本流、どれを支流と云つていゝか苦しむ位だ。インゴダとオノンとが合してシルカとなり、シルカとアルゴンとが合してアムウルとなる。そして此のアムウルは又スンガリと合して彼の洋々たる大河となり、東北に流れて韃靼海峽の無人境で太平洋に注いでゐる。

其の年即ち一八六四年までは、滿洲の此の大河も餘りよくは知られてゐなかつた。初めていろ〳〵と知られたのは、前にも云つたシエスイトの時代からであるが、それも極くいゝ加減なものであつた。

クロ等は總督に迫つてスンガリ探險の急務を說いた。總督は吉林州總督に友交を求めると云ふ口實の下に、其の秋一隻の汽船を送つてスンガリを遡らせる事にきめた。クロも其の一行に加はつた。此の探險も立派に其の目的が達せられた。スンガリの航行が確かめられた。河口から吉林までの詳細な河流圖も作られた。

『私達の探險は其後忘れられて了つた。天文學者のウソルツエフと私とがシベリア地理協會の會報に其の報告を發表した。然るに數年後イルクウツクの大火で、其の會報の殘本もスンガリの原圖も總て燒失して、漸く昨年(一八九八年)になつて外滿洲鐵道の布設が始まつた時に、ロシアの地理學者等が私達の報告書を探し出して、此の大河が既に三十五年以前に探險された事を發見したのであつた。』(『思出』二五九)

斯くして彼れはだん／＼其の精力を科學的探險に向けるようになつた。一八六五年には西サヤンスを探險して、其處でシベリア諸高原の地勢に就いての新見地を得、又それが支那邊境の重要な一大山地方である事を發見した。そして遂に、其の翌年再び長途の旅行を企てゝ、ヤクウツク洲の諸金鑛とトランス・バイカルとの間の直接通路を發見した。

シベリア探險會の會員等は多年此の通路の發見を試みて、それらの鑛山とトランス・バイカルの平野との間にある極く險しい岩質のしかも幾列にも平行した山脈横斷に努めたのであつたしかし北の探險家等は、南方から進んで此の陰氣な山岳地方に到達し、そして更に幾百哩も此方に延びてゐる物凄い山脈を目の前に見た時、悉く皆なもと來た南へ引返して了つた。

クロはそれを反對に北から南へと行つた。先づレナ川を下つて北方の金鑛地に行き、其處で遠征の仕度をして、三ケ月間の糧食を持つて二百五十哩に亘る山岳地方を南へ南へと横斷して行つた。

『とう／＼私達は目的の通路を發見した。三ケ月の間殆んど全く無人の山中と陰濕な高原とをさ迷つて、遂に目指すチタに着いた。聞けば今では此の道が南方から金鑛地へ牛馬を送る重實な道になつてゐるさうだ。私自身にとつては、此の旅行は後日シベリアの山岳と高原との地勢を研究する要石を見出す上に非常な助けとなつた。』（『思出』二六一―二六三）

これらの旅行と探險とは、地理學者としてのクロを大成させると共に、其の間に見聞した諸動物の社會的習性によつて後年の名著『相互扶助論』の萌芽を得しめたのであつた。

## 三

クロポトキンの著書の一々を思ひ出すまゝいゝ加減に紹介して見ようと思つたのが、書き始めるとやはり持前の癖性が出て來て、書物の内容よりも寧ろクロをしてそんな物を書かせるに至つた事情の方が明かにしたくなつた。どうも其の方が本當のやり方らしい。それに面白いのは、始めや中程にちよいちよい書いた僕自身の腹いせや何にかゞ、其時には是非ともそれを云はなければ濟まない氣持であつたのが、もうそんな事はどうでもいゝ事になつて了つた。クロポトキン大明神が復活した譯ではないが、クロと云ふ一個の偉大な人間の、其の思想や感情の科學的研究の前には、僕と云ふちつぽけな人間の、しかも其の極めて些々たる私事なぞに構つて居れなくなつたのだ。

一八六七年、クロはセント・ペテルスブルグに歸つた。ポオランドの政治叛人等がシベリアで暴動を起したに對する、ロシア軍隊の殘虐が、遂にクロをして其の軍職を見棄てしめたのであつた。

クロは大學にはいつた。數學の十分な素養が今後の一切の科學的研究や思想の唯一の健全な基礎であると云ふ考へから數學科の中の物理數學科にはいつた。そして其の間に主として地理學的研究に耽つた。

クロの最近の探險報告書が印刷された。しかし其間に彼れにはもつと大きな問題が起つてゐた。シベリアでの彼れの旅行は彼れに次ぎのやうな事を信じさせた、即ち當時北部アジアの地圖の上に描かれてゐた山脈は大部分とりとめのない空想的なもので、其の地方の地勢に就いての何等の觀念をも與へない。アジアの一大特徴である彼の大高原は、當時の地圖を描いた人々には其の存在をすらも想像されてゐない。そして此の高原の代りに、幾多の大山脈、たとへば、地圖の上では普通に黑い毛虫が東の方へ匍つて行くやうに描かれてあるスタノヴオイ山脈の東方の部分などが、實際にはそんな形勢もなく、又エル・シュワルツなどの探險家の報告とも違つてゐるにも拘はらず、測量局でのさばつてゐた。こんな山脈は自然の上には全くないのだ。一方には北氷洋に流れ、他方には太平洋に流れこむ幾多の河の源泉は、廣大な一高原の上で入りまじつてゐる。即ち其の源泉は同じ沼の中から出て來るのだ。然るに、ヨオロッパの測量家共の想像では、高大な山脈が首要分水界に沿ふて走つてゐなければならないものとされてゐた。で、彼れは其處に實際には何んの形跡もない大高山を描き出してゐた。そして斯う云つた多くの空想上の山脈が北部アジアの地圖の上を四方八方に入り亂れてゐた。

そこでアジアの山脈の排置を知る本當の首要原則、即ち其の山脈構成法の調整を見出すと云ふ事が、幾年かの間クロの注意を集中させた一問題となつた。暫くの間は、彼の古い地圖と、それからアレキサンダア・フオン・フンボルトが久しく支那の原著を研究してアジアの全體を子午線と其の並行線とに沿ふて走る幾多の山脈の網の目で覆ふて了つた推論とが、クロの研究の邪魔をした。が、遂に彼れは、此のフンボルトの推論ですらも新しい研究の刺戟にはなるもの丶、事實とは一致してゐない事を知つた。

始めて彼れは、實際當時ではこれが全くの始めてゞあるが、彼れは純粹の歸納的方法で從來の探險家の有らゆる氣壓的觀察を蒐めて、それによつて幾百ケ所の高度を測つて見た。次ぎに彼れは、いろんな探險家によつてなされた、假定上ではない事實上の有らゆる地理學的及び物理學的觀察を、大きな地圖の上に書き記して見た。そして彼れはどんな地形線が此の觀察の事實と最もよく適合するだらうかを見出さうとした。此の豫備的研究が二年餘りかゝつて、猶數ケ月の間彼れは、此のあちこちに散らばつてゐる觀察の、如何んとも手の下しようのない混亂の理由を見出さうとして考へぬいた。

すると或日の事、全く突然に、丁度一閃の光明に照らされたやうに、すべてがはつきりと分つて來た。アジアの首要地形線は、北から南へでもなく又西から東へでもなく、丁度アメリカのロッキイ山脈や高原の地形線が西北から東南に進んでゐるやうに、西南から東北に走つてゐるのだ。そしてたゞ第二次的の諸山脈が西に跳び出してゐるだけの事だ。それにアジアの諸山脈は、アルプス山脈のやうに獨立した山脈の集合ではなく、總て皆な嘗つてはベエリング海峽の方に向つてゐた古大陸であつたところの一大高原に隸屬してゐるのだ。高い分れ山脈が其の高原のふちに沿ふて屹立し、そして幾年月かの間に其後の沈澱物によつて生じた臺地が海の中から浮び出て來て、アジアの古い脊骨である此の高原の幅を兩側に擴げて行つたのだ。

『此の研究は、私は科學に對する私の主なる貢獻だと考へてゐる。最初私は、大きな著物を出して、北部アジアの山岳や高原に就いての此の新しい觀念を各々別々の地方の許細な調査によつて證據立てゝ見ようと思つた。しかし一八七三年になつて私が直ぐにも拘引されさうな事が分つた時に、漸く私は此の考へを現はした地圖と其の說明書とを書きあげたゞけであつた。

『これは兩方とも、私がセント・ペテルポオルの獄中にある間に、兄の監督の下に地理學協會から出版された。當時アジアの地圖を書きかけてゐて、私の研究の事をも知つてゐたペテルマンと云ふが、先づ其の地圖に私の案を採用し、それ以來大多數の製圖家もそれを採用した。此のアジア地圖は、今日では直ぐに理解される事であるが、アジア大陸の地勢上の首要諸特質と、其の氣候や動植物の分布と、及びそれらのもの﹅歷史までをも說明したものだ。』

『今日では製圖家でもいつアジア地圖にこんな變化が來たのか知つてゐるものは殆んどゐない。しかし科學の上では、新し

い觀念はそれに結びつけられた何人かの姓名とは構はりなしに進んで行く方がいゝのだ。最初の概論には免れる事の出來ない誤謬も其方が修正し易くなる。』(『思出』二七七—二七八)

クロは又ロシア地理學協會の地勢地理科の幹事として隨分働いた。

當時は全ヨオロッパに亘つて猛烈に探險熱の昂まつた時代であつた。ロシアの地理學協會も盛んに活動した。從つて又其の地勢地理課、及び其の幹事たるクロが熱心に取扱つた地理學上の問題も隨分多かつた。殊に協會が北極探險の計畫を立てゝ、其の探險隊によつて行はるべき諸科學上の研究を指定する爲めの一委員會が設けられ、クロは例によつて又其の委員會の幹事となつた。そしていろんな專門家が各々其の專門とする一科學の項を受持つたのであるが、海棲動物學だとか、潮流學だとか振子觀察だとか、又は地球磁氣などゝ云ふ多くの厄介な項目は間に合はずに、仕方なしに幹事たるクロが書かなければならない羽目になつた。それはクロには全く新しい學問であつた。しかしクロはそれすらをも極めて短日月の間に立派に仕あげた。が、其間に彼れは又、其の專門の地理學に就いての全く新しい一大著述を企てる野心を養つてゐた。ロシアの地理に關する有らゆる有益な材料は、總て皆なクロの手を通して協會にはいつた。世界の此の廣大な部分に就いての遺漏のない。一大地理書を書いて見たら、と云ふ考へがだん〳〵彼れにつのつて來た。彼れのつもりでは、先きに彼れがヨオロッパ・ロシアに就いて發見した首要地形線に基づいて、此の國の詳細な地理的記述をなし、更に其の記述の中に各々其の地勢を異にする諸地方に行はるべき經濟生活の種々なる樣式を略記して見たいと思つた。

そして彼れは此の野心を充たす爲めの十分な時間と自由との爲めに協會幹事の職を渇望してゐた。しかし彼れは、其後間もなくフインランドとスエデンとの週遊を命ぜられて、氷河時代の堆積物調査に派遣され、地質學と動植物分布學との上に新地平線を開かうとしてゐた間に、其の目撃した悲慘な農民の生活が彼れをして折角すゝめられた協會幹事の地位をも辭せしめ、同時に又其の科學者としての野心を全く放擲させた。

が、其の一大地理書著述の野心は、後年彼れが同志エリゼ・ルクリュスの『大地理學』編纂に與かつた時、其の第五卷『スカンディネギアとヨオロッパ・アジア』及び第六卷『アジア・ロシア』の中に十分に果し得た事と思ふ。嘗つて僕は此の第六卷の

ロシア譯を丸善で見た事があるが、最近には其の第七卷の『フランス文東部アジア』が四五冊丸善に來てゐるのを見た。

僕はクロのロシアやシベリアの地理學的發見に就いて、大部分の讀者には大して興味のなさゝうな事を少々長すぎる程書いて來た。しかし斯うして自然科學上の研究が、同時に又、後年のクロの社會科學の基礎になつてゐるのだ。過激派征伐の軍人共は、戰さのひま／＼には今云つたやうな地理學書でも繙いて見て、少しは『土地と人間』（これはルクリュスの本のサフ・タイトルだ）の事を考へて見るがいゝ。

## 四

アジアの新地圖を作り、新地理を書く事に就いての、クロの科學的研究の態度は大抵これで分つた事と思ふ。が、クロの此の科學的研究の素養に就いては、更に遡つて其の少年時代に受けた教育を見なければならない。

クロが近侍學校―日本の幼年學校と士官學校とを合せたやうなもの―で受けた教育程羨ましいものはない。先生は皆な當時ロシアで第一流の學者であつた。實際、極く年少の生徒に或る課目の一番の初歩を教へるのには、どんな先生でも決して善すぎると云ふ事はない。たゞ書物だけで講義をするのではない。總て實地に就いて、生徒自身をして其の實驗をやらせた。

書物で初等幾何學を教はると、直ぐに野外に出て、始めは棒や測量用の鎖で、やがては觀象儀やコンパスや測量器などで、其の復習をした。そして稍々進んで測量學や築城學を教はる時には、反射羅針盤をあてがはれて、『此の羅針盤で角度を量り、歩測で距離を計つて、某々の湖、某々の道路、某々の公園の見取圖を作つて來い』と命ぜられる。生徒等は軍服の大きなポケツトにライ麥のパンの幾きれかを詰めこんで、毎日朝早くから數哩隔たつた公園へ出かけて、地圖を引きながら美しい木影の路や小川や湖の畔を歩き廻はる。斯くして出來あがつた皆んなの地圖はやがて正確な地圖と對照される。

『私には此の測量が深い悦樂の泉であつた。其の獨立の仕事、幾百年を經た老樹の下の孤獨、何者にも妨げられずに樂しむ事の出來る深林生活、及び仕事其者の興味、これらの總てのものが私の心に深い痕跡を殘した。私が後にシベリアの探險家になり、又友人の幾人かゞ中央アジアの探險家になつたのも、其の基礎は既に此の測量によつて準備されてあつたのだ。』（『思出』）

それに生徒の方でも又、此の方針に從ひ且つそれに促がされて自己教育をした。獨立的研究をすらもした。

クロは年十五の時にもう經濟學の獨立的研究をやつてゐる。それは當時經濟學熱の絶頂にあつた兄アレキサンダアの勸めで村の教會のお祭りである『カザンの聖處女祭』の市を研究して、其處へどれだけの商品が持ちこまれどれだけの商品が賣れたかの統計を作つたのだ。クロ自身もそれを『平民生活の探險者としての最初の出立』だと云ひ、『此の小事業は私を農民等に更に一層近づかせて新たな方面から彼等を觀察させ、猶後年シベリアでそれが非常な助けになつた』と云つてゐる。そして其の統計其者に就いては、『自分ながら驚く程成功した。今から考へて見て、私の其の統計は多くの同じやうな統計に勝るとも劣るところはなかつた』と自讃してゐる。

此の點がクロの知識的發達にどれ程與かつてゐるか知れない。しかし其の事はこゝでは省く。

そしてクロは十六の時にもう歷史の著述と獨立研究とをしてゐる。彼れは授業時間中に作つたノオトの助けをかりて、又いろんな書物の助けをもかりて、自己用の初期中世史の一と講義を書きあげた。其の翌年彼れはロオマ法王のボニファス八世と王權との爭ひに特殊の注意を持つて、無理やりに帝室圖書館にはいりこんで、古代チュウトン語と古代フランス語との豐富な古文書的源泉に親しんだ。

『全く新しい社會の構成法や、錯雜した關係の全く新しい世界が、私の前に現はれた。そしてそれ以來、近代的見解によつて演繹された著述よりも、歷史の古文書的源泉に遡る方が遙かにいゝ事を覺つた。近代的見解には、近代政治學の偏見や、又は單なる一時的思潮の信條が、其の時代の實生活を覆ひかくしてゐる。』(『思出』一三八―一三九)

クロの此の中世史研究は、其後彼れに全く獨創的な史的觀察を抱かせて、『相互扶助論』の中の最傑作『中世都市に於ける相互扶助』二篇を形づくらせる基礎となつた。

クロは又十八の時に學校用の物理學教科書を編纂してゐる。陸軍の學校で使ふ大がいの教科書は其の當時の第一流の學者によつて特別に書かれたものであつた。クロ等の物理學の教科書も可なりいゝものであつた。が、どちらかと云へば、それは少し舊式のものになつてゐた。で、クロ等の先生は其の獨特の教授法でやつて行つて、教室で使ふ其の教材の摘要を作り始めた。

そして數週間たつと、先生はクロに其の摘要を書く役目を仰せつけた。先生は本當の敎育家としての態度に出て、其の一切をクロに任せて、自分はたゞ校正刷を讀むだけだつた。熱や電氣や磁氣の章は全然書き直さなければならなかつた。クロはそれを書きあげた。そして彼れは學校用に印刷されたほゞ完全な數科書を作つた。

其の年にクロは又化學の研究をはじめた。先生はやはり第一流の學者で、既に有益な獨創的研究を遂げてゐた人であつた。クロ等は五六人で組んで、一友人の家に實驗室をつくつて、ストツクハルトの敎科書の中に初學者に勸めてゐる簡單な機械を備へた。そして日曜日や祭日の全部を其の實驗に暮した。

當時、即ち一八五九年から六一年にかけては、諸正確科學に對する趣味の世界的勃興の時代であつた。グロオヴやクロオシアスやジニウルやセゲン等は、熱及び其他の有らゆる物理的力が運動の變態に過ぎない事を證明した。ヘルムホルツは音響に就いての其の劃時代的研究をはじめた。テイユタルは其の通俗講演の中で分子や原子に就いての暗示をした。ゲルハルトとアヴオガドロとは元素交換の法則を發表した。メンデレオフ、ロオタル・マイエル、及びニユウランズは諸元素の週期律を發見した。ダアヰンは其の『種の起原』によつて一切の生物學的科學を革命した。又、カアル・フオクトとモレシヌツトとは、クロオド・ベルナアルのあとをついで眞正の心理學の基礎を生理學に置いた。科學勃興の大時代であつたのだ。そして人心を自然科學に向はしめた此の大潮流は到底不可抗的のものであつた。クロもやはり此の潮流の中に卷きこまれた。そして彼れは、あとで何んの研究をするにしても、自然科學の深い知識と其の方法とに習熟する事が總ての基礎にならなければならない、と云ふことを覺つたのであつた。』

クロポトキンの著者の總てに一貫する最も深い特徴は、此の『自然科學の深い知識と其の方法との習熟』である。本當に正直な近代科學的精神の横溢である。

僕はさきにクロは其の科學者としての野心を全く放擲したと云つた。しかしそれは單なる科學者としての野心を棄てただけの事で、科學其者を見放した譯ではない。又、自分の人間の一部分を形づくつてゐる科學者を殺して了つた譯ではない。其後と雖も自然科學の研究には出來るだけ盡してゐる。そして其の研究と共に、諸社會科學の新見地の上に自然科學の方法其儘を

適用する事に全力を盡してゐる。

が、其の事は又あとで云ふとして、もう少しクロの自然科學に就いて說かう。

一八七四年、クロが始めてセント・ペテルボオルの要塞に投獄される數日前の事だ。彼れはスインランドとロシアとの地質的構成に就いての報告書を書き終つて、それを地理學協會で朗讀しなければならない事になつてゐた。厚い氷の層が中部ロシアをまでも蔽うてゐた、と云ふクロの新發見は、當時の多くの學者等に餘りに極端な假說だと考へられた。で、一旦きまつた朗讀の日を一週間延ばして、十分な討論に附する事になつた。

『盛んな討論があつた。そして少なくとも或る一點だけは私が勝つた。ロシアの洪積時代に就いての一切の舊い學說は全く根據がない、で其全問題を調査し直して新しい出發點を求めなければならない、と云ふ事は認められた。そして私は我國第一流の地質學者バロボ・ド・マルニイの次ぎのやうな言葉を聞いて滿足した。厚い氷の層が蔽ふてゐたか否かは別として、とにかく流氷の作用に就いて從來吾々が云つた一切の事は、實際の如何なる探險にも根據のなかつた事を認めなければならない。』

其の日彼れは地勢地理課の課長になるようにと勸められた。しかし彼れは內心其の晩は『第三部』の牢屋で寢なければなるまいと決心してゐたのであつた。果して其の翌日彼れは拘引された。

そして彼れは要塞の獨房の中で、此の報告書を訂正增補して、二冊の大きな本になる程の原稿を書きあげた。其の一冊は先きにも云つた如く、兄アレキサンダアの監督の下に地理學協會から出版された。其後クロが脫獄してイギリスに亡命し、レヴアショフと云ふ匿名で雜誌『ネエテユア』と新聞『タイムス』とに科學上の雜報や新刊批評を書いて生活の資を得てゐた時、『ネエテユア』の副主幹ケルシイからさうとは知らずに此の自分の著書の評論を賴まれて、ひどく當惑したと云ふ面白い話もある。

遠い過去の、人類が生れ出たばかりの頃に、スカンデイネヰアやフインランドの向うの北方の諸群島に、年々氷が積り積つてゐた。そして此の積り積つた廣大な氷の層が、漸次ヨオロッパの北部に襲ふて來て、やがては徐々として其の中部地方にまでも擴がつた。生物は此半球の此の部分にも住んでゐた。が、此の廣大な氷原から來る氷の息に吹かれて、慘憺たる不安な生活を送りながら南へ南へと逃げた。憐れな弱い無智な人間も其

の覺束ない生存を續けるのに有らゆる艱難辛苦を嘗めた。幾千萬年かゞ過ぎ去つた。氷が解け始めた。湖水時代が來た。無數の湖が凹地に出來た。みすぼらしい亞北極植物がそれらの湖のまはりの底も知れない沼地をおづ／＼と侵し始めた。再び又、幾千萬年かゞ過ぎ去つた。極く緩慢な乾燥作用が始まつた。諸生物が南の方から徐々として其の侵寇を始めた。そして今日では吾々は其の乾燥作用が餘程迅速になつた時代にゐるのだ。乾燥した平野や草原が出來て來た。人類は此の乾燥作用を妨げる方法を見出さなければならなくなつた。現に中央アジアは此の乾燥作用の犧牲となり、東南ヨオロッパもそれに脅やかされて居る。

此の氷原が中央アジアにまでも及んでゐたと云ふ確信は、當時多くの學者の間に異端視されてゐた。が、今日では、クロの此の新發見は大體に於て認めないものはない。

其後クロはエンサイクロペデイア・ブリタニカにも多くの科學上の論文を書いてゐるが、それにも増して彼れ自身の科學上の研究ともなり又科學界の貢献ともなつたのは、一八九二年から一九〇三年に至る十年間、彼れが雜誌『ナインティス・センテユリイ』の『最近科學』欄を受持つた事だ。

これは其後は誰れが擔任してゐるか知らないが、クロの前にはハクスレエがやつてゐた。さすがのクロも其のあとを引受けるのには多少の躊躇があつたやうだ。しかしクロの其の諸論文はハクスレエのに較べて決して優るとも劣るものではなかつた。此の諸論文は最近に一まとめにして出版されると話しがあつたが、其後戰爭や何にかで一時立消えになつてゐるらしい。

とにかくクロには、其のお蔭で、最近科學の一切の發見、一切の新說に通ずる事が出來た。そしてそれらの發見や新說の研究の結果、益々科學的方法の上に深い確信を抱くようになつた。其の事は『近代科學と無政府主義』の再版の序文にも云つてゐるし、其の本文の中にも詳しく論じてゐる。

## 五

クロポトキンの著書全部の大體の單なる解說、と云ふのが中途でクロをしてそれらの著書を書かしめた頭の出來具合の說明に變り、それが同時に又うまくクロの無政府主義以外の科學的著述の自然の解說になつて了つた。クロの生涯をフインランドでの改宗を境として、前後の二期に分ければ、其の前期の殆ん

ど總ての著述、若しくは著述の卵が紹介されて了つた譯だ。

革命家としてのクロの著述、それは素よりすこぶる重要なものだ。しかし其の本當の重要さは、やはり其の科學者としての著述の重要さが分らない間は、本當には分らない。

先きに僕は巣鴨の獄中から幸德に宛てた手紙の一節を書き拔いたが、其の一節の前には斯んな事が書いてある。

『此頃讀書をするのに甚だ面白い事がある。本を讀む。バクニン、クロポトキン、ルクリユス、マラテスタ、其他どのアナアキストでも。先づ卷頭には天文を述べてゐる。次ぎに動植物を說いてゐる。そして最後に人生社會を論じてゐる。』

『やがて讀書にあきる。眼をあげてそとを眺める。先づ眼に入るものは日月星辰、雲のゆきき、桐の靑葉、雀、鳶、烏、更に下つては向うの監舍の屋根。丁度今讀んだばかりの事を其儘實地に復習するやうなものだ。そして僕は、僕の自然に對する知識の甚だ淺いのに、いつもいつも恥ぢ入る。これから大に此の自然を研究して見ようと思ふ。』

『讀めば讀む程、考へれば考へる程、どうしても此の自然は論理だ。論理は自然の中に完全に實現されてゐる。そして此の論理は、自然の發展たる人生社會の中にも、同じく又完全に實現されなければならない。』

『僕は又、此の自然に對する研究心と共に、人類學や人類社會史に強く僕の心を引かれて來た。こんな風に、一方にはそれからそれへと泉のやうに學究心が湧いて來ると同時に、獄中の強制的無爲無活動は愈々益々……心をそゝつて來る。此の學究と……との二つの野心、僕等はそれを一つは監獄で一つは社會で滿足させて行くんだね。』

此の『自然は論理だ』の項は少々可笑しいが、とにかくクロの無政府主義文書には自然科學を說いてゐる事がすこぶる多い。しかし此處に注意して置かなければならないのは、それがヨオロッパの多くの自然科學者がやつたやうな、又日本でも丘淺次郎博士や石川千代松博士がやつてゐるやうな、謂はゆる生物學的社會學では決してなかつた事だ。クロは自然科學の事實若しくは原則を其儘人類社會學の上に適用する、幼稚極まるそして又危險極まる類推法なぞには決して依らなかつた。彼れは何處までも本當の科學者であつた。彼れが社會科學を論ずる上に自然科學を說いたのは、一方には自然科學の歸納的方法を其儘社會科學の上に適用せんとし、他の一方には斯くして自然科學の傾向と社會科學の傾向との上に一致を求めて、其處に其の

一大世界觀を建てようとしたのであつた。
そして此の一大世界觀が、クロにとつては、其の無政府主義其物なのである。
『無政府主義は自然全體を包括する。——即ち其中の人類社會の生活と其の經濟的政治的道德的問題をも含む——一切の現象の機械的說明に基礎を置く世界觀である。其の目的は一個の概括的結論の中に、自然の一切の現象——從つて又社會生活の——を包含する綜合哲學を建設する事である。』(クロ著『無政府主義の哲學と理想』)
『無政府主義の哲學と理想』は、先づ最近の諸自然科學の傾向及び諸社會科學の傾向を述べて、そこに立脚する宇宙の科學的概念即ち綜合哲學としての無政府主義を論じ、更に進んで『自然科學的歸納法によつて得られた概括的結論を人類諸制度にも適用しようとする試み、又人類社會の各單位に對して最大量の幸福を實現する目的を以て自由平等友愛の途上に於ける人類の將來の步武を豫見しようとする試み』(クロ著『近代科學と無政府主義』)で、社會哲學として無政府主義を說いたものである。そして其の『近代科學と無政府主義』はそれを更に一層詳細にしたものと云ふ事が出來よう。

## 六

近代の哲學には全く相反するが如き方向に流れる二大潮流がある。
其の一つは、實驗科學の著しい進步につれて、其の方法に全く安住してゐる人々の一派である。此の人々と雖も自ら全眞理を捉へてゐるとは素より信じてゐない。彼等自らも、極めて小さな、しかもあちこちに散らばつてゐる斷片を持つてゐるに過ぎない事は、十分に承知してゐる。しかし彼れは、眞理であると認められ又認めらるべき一切が、即ち彼等の精神を滿足せしめ得べき一切が、科學的方法によつてしかもそれによつてのみ得られると堅く信じてゐる。然るに他の一方に、此の科學を無視してゐるのではなく、寧ろそれに非常な注意と敬意とを拂ひつゝ、謂はゆる科學的方法に十分な滿足を感じ得ない人々の一派がある。即ち此は人々の精神殊に情感は科學的方法によつては滿足され得ない或る要求を持つてゐる。
今僕が此の二大潮流の簡單な說明の中に、其の一方に對しては精神、他の一方に對しては精神殊に情感と云つた如く、前者は理知若しくは理性を重んずると共に、後者は本能若しくは感

情を尙ぶ傾向がある。そして此の何れもの傾向に濃淡強弱の度のいろ〳〵ある事は云ふまでもない。しかし概括して、前者を科學派（サイエンティズム）、若しくは主知派（インテンクテュアリズム）、後者を實際派（プラグマティズム）、若しくは非理知派（アンティ・インテレクテュアリズム）と呼ぶのに差支へはあるまい。

實際派は科學派の主知主義と主理主義（ラショナリズム）とを非難して、科學を利用しつゝ、科學のそとに又は時として科學に反對して眞理を得ようとする。科學派の重んずる理知や理性を人間の皮相の能力であると見做して、更に其の根本のものであると認める感情や本能や傾向や欲望や又は憧憬を尙ぶ。此の實際派に據れば、理知や理性の所産たる科學は、自然に對する吾々の能力を確かめるものに過ぎない。事物の利用を吾々に敎へるものに過ぎない。其の本質に就いては何事をも敎へない。吾々自身が如何なる本質のものであり、吾々が何處から來り、何處に行き、又行かんとしつゝあるかは、吾々自身の非理知的根柢又は時としては無意識の中に求めなければならない。吾々の暗い憧憬や本能は、吾々の理性の明るい判斷よりも、遙かによくそれらの事を敎へてくれる。科學は無視し蔑視すべきものではないが、しかし第二義的の知識に過ぎない。第一義の本當の知識は吾々の情感的直覺の中に求めなければならない。と云ふ。

科學派と實際派とを比較する時、直ぐ吾々の頭の中に浮んで來るのは、科學の破産と云ふ言葉である。此の科學の破産によつて實際派が産れ、實際派の勃興によつて科學の破産が確かめられた、と屢々云はれてゐる。

此の謂はゆる科學の破産は、既成科學其者の不完全と、及び或る科學者等の態度の愚昧と不遜とから生じたものである。即ち或る學者等は科學の急速な進歩に醉はされて、科學の萬能を信じ又科學の既成法則を以て一定不變の眞理であるかの如く說いた。けれども科學其者の更に新しい進歩は、其の既成のしかも根本の、多くの法則を打破つた。

即ち先きの謂はゆる法則は、數學者の常に用ひる、第一近似價であつたのだ。そして此の第一近似價は、それが發見されたのと同じ科學的方法で、必然に且つ當然に、更に第二若しくは第三の近似價に移らうとしてゐるのだ そして又、此の第一近似價の破滅に乘じて、從來の科學の不完全と或る科學者の愚昧と不遜と又謂はゆる科學的方法の或る方面に於ける無能とを批評し

つゝ、更に異なれる方法によつて第二若しくは第三の近似價を求めようとしてゐるのが、かの實際派の哲學論者であるのだ。

然るに科學派の學者は、精神と物質との一元論から出發して、此の二つの世界のいづれの研究にも科學的方法を以て進まうとする。又實際派の哲學者には、其の謂はゆる事物の皮相たる物質界の研究を科學者の爲すが儘に委ねて、其の謂はゆる事物の本質たる精神界の研究に特殊の方法を以て自ら任ぜようとする。されば問題は、此の精神界に於て、科學派の歸納法と實際派の直覺派とのいづれが、第二若しくは第三の近似價を得る事に成功するかにある。

以上は科學派と實際派との、いづれにも出來るだけ善意的な從つて最も公平な大體の比較であるが、しかし實際派の起原を見るに、それは精神界と云ふよりも寧ろ社會界に於ける眞實を求める爲めに、謂はゆる科學的方法の訂正として現はれたものだ。

物理學や化學などの謂はゆる正確科學では、從來の科學的方法で十分であるかも知れない。しかしそれらの科學に馴れた科學者等は、とかくに人間の本能とか意志とか感情とか憧憬とかを無視して、たゞ知力と理性とに重きを置く傾向があつた。そして此の知力や理性の上にのみ築かれた體系を以て、眞實である法則であると見做し、猶それを一定不變の絕對的のものであるとまで斷定した。此の主知主理的眞實の中には、本能や意志や感情や憧憬を無視したところに全的人間味が缺け、又不完全な人間の知力や理性を過重したところに必然の誤謬があつた。從つて謂はゆる社會的法則や眞實はただ理窟攻のもので、實際に於て人間離れのした又實際の生活と適合しない場合が多かつた。そこで此の缺點を補ひ、此の誤謬を正さんが爲に、等しく觀察と實驗とによる科學的方法を用ひつゝ、たゞ其の觀察や實驗を知力や理性の上よりも寧ろ本能や行爲の上に基づかせた。プラグマティズム、卽ち固有の意味の實際主義が生れたのであつた。

此の意味の實際主義は、一八七七年十一月及び一八七八年一月の『ポピュラア・サイエンズ』に始めて此のプラグマティズムと云ふ言葉を用ひた、アメリカの科學者ピアスの創見であつた。

此の實際主義とは行爲の哲學、結果の哲學、利益の哲學である。或る思想の眞僞を判斷するのに、直ちに理性や論理に走る

事なく、先づ行爲に赴いて見る。卽ち其の思想を實際問題とぶつからせて見る。そして其の行爲の齎す結果により、利害によつて、其の思想の眞僞を決定する。斯く有らゆる思想を夢みながらではなく生かして、抽象から具體に移して、試して見ると云ふ方法には、第一の條件として意志を要求する。精力を要求する。敎へられた一切の理屈を排斥し若しくは忘却して、たゞ本能の奔るが儘に有らゆる事實にぶつかつて行く、意志と精力とを要求する。

　ピアスの此の實際主義は、ジエムスによつて多くの解釋を加へられて著しく宗敎的となり、又シラアの謂はゆる人本主義となり、更に又ベルグソンの創造論となり、種々に發展し變化して遂に先きに述べた今日の實際派的大勢を形づくるに至つた。しかし要するに固有に云ふ實際主義の起原と根本とは、此の行爲と其の要求する意志と精力とによつて、主知主理派の科學的方法の訂正を企てたものであつた。

　けれども從來の謂はゆる社會的法則若しくは眞實が、多くの場合に虛僞であり或は容易に其の眞僞を判斷され得ないのは、社會科學其者の又は其の硏究方法の今云つた意味での不完全であると云ふほかに、實際派の哲學者輩の全く知らないしかし吾々の忘れてはならない一大理由がある。卽ち科學者や哲學者も亦吾々と同じ人間であつて、其の屬する社會的階級の定心を持つてゐる。彼等の多くは少なくとも有閑階級に屬し又直接間接に權力階級に附隨してゐる。社會が利害の全く相反する征服階級と被征服階級との兩極に分離し、學者が其征服階級の定心を持つてゐる時。其の謂はゆる社會的眞實が多くの場合に於て被征服階級の生活事實に適合しない事は云ふまでもない。

　勞働運動は、更に廣く云へば一切の民衆運動は、此の征服階級の謂はゆる社會的眞實に對する、實生活の上からの最初は無意識的の運動であつた。そして實際主義は、社會の此の階級的區別を少しも考察の中に入れずに、たゞ主知主理的の謂はゆる社會的眞實に對する最初から意識的の運動であつた。

　C・G・T卽ち勞働總同盟のセンディカリスムは、勞働運動に於ける此の無意識的實際主義の最もよく肉體化されたものである。

　センディカリスムは、無知なる勞働者の日常生活の間に、其の日々の資本家との鬪爭の間に、殆んど自然に出來あがつた運動である。理論である。尤もセンディカリスムは其の長い間の形成の行程の間に、社會改良主義から無政府主義に至る幾多の

社會的學說の影響を受けてもゐるが、それらの學說の指導の下に形成されたと云ふよりも、寧ろ勞働者がたゞ生きんとする本能に驅られて、右往左往の間にそれらの學說と行爲によつて吟味しつゝ、遂に彼等の生活共者の經驗と直覺とから不斷の流轉を經て創造されたものである。彼等は最初から理想を持たなかつた。又定まつた運動方法を持たなかつた。素より何等の社會的學說を持つてゐよう筈もなかつた。彼方はたゞ盲滅法に、其の目前の死から遁れんが爲めに、更によりよく生きんが爲めに彼等の能ふがけの全力を盡した。斯くして彼等は彼等自分の力を以て彼等自分の眞實を築きあげやうとしたのであつた。

彼等は其の長い努力の間に、種々なる社會的學說にたよつて悉く失敗した結果、一切の社會的理論を斥けて、たゞ彼等自分の經驗にのみたよる事となつた。よりよく生きんとする意志から、其の障碍となるべき一切の事物にぶつかつて行つて、其の結果の中から彼等自身に利益のあるものだけを選び出した。彼等の運動方法も、彼等の團體の組織も、彼等の將來の理想も、彼等の道德も哲學も、總て皆な理窟でこねあげたものではなくたゞ有らゆる事業とぶつかつて見て、其の結果として現はれたものである。

然るに此の實際的方法によつて形成されたセンディカリズムと、全く科學的方法によつて形成された無政府主義とが、即ち別個の方法によつて獲得された各々の社會的眞實が、其の最後の結論に於てほゞ相合致したのは何故か。

それはクロポトキンの科學的方法が、謂はゆる實證派（ポジテイヸズム）の偏狹杜撰な科學的方法ではなく、『人類社會の各單位に對して最大量の幸福を實現する目的を以て、自由平等友愛の途上に於ける人類の將來の步武を豫定しようとする試み』の科學的方法であつたからである。人間は本能や感情や意志や憧憬やを蔑視する、又社會の階級的分離を無視する、謂はゆる主知主理派の科學的方法でなかつたからである。實生活の上の觀察と實驗とによつて幾多の事實を歸納しつゝ、又人間を全人的に取扱ひつゝ、社會的眞實を求めんとした純正な科學であつたからである。殊に其の社會進化の最大要素を人類の社會的憧憬に求め、社會的創造に賴よつて、新勃興階級たる勞働者中の最も活力ある分子の實際生活に其の結論を得て來たからである。

クロポトキン總序の中の、其の又ほんの序論だけは、これで大體すんだとする。

そこでこんどは其の無政府主義文書の解説に移らなければならんのだが、既に豫定の紙數を大ぶ超えてもゐるし、それに他の人達がいろんな本に就いてどんな紹介批評をするかを見た上で書きたいとも思ふので、それは次號に延ばすとにする。しかしそれも、どんな方法で、どんな風に書くかは、むら氣の僕にはちよつと豫告が出來ない。

たゞお互の便宜の爲めに、クロの無政府主義文書の極くざつとした目錄をこゝに掲げて置かう。

## クロポトキン著述目錄

一、謀叛人の言葉。（一八八五年）

Paroles d'un révolté.

エリゼ・ルクリュスの序文と、クロが雜誌『謀叛人』(Le Révolté)に書いた十九論文とがはいつてゐる。其の各論文の題は、

現狀。
國家の解體。
革命の必然。
來たるべき革命。
政治的權利。
靑年に訴ふ。
戰爭。
革命的少數者。
秩序。
自由自治村。
パリ・コンムユン。
農民問題。
代議政府。
法律と強權。
革命的政府。
猫も杓子も社會主義者。
叛逆の精神。
理論と實際。
略取。

此の中の大部分は別に小冊子となつて出てゐるが、其の主なる二つだけを次ぎに擧げて置く。

二、靑年に訴ふ。

Aux jeunes gens.

An die jungen Leute.

Appeal to the young.

これは嘗つて大杉榮氏が日刊平民新聞に譯載し、後アメリカでそれが出版されてゐる。近々又氏の新譯が出る筈だ。

三、法律と强權。

La loi et l'antorité.

Gesety und Autorität.

Law and authority.

これは故大石誠之助譯で、やはりアメリカから出版されてゐる。

四、田園と工場と製造所。（一八九八年）

Champs, usines et ateliers, on l'Industrie combinée avec l'agriculture et le travail cérébral avec le travail manuel.

Landwirtschaft, Industrie und Handwerk, oder. Die Vereinigung von Industrie und Landwirtschaft, geistiger und Körperlicher Arbeit.

Fields, factories and workshops; or, industry combined with agriculture and brain work with manuel Work.

一九一三年に其の訂正增補の新版が出た。これは嘗つて『農工業の調和』と題して農學士（今は農學博士）佐藤寛次氏の飜譯が出てゐる。文章が古臭い上に隨分の拙譯で、今時の人にはちよつと讀みにくからうと思はれる。近日大杉榮氏が其の新譯を出す。

これも其の一部分づゝが幾つかの小冊子になつて現はれてゐる、

五、相互扶助。（一九〇二年）

L'entr'aide.—Un facteur de l'évolution.

Gegenseitige Hilfe in der Entwicklung.

Mutual aid: a factor of evolution.

これも大杉榮氏の日本譯がある。

六、一革命家の思出。（一八九九年）

Autour d'une vie,—Mémoires.

Memoiren eines Revolutionärs.

Memoirs of a revolutionary.

ブランデスの序文つきで

これには三浦關造氏の惡譯『革命の巷から』と大杉榮氏の善譯『一革命家の思出』との二つの飜譯がある。

七、パンの略取。（一九〇六年）

La conquête du pain.

The conquest of bread.

猶、此の本の中の或る一章を切りはなした、數種の小冊子がある。

平民社譯と稱して、實は故幸德傳次郎の飜譯がある。發賣禁止。

八、ロシア文學論。（一九〇五年）

Ideals and realities in russian literature.

これは『露西亞文藝の主潮』と題して、田中純氏の、部分譯がある。緒論、ゴーゴリ論、ツルゲネーフ論、トルストイ論、ドストエウスアイ論、ゴーリキイ論だけを收む。

九、フランス大革命。（一九〇九年）

La grande révolution, 1789—1793.

The great French revolution, 1789—1793.

猶、此のフランス大革命に就いては、此の本の一部分を切りはなした、數種の小冊子がある。

一〇、監獄論。（一八八七年）

In Russian and French prisons.

此の本は絕版になつてゐるが、やはり其の一部分を切りはなした、或は其の抄略をした、數種の小冊子がある。

一一、近代科學と無政府主義。（一九一三年）

La science Moderne et l'anarchie.

これは新版で、訂正增補された、次ぎの四論文を集めたものだ。

近代科學と無政府主義。

共產主義と無政府。

國家論。

近代國家論。

此の中の何れも皆な各國語で別々に出てゐるが、『近代國家論』だけは小冊子にもなつてゐず、又佛文以外には見えないやうだ。其の小冊子を次ぎに別々に記す。

一二、近代科學と無政府主義。

Moderne Wissenschaft und Anarchismus.

Modern science and anarchism.

一三、共產主義と無政府。

Le communisme et l'anarchie.

一四、國家論。（一九〇六年）

L'état: son rôle historique.

The State: its historie röle.

これは故幸徳傳次郎譯がアメリカで出版されてゐる。

これでクロの大きな本は終つたが、これから其他の小冊子の主なものに移る。

一五、無政府主義の哲學と理想。（一八九六年）

L'anarchie, ra philosophie, son idéal.

Anarchism: its philosophy and ideal.

これは白柳秀湖譯で、昔つて堺利彦氏編輯の雜誌『社會主義研究』（今ある同名の雜誌とは違う）に載つた事がある。

一六、無政府主義の道德。（一八九一年）

La Morale anarchiste.

Anarchist morality.

一七、裁判論。

La justice

The justice.

これは誰れの飜譯か、又何處から出たのか知らないが、とにかく日本譯が出てゐる。

一八、無政府共產主義論。（一八九五年）

Le communisme anarchiste.

Anarchist-communism: its basis and principles.

一九、社會主義的進化に於ける無政府主義の地位。（一八八六年）

L'anarchie dans l'évolution socialiste.

Die Verwirklichung des Socialismus.

The place of anarchism in socialistic evolution.

二〇、革命の研究。（一八九一年）

Stude sur la revolution.

Revolutionary studies.

二一、ロシアに於ける恐怖。（一九一二年）

La terreur en Russie.

The Terror in Russia.

まだ、いろいろあるが、原稿とりの居催促がうるさいので、これで止む。

# 「一革命家の思出」に就いて

森戸辰男

（一）

嘗てペツタニイはマルサス人口論の翻刻の序説の冒頭に於て「マルサスの人口論及マルサス説を非難せる多數の人々の中、此書を讀みたる者又は其著者の生涯及性格に就き何等かの知識を有する者は極めて僅かである、と斷言しても萬々間違はない」と誌して居るそうであるが、クロポトキンに就いても、殊に我國に於ては、略ぼ同樣なことが言はれはしまいか。或る學説に對する理解なしに、唯その結論が自分の奉持する所と異つて居ると言ふだけの理由から、之を否認若しく排斥せんとするのは獨斷であり、また、或る人の人格に關する知識なしに、單にその人の人生に對する態度が自分のと相容れないと言ふだけの理由から、其の人に惡名を與へんとするのは誹謗である。此のことは其が個人によつてなされる場合でも、團體によつてなされる場合でも、無力の弱者によつてなされる場合でも、有力な强者によつてなされる場合でも、全く同樣である。そうして、獨斷は吾々の知識の最も大なる障害であり、誹謗は人類の協働連帶を傷くる恐るべき害毒である。故に、文化と生命の健全なる發達を希ふ者は、常に自ら警めて此の陷り易き危險を避けなければならぬ。殊に正當なる判斷をなすべき機會と自由とを拒否しつつ、一定の獨斷と誹謗とを他人に强制せんとするが如きは、それが何人によつてなさるる場合でも、忌むべき罪惡として、斷乎として之を斥けねばならぬ。

クロポトキンの社會學説に關する是非の議論は、今玆に之を論ずべき機會でもなし、また今の私は之を論ずるに適當の地位にもない。唯、しかし一言すべきは、最近我が論壇に於てクロポトキンの學説に對して向けられた反對論――あれ程論壇を賑はしたにも拘らず、殘念なことには、純粹に學問的見地よりする論

議は、反對論には勿論、贊成論にも、極めて少數であつた——の多くは、クロポトキンの學説に關する充分なる理解の上になされたものでないことである。或は答へて云ふかも知れぬ、我國ではクロポトキンの著書を手に入れることが困難であるから止を得ぬと。私は斯かる人に云ひたい、「其の場合吾々の守るべき唯一の義務は沈默である。」と

多くの偉大なる社會學説は、その人の社會人生に對する態度の知的表現である。爰に學説と生活との密接なる交渉が生れる。クロポトキンに就いては之れが殊に顯著である。從つて私はクロポトキンを論評せんとする多くの人々に對して、先づクロポトキンの生活を知つて貰ひたいと思ふ。勿論、私は或る人の生活が非常に立派であるから、それでその人の學説が誤りないものだ、」と言ふとを主張するのではない。私の望む所は、彼の生活を知ることによつて、多くの人が彼の上に積み重ねた所の有意無意の誹謗に基く豫斷から解放されることである。かくて人々は彼の學説を論議すべく適當なる心的狀態に置かれるのであらう。

嘗てステツフエン教授はクロポトキンに關して云つた。「道德的先驅者から吾々が主として要求しなければならぬ論理は、認識能力の論理ではなく、意志と感情との論理である。彼の最初にして最後の使命は、自分の環境を知的に反映することではなく、自分の中に新しい實在を創造することである。而して此の新實在の價値は生命の進化を促進することに存して居る」と。多くの人々は、一度彼の生活に關して知ることが能きた時、環境の知的反映たる彼の社會學説に對する評價と關係なく、此の偉大なる道德的先驅者の前に自づとその膝を屈するであらう。而して此の人格者の生活の記錄が、私の問題として居る『一革命家の思出』である。故に本書は近代に於ける有數なる道德的先驅者の生活の記錄として充分なる獨立の興味を持つと同時に、クロポトキン研究の最善の序論であると云ふとが能きる。

(二)

本書の成立ちを討ぬると、それはもと『アトランテイク・マンスリ』Atlantic Monthly の編輯者の強いての懇請によつて、クロポトキンが自分の回想錄に筆を染め、一八九八年九月より一八九九年九月に至る間、『一革命家の自叙傳』'Autobiog-rapby of a Revolutionist と題して同誌に連載したものである。從つて勿論それは英語で書かれてものである。此の本が英語

で書かれたと言ふとは、原文で之を讀み得る吾々には至極都合のよいことであるが、彼にとつては恐らく此上なき悲痛であつたらうし、ロシヤにとつては、疑もなく、大なる恥辱である。

クロポトキンは、勿論ロシヤの專制政府とその走狗たる官僚と彼等の奉ずる權力主義とを蛇蝎の如く憎んでゐたのであらう。併し彼は母國の土とその上に住む一億五千萬の生靈の熱愛者であつた。『甦りたる自由のロシヤ、』これこそ彼の約束の地である。彼は凡てを捨てゝ『民衆の中』に行き、彼等の間にあつて、新しき地上の福音を說き、彼等と共に若きロシヤを建設せんとした。彼が如何に祖國の熱愛者であつたかは――祖國を愛することと國家主義を奉ずることとは同一でない――此過般の戰爭に際し、舊政府の倒壞するや急遽彼が歸國したと言ふ一事でも推測が付くと思ふ。併し民衆の向上を敵視するロシヤの政府は、彼を民衆より引き離した。彼は今、亡命者として、慣れざる國語を以て、親しからざる讀者に向つて、彼の生活を物語らなければならなかつた。敏感なる彼の心に、如何なる感慨の動いたかは、彼のみ知る所である。

此の事は同時にロシヤ政府の恥曝らしである。凡ての虛僞と醜惡との上に立つ者と同じく、ロシヤ政府は眞理と善美との前に跪くことをせずして、その下に戰慄した。かくて眞理と善美とに對して沈默を命じ、強いて之を說く者があれば、容赦なく牢獄に投じ、シベリヤに送り、絞首臺に上せた。從つて眞理と善美とを愛する天才の少からざる者は、祖國の外にあつて、その力強き併し淋しい文化の花を開いたのだ。露國民の眞實の幸福のために、之れがどれだけの損失であつたらう。

それはとも角、此の論文は同年即ち一八九九年、『幼年時代』『シベリヤ』、特に『西歐』の三篇を增補して『革命家の思出』Memoires of a Revolutionist と題する書物となつて世に出た。私の手許にあるのは一九〇八年の廉價版(フアープエデイシヨン)であるが、それによると本文は四六八頁であつて、それは『幼年時代』(一―六四頁)『少年侍從隊學校』(六五―一四三頁)『シベリヤ』(一四四―二〇八頁)『セント・ピイタアスブルグ――西歐への初旅』(二〇九―三一九頁)『要塞――逃亡』(三二〇―三五一頁)『西歐』(三五二―四六八頁)の六篇に分れて居る。

(三)

ゲオルグ・ブランデスは本書第一版の序文に於て(拙譯『我等』第二卷第二號五一頁―五八頁に揭載しあり)本書を聖アウグ

ステインの『懺悔錄』や、ルウソの『懺悔錄』や、またゲエテの『作詩と眞理』やなどの古來有數の自叙傳と對比して、その特質を指摘して居るが、更に、クロポトキンの生活の記錄は、此等の過去に於ける天才の所產と列べて、少しも見劣りのせぬ勝れたる作物である。而して凡ての少勝れたる作品に於けるが如く、それ自身一個の藝術であると共に、また人間生活の實相に對する嚴密なる直視と、崇高なる理想に對する熱烈なる憧憬をも含むものである。

クロポトキンは所謂藝術家でもなく詩人でもない。彼は常に科學者なることを自ら標榜して居り、またそれだけの値打を持つて居た。而も彼の作物は、そのいと小さなものでも、必ず高い藝術的色調を持て居る。――玆に藝術と言ふのは貴族文化とブルゼオア文化との生んだ頹廢的畸形藝術を言ふのでないことは勿論である――而して此の藝術的色調を最も豊かに供へて居るのは此の『思出』であつて、それは宛然、無韻の叙事詩である。

ブランデスが適當に指摘して居るやうに、此の一卷中には、「牧歌と悲劇、戯曲とローマンス」が含まれて居る。早く死別れた懷しい母の面影や、軍人質氣で貴族通有な尊大と無情とを持つた父の振舞や、兄サーシャとの唯ならぬ愛情や、親切な老僕婢や家庭教師などの追憶を以て充された、牧歌的情趣の豊なる『幼年時代』。兵學校生活にあり勝な上級生の横暴に對する反抗や、純良なる教師に對する絕對的心服と不良なる教師に對する斷乎たる排斥運動や、農奴解放の叫びに高く脈動した彼の幼心や、一少年侍從として彼のニコラス一世に對する心よりの忠勤振りや、或時には噴き出しそうな、或時には淚ぐまれるやうな話に充ちた『少年侍從隊學校時代』。首席で卒業しながら灰色のズボンのアムール・コザックを志願して同僚父兄は勿論皇帝をまで驚かした青年士官、船隊副官として百五十艘の船隊を指揮してアムール下航中の遭難、華氏零下四十度乃至六十度のシベリヤの氷野を一日二百哩の速力で驅け通した橇旅行、コザック隊商の一人に變裝し歐人未踏のキンガン山脈を横斷して滿洲メルゲンへに行つた探檢旅行、勇敢に戰ひ悲慘に壓伏されたポーランド流刑人の反亂、そうした血を湧かすやうな冒險的記事に富んだ『シベリヤ』時代。科學的創造の歡喜の甘き享樂を捨てて社會運動者の苦き杯を飲まうと決したフインランド地質學研究旅行中の回心、スヰスに於ける社會主義者併に勞働者との交際、ジュラ山中の時計師の間に於ける生活とその感化、ロシア政府の殘忍なる壓迫と、之と戰ひつつ行はれた若き男女の悲

壯なる『民衆の中へ』の運動、ボーデインの偽名の下に一勞働者と變裝して主義を宣傳しつゝあつた公爵クロポトキンの芝居のやうな逮捕、そうした個人と社會とに行はれつつあつた人道的目醒めに強く色彩られた『西歐への初旅』。その年代記が同時に「虐殺と拷問との年代記」である所のセント・ピイタア及セント・パウルの要塞監獄と、その下に繰返されつつある戰慄すべき囚人の運命、「犬死は出來ぬ」との決心の下に、獨房内を毎日隅から隅迄千餘回の往復卽ち五哩の運動と撚製の椅子を以ての體操と知的勞作とによつて規則立てられた彼の牢獄生活、弟の入獄を聞くや直ちに自由の國を捨てて壓制の手が待ち構へて居る母國に歸つた弟思ひのアレキサンダアとの情愛に溢れた會見、無情なる檢事の理由なきアレキサンダアの拘禁、不斷の科學的勞作と發病、空想的な活動寫眞の筋書にも優つて劇的なる病監よりの逃亡、こうした陰鬱と悲痛とに充ちて居る『要塞―脫走』。西歐諸國に於ける社會運動の阻止し難き趨勢、各國政府の惡辣なる同盟的迫害と無政府主義の奮鬪、僅か二十三フランの有金で『ル・レヴオルテ』を經營した苦心談、リヨン騷擾事件に關聯する無實の拘引と滑稽至極な檢事の論告、色々なエピソオドと有益な觀察とを伴ふクレアヴオーの牢獄生活、笑止極まる併し最も唾棄すべき密偵政策の眞相、十餘年間の流謫の後、「ファウストの絕望が遂に彼の生命を絕えせた」愛する家兄の悲慘な運命の思出、そうした半ば悲觀的な敍述の中にも、何物を以ても遮ることの出來ぬ社會運動の前途の好望を豫示する『西ヨオロッパ』。

かくの如き局面の次から次への展開のために、卷を播く者は絕えざる新鮮さを以て、一つの頁から他の頁に遷り行くことが能き、變らざる興味を以て全卷を讀み終ることが能きる。而もその間、吾々は何等故意とらしき誇張を感ぜしめられることなく、常に心情と事件との自然的發展を見、又、何等の道德的說法や主義の宣傳やに出喰す不愉快さを持たぬが、而も讀了後の吾々の心には、人道的熱情とその向ふべき具體的方向とが牢乎として植え付けられて居るのを見出すのである。

彼の自敍傳が斯樣な魅力を持つて居るのは、勿論彼の表現の巧妙なるにもよるけれども、それは主として彼の本性其者、彼の生活其者が卽ち藝術であつたがためである。そこで吾々は先づ自敍傳に表はれた彼の生活の一面を見ることにしよう。

(四)

彼の著作殊中自叙傳の藝術的なるは、彼の生活其者が藝術的であつたからである。彼の生活が藝術的であつたと言ふこととは、亦彼の生活が自由であつた、若くは自由に對する憧憬と努力とであつたこと、を意味する。之は他方から見れば、彼が最も純粋の意味での道徳的人格であると言ふことである。彼の生活を貫く一線の金の糸は、人と我との自由を、憧憬努力の對象とする道徳的人格、人道的性格である。

私は近頃二人の人道の鬪士の自叙傳を讀んだ。それは玆に紹介しつゝあるクロポトキンのそれと、ゼイ・エス・ミルの『自叙傳』とである。此等二つの偉大なる人格の僞らざる生活の記錄は、私に多くのものをインスパイヤしたが、併し此兩著に接した感じは非常に違つたものであつた。後者が謹嚴で論理的で敍述が自己中心的であるに比して、前者が情趣に富み、奔放で時代的環境の描寫に重きを置いて居ると言ふやうな形式的相違の外、私の受けた印象は、ミルに於ては、彼の外面的に殆んど變化のなかつた生活の内に於て、人間の心が如何に廣く如何に高く如何に深く迄、活動し得るか、であつたが、クロポトキンに於ては、丁度それと正反對に、人の心が、あらゆる境遇の變轉とあらゆる迫害とにも拘らず、如何にして斯樣に不變の發展の一路を辿り得るか、であつた。そしてクロポトキンの此の「變らざる發展の一路」は彼の本質をなす所の純眞なる人道的人格の斷えざる發展である。

自己と他人との人格に於ける、自由と愛との實現、――此の努力こそ人道的性格の本質を形造るものであるが――之が如何なる境遇にあつても常にクロポトキンを特徴付けて居た所のものである。家庭生活に於て、之はやさしい生母や情深い兄への愛慕、惨たる境涯にある僕婢への同情、父に對する不滿などとなつて表はれ、學校生活に於ては此の性格は彼をして横暴なる上級生や無情なる教師に對する反抗者たらしめ、卒業後は遂に宮庭生活の好機を捨てて自由の空氣の横溢せる植民地に趨らしめ、シベリヤにあつては探險者として山川の原始的自由の享受者たらしめ、遂に軍人生活を放棄して科學的創造の天地に向はしめた。社會に出でては、之の性格のために、彼は農奴や勞働者の同情者となり、一切の資本家と權力者に對する猛烈なる糺彈者となり、ロシヤの若きインテイゲンシヤの『民衆の中』への運動に投じて、『自由なるロシヤ』の建設に努力し、更に西ヨーロッパの勞働者運動に參加しては、强權的臭味を脱せざる集中的劃一的社會民主黨に對抗して、無政府共産主義の

闘將たらしめたのである。

要するに吾々は彼の生活の如何なる地位にあつても、自由と愛と、眞理と平和との非妥協的愛好者、自己と他人との人格を自已目的として之に至上の價値を附する人道主義者、の不斷の成長を見るのである。

（五）

彼の人道主義は、知識的には無政府共産主義の形をとつて發展した。俗見に從へば、無政府共産主義と人道主義とは恰も水と油との如きであらうが、少くとも吾々はクロポトキンに於て兩者の渾然たる融和を見る。本來、無政府共産主義と人道主義とは全然相矛盾するものであるか、また、徹底的人道主義は必ず無政府共産主義たらなければならぬのであるか。之は非常に興味の多い問題であるが、玆に私は之に論及する餘裕を持たぬ。私は唯彼の人道的性格の發展と共に、彼の無政府主義的見解が確立し來つたことを指摘することで滿足しなければならぬ。

彼の無政府共産主義の思想が如何にして成立し、廣化し、深化し來つたのかは、他の機會（『我等』本月號）に於て、之を稍詳しく述べて置いたから、玆で之を繰返すことを避ける。彼の人道的性格が、彼の社會的經驗と、自然科學並に社會科學の知識の増大と共に、所謂『科學的無政府主義』の形態を採るに致つた次第は、私のやうな社會科學の研究者にとつて、特に興味のあるテーマである。

フインランドに於ける地學研究旅行中、農民の窮狀を痛感し、科學的創造の歡喜を捨てて社會運動者たらんと決心した第一の回心、當時スヰスに於ける勞働者運動の中心であつたゼネバのテムプル・ニユークで開かれる社會民主黨に屬する勞働者の會合に出席して居る内、或る晩、他の目的のために勞働運動を利用するのでなく、眞實に勞働者のためにする勞働運動者たらんとの決意を固うした第二の回心、更にジユラ聯合の所在地なるジユラ山中の時計師の間に滯留中に經驗し、遂に一個の無政府主義者となつた第三の回心、而して其の後に於ける彼の此の思想の廣化と深化と、こうした彼の興味ある記事を辿り讀む者は、何人も彼の無政府主義が彼の人道的性格が纏はなければならなかつた所の、自然の知的衣裝であつた、ことを承認せぬわけには行かないであらう。

(六)

「歷史家は屢々語つて、これこれの哲學體系が人類の思想に、從つて諸制度に、一定の變化を成就せしめたと言ふ。併し最大の社會哲學者は、唯來るべき變化の諸兆候を捕へ、此等の兆候の間の內的關係を理解し、歸納と直覺とによつて、將來を豫言したに過ぎないのだ」(三九〇―三九頁)との彼の言葉は、彼の生活の歷史の敍述に於て、彼の其儘遵奉した所である。彼は自分の思想の發展が、特にたれそれの思想言動に基くと言つた風な考へ方をせず、之を大なる時代の潮流の上に置くことにより、初めて自己の完全なる歷史が書けると考へたやうである。彼の活動は「個人的努力よりは無限により力强き潮流に乘つて」爲されつつあるものであり、而して此の時潮の變化は「一人の天才の憶測から生じ得るものでもなく、また一人の人の發見でもなく、實に民衆の建設的勞作の結果でなければならぬ」(三七五頁)ことを認めて居た。從つて彼の自敍傳は當然に、民衆に關聯する多くの歷史的敍述を含むのである。故に彼と違つた考へ方をする人々は、彼の自敍傳の中に、有益で且つ興味があるが、併し脫線的部分の多々あることを指摘するかも知れぬ。併し、先の說明でわかつたやうに、彼の考へ方からすれば、それは當然さうあるべき筈のものなのである。

從つて私はブランデスの次の言葉に同意せざるを得ない。即ち彼は自敍傳の序文に誌して云ふ、「彼は自分自身の心理よりも、むしろ彼の同時代人の心理を描寫するやうに努めた。從つて此の書物の中に於て、人々はロシヤ――卽ち官僚的ロシヤとその下にある民衆、足搔きながら前進しつつあるロシヤと停滯せるロシヤ――の心理を讀むことが能きる。彼は自分自身よりも彼の同時代人に就いて物語らうと努めて居る。從つて其の結果、彼の生活の記錄は、彼れの生活して居た間のロシヤの歷史と並に前世紀後半に於けるヨオロツパの勞働者運動の歷史を含んで居る。彼が彼自身の內的世界に沈潛し行く時、吾々は彼處に外的世界の反映されて居るのを見るのである。」と(序文一〇頁)

(七)

過去幾世紀の間の隸屬制度の因襲の重い鎖と傲慢なる權力者の殘忍なる皮の鞭とから、ロシヤの民衆を解放することは非常に困難な仕事であり、時には全然絕望的であるとさへ考へられ

た。從つて多くの人道の闘士は或は牢獄に繋がれ、或は流謫に處せられ、他の人には前途を悲觀した結果、變節して專制主義と妥協し、更に多くの人達はもとの信念は捨てなかつたが、一切之を公言することを憚つて居たから、之を捨てたのと、たいした相違がなかつた。

當時、ロシヤの解放運動は、自己の階級利益にのみ敏感にして、道理と人情とに感無覺なる警察官の專斷の下に置かれた。「急進主義の嫌疑を受けた者は何人に限らず、彼れが過去に何んな善いことをして居ても、また何んの惡いことをして居ないでも、今は逮捕されるか明夜は逮捕されるか、と言ふ恐怖の下に生きねばならなかつた。それも何か一寸した政治上の事件の連累者に同情を表したとか、又は深夜の家宅捜索で押收された譯もない手紙のためとか、又は單に『危險』思想を抱懷して居るとか云ふ理由のためである。そして政治上の理由のために逮捕されれば、それは結局、セント・ピイタアとセント・ポールの要塞に數年間禁錮されるか、シベリヤに流されるか、又は要塞の獨房中で拷問されるか、の何れかになる」と(一二三四—一二三頁)と言ふ有樣であつた。

此の社會的暗黑を破つて、唯一道の光明が微ながらも輝き出でた。それは若き男女の『民衆の中へ』の運動である。それは無智なる批評家が狂暴なる破壞運動と惡罵する所の、併しその本質に於ては人道的感激に燃えて居た所の所謂ニヒリストの運動である。彼等の運動は不撓の熱意のみが、よく之を耐えしめる所の不斷の苦鬪であつた。「ロシヤの青年は結局農奴制の擁護者である彼等の父と戰はなければならなかつたのみならず、兄だちよりも全然見棄られると云ふ苦しい地位に立つた。彼等の兄だちは彼等と共に社會主義に傾くことを好まず、政治的自由の伸張のための鬪爭に於てですら、彼等を援助することを恐れて居た。」彼等は孤立無援の地位に立ちつつ、非常な强敵と戰はなければならなかつたのだ、斯樣な不利益な事情の下に行はれた、斯樣に悲壯な鬪爭は、史上その例に乏しい所である。

而も此の運動に參考した者は、單に男子ばかりではなく、多くの女子は、進んで此犧牲の重荷を分ち擔ふた。此の女子運動に參加した女子は、其中には多數の貴族の娘達も居たが、或は田舍の敎師となり、或は工女となり、或は看護婦となり、或は産婆となり、或は醫者の助手となり、苟くも民衆の役に立つことであれば、如何なる賤しい地位も、如何なる困苦缺乏も、少しも之を意とすることはなかつた。「彼等は言葉の眞實の意味に

於て、彼等の權利を戰ふて獲たのである。」而して彼等の運動が非常に成功した秘訣は、「此の運動の中心であつた女子が、一人として、社會及國家に於ける特權的地位の分前を獲ようと希ふ所のフエミニストでなかつたからだ。それとは丸で違つて彼等の中の多くの者の同情は、民衆に向けられて居た。……彼等――指導者並に指導された多數の女子の双方共――が追求した權利は、單に高等教育に對する個人的權利ではなく、それよりもズツト進んで、否、遙かに進んで、人民の間民衆の間にあつて有益なる働き人となるの權利であつた。これこそ彼等が斯樣な程度に迄成功した理由である」(二四四―二四五頁)

## (八)

クロポトキンが此の運動に參加したのは、西歐への初旅の後、チヤイコフスキイ團を通してであつた。チヤイコフスキイ團は「道德的人格が社會の基礎とならなければならぬ」と言ふ信條を持つた修養の團體であつたが、時代の要求に伴ふて社會主義の宣傳團體となつた。彼はその次第を說明して云ふて居る、「若しロシヤの青年が唯に抽象的に社會主義を信奉したのであれば、或は單純に、「生產手段の共產主義的所有」と言ふ明確な目的を含む社會主義的原理を宣言することだけで滿足を感じたかも知れず、また何かの形で政治運動をしたかも知れぬ。が、ロシヤの青年はそれと全く違つた方法で社會主義に入つて行つた。彼等は社會主義に關する理論家であつたのではなく、勞働者と同じやうな貧しい生活をすることにより、彼等の團體の間では『私のものと汝のもの』との間の區別を立てぬことにより、自分等の父祖から相續した富を自分だちだけの滿足のために享樂することを拒むことによつて、社會主義者となつたのだ。……此の如き青年たちは民衆の中へ行かなければならなかつた、そして彼等は實際に行つたのである」(二八六―二八七頁)

彼等はその運動の政治化をさけ、ツアルやその權官に對する兇行の企圖等は、彼等の極力之を抑止した所であつた。然るにも拘らず政府の彼等に對する强壓は愈々激しくなつた。併し彼等は之がために毫もひるむことがなかつた。彼は誌して居る「一八七四年の夏に行はれた無數の拘引と、私達の團體に對する警察の迫害の急に激しくなつたこととは、ロシヤの青年の思想に深い變化を生ぜしめた。それまでは、勞働者殊に農民の間から、社會主義の運動者となるやうな人間を拾ひ出すと言ふの

が、其の主なる思想であつた。然るに今は、工場は皆間諜で充されて居る。從つて何かやれば、其の傳導者も勞働者も直ちに拘引されて、永久にシベリヤに埋沒されて了ふのは分りきつたことだ。そこで今度は、更に新しい様式の『平民の中へ』の大運動が始まつた。幾多の男女が、今までのいろんな用心を棄てて、地方へ地方へと突進した。そして町や村を驅け廻つて、殆んど公然と小册子や歌や檄文などを配付して、民衆に革命を煽動した。私達の團體では其の夏は『狂氣の夏』と云ふ名を受けた。憲兵等は周章狼狽した。此の傳導者等の一人一人を拘引するにも、又其跡を追つて行くにも、到底その手が足りなかつた。それでも此の檢擧の爲に千五百餘りの青年が拘引されて、其の半數は幾年かの間牢獄につながれた。」（三三四頁大杉君の譯による）

民衆の解放が、眞實の意味での國民の選良の高き犧牲よつて購はれつゝあつた當時のロシヤの歴史は、人生の最も悲慘なる歴史であると共に、また最も光輝ある頁であるが、それはともかく、クロポトキンの生活は此の如き時代の舞臺の上に於て開展されたのである。

（九）

時代の潮は單にロシヤにのみ流れて居たのではない。否、むしろロシヤは西歐に溢れける時代の風潮から取り殘された部分であつて、漸くと當時、西歐の影響の下に、自由への目醒めを經驗しつつあつたのだ。從つて環境の感化を重視するクロポトキンは此の西歐に於ける民衆の解放運動を看過するわけには行かなかつた。加ふるに彼は一八七二年にスヰスに旅し、其後亡命以來の二十餘年を主としてイギリス、フランス、スヰスに過して、常に此等の國々の運動と密接な關係に立ち、自分で直接に此等からの教訓と感化とを攝取することが能きた。此の事はまた西歐に於ける解放運動に關する彼の叙述を、机上で編纂した通り一遍の勞働運動史以上に、此の方面の直接資料として價値あるものたらしめるものである。唯、ドイツに屬する一切のものに對する強い反感を持つて居た彼は、ドイツ及ドイツ流の系統に屬する民衆運動を不當に輕視したと言ふ非難は免れ難いと思ふ。が、同時にドイツ流の社會主義者によつて閑却された社會運動の他の方面に就いて、彼が吾々を啓蒙して與れると言ふ功績に就いて、吾々はより多く彼に感謝しなければならぬ。

一八六〇年代に於て、國際的勞働運動は四十年代以來の二十年間の長き眠より再び目醒めた。「勞働者は『信條、性、國民、人種、皮膚の色の區別なく』團結し、「勞働者の解放は勞働者自身の仕事でなければならぬ』と言ふことを宣言し、强力なる聯合國際組織の力によつて、人類の進化を促進するやうに――而もそれは愛と慈悲の名に於てではなく、正義と…團結の力の名に於て之をなすやうに――要求された。」(二五一頁)「此の運動は野火の如くフランス、ベルギイ、イタリイ、スペインに擴がり、非常に多數の賢くて活動的で且つ獻身的な勞働者を第一線に立たせ、なほ教育ある富有階級から、幾千かの非常に優秀なる男女をも惹きつけた。それより以前には有らうとも考へられなかつた一つの力が、日毎に、ヨオロツパに於て益々力强くなつて來た。若し普佛戰爭によつて其の成長を妨げられなかつたなら、多分偉い事がヨオロツパに起り、吾々の文明の諸形相を根柢から改修し、明かに人類進步の速度を增したであらう」(二五二頁)。スキスは勿論此の國際的社會運動の渦中にあつた。而して西歐の初旅に於て彼は、國際勞働者協會に入つて生活することになり、且つ日常生活に於て勞働者達と相知ることにより、「新しき世界」が自分の前に啓けるのを見た。

當時、既に國際勞働者會には二つの潮流があつた。それはマルクス・エンゲルスの社會民主主義とバクーニンの無政府主義とである。政黨は何時も非妥協派と妥協派に分裂するものであるが、丁度此の場合もそれで、社會民主主義は軟化した彌縫的改良黨である、「現存國家內に於ける權力の奪取」を合言葉とする彼等は、議會に多數の議員を送つて立法手段によりて、社會主義的民衆國家を形造らうとした。「かくしてドイツ社會民主黨の全生命と全活動とは、だんだんと選擧の利害に從屬させられるやうになつた。勞働組合は輕蔑なれ、同盟罷工は非難された。と言ふは、その何れもが勞働者の注意を選擧の鬪爭から轉ずるからである。ヨオロツパの何れの國に於ても何れの民衆的暴動も、何れの革命的運動も、社會民主黨の首領連からは、資本家の新聞よりも、一層ひどい敵意を以て迎へられた。」(三六〇頁)

「しかしラテン諸國では、此の新しき傾向に贊成する者は極く少かつた。國際勞働者會の各支部及各聯合は、同會設立當時に行はれた原理を忠實に奉持し續けた。ラテン諸國の勞働者は、其歷史上聯合主義で、中央集權的國家の思想に反對し、革命的傳統に憑かれて居るので、ドイツ人共の進化には追從すること

が能きなかつた。」(三六〇頁)

故に「マルクスとバクーニンとの衝突は個人的の事情ではなかつた。それは聯合主義と集中主義との、自由自治團體と國家の後見制度との、民衆の自由行動と資本家制度の現狀の立法手段による改善との、必然の衝突であつた。又それはラテン精神とドイツ精神との衝突であつた。此のドイツ精神は、フランスの戰敗後、科學上、政治上、哲學上に於て優越を求め、更に社會主義の上に於ても、自分の社會主義觀を以て『科學的』と稱し、他の一切の解釋を以て『空想的』なりとなして、自己の優越を認めたのである。」(三六一頁)

此の兩派は一八七二年のヘイグの大會で衝突し、バクーニン等は國際勞働者會より除名された。玆に於てバクーニン派に屬するラテン諸國の勞働者は別に國際聯合を造り、ジュラ同盟は之が中心であり、指導者であつた。クロポトキンが彼等の間に留まつて無政府主義者となつたのは丁度此年である。一八七一年以後數年間ヨオロッパは絶えず黑い反動の雲に脅かされたが、此の慘憺たる反動時代が遂に實現しなかつたのは、「普佛戰爭に先つて西歐に目醒め、其後無政府主義國際派や、ブランキ派や、マヂニ派や又はスペインのカントナリストやによつて維持され來つた革命精神に負ふ所が最も多いのである。」(三六二頁)而もそれは主としてジュラ同盟の力によるので「ジュラ同盟はフランス語で印刷したその新聞を以て革命的精神をラテン諸國に維持表白する中心となり、……此の革命的精神がヨオロッパを反動の暗黑時代から救つたのである。更にまた、バクーニンやその友人等が、全歐大陸に通用する言葉で、無政府主義の學理的概念を造り上げたのもまた此の土地であつた。」(三六四頁)

一八七七年ゲントに國際社會黨會議が開かれた。之れは社會民主主義者が歐洲の全勞働運動を自分の勢力の下にある中央委員會の下に統一しようとの企てあつたから、クロポトキン等はラテン諸國の勞働者團體の自治權を擁護するために之に出席して之を不成功に終らしめた。其後も國際社會黨大會は、同じ鬪爭を繰返し、社會民主々義者はその議會主義の旗色の下に全歐洲の勞働運動を統一せんとし、無政府主義者は常に之に反抗し來つた。社會民主々義者の議會主義一點張の態度が、どれだけ無用な精力の浪費と惡口の言ひ合ひと、勢力の分裂とを齎したらう

「社會主義は其最初からサン・シモンとフーリエとロバアト・オーエンを始祖とする互に獨立した三つの線を辿つて發達して來

た。サン・シモン派は社會民主々義にフーリエ派は無政府主義に進んだ、そして、オーエン派は、イギリスとアメリカで、勞働組合主義産業組合主義及所謂都市社會主義に進み、無政府主義とは多くの接觸點を持つて居たが、社會民主々義的國家社會主義には反對して居た。しかし此三派が各々違つた道から共同の目的に進んだと云ふことが分らず、又後の二派が人類の進歩に、それ自身の貴重な貢獻をなして居ると云ふことが分らなかつたゝめに、二十餘年の年月が、到底實現できぬユートピヤである社會民主々義型一點張の運動を實現するために費されたのである。」（三七八頁）

全歐洲は軍國主義精神の發達のために苦しめられたけれども、既にその反流は現代生活に現はれて居る。彼は云ふ、「修道院式の形態を脱却した共產主義思想がヨオロッパ及アメリカに普及した有樣に就いて見ると、私が社會運動に參加してその發達を見ることの出來た二十七年間に素晴らしい範圍に及んで居る。國際勞働者會の第一回大會に際して勞働者が主張し、コムミユヌ擾亂に方り、パリに於て、首領中での最も思索的な連中の間に行はれ居た漠然とした混亂した臆病な思想を想ひ合せ、そして之を今日驚くべき多數の勞働者が到達して居る思想と比較して見ると、私にはそれが全く異つた二つの世界に見える位だ。中世自由都市の發生に導いた所の十二十三世紀の反亂時代を除けば、恐らく歷史上のいづれの時代にも、社會思想にこれ迄深い變化を來した時代はない」（四六七頁）而してクロポトキンは常に此の時代の子であつた、――明けんとする光の國の子なるが故に、勿論闇黑の世の寵兒ではなかつたが――故に吾々は彼の期待したやうに、彼の描き出した彼の時代を見ることによつて、初めてその反映若しくは一部分たる彼の思想を充分理解することが能きるのである。唯、注意すべきことは、彼自身が此の時代の發展に及ぼした重大なる感化に就いては、彼の考へ方と謙遜とが何物をも彼に語らせなかつたことである。吾々は彼が時代に指導されたばかりでなく、また、少からざる程度に於て、時代が彼によつて指導されたことを認めぬわけには行かぬ――彼れは斯樣な考へ方に不贊成ではあらうが――。

（十）

非常な魅力を以て私を惹き付ける此の自叙傳は、唯一つの點に於て、物足らぬ感を私に懐かせた。それは此の生活の記錄の中に、心靈の歷史、特に運命と鬪ふ心の悶えが誌されて居ない

ことである。人生に對する正反對の意見のために、常にその希望に背いた父親と對して、彼はどう云ふ考へを持つて居たか。彼の情緒に細やかな本性は、テロリストと提携することに於て、何等の矛盾をも感じなかつたか。彼は亦その戀愛に於て如何なる惱みと如何なる喜びとを經驗したか。彼は屢々置かれた危險なる地位に於て、何等の恐れなく、死に面することが能きたか。此れ等は彼にとつては記述すべく餘りに價値少なき問題であつたかも知れぬが、併し吾々平凡な人間は、此等の問題に就いて、彼の偉大なる靈の辿つた道が知りたい。併し彼は私共の此の願望には殆んど答へて與れない。彼の生活の記錄は、凡て此等が初めより問題でなかつたかの如く、なだらかに辿り行いて居る。

秘れたる靈の歩みに就いての此の沈默はどうしたわけであらうか。彼自身も認めて居るやうに、彼の生活が餘りに繁忙であつたがために、斯樣な問題に心を向ける餘裕がなかつたであらうか。私はそうは思はない。なるほど、彼の生活は目の廻る程の忙はしさであつた。併し、かなり多くの年月を過さなければならなかつた牢獄生活に於て、彼は自己を省察すべき多くの機會を持つたに違ひない。更に、また、如何に繁忙なりとは云へ彼の感動し易き微妙な琴線が、此れ等のショックを感じなかつたとは到底想像し得ない。悲慘な運命の手に犠牲になつた彼の兄アレキサンダアに對する彼の細やかな情愛の一端を傳へる記事を讀むものは、必ず彼の情緒が人並勝れてデリケイトであつたことを否定しないであらう。

彼の謙遜な幾分羞しがりの性質が、幾分此の沈默に手傳つて居ることは慥かである。凡てそうした性質の人に見るやうに、彼は善きにしろ、惡きにしろ、自分の個人的事項に就いて彼此、くだくだしく喋べることが厭であつたに違ひない。私は勿論彼に於て斯樣な心理を認めるけれども、彼の此の沈默の主なる理由は、まだ他にあるやうに思ふ。

私の考ふる所によれば、彼の自傳に於ける內的苦鬪の記事の缺如は、一方に於ては、彼の本性が極めて善良であつたこと、即ち彼が道德的天才であつたことに起因して居る。從つて彼は人類進歩の障害を、彼の內心に認めずして、外界に於ける諸制度の中に見出したのである。玆に於て彼の心を惱ふた問題は、內心のそれではなくて、社會のそれであらねばならなかつた。此事は彼と同時代の同國人で屢々彼と列び稱せられるトルストイとよい對照をなす。トルストイも亦多くの外的制度に對

する勇猛なるプロテストをなして居るけれども、彼の中心の問題は常に運命に對する知慧、肉に對する靈の闘爭であり、從つて彼の生活の記錄、殊に『我が懺悔』の如きは、主として曠野を放浪ふ靈の旅行記であつた。而して、それはトルストイが常に彼自身の中に狂暴なる獸性の壓迫を感じつゝあつたがためにその克服が彼の最重の問題となつたのではあるまいか。之れが屢々暴力論者と呼ばれるクロポトキンのやさしさに對して、無抵抗主義の愛の行者に深酷さを與へて居るのである。

之は丁度、新約聖書に現はれたエスとポーロとの對照に類似して居る。聖書に表はれた記事を信ずれば、——勿論私は違つた見方の成立を否認しない——エスの生活は、大體に於て、彼の靈の旅の記錄であるよりは、外的活動の記錄であるが、パウロの生活が吾々を惹きつけるのは、その傳道旅行の如き變化多き外的活動に於てゞはなく、むしろ彼の心奧に經驗した靈肉の闘爭に於てゞある。而して吾々は玆にエスの自然さに對してパウロの深酷さを見出す。私はクロポトキンの自叙傳に靈の悶えの殆ど記されて居ない一部分の理由は、丁度エスの傳記に於て斯かる方面が非常に少ないのと同じ理由であると思ふ。それは靈の闘爭の閑却、從つて彼等の淺薄を證するものではなく、却つて彼等の性格の圓滿とその自然的强壯とを表はすもの云とへよう。

他方に於てはまた、之と全然違つた理由が、彼をして此の方面のことを多く物語らせなかつたやうにも考へられる。それは彼の自然科學的色調の勝つた人生の見方である。卽ち個人の生活にとつて決定的重要を占むるものは、彼の個人的なる感動や、昏迷や、煩悶や、哀愁や歡喜やではなくて、彼の周圍に動いて居る時代の流れである、となす見解である。詩趣に富んだ彼の傳記の中にも、屢々此の見解が支配して居り、從つて、彼の『自叙傳』からも彼の個人的内面生活が、雲のきれ目から洩れる日光の如く、時折、併しそれがために一層美はしく、照り出でるのを見るの外、大體に於て斯樣な方面がわざと省略されたと云ふ疑も挾まれなくはないのである。

其の理由は何であれ、私は本書が與へて呉れる尊貴なる多くの賜物に對して最大の感謝を捧げつつも、なほ、一つの大切のことを聞き忘れて歸つた時に感ずる一種の空虛を感ずると言ふ事實をも告白せざるを得ない。

(十一)

本書は、其の價値に應はしく、非常な勢を以て、諸國に流布した。それは主として本書の有する文學的興趣と及びその無政府主義的色調に基づくと考へられる。

原文は一九〇六年に著書の序文を加へて再版され、更に一九〇八年にはその廉價版が出て居る。其後今日に至る迄には、幾度か版を重ねたことと思ふが、確かなことは私にわかり兼ねる。

此の本は出ると間もなく歐洲諸國の國語に飜譯された。ドイツに於ては、一九〇〇年にパンキッの飜譯が『傳記叢書』の一として發行されて一九〇七年迄に四版を重ね、一九〇六年には『通俗版』も出て居る。(Memoiren eines Revolutionärs uebers. von Max Pannwitz) 一九〇二年にはニューエンフイスのオランダ譯が出で、(Gedenkschriften van een revolutionair. Vertaald door F. D. Nieuwenhius) 之と年を同じうして Autour d'une vie と題するフランス譯が表はれた。譯者は多分著書自身である。ロシヤ譯の出來たのは大分遲れて一九〇七年でやはり著書自身の手でなされた。此の年はまたスペインに於いて、ヴアルヴエルデのスペイン譯が出た年である。(Memorias de un revolucionaris. Version espanola por A. Valverde.) 以上はシュタムハュマアの『社會主義及共產主義書目錄』(Stammhammer, Bibliographie des Sozialismus und Kommunismus. Bd. I, 1893, Bd. II, 1899, Bd. III, 1909)によつたものである。尤も同書は非常に正確な本であるが、幾分の遺漏はあり得ることであるしなほまた同書第三卷の出たのが一九〇九年であるから、其後に版を重ね又他の新なる國語に飜譯されたものもあるであらう。從つて上記は、唯、一九〇九年頃迄に歐洲に於て本書の普及した最小範圍であると見るのが一番穩當な見方であらう。現に私の見た限りに於ても、飜譯の年はわからないが、アグレスティのイタリヤ譯がある。(Le Memorie di un Rivoluzionario, Traduzione Italiana di OlivaRossetti Agresti)

## (十二)

多くの人々の記憶にはないであらうが、本書は案外早くから、我が讀書に紹介され、其後幾度か、或は抄譯、或は部分譯或は全譯の形に於て、世間に發表されて居る。クロポトキンの自叙傳に關し我國に於て發表された論著で、私が見若くは聞いたものは、大凡次の如くである。私の不詮索のために少からず脫漏したものもあらうと思ふから、お氣付きの讀者の教示を受く

るを得ば幸である。

先づ私の事件發生前のものから擧げると次の如くである。

一、長谷如是閑氏『表題不明』日本新聞所載（明治三十八年？）

同氏は本書を抄譯して、略ぼ四十回に亘り、日本新聞紙上に掲載した。中途迄しか行つて居らぬとか云ふことであるが、とも角一番槍の功名は如是閑氏のものである。同氏の事であるから紹介振りも中々美事であつたらうと推測されるが、不幸にして私は未だテキストを讀み得なかつたから、私の實見に基いて之を確言するわけには行かぬ。

二、大庭柯公氏『革命家の手帳より』大阪毎日新聞所載。（明治四十年？）

大庭氏は日露戰爭の直後明治四十年（一九〇七年）頃シベリヤで露譯を購入され、同年の夏頃、其の中の面白い個所を飜譯して上記の表題で、二十餘回に亘つて『大毎』紙上に連載された。巧妙な筆を持つた大庭氏のことでもあり、またその記事が讀者の非常な興味を惹いたとのことであるから、定めし、手際よく紹介されたと推測されるが、これも亦、現物を見ないから唯の推測である。

三、大杉榮氏『ル・レヴオルテ發刊の記』日刊平民新聞　明治四十一年一月十五日。）

原書第六篇第七節（三八八頁—三九五頁）の飜譯で、社會主義新聞の創刊に際する記事としては最も格好のもので、譯も極めて正確である。其他、其の前後に大杉氏は本書の部分的抄譯又は飜譯を數ケの他の場所にも發表されたそうであるが、私は其の各々を探し出すことが能きなかつた。

四、山本飼山氏『要塞と脱走』年代不明

之は初め單行本として出され、後飼山遺稿中に收められて居るそうであるが、私はまだ、その何れをも見る機會を得なかつた。從つて何事をも云ひ得ぬ。

五、三浦關造氏譯『革命の巷より』大正七年二月

從來の抄譯又は部分的飜譯に對して之は全譯である。當然なされる筈でありながら、當時迄なされなかつた全譯が我が讀書界に提供されたことに就いては、何はともあれ、三浦氏に感謝しなければならぬ。併し、此の飜譯は頗る讀みよい日本語にはなつて居るにも拘らず、概して不正確であり、更に無責任であると非難されても仕方のないやうな個所さへも含まれて居る。譯語の不穩當な若くは間違つた個所や、意味を取り違へた個所やが少からずあるのみならず、ことわりなしに省略された文章や句

やがかなりにあり、時には全一節が削除された個所さへもある。殊に、社會思想社會運動に關する、從つて多くの讀者には最も興味があり、また正確を必要とする部分に於て、上記の缺點が最も多く表はれて居るのは、甚だ殘念なことである。勿論三浦氏には專門外の事項であるから、深く咎めるわけにも行かぬかも知れぬ。が、併しクロポトキンの傳記の譯者としては、此の方面に於ける準備を充分にして貰ひたかつた。從つて私は社會科學の方面に於て充分なる造詣のある人によつて、再び本會の正確なる全譯が試みられることを切望する者である。

私の事件以來、クロポトキンに關する論著が少からず、發表された。其の中彼の自叙傳に關聯したものを時の順序に從つて擧げれば、次の如くである。

六、萩原朝彥氏譯『追想記より』露西亞評論二月號(五九一七一頁)。

之は第五篇第一節乃至第三節(三二〇—三三三頁)の全譯で、數ヶ所の誤譯の外は、正確に讀み容く譯されて居る。

七、拙稿『自叙傳に表はれたるクロポトキン』我等二月號(五一—五八頁)

本書の第一版に附せられて居る、『ゲオルグ・ブランデースの序文の飜譯である。

八、遠藤無水氏譯『勞働者の觀たるマルクスとクロポトキン』(七五—一九六頁)。二月發行。

本書の後半即ち『自叙傳中のクロポトキン』がそれで、大體第一篇より第五篇迄の抄譯である。先づクロポトキンの風貌は伺はれるが、縮め方に就いても、必ずしも全部贊成し難い所があり、譯にも折々間違つた個所があり、時には明かな事實の思ひ違ひもあるやうである。

九、伊藤野枝氏『クロポトキンの自叙傳に表はれたるロシアの婦人運動』改造三月號(一三三—一四〇頁)

之れは第四篇『西歐への初旅』第六節(原文二二九—二四五頁)と七節の一部分(原文二四七頁)と八節の一部分(原文二四九—二四〇頁)を、紹介し布衍したもの、女子運動に興味を持つものには、自叙傳中最も有益な部分である。飜譯された部分紹介された部分共に確かなやうに思はれる。

一〇、大杉榮氏『クロポトキン自叙傳要塞と西歐』新小説三月號(二九—一四〇頁)

これは第五篇第六篇(原文三二〇—四六八頁)の全譯である。大杉君は何の點から考へてもクロポトキンの飜譯者として

は我が國に於て最も適當な人であらう。そして此の飜譯は此の期待に反かぬものである。勿論、多少違つた風に考へ得る點が絶無であると言ふのでないが、正確の點に於ても、平明な點に於て、私程度の能力の者の達し得るレベルを拔いて居る。不幸同誌が神近市子氏の『クロポトキンを訪ねた青年に聞く』のために發賣禁止になつたゝめに、讀者の手に渡らなかつたことは、返す返す殘念なことだ。併し近く同氏による本書の全譯が出版される運びになつて居るそうであるから、吾々は此の名著が我が國に於ける最適任者によつて我が國語に移し植ゑらるることを樂しみにして待たう。

一一、遠藤無水氏譯、『クロポトキン獄中記』(一―二五四頁)三月發行。

之は前篇秘密結社運動、中篇要塞幽閉の二年、後篇病監脫走亡命、續篇在佛下獄の前後の四篇第五十八節に分れて居り、原文では第四篇第一五項第十六節(二九五―三一九頁)第五篇全部(三二〇―三五二頁)第六篇西歐第一二節第一三節第十四節の一部分(四一五―四四三頁)第一五節の大部分(四五一―四五八頁)の譯である。折々わかり難い個所や、稀には明瞭に間違だと思はれる點もある。

一二、遠藤無水氏譯『クロポトキンの判決と露佛同盟』解放四月號(一九七―二〇五頁)

原著の第六篇第一二節(四一五―四二三頁)一五節の一部(四五一頁)に當り、上記の本の一部分(一六五―一八八頁、二四三―二四四頁)と大體合じである。

一三、拙稿、『クロポトキンの生活の一面』我等五月號。

彼が如何にして無政府主義者となつたか、また無政府主義として如何に生活したかと言ふ見地から、自敍傳に表はれた彼の生活の一面を研究したものである。

# パンの畧取梗概

山川均

右の長論文は此處に掲載する豫定なりしも、都合あり一時見合せとなれり。表紙の印刷は削除不能の爲め其儘とせり
諒之

# 生存競爭の哲學より見たる相互扶助

賀川豐彦

## 最近に於ける進化論の進化

**進化論の四分科**

進化論は最近に於て著しい進化を經て居る。進化論と云へば、たゞダウヰンやワレースや、ヴアイヌマン、新しい所で、ドウリス(DeVries)の超異説(ミユーテーシヨンセオリー)位の所が、日本に於ける一般の常識的進化論の知識となつて居るが、進化論の四分科―比較解剖學Comparative Anatomy 胚生學 Embryology 發生學Genetics古生物學 Palaeontology に於て、進化論は一層深く研究の程度を深めつゝあるので、特に發生學(Genetics)の研究は最近非常な進化を遂げた。『チヤールスダアウヰンがもう二十五年も長く、生き延びて居たならば、自然陶汰などによつて進化論を説くことは爲無かつたであらうと、今日世界に於けるメンデリズム學者の第一人者である、ウイリアム・ベートソンが云ふて居る。(英國王立科學々會々長就任演説)。又ベートソンは云ふて居る。

When the details of the geographical distribution of any variable species are studied the conception of Evolution Under Selection is found to be rarely if ever realized in Nature William Bateson: "Problems of Genetics" P.131

(變種の地理的分布を詳細に研究すれば、陶汰によれる進化と云ふ考は嘗て自然界に有つたとしても珍らしいものであることがわかる。ウイリアム・ベートソン『發生學諸問題』百三十一頁)即ち發生學などの方面からは、自然陶汰など云ふ外面的勢力は生物そのものゝ内面的生命をして進化せしむる力としては非常に弱いものであつて、進化の力は全く『種(スペーシース)』そのものゝ内的勢力の破裂であると考へられるようになつたのである。

**變移の哲學**

勿論ダアウキンにしても之を否定して居るわけでは無い、彼は變移 Variationと云ふことを彼

の『種の起原』の哲學の基礎に置いて居るのであるから、彼はその變移の上に陶汰が行はれると考へたものに違ゐは無からうが、彼にすれば變移そのものは殆ど『種』を決定するに無勢力であつて、それは寧ろ外的陶汰によるものと考へたのである。そしてこの外的勢力と云ふものは現象的なものであつて、一種の表面張力のようなものであるにも係らず『種』そのものゝ凡てを動かすものであると考へたのである。

### 生物境遇と自然境遇

然しダァウキン時代に於ては彼に對して反對を唱へ得る材料を持つて居るものは誰一人無かつた。然しまたダアウキンの學說にしても哲學的に云へばラマーク說と遠いものでもなかつた。ラマーク學派の人々が境遇說を主張してダアウキンの如き『種』の諸系統間に於ける相互的關係と云ふ狹い範圍內の表面張力を說か無いで自然境遇の感化を種の變移に組み入れることを固守したにしてもダアウキンの學說が『生物社會的境遇說』(生物相互間の生存競爭を一種の社會關係と見るならば)と考へるならばラマアク學說は要するに自然境遇說であつて、その間に立體的な社會境遇と平面的な自然境遇の差があるにしても、內面的勢力の方向に就ては何等知ることが出來なかつたのである。即ちラマーク說にしてもダアウキン說にしても結局は一種の現象論(フェノメノロヂー)であつたのである。たゞラマーク說は自然的境遇と云ふ中に『種』に對する超越的勢力を認めて、この超越的勢力に目的を持たせて有神論の餘地を殘して、ダアヴキンの如く生存競爭說から割出されるような殘酷な倫理學を避け得たのであるが、ラマーク說は自然境遇と『種』に對する客觀的豫定を自然的境遇の中に含蓄させた爲めに、現象論の中の現象論に了つたのである。

それに引き換へダアウキニズムは生物相互間の社會境遇を基礎とする爲めに、「種」に對しては自然から來る超越分子を排斥し、『種』と『種』との時間的推移をも立體的に取り入れ得るので、ラマーク的境遇論よりはより內面的(?)になつたのである。いや、少なくも自然境遇と稱する『種』より以上の超越的分子だけは無視することが出來たのである。然し生物相互間の生存競爭と云ふものが一種の境遇說で無いと考へたのがダアウキンの非常な間違ひで生存競爭と云ふものはたゞ一つの『種』を決定する勢力としては何等効能の無いものであつて常に二つ以上の勢力をそこに假定し無ければなら無いのである。即ちそれは鐵と磁石の關係の樣なものであつて、生存競爭說とは云ふものの實は一種の生物社會の境遇說にしか過ぎ無いものであるの

だ。それは時間的に推移し得る社會境遇である。然しそれは勢力そのものの源に關する說明にはなら無いのである。それで結局はダアウヰニズムも一種の現象論にしか過ぎ無いものとなつて居た。

**ミューテーションセオリー**

そこへメンデリズムの再發見が有つた。そしてそれに次で各種の突變的變異の發見が有つた。ド・フリースの『月見草』の變種の發見もその一つであるが、ロシアのコルシスキーが植物の歷史を研究してそれを歷史的に發見しベートソンも日本の外山博士も、米國のシャル(Schull)もタウアー(Tower)もマクドガル(Macdougall)突變的變種の出現を各種の動植物に就て見たのである。

勿論ベートソンはこの突變的變異の諸種に就て頗る疑惑的である。彼はタウアー Tower の(てんとう虫 Leptinotarthaの變異に就ても Macdougul の植物の變異に就ても否定的に出て居る。(Problems of Genetics, P. 248) そしてたゞ『我々は臨時に新種の出現することに就て直接の知覺を有するのみである』と云ふて居る。(We have direct perception that new forms may arise spordically)

**正系發生とエネルギー**

然し兎に角、發生學(ゼネテツクス)の秩序ある研究によつてダアウヰンなどが考へつか無かつた『種』の正系發生 Orthogenetic Evolution が考へられるようになつたことは嬉しいことである。そして之は古生物學の研究と合致するのであつた、米國に於ける進化論の權威として知られて居る紐育博物館長ヘンリー・フエアヒヰルド・オスボルン博士の如きは境遇說を求心的(セントラペタル)進化論だと云ひ(境遇がジアム・プラズムの方へ侵入して行くから)之が最近になつて、遠心的(セントラフユガル)になりつゝある。即ちジアム・プラズムが變異し進化してそれが境遇に依つて適者のみが陶汰されることを認める樣になつて來たと云ひ、然し、後者の場合でもまだ充分で無いとしド・フリースの變異說の如きはダアウヰン說の眞正なるものであつて、(ダアウヰンには二種の說があつて變種說と陶汰說が交流をなして居るがオスボルンは陶汰說を求心的として排斥し、變種說を眞正ダアヴヰン說としてドフリース說と同一視して居る)遠心的にはなつては居るがまだ生物進化の秘密を說明するに足らぬと云ひ、『優種』が『生存』に適するとしても、優種の『出現』した理由には少しもならないから結局は何の說明にもならぬと云ひ之は要するに物質の形體のみから說明せんとする凡ての進化論の

失敗を裏書するものであつて、生きた勢力の進化の跡を先に研究するならば形體の問題は解決出來るとして、エネルギーの起原を四つの形に於て求め（1）『無機物的境遇』―太陽、土地、水、空氣 （2）有機體―內體細胞の成長し變化する個體の凡てのエネルギー （3）遺傳細胞――代々永續し繼承して行く生殖細胞を中心としまた有機體の凡ての細胞と組織に含れて居る遺傳物質のエネルギー （4）生物境遇――之は單細胞から高等動物に至る凡ての生物等四つの要求を研究してその能動、反動相互關係を詳細に研究することによつて、科學的進化論の方向が定まると云ふて居る。即ちオスボルンによつても、物質の形體のみを論ずる進化論の學說は失敗であつて、內觀的エネルギーの進化の跡を研究せねばならぬと云ふことを力說するようになつて居るのである。之はオスボルンがベルグソンの創造的進化や、ドルーシュのユンチレキー說（內在目的）を科學的では無いと云ひつゝも殆どそれに近き內的勢力の進化を發見せんとした跡が見えるものであつて之を見ても今日では進化論をたゞ生存競爭のみで說明することが全く無謀なことであることがよくわかるのである。(H. F. Osbom: TheOriginand Evolution of Life, Preface X-XVI)

それは正系發生で無いにしても、それはエネルギーの進化の徑路として研究せねばならぬことになつて居るのである。

## ダアヴヰンズムの內容

### 四大要素の四分の一

如斯オスボルンの如く考へると生存競爭から來る陶汰と云ふものは、進化の四大要素の中の四分の一にも及ば無いもので有つて、オスボルンが生物境遇と云ふものの中にはクロパトキンが主張する相互扶助の要素もあれば、ドラモンドの主張する母性的愛護の進化の傾向もある。相互扶助とまで行か無いが、廻り遠く互に相利用し合つて居る協力作用（植物と動物間の炭酸淨化作用の如き）の如きもあつて、ダウヰンの云ふ如き生存競爭一點張の進化論が今日全く信用の無くなつたことは拒むことの出來ない大きな事實である。

況や、生存競爭そのものがダァウヰンの考へる如く激烈なものでは無くして、アンリ・ファブルの如き自然界に親炙して居る人の云ふ所によると、『種』を變化せしめるに殆ど能力無きものであると云ふことが判明してくると、生存競爭から來る進化と云ふものはオスボルンの四大要素の一として見ても猶且多大の制

引をせねばならぬことになるのである。

**生存競爭說と國民性**

然し妙なもので生存競爭說などを主張してそれが眞理として受け入れられる國民はちやんときまつて居るのであつて、ロシアやアメリカの樣にデモクラチツクに進まうと云ふ國では評判が惡いが、英國や獨逸の樣に軍國主義的に世界を統一しようと云ふ國では誠に評判が善いのである。之はケローグ Kellog『今日のダウヰニズム』"Darwimsm today"の中に云ふて居ることであるが、日本の國などでも進化論そのものの研究は少しもされずしていつも飜譯的に假說輸入計りの流行する國では一層そうである。それで私がいくらダアヴヰンの生存競爭は信用が無いものだと云ふても、權力意志だけしか知ら無い所謂唯物史觀的と云ふよりか、實用主義的(プロマチズム)に目の眩んだ人々は飽迄ダアヴヰニズムの惡い方面だけを眞理だと主張するであらう。それは、少ならず彼等自らの心理的立場に於ては眞理であるからである。即ちダヴヰニズムは心理的に眞理であつて、其次に自然界に應用される、との方が今日迄多くあつたので、自然界の生存競爭の測量など云ふものは充分出來て居るものでは無い。それを心理的に推理して一筋繩で全部を『そうだ』として了ふ所にその假說の破綻があるのである。

**マルサスの假定**

ダァウヰンの假說はあの有名なマルサスの人口論から出て來たのであるが、マルサスの人口論から出て來たダァヴヰニズマが危險性を持つて居ることは今日誰も拒む人はあるまい。マルサスの人口論を極端に持つて行くのがヘツケルでありビユヒネルである。實際或種の蠅(Typhoidfly)が五日間に生長して五日目に百二十の卵を產むとするならば一夏の中に

1,096,181,249,311,720,000,000,000

となり唯の十二代だけにでも 268,778,165,861 平方哩を蔽ふと云ふことである(Williams: The Wonders of Science in Modern life Vol. IX. P. 174)

それでマルサス的增加が眞理でありとすれば生存競爭は避く可らざることである。然し如斯人口の增加することには種々の理由があらう。それはオスボルンの擧げた四個の進化的要素は勿論影響を持つて居よう。即ち自然的境遇に打勝たなければならぬから試驗的に多くの種子を蒔き散すこともあらう。之は下等な生物程その必要があるので、高等な動物であると、自己調節を知つて居るけれども心理的に自己調節を知ら無いものは之の方

法を取るより外に道が無い。また有機體として殖え得るだけ殖えようとする傾向のあることは否定出來ない事實である。之は有機物の生命經濟から來たものである　植物の有機物保存力が有つて初めて動物と云ふものが存在して居る如く、宇宙には不思議な法則が有つて、植物は食はれる爲めに出來たものであるかの如きことを示すのである。然しそこに面白い秘密があるので有つて、食はれる方の植物はそれでは全く絶えて了ふかと云うに決して絶えて了は無い。動物の方でも生れ出た以上、食物が無くなるような所に生れ無いと共に植物の方でも食ひ盡されると云ふことは決して無いのである。こゝに生物進化の不可思議な點があるので、動物の『種』の永續性は少なくも植物の永續性の上に横はつて居るのであつて、そこに生存競爭と云ふ言葉だけで表白し得ない或物があるようである。

　下等動物の繁殖に就ても殆ど植物的繁殖性と同樣の傾向を持つて居るものがある。蝿の如きがそれであつて、はちきれそうになるまで增加するのである。然し之は先に述べた通りに外部的に蝿の一種で世界を蔽ふと云ふ樣な努力と見るよりか寧ろ內部的に一つの調節作用を持つた增加だと考へてよいのである。即ち自然陶汰に備へる爲めに多く子を産むのであると考へることの出來るものである。(多く增加するから陶汰されると考へると共に)即ち增加するから陶汰されるし、陶汰されるから多く産まんとする努力があるとすれば、自然界は盲目では無くして少なくとも自然陶汰だけには目が明いて居ることになる。即ち自然陶汰に對しては充分調節の能力があるとせねばならぬ。

**盲目的目的**

　ダアヴヰンの陶汰說と云ふものはこの調節能力を指したものであつて。調節能力そのものが即ち一種の內含的目的となつて居るのである。繰返して云ふならば自然陶汰と云ふ盲目的運動があるからその盲目運動に備へる爲めに武裝し多く生殖するとすれば、盲目運動に對しての目的運動が臨時であらうが兎に角始まるのである。即ち漸進的目的は之で曲りなりにも出來たわけである。即ち生物界には盲目的目的を許容したことになる。既に自己保存と云ふ目的を許容する以上はダアヴヰニズムの世界は暗黑では無い。自己を通じての內的進化と內在目的を凡て許容し無くてはならぬ。そして競爭と云ふものが全く無目的のものでは無くして、自己を充分他より進化させなければならぬと云ふ競爭になるのである。そして自己は時間的に成長するものであるから、生存競爭は成長競爭となる。そして成長競爭は遂に人間の心理

生活を蔑んだとしなければならぬ。即ち生存競爭もこゝまで押詰めてくると破壞的勢力であるか建設的刺激であるか頗る疑問である。

## 成長競爭と生存競爭

**全能なる生存競爭**

ダァヴヰニズム的生存競爭說と云ふものが破壞的なもので無くて『人間完成』までの筋道を取つた建設行動であつたとすれば、生存競爭程全能なものは無いのである。

それで生存競爭が而か全能な有目的なものとして自己完成の恩人だと考へる時に相互扶助が反つて敵で有つて、ダアヴヰン的超人主義が人類の理想であるかの如く考へられるのである。即ち生存競爭を說くものがその破壞的方面を無視してその成長競爭的方面と自己保存的方面を力說する時にいつでも主張するのはニーチエ的個人主義である。然しよくその思想を解剖すれば、競爭が一種の相互刺激であると考へることから起つて居るのである。實際もしも生存競爭が常に人間のようなもののみを生産し得るならば、悲觀すべき材料とては少しも無い筈である成長競爭に敗北するものが惡いのである。

こゝがニーチエズが基督敎道德を奴隷道德と罵り、イブセニズムが近代人の胸に昂奮を覺えしめる理由である。また生存競爭をこんなに解釋するならば生存競爭程有難いものは無くなるのである。『生存競爭』は『神』より全能であり、慈悲深いものであるからである。否寧ろ生存競爭こそ向上的相互扶助そのものであると考へられるからである。

**相互扶助としての生存競爭**

何にしても人類出現までの進化史を凡て競爭で解決せんとすることは無謀な企ではあるが、之を肯定するならば、それは相互扶助以上の相互扶助を肯定して居るものであるから部分的種屬間の相互扶助などを無用視することは尤もなことであると考へねばならぬ。つまり我々が生存競爭說を保持する進化論者に出會した場合にいつでも頭に入れて置かねばならぬことは、彼が競爭の中に成長を入れて居るか否かの問題であり、もし人類までの成長競爭を肯定して居るとするならば、彼は相互扶助論者中の相互扶助論であると云ふことを知らねばならぬ。

人間の道德から云へば、『殺さ無い』と云ふことが最高のこととせられて居る。それは殺す時に價値が消えるからである。所がダアヴヰンが、殺すことによつて價値が増す(進化)と考へ

るならば、殺すことは一種の實在的行爲では無く價値行爲である。從つて價値の上から云へば殺す程多く價値が上進して來ると云ふことになる。そして之が道德と衝突を來すので、ダアヴヰニズムは一種の困難を持つて居たのである。

それでこの困難を避けんとするならば、ダアウヰニズムは生存競爭一點張の陶汰說を撤回して、進化に於ける成長と戰爭の兩方面を分離して考へねばならなかつた。從つて自已完成の成長競爭と云ふことも或程度を超えて考えてはならない。そして生存競爭の事實を肯定すると共に、同時に共存の可能性、そしてその共存を通じての價値の上進をも、許容せねばならなくなつた。即ち生存競爭と成長競爭とは違つたものであつて、生存競爭は成長に對する一つの刺激になることもあれどまたその反對に退化に導くもであるとも考へねばならぬ。ダアヴヰンはこの點は樂天的で、競爭の凡てが成長的進化的であると考へる爲めに、相互扶助も何にもいら無い、捨てて置いても相互扶助以上の大きな仕事が出來たのであると考へたものである。それに反して道德家と宗教家は悲觀的であつて、相互扶助が無ければ生存競爭は全く破壞的であると考へたのである。即ちダアヴヰニズムは生存競爭を價値的に觀察し宗教家道德家は之を實在的に判斷した。でもし公平に之を判斷せんとするならば、生存競爭は價値に對する一刺激であらうが、また一種の實在的破壞であると云ふことを承認することである。そしてこの立場を取ると共に生存競爭に對してどうしても相互扶助的努力を持つて戰はねばならぬと云ふことを考へるのである。即ち破壞の事實を認めると共にその救濟が必要となるのである。そこでダアヴヰンの如く陶汰說に對して樂天的見解を取ら無い人々の間に相互扶助論が必要となつた。

## 相互扶助の本源

然し相互扶助論も、たゞ實在の進化を說明する內的勢力としては實に薄弱なもので有つて、ニーチエズムが基督教道德を罵り得る如くに、相互扶助論もオスボルンの如く云ふならば一種の求心的（セントラペタル）境遇論であつて、之れで進化の全部を說明するに足らぬものである。即ち、玆に互に扶助するものがあるにしても、それで互に進化するものであると云ふ理由にはならない。之は殺すことが價値の上進にならさる如く、殺さることがまた價値の上進に直接影響を與へ無いのである。たゞ相互扶助によつて內的に爆發して來る生命の優越性を涸らしめ無い保證だけは

充分出來るのである。

クロパトキンも『相互扶助無くしてどうして人生の苦鬪に勝ち得るものか、生存競爭が激しい所程團結が堅いものである』(Kropotkin; Mutual aid, P. 96) と云ふて居るが、相互扶助も大きな意味に於ては生存競爭に呑み込まれて居るものであつて、生存競爭が價値上進に効力が無いとすれば、生存競爭に含まれて居るものだとも考へられる相互扶助も價値上進には根本的變化を與へ得るものでは無い。

兎に角、價値の上進と云ふものを現象的生存競爭とか相互扶助によつて説明せんとすることは全くの誤謬であつて、實在の本質と價値の本質はそれで動かされ無いのである。それでは相互扶助は不必要であるかと云ふにそうでは無い、それは生存競爭の如く破壞的作用を持つ代りに建設的作用を持つ點に於て種の保存に取つては後者に勝づて居る。

それで相互扶助を考へる時に我等の間違へてはならぬことは、相互扶助がクロパトキンによつて筋道よく辿られたから、動物の進化するのは全く相互扶助のみによるのであると先のダアヴヰニズムよりの反動として極端に反對の方向に走らぬことである。

**相互扶助以上の事實**

クロパトキンの研究して居る相互扶助の如きは實は頗る現象的の方面のみで有つて、種の保存に對しては生物界に於てはそれ以上の深い衝動を持つて居るのである。

クロパトキンの辿つた道は主として單體動物が、本能的にか無意識的にか將た心理的にか――人類に於ては明かに意識的にまた道德的に群集生活をなすものであると云ふ、社會本能を生物學的に説明したに止まつて、生理的にまた有機的に相互愛的に連絡して居るものであることを説明して居ら無い。

で、私から見ればクロパトキンの研究は有難いものであるけれども生命に對する深い同情がまだ不足の樣に感ぜられる。

茲に三つの事實がある。それは一つはヘンリー・ドラモンドが發見した母性愛の進化とも云ふ可きものであつて、もう一つは戀愛の進化第三は胚種學の進步と共に我等に明かになつて來た有機的種の保存法の進化である。

**母性愛の進化**

ヘンリー・ドラモンドはまだ多くの實例を擧ぐることが不足して居たが、昆虫生活の研究が深くなればなる程、昆虫の母性などがその子孫に對する犧牲の偉大なことはとても我等の想像以上の事實であ

り、之が、鳥類などの『巣の進化』を辿つても我等はたゞ母性愛の力の偉大なるに驚嘆するものである。Cassique 鳥 Chafinch (Fringilla Coelebs 太陽鳥 (Sun bird-Aecthopyga Magnifica) の如き纎維を持つて袋の如く巧妙に織つた巣の如きものを見れば人間の建築本能より更に尊い或者が母性本能の中に含まれて居ると考へざるを得ないのである。(Charles Dixon: Bird's nest)

その他高等の動物になればなる程この母性愛の昂進するのを見るので有つて、人類に於ては之が頂點に達して居ると考へても善いのである。即ち相互扶助の前にあるものはこの母性愛である。そして種族間の相互扶助も母性愛の如き強い本然的衝動が本能的にまた心理的に變形したものであると考へ得ないこともないのである。

**戀愛の進化**

然し母性愛より更に不思議なのは男女の愛である。ダアヴヰンは之を雌雄陶汰として別に論じて居るが之が果して可能であらうか？性別の進化は生物界の一種の神秘である。レエブは生物化學的に云へば酸化作用を六百倍位多くする爲めに雌雄別が始まると云ふ。然し兎に角兩性の分化することは進化の爲めには缺ぐ可らざる一大事實であるに違いないのである。そしてこの男女兩性の分離があると共に戀愛の進化は母性愛の進化と共に否定出來ない大きな事實である。勿論蟷螂のようにまた蜘のように雌が交接の後に雄を食ひ殺すと云ふようなことも無い、然し之はたゞ殺戮と云ふ方面からのみ見ずして、太古食物の缺乏して居た時代に生殖する雌性の營養の問題と、精を遺した直にその年の中に死ぬ可き不用な雄の死（昆虫を始め動物の多くは交接後多くは直に自滅する）とを並び考へなてはならぬ。ファブルの如きも之を太古の遺風として考へて居るがこの種類のものは實に珍らしいのであつて、動物の多くは雌雄によつて深い愛を現すのが普通である。それは互に飾り、互に悦ぶものである。その間には相互扶助以上に共棲と協力とがあつて、必しも爭鬪を以つて始終するものでは無い。殊に鳥類や哺乳動物などになると雌雄の愛着心は一層鋭感になつて、所謂相互扶助以上に戀愛を成立せしめるものである。で、もし戀愛と云ふ様な大きな事實を無視して相互扶助を說かんとするならばそれは砂漠に泉を掘るようなもので有つて、私に云はせば相互扶助こそは戀愛のようなものが成立し得る生物社會に於て初めて可能なので有つて、戀愛の成立し得ない生物社會には相互扶助は決して產れ無いのである

そして個體が男女別に別れて各種の經驗をしてそのプロトプラズムに綜合的分子を集め強く生きんとすることがコロンビア大學のモルガン教授(T. H. Morgan)などの主張する綜合的進化であるとすれば、相互扶助の如きは雌雄別進化(雌雄陶汰と云ひたくない)に比して極く小さい任務しか持つて居らないものであつて、この戀愛の成立を除いて相互扶助がどれだけ成立しても種の進化は決して望み得られ無いのである。

つまり、男が女を愛し得る様な生の本然的力は、その同種族間の間にも働き得るものであると云ふことを考へさへすれば善いのである。たゞ、雌雄愛と母性愛は時間的に繼承して行く種の保存に對する努力であるが、その種の保存の力が空間的に働くのが相互扶助である。

不幸にしてダアウヰンは雌雄競爭と云つたような暗黒な方面のみを畫いた爲めに戀愛のような甘い事實が個體の間にあることを無視したことは誠に殘念なことである。然し雌雄別の進化が判明してくると共に戀愛の事實は相互扶助の事實よりより本然的であることが明瞭になつて來たわけである。云ひ變れば、相互扶助と云つたような水臭いもので無くして愛が充分成立し得るものであると云ふことを認識せねばならぬようになつて來たのである。クロパトキンは愛より相互扶助の方が強いと云ふようなことを云ふて、愛は假想的で、相互扶助の方が本然的である、無意識的衝動を含んで居ると云ふて居るが(Mutual Aid, P. 283)なる程彼の解釋する如く、愛と云ふものを天から來るものとして取扱ふ常套的キリスト教道德に比較すれば、相互扶助の方が更に本然的であるかも知れ無いが、私が今迄に述べて來たような根本的愛であれば相互扶助の方が假象的で、愛の方が本然的となるのである。

### 卵と胎盤の進化

然し更に之に加ふるに、卵の進化から、胎盤の進化、ゾナレヂアータの進化を研究するならば有機的に如何に種が守られ愛せられて居るか、而もそれが高等な動物になればなる程卵が大切に保護せられて居るものであり、哺乳類であれば營養が卵だけで足ら無いものであるから母體その者までも犧牲にし母胎の內に子供が發生すると云ふようになつて居る。而もそれが、カンガールーのような子宮の內壁が殆ど胎盤と同じような作用をするものから、豚や駱駝の胎盤の様に Placenta diffusa と云ふ稍複雑な胎盤となり、更にそれが、羊のような動物の一層完全な胎盤 Cotyledonary Placenta となり、更に進んで食肉類の Placenta Zonara

となり、人類の如き完全な Discord placenta になるものであるが、之は愛よりも更に深い有機體の内部に行はれて居る、我等には全く無關係とも云ふ可き無意識的愛が子孫に對して行はれて居るのである。

さて如斯無意識的又は有意識的愛が種族保存の爲めに行はれるとするならば——そしてこれだけ骨を折つて守るだけ大事な生命だとすれば——それを同屬間に於てむざ〳〵生存競爭の名の下に破壞するものであるとは考へられ無いことである。

そして高等な動物程母性愛も、雌雄愛も、無意識的保護も加はつて居る所を見ると、その上少なくも同族間に相互扶助が行はれると云ふことは之等の本能的愛の續きであつて、何の不思議なことでも無いのだ。之だけ大事にして作り上げたものを個體間の生存競爭で破壞して了ふと云ふことは考へられ無いことである。

そこでクロパトキンの相互扶助論が初めて生きてくるのである。母性愛より、又雌雄愛より更に有機的本然愛の衝動をずつと根深く掘つて行くと相互扶助の事實が生物相互間にあることは何の不思議もないことである。が、またその事實がクロパトキンの樣に秩序よく配列されて見ると今更その力の偉大なるに驚くより外は無いのである。

**蟻の相互扶助**

然し玆に注意せねばならぬことは、その所謂相互扶助なるものは多く血族的或は種族的に區切られて居ることである。たとへば蟻の間に相互扶助のあることはよく傳へられて居るが、その相互扶助は全く血族的範圍を出無いと云へよう。然しそれにしてもその相互扶助は殆ど人類の想像以上に出て居るものである。

フオン・イヘエリングは一八九四年ソレノプシス・ジエミナタ蟻が洪水に出遇つて直徑一六—二五ミリメートルの球を作りその中に卵を入れて逃げ出すのを見たと云ふて居る。サプオゲは（一八四七年）アフリカのアノンマ・アルセアス蟻に就て、エルン・アンデレは（一八八五年）歐洲の蟻に就て同樣のことを見たと告げて居る。米國で蟻學者の隨一として知られて居るハアヴアト大學のホキラー博士は或年の十二月の或日米國テキサス州モナハン地方の沙地でイショメリメクス・コケレク蟻が同族の蟻で疲れて歩け無いものを口にくわへて、巣に運んで居るのを見たと云ふ。アマゾン蟻は疲れた場合に奴隷蟻に運んで貰ふことがあるが普通の蟻も親切から殆ど奴隷のするようなことをすることもあるのである。またホキラー博士は或蟻は飢えた蟻に

自らの胃袋から蜜を吐き出して口から口へ與へて居るのを見たと書いて居る。またホヰラー博士は蟻が段々初期の殺戮を逃れて、段々無抵抗主義的農業主義に移り高等なものになると牧畜をなし農場を經營する樣になつたとまで極言して居る。(Wheeler: "Ants") またヨハネス・ミユラーであると思ふ蟻は病院を持つて居るとまで云ふて居る。

**競爭か共棲か**

之等のことに就ては比較的詳しく拙著『精神運動と社會運動』の一章『殘酷の歷史』の中に述べて置いたからその章を參照せられんことを希望する次第である。蟻の場合の如きは極端な一例であるが、私はクロパトキンの集めた材料の外に色々の材料を持つて居るがそれを此處に述べたくは無い。それよりか寧ろ私としては、クロパトキンが論じようとはし無かつた動物の共棲方面を詳しく研究せねばならぬと思ふのである。それは素朴的生存競爭論者は共棲と云ふことを生物界には不可能のことであるかの如く云ふものがあるが、私にはそんな誤れる考を全く排斥せねばならぬと思ふのである。後にも詳しく論じたいと思ふが、生物界に於ては一動物、或は一植物が生存し得ると云ふことによつて、幾十幾百種の動物がそのお蔭を持つて生存し得ると云ふ事實があるのであつて、之は生存競爭とは正反對で、生存互助と云つたが美いと思ふのである。然し勿論之は相互扶助とも違ふのである。之は喧嘩し無くとも住んでゆけると云ふ宇宙の意志の寛容さを示すものである。

クロパトキンもその『相互扶助論』の始めの方にシベリア地方で狼の群や鳥類などが戰爭もせずに群居して居ることを書いて居た樣であるが、私はダァヴ井ンの『種の起原』を讀んで居る中に非常に感じたことは砂原に植えられた一本の樹の蔭に幾十種類の動物が移住して行つたと云ふことであつた。その時に私は之は生存競爭では無い、『生存互助で無いか？』と心の中で叫んだことである。

熱帶地方では生存競爭が盛んであると云ふ。然し私から見ればそれは生存互助の方面を全く無視した見方で有つて、熱帶地方の動植物の種類の多いと云ふことは少しも生存競爭が多いと云ふことの證據には少しもなら無いのであつて、寧ろ一本の木の下に幾十の生物が移住する樣に全く共棲の事實を證據立てゝ居るとしか考へられないのである。南米アカシア (Bull's horn Acasia) 蟻の共棲は世界によく知られたとであるから私は繰返したくないが、植物にもまるで知覺がある如くわさわさ蟻の爲

めに穴を作つてやつて之を庇護しその應酬として他の蟲害を免れると云ふことは我等には想像もつかぬ相互扶助以上の大きな力である。その他、蟻の爲めに洞窟を作る植物には Korthalsia Echinometra, Clerodendron fistulosum, Nepenthes bicalcarata, Myrmecodia echinata, Myrmecodia alata, Disclidia raffiesiana Conchophyllum Tococa bullifera 等の數種の植物が有つて、我等に想像も出來ない面白い世界を作つて居る。(Dr. Heim: The biologic relations betweenplants and ants, Annual report of the Smithonian institution, 1896, P. 411-455)

共他ブナ Beech の樹と Mycorluza-fungi の共棲或は各種の植物は組織中に共棲して居る百餘種類のアルゲ Algaeの如きは生物が互に共棲し得るものであると云ふことの善い例である。又加奈陀の進化論者として世界的名聲を持つて居るアーサー・ウイリー博士 Arthur Willey は『同一食物のある處では違つた各種の生物を生存せしめることが出來る。之は相互利益の關係でも無ければ、相互寛容の爲でも無く、たゞ獨自獨存でそうなのだ』(Willey: Convergence in Evolution, P. 114) と云ふて居る。即ち必しも相互扶助で無くとも同一食物に對してさへも生存競爭をせずして生きて行ける工夫はいくらもあるのである このやうに考へると、共存し居ることも、共棲し得ることも出來る世界に於ては、必しも生存競爭が進化を支配するものでは無い。

## 生存競爭の限定と愛と生命

**海洋の生存競爭**

私は生存競爭の限定と云ふことを深く考へて居る。之に就ては拙著『精神運動と社會運動』の中にも『苦痛の哲學』の中にも一寸書いておいたが、たとへば海の中の動物が生存競爭をすると云ふても海の深さに從つて動物の種類が違つてくるので、海の上層に住むものと中層に住むものと下層に住むものとの間には互に相犯さざる限定があるものであつて、サー・ジョン・マーレー氏の研究によつてもそれが明かに示されて居る。次に示す表は同氏が『海洋』Sir Jhn Murry: Occean, P. 182 に掲げて居る統計で有つて之を見ても海の深度に從つて動物種族が異り從つて生存競爭が限定せられて居ると云ふことを知るのである。

## 海洋の深さと生物の種類

| 尋數 | 測量地域 | 採集實數 | 種目の數 | 綱目數 | 種と綱の比 | 一地方に限つての種目數 | 含數 % |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一〇〇以上 | 七〇 | — | 四三六〇 | 一四四〇 | 三、九五—一 | 三九〇〇 | 九三 |
| 一〇〇—五〇〇 | 四〇 | 六〇〇〇 | 一八九五 | 七三六 | 二、五七—一 | 一四〇八 | 七四 |
| 五〇〇—一〇〇〇 | 二五 | 二〇〇〇 | 六五一 | 三六五 | 一、六七—一 | 四一六 | 六四 |
| 一〇〇〇　一五〇〇 | 一五 | 二〇〇〇 | 五〇八 | 三三七 | 一、五一—一 | 二七〇 | 五三 |
| 一五〇〇—二〇〇〇 | 三三 | 一三五〇 | 四一三 | 二七二 | 一、五二—一 | 二四五 | 六〇 |
| 二〇〇〇—二五〇〇 | 三三 | 八三〇 | 二六三 | 一八四 | 一、四三—一 | 一六五 | 六四 |
| bleow 二五〇〇 | 二五 | 六〇〇 | 一六一 | 一三七 | 一、一七—一 | 九六 | 六〇 |

P. 183 Ocean: Sir John Murray

生物の地理的分布に就てはアルフレッド・ラッセル・ワレースが最も深く研究してこの爲めに大著述まで殘して居るが、生物によつては極く小さい地域にのみ限つて居るものもある位であつて、その間に生存競爭が充分限定されて居るのである。

處がその一地域に於てすら、地下、地上、空中と云つた風に生物の領域が異り、その生活樣式によつてまた生存競爭の限定があり、更に、相噛み相戰ふものの間に於てすら、一定の限定が有つて、凡ての動物が相亂れて相噛むものでは無い。一つの昆虫が一つの昆虫を犧牲とするやうな（拙著『精神運動と社會運動』中『殘酷の歷史』參照）類が多いのであつて、從つて生存競爭はちやんと限定されて居るのである。この生存競爭の限定と云ふことはダアヴヰンなどがあまり注意し無かつたのであつて、生存競爭を研究せんとするものが忘れてはならぬ點である。

既に生存競爭に限定がある。一地域に於ても多くの動物が各自その天地を樂しみ得ることが出來るやうになつて居る。即ちそこに、生存競爭を離れて、不思議な生命の綱から湧き出してくる有機的關係が出來て、一生物の滅亡の爲めに凡ての他の動物が滅亡せねばならぬと云ふことが現れるのである。即ち生物界には或飽和的生產が行はれて居るものであつて、一定量の生存競爭が寧ろその飽和量を一定ならしめる爲めに出來て居るものでは無いかと考へしめるものである。それは食肉動物發生の歷史を研究すればよくわかるのである。即ち或物の食肉類は生物界の平衡を保つ爲めに全く必要であるのである。

### 生存競爭の效用

即ち宇宙意志の大きな進行から考へると生存競爭と云ふものも要するに生物共存の大事實に比較してはいと小さい事件であり否寧しろ、共存の爲めに必要な一種の鈌の樣なもので無いかと考へされる程である。

つまり私は生存競爭を哲學的に考察すればする程、生の本然に於て破壞の代りに建設の力が動き、クロポトキンが云ふ『相互扶助』にも優つた相愛相思の本能が噴火の如く湧き上つて來つゝあることを見るのである。

だから生命の爆發力から見れば生存競爭の如きは要するに一種の表面張力にしか過ぎ無いものである。生命はその本然に於て愛さずに置かぬものである。否、愛さずとも少なくも共に生きて行くことに少しも差支へ無いように出來て居るのである。

況や人類が凡ての武器と武裝を捨てゝ、だゝ頭腦の發達によつて、宇宙の凡てを支配せんとする力までも投つて居て、民族間に共存が出來ないと云ふようなことは決して無いのである。それは全く迷妄と虛僞に囚れて居るのである。人間の爭鬪だけは宇宙意志も責任を持つまいと私は思ふ。

兎に角宇宙意志の進化の方向と人間意志爭鬪の方向とには全く違つたものがある。宇宙意志には先にも擧げた通りに節制と秩序を知つて居る。誤謬をしても直に悔改めることを知つて居る。魚の如きは一度陸上へ昇つて來たが直にまた海へ歸つて行つた如く、宇宙意志は悔改むることを知つて居る。然し人類の意志は殆んど半狂亂である。殊に此度の歐洲大亂の如きはその發明の能力に比較して私にはとても想像の出來ない暴擧である。それでももしも人類の爭鬪を見て生物界の爭鬪を想像するならば非常な間違がある。獅子でも熊でも――凡ての猛獸の方がずつと節制を知つて居る。アフリカに約百萬頭の獅子が居ると推測されて居るが、彼等は決して狩りに殺さ無い。人間と違つて肉で無ければ生きて居れ無い彼等でさいそれである。獅子は食物があれば三日でも四日でも穴の中にすつこんで居る。それで獅子は豹より遙かに人民に害を與へ無いものであるとせられて居る。

之を考へる時に生存競爭の正鬪なるものは――病的になつて居るものを除いて――生物社會に於ては必しも相互扶助の反對の事實では無くして、相互扶助と生存競爭は延び上らんとする生命の大道に互に相並んで居る現象であると私には考へられるのである。で、人間の爭鬪に對して何等同情の無い私も生物界の爭鬪に對しては深い同情と敬意を持つて居るのである。

宇宙に於て生存競爭が無用だと云ふ時代は來ないかも知れない。然し愛と生命の力は生存競爭すら許容するものであることが分知される時が來ることを私は疑は無いのである。生命と愛は生存競爭よりも遙かに強いものであることを私は見た。

# クロポトキンの哲學倫理

早大教授　杉森孝次郎

クロポトキンが生産を信ずる點は、彼れの强點だ。クロポトキンが弱者、境遇上及び本質上の弱者に對する人情、道義的感情の强烈なことは、人をして敬虔の襟をたださしむ。クロポトキンが組合の信者たる事は、近代生活の一豫言者的資格の、彼れが所有者である事を示す。クロポトキンが、僞善の隻影をも着けない事は、彼れの人物が、彼れの思想力よりも、否な彼れの思想的價値の如何に拘らず、高潔聖志の質たるの證だ。涙囊とも稱すべき人柄らしい。彼れの學說は彼れの感情の支配下に立つ。そしてその感情は純赤だ。我のない同情だ。敏感なる聖情だ。これだけの前置きをなりともして置いて、彼れの思想を一檢して見よう。

生産の可能を餘りに低く見積もつた一例がマルサスだつた。クロポトキンは人間の生産力は、人間の出産力を遙かに超越し得ることを信ずる一人だ。これは今となつては殆ど平凡に近い知識だ。科學が發達せず、隨つて機械が發明されなかつた間こそ、出産率は生産率を追ひ越したれ、時代は一變した。亞米利加の平野で、一百人が數ケ月間勤務すれば、一萬人が一ケ年間食ふだけの小麥が生産されるといふ。衣でも、住でも、その他の必要品でも概ねこの例の如しだ。これはクロポトキン自身が唱へる事だが、大戰後にでたマック・イーヴー君の新著などにも、同樣の主張がある。最近時の學者が一致する點だ。英國ランカ州の紡績機は、機械が發達しなかつた當時に於ては二億の人の手を要したであらう類の生産を今日現になしつゝある。人間の生産能力を信ずる餘地は、今後永久に存する。勿論、欲望を滿たす方法が發達すれば、欲望そのものが隨つて發達する。一欲を滿たさば恐らくは二欲が新たに生じよう。同一欲望の優質といふ方途を追うてか、或は全然別種の慾望に向かつてか、要するにこの二途を追うてだ。料理でも、服裝でも、建築や家

具で凝りだせば限りがない。しかも人は、時と力に餘裕があれば凝りずにはゐない。非難すべからざる現象だ。人生の美化だ世界の優變だ。問題は、最低限の必要を滿たし得ない同胞が有り餘つてをる社會內に、必要以上の贅澤を盡す少數者が同棲してをる現在の經濟組織に對して、識者は無感覺では居れないといふ事だ。クロポトキンもその一人だ。そして彼れの神經むしろ心臟は貧者の前に、母が子の危難を目睹したかの如くに活動する。そして現在の富者の前には、やゝもすると母が子の迫害者に對する如くに憎厭憤激の態度になる。そして手段としての××××する。

生產の方法としての科學を奬勵し、且つまた怠惰な富者を純化して相當の生產的業務に服させることは必要だ。けれども現在の貧者にむかつて現在の富者を、直接行動によつて無產者にしてしまはうといふクロポトキンの思想はまちがつてをる。何となれば、現在の富者が富み、貧者が貧しい理由は、主として制度にあるのだ。若今日の貧富が不都合なら、制度の改良を目的とすべし。況んや制度そのものも、果して破毀を必要とする性質のものであるか。クロポトキンが觀察しただけの現制度の弊からは、その總破壞を是認する結論はでて來ない。

クロポトキンは各人の必要に對して敏感だ。けれども彼れは各人の功績といふものをば殆ど毫も認めない。萬人の功績をば認めるけれども、各人の功績をば認めない。そんなものは非存在だ、不可能だと認める。發明者としての天才の功績といへども、歷代の萬人の收穫だ。自分のだ、汝のだ、彼れのだと呼び得べき功績も價値も、資も富も絕無だと判斷する。クロポトキンのこの判斷は果たして正當であるか。私は不正當だと判斷する。必要と功績と能力と、吾人はこの三つを認むべきだ。功績と能力を統一し包含してをる必要なら、必要一元論は聽こえる。けれども、功績と能力を拒斥した意味の必要の一元論は、社會政策の原則とはされない。吾人は各人の必要を尊敬せざるべからず。尊敬する唯一の方法はそれを滿たすのだ。しかしながら、各人の必要を滿たすためには、各人の能力と功績を無視し、故らに平等視せねばならないといふわけは決してない。實を言うと、各人の必要は、各人の能力及び功績を不可離の關係を有するのだ。

各人の必要を認めて各人の能力と功績を認めないクロポトキンは、顚つて各人の必要に不親切な結果に到達する。クロポトキンが、自由を信ずると自稱しながら、分業を承認するに否な

のは卽ちその一例だ。分業の原則は個性承認だ。個性を信じ、個性の保護成達を目的とする時に、吾人は必然的に分業を肯定する。クロポトキンの根本弊は、個性に對する洞察と、随つて同情が乏しい點にある。クロポトキンの最大美點が社會の大多數の同胞の窮乏困苦をわが身の苦痛の如くに、否な實にそれにも優つて堪えがたく感ずるにあると相對して、極めて鋭角的の對角をなしてをる。クロポトキンといふ一人が、その對角線をなしてをることは、古來偉人に矛盾多き一例として何の不思議でもない。偉人必ずしも完人ならずといふ法則は萬人既知の筈だ。

分業を失うてよい場合もある。科學と工藝が、敎育と交通機關と併せて發達する時代に、産業の地方的分類を昔通りに信ずるならば、それは大なるまちがひだからだ。けれども吾人は事實を過大視してはならぬ如くに、過小視してもならない。理想と現實との關係は動的だ、雨がふれば傘をさし、雨がやめば傘をつぼめねばならぬ如し。

クロポトキンが組合を信ずるにも拘らず、國家をあらゆる意味に於て否認するのはまちがひだ。國家は組合の一種たる意義を當然有するからだ。クロポトキンは小地方本位の組合を強く嘆美する。小地方本位の組合は勿論結構な事であるが、大地方本位の組合が無用有害とは考へられない。國家を中央集權、强制、壓迫の他の形式に於て想像し得ない事は缺點だ。組合は、職業を內容とし、專門を內容とし、地方を內容として、今後ます／＼發達するに相違ない。吾人はこれを希望する。個性の保護成達のためにだ。協力の經濟のためにだ。併しながら、組合が復雜に發達すればするほど、その多種多數の組合間の協力の組織が特殊の專門職業として當然要求される。生活の全野を見渡して、その各組合に共通の利害を發見して、各組合に代はつてこれを處理する係りが必要だ。各組合自身のために必要なのだ。今日の各國に於ける國防、警察、郵便、普通敎育、公衆衞生の如きはその例だ。生活が低度の社會に於ては、國防と警察が國家の主內容をなす。これは永久態ではない。永久態ではあるべからざる事態だ。聰明と良心の欠乏を補ふ方法としての國家制度は敎育と經驗の進み擴がるに連れて廢用となる。けれども多種多數の組合間に組織を創設し、維持する目的の國家制度は、別の運命を有する。海陸軍と警察のみに代表されない使命を有する。組合はおの／＼自治領を有する。けれども各組合は共治領をも有するのだ。生産者は勤務時間や、利益の分配をば

生産組合内できめて然るべし。けれども生産品の價格をば、消費團と協定しなくては正當でない。これは一例に過ぎない。自治領と共治領とは、多種多數の組合の各々と相互の間に、併行して發達する。その共治を委任統治する者が國家であるべきで、自治體のすべてに共通な興味を、國家は管理する任を引き受けるのだ。

クロポトキンの一弊は、劃一を招いて、統一を斥けるにある。人間性にむかつてだ。隨つて制度にむかつてだ。

各人の必要を明視せよ。然らば各人の必要は主觀には絶對的に强いかも知れない。けれども客觀的には各人の必要間には種類の差も程度の差もある。そのすべてを組織的に滿たすのが眞の制度だ。眞の思想家は、決して眞の政治家と背馳すべき性質のものではないのだ。クロポトキンの思想が個性に至切なものでないと同時に、クロポトキン自身がわが個性に極めて忠實な人であつたことは、虐げられたる階級、不運な同胞に對する彼れの同情が、遣る瀬もなく、とめ度もなく、熱い〱ものである事の活きた證據だ。大多數同胞の最低限の必要をも滿たさないで、永久に小數者の特權たるべき天才者を謳歌するなどは、想ひも及ばぬ事なのだ。天才が山に登つてはニーチエとなり、地を匍つてはクロポトキンとなる。最近は天才が地を匍ふ術を學びだした。レーニンでも、ラッセルでも、それだ。泰山は土壌よりも大ならず。大地と平地を吾人は荒廢に委してはならん。野を肥やす吾人の手が山に植ゆる吾人の手と相打つてはならんのだ。

# クロポトキンの歐洲戰爭論

昇曙夢譯

譯者より＝本節はクロポトキンが歐洲戰爭中ロシアの或雜誌社の依頼に應じて、歐洲戰爭の意識を國際勞働聯盟の立場から論じたもので、何所までも獨逸の軍國主義と帝國主義とを攻撃して正義人道を高唱した所に、筆者の面目躍如たるものがある。

# 一

今の場合凡ての人々が、特に歐洲文明の結果と國際勞働組合の理想とを尊重する人々が、進んで取るべき唯一の方針は、我々に取つて最も貴重なる約束の敵即ち獨逸の軍國主義と帝國主義とを撲滅せんとすることである。既に一八七一年普佛戰爭後、強盜の如き獨逸帝國が、アルサス、ロートリンゲンの二洲をその洲民の意志に反して無理に併合した時、リープクネヒトとベーベルとは獨逸の軍國主義と帝國主義とに對して宣戰して居る。彼等は獨逸の斯かる掠奪的行爲のうちに、將來の不可抗的大戰爭の萌芽と、この大戰爭によつて惹起さるべき文明の停滯とを看取したからである。殊にバクーニンの如きは過激なる國際勞働組合の立場から、この軍國主義と帝國主義とに宣戰し、南佛蘭西に於て獨立戰爭を企てたほどであつた。またガリバルディとその義勇兵とは、ナポレオン三世が沒落して佛蘭西が共和國を宣言するや、直ちに佛蘭西の爲に起ち、一電報を全歐洲に發送して、カプリの獅子が獨逸の侵略から佛蘭西を防禦する爲に上陸したといふことを告げた。そればかりでなく、獨逸が佛蘭西に侵入したことゝ、佛蘭西から二洲を割取したことゝ、その新領土に五十億フランといふ前代未聞の償金を課したことゝは、當時既に或過激派に屬するものばかりでなく、全歐洲の中流社會や知識階級に屬する穩健なる思想家のうちにさへ反感を起させた。そして眞面目なる歐洲人は、獨逸の戰勝と、歐羅巴の中央に強大なる獨逸帝國の勃興したことゝを以て、從來佛蘭西によつて維持されて來た歐洲文明を永久に停止するものと見、その時まで獨逸の眞面目な代表的人物を動かして來た理想から獨逸自身が遠かるものであることを看破し、同時に獨逸の勝利は全歐洲に於て武力と腕力との勝利に、即ち文明の蹂躙に導くものであることを疑はなかつた。

軍國主義の反對者等は、今も猶ほ平和の武器を以てこの軍國主義と最後の一瞬間まで頑強に奮鬪して居る。或者は非戰論を以て、或者は世界的同盟の威嚇を以て何れも軍國主義に反對して居る。けれども長年の間に堅い根を卸した軍國主義の勢力は遂に勝利を占めた。曾て支那の團匪に對して軍隊を送り、自からアッチーラを以て任じ、アッチーラの軍隊のやうな狂暴を部下の兵卒等に命じた者が獨逸の元帥となり代表者となつて、遂にその狂暴なる軍隊を西歐にまで放つに至つた。我々の義務は

我々の權内に於て爲し得る丈け方法を盡して、この暴力に一大痛棒を加えることとである。

ビスマーク公は曾て、『軍事上の戰爭と同時に外交上の戰爭をしなければならぬ』と言つたが、玆に外交上の戰爭とは權謀術數を謂ふのである。獨逸の外交家等はこの言を能く遵奉して居る。這回の如き獨逸の外交家等は、露西亞が塞耳維を援助したのが此の大戰の原因であると言ひ觸らし、この事を獨逸國民に信じさせようとして、フェルヂナンド侯の暗殺を利用した。けれども獨逸政府の意志が既に七月十九日に開戰に決してゐたことは、西歐諸國の政治家等が等しく認むる所である。墺國政府が塞耳維に對して最後通牒を發したのも、この決意の結果であつて、決して原因ではなかつた。

## 二

這回の歐洲大戰の原因は塞耳維でもなければ、露西亞に對する獨逸の恐怖でもない。多少の例外はあるかも知れないが、兎に角この戰爭は獨逸の政治的生活を左右してゐる階級が、曾て佛蘭西の上に占めた勝利と、海に陸に長足の進歩を遂げたその力とに心醉した結果である。この階級は地中海に於ける豐富な植民地や、小亞細亞や、支那の一部を獲得しやうとする獨逸の政策は、隣國が掣肘を加えたり、また印度洋即ち斯波灣に於ける未來のアドリヤチックを獲やうとする獨逸の計畫を妨害したり、歐羅巴と亞細亞と亞弗利加とに確立しやうとする獨逸の霸權を妨げたりすることを、獨逸に取つて此上なき侮辱的行爲だと思つて居る。今では獨逸の下級勞働者さへ大多數は例の侵略主義の病毒に感染して、強大なる侵略的資本主義の急速なる發達を空想するに至つた。之は最近四十年間に於ける獨逸産業の異常な發達が、製品販賣の市場たるべき農民社會の富の發達を件はなかつたからで、その結果として彼等は軍國主義を讃美し、軍隊を崇拜し、只管征服を空想するやうになつたのである。最近の事件はこの觀察が決して誇張でないことを立證して居る。

ウイルヘルムが英國政府に送つた書翰の中には恁ういふことが書いてある。『貴國は當然中立の態度を維持せられよ、余は歐羅巴に於ける佛蘭西領には手を觸れず、たゞその植民地を奪取せんとする者なり』と。然るに彼が伊太利に送つた書翰の中には、『貴國は中立を維持する勿れ、進んで余と同盟せよ、然らば貴國はサウオイヤ、ニツツア、チユニスを獲べし』とあ

る。更に彼が露西亞に送つた書翰の中には、決して露西亞を冒さないといふことを約して、『貴國はこの事件に干渉することなく、余をして宜しく英國、白耳義及び佛蘭西と決戰せしめよ』と言つて居る。

また獨逸宰相は英國外相に送つた書翰中に、『英國が白耳義の獨立と中立とを保障せる反古同樣の歐洲條約に大なる意義を附せんとするは理由なきことなり』と言ひ、獨逸に取つては如何なる國際條約も存在しないといふことを露骨に傲言して居る。それから獨逸人は我々に向つて斯んなことも言つた。ナポレオン一世は一切の國際條約を蹂躙する權利を有つてゐると自信してゐたと。或は然りであつたかも知れない。然し少くとも一八一二年の戰爭までは、佛蘭西共和國の軍隊は勿論、佛蘭西帝國の軍隊さへ農奴制の撲滅と市民の法律上の平等とを全歐洲に傳播したことは事實である。此所にまた彼等の功績があつた。が、今日獨逸の軍隊はその燒棄しつゝある都市村落に何を齎らして居るか。軍國主義の外何物をも齎らさないではないか。野獸のやうな兵卒の勝利の外何等權利の觀念も齎らさないではないか。一八七〇年まで獨逸に發達したその文明を徒らに泥濘の中に踏み込む外、他に何物をも齎らさないではないか。

國民性の自由、平和の理想、文化の進步―是等は獨逸帝國々旗の示さない所である。獨逸の國旗はたゞ戰爭を約束し、常に新しい戰爭の保障となつて居るに過ぎない。獨立國の征服、强大なる軍國の建設、國民生活を軍事的理想に服從せしむること―是れがウイルヘルムの理想であつて、彼は此の理想の結晶である。彼は自から稱して「神の鞭」アッチーラと言つて居る。

若し這回の戰爭が獨逸の勝利に歸するとしたならばその結果は何うなるだらうか。何にしても此の戰爭に於て獨逸が勝利を占むるといふことは全歐羅巴の文明を武力の下に隷屬せしむると同じ結果になる。一八七〇年に於ける獨逸の勝利は、文明史的關係に於て既に四十年の停滯と隷屬とを我々に齎らした。今回若し獨逸が白、佛、英、露の聯合軍に勝利を占むるならば、―全歐洲と全スラヴ國の間に弘布されて居る文明を半世紀若くはそれ以上停滯させることは明白である。勝ち誇れる獨逸主義が這回の戰爭に於て如何に野蠻な形式の中に現はれてゐるかといふことは此所に言ふまい。が、たゞ私は獨逸の制規軍が前代未聞の恐るべき蠻行を敢てしてゐることは動かし難い事實によつて證明されてゐるといふことだけを言つておく。而も獨逸の下士卒は白耳義の老幼婦女子を辱しめ虐げながら、彼等を反逆者

と罵り、また彼等を目して謀反人であると言つて居る。然しそれよりも最つと〳〵恐ろしいことは、世界の文明國の嫌惡の的となつてゐる獨逸人の此の暴行を極端な社會民主黨が擁護してゐることである。

今日獨逸以外の全歐洲の勞働者階級は、這回の戰爭が獨逸國民に如何なる刻印を捺すかを知つて居る。そして彼等は獨逸の全敗北と、彼によつて我々の生活に齎らされた戰爭熱の絶滅とを待ち望んで居る。街も今日我々の周圍に行はれて居る事件に眼を閉ぢない者、人類の進歩發達を希望する者、及び個人的執着や慣習や官僚的愛國心などで自分の思想を昏まされない者は、一刻も躊躇逡巡すべき時ではない。我々は傲慢なる軍國主義の獨逸が全然敗北に歸することを願はなければならない。決して中立を守るやうなことをしてはならぬ。今日の場合中立は戰爭に對する姑息な寛容である。

大多數の人は皆この事を了解して居る。そして諸方から斯ういふ聲が聞える。聯合軍が勝つに違ひない、此の戰爭は歐洲に於ける最後の戰爭であらう、之によつて自由なる發展に對する各國民の權利が承認されるであらう。歐洲聯盟は地圖の改造によつて廣い適用を見るであらう。戰爭の醜態と、武裝的平和が戰爭を豫防するに足りなかつた事實とは、世界的武裝解除の機が近づいたことを示して居る。凡ての文明國民は世界的危險が襲ふて來たその時から内部的團結の必要を痛切に感ずるやうになつた。この團結は國民を形造る凡ゆる階級の新らしい合同的生活の萌芽である――斯ういふ聲が到る所に聞えて居る。之が今日西歐に於て盛に芽を吹き出しつゝある思想である。そして此の眞面目な思想は必ず最後の勝利を占むるであらうと私は信ずる。

## 三

非軍國主義者や非戰論者等はその非戰論の宣傳によつて戰爭を防禦することが出來ると思ふて居るが、然しそれは彼等の凡ゆる事業に横はつて居る根本的誤謬から生じたものではあるまいか。戰爭をして不可避ならしむる原因は今日尚ほ依然として非常な勢力を有つてゐることを彼等は忘れてゐる。彼等は筆を採れば、直ちに現代戰爭の原因は歐洲の資本主義と、それから生ずる凡ての結果であると論じ、或はまた戰爭を構ふる國に對して世界的聯盟を布告すれば戰爭は出來ないやうになると説く。けれど資本と、資本に支配されて居る武器との偉大なる

力は、今や不思議にも消滅し、壞頽し、麻痺して居る。是れは獨り佛蘭西に於てばかりでなく、佛蘭西の一部を征服し、佛蘭西を壓迫し、佛蘭西の植民地を掠奪することを以て、自國の資本主義を發展させるための必然的步調と心得て居る獨逸に於てさへ、その影を滅したのである。

斯う考へて來ると、そこに明かな矛盾の横はつて居ることが解る。で、私は自から問ふて見た。非軍國主義者の多數は、歐洲に於ける資本主義の發達と戰爭との間に密接な關係の存することを完全に意識したか何うか。彼等は戰爭に於て餘りに大なる意義を各個人の強い意志に附し過ぎはしなかつたか。それで私は獨逸帝國の佛蘭西侵入の不可避なことが明瞭になつた最近十二年間、佛蘭西の友人等に次のやうなことを極力主張した。それは非戰論の宣傳と、獨逸が一旦宣戰した際に我々の取るべき態度とは全然別であるといふことである。

今假りに或社會に我々二十人の人間が住んで居るとする。そしてその中の一人が他の者即ち弱者を壓迫しやうとする。この場合私は弱者を壓迫する強者を誡むるために、自分の凡ゆる努力を用ゐなければならぬ。が、不幸にして私の努力が何等の効力をも現はさずに、強者が益々猛烈に弱者を苦しむるやうなことがあつたら、私は以前爭鬪の有害と平和の必要とを說いたといふ理由で、この強者の横暴を默つて看過することが出來るであらうか。決して然うではない。私は強者が弱者を壓迫することに反對する者であるといふ理由から、身を挺して弱者を援け、強者を打ち懲すであらう。たとへ弱者の頭上に下さるゝ鐵拳は私の頭上にも落下するといふことを知つてゐても、必ずこの行動に出づるであらう。私は個人的侮辱なら忍んでも宜いと思つてゐる。けれども惡人と強者とが弱者を虐めたのを默つて傍觀するのは許すべからざる卑怯である。斯んな卑怯が絶えないから壓制が横暴を止めないのだ。勿論非戰論と雖も、一國が他國の勞働や、その勞働によつて得た日當を利用せんとする慾望が、戰爭の眞の原因であるといふことを、人々に理解させる上には有効である。それればかりでなく非戰論はまた、勝利の戰爭ですら結局は勝利者自身に對し利益よりも寧ろ損害を齎らすものであることを人々に納得させる効力を有つて居る。けれども今のやうな事態に於ては、そのやうな宣傳は到底戰爭を防壓することは出來ない。何故なれば、まだ或國には他國の勞働を利用して自國の口腹を肥やさうとする狡猾な國民が存して居るからである。

世界的聯盟の威嚇は、或は一時侵略熱を抑制し得るかも知れない。けれども世界的聯盟は或る一國が戰鬪行爲を開始し宣戰を布告したその瞬間に直ちに成立するものではない。斯かる危急の場合、侵入を以て威嚇された國民は、動員が一日後るれば征服者に一洲を與へ、餘計な數十萬人の犧牲者を出さなければならないといふことを感ずるから、世界的聯盟など待つては居られないのである。

## 四

更に伊太利や佛蘭西や瑞西に於けゝ熱心な非軍國主義者の團體に就いて言へば、彼等は戰爭を否定するといふ主義から、兩交戰側の何れにも加擔することを好まないが、私の見解からすれば彼等は重大な誤謬に陷つて居るやうに思はれる。彼等の同情は言ふまでもなく佛蘭西と白耳義とに注がれて居る。彼等は一國民が他國民を征服したり、その領土を掠奪したりすることを憎んで居る。『けれども戰爭は罪惡である、それ故に獨逸の味方となることも、その敵となることも好まない』と、彼等は言ふ。然し彼等は次の一事を見落して居る。這回の戰爭は新しい歷史を造り、凡ゆる國民の前に世界的建設の新題目を提供して居る。それ故に此の改造が開始される時、現世紀の運命が戰場に於て決せらるゝその瞬間に活動を拒んだ者は、來るべき新生活に入ることが出來ない。一事とは即ちこの事を言ふのである。實際戰爭は幾多の悲しむべき問題を提供するものであるが、然し最つと單純に戰爭を觀ることは出來ないものだらうか。何故か這回の戰爭に對して大なる希望を囑して居る者が到る處に在る。この大戰爭は歐洲の中央に於て、隣國を威嚇するやうな強大なる軍國の勃興に終りを告ぐるものであるといふ說が到る處から聞える。何故か人々はこの大戰爭が善良な方向に於ける平和的發展の新しい時代を產み出すものであると信じて居る。

この數ケ年間に於て戰爭の慘劇はその驚くべき醜態を曝露した。そしてこの戰爭によつて喚起された社會各階級の公共事業に於ける結合は、啻に消失しないばかりか、益々共同的生活の基礎を固ふした。之を要するに這回の戰爭が種々の意義を有つてゐることは確かである。例へば獨逸の覇權の滅亡、墺帝國の分裂、スラヴ民族に於ける新生活の曙光、再びその民族的要素を歐洲の智識と創造の寶庫に齎らさんとする波蘭（ポーランド）の統一、一としてこの戰爭から期待されないものはない。

この戰爭に斯かる意義を附することは勿論喜ぶべきことで、この意義が何のくらゐ實現されるかは分らないけれど、兎に角その實現の端緒だけは置かれるに違ひない。けれども戰爭に對する我々の態度を決定する爲に斯んことを考へる必要があるだらうか。第一、戰爭の最も手近かな問題は既に充分明瞭に決定されたであらうか。曾て一八七〇年に、負傷せる老ガリバルディがその友を召集して佛蘭西共和國の爲に戰つた時、彼は決して世界的問題などは考へてゐなかつた。彼は戰爭の意義などは評價しなかつた。彼は佛蘭西に於て「自由」と壓制との鬪ひ」を見て、何時もの如く自由の味方に起つことを自分の義務と考へたのである。彼が一八六六年の普墺戰爭に參加しなかつたのも亦當然のことである。何故なれば、彼は普墺の何れの爲にも獨逸聯邦を壓倒する權利を認めなかつたからである。けれども彼は普佛戰爭には無關心では居られなかつたのである。といふのは、ナポレオン三世が倒れた時から戰爭は獨逸に取つては單に征服といふことの外他の目的を持つてゐなかつたからである。そればかりでなく、權利と進歩とが佛蘭西側にあつたからである。

這回の大戰に於ても同じことが言へる。獨逸は自國の資本家等の爲に他國の領土と植民地とを要するといふ理由と、その競爭者たる佛蘭西を征服する爲には、數百萬の大軍をして白耳義を通過させなければならぬといふ理由と、富を獲る爲には英國を擊破しなければならぬといふことを名として、徒らに戰爭してゐるのであるから、我々は是非共この橫暴なる力を擊破しなければならない。

この事は最近數ケ月間に生じた種々の事件を考へたら明かに分ることである。獨逸人は白耳義や佛蘭西の百姓等が血と汗を流して耕した田畑を荒し、都市を燒き、老若男女を虐殺するの權利と使命とを持つて居るかのやうに思つて居る。獨逸政府はこの事を隱さず表明して居る。彼は征服を目的として開戰したと言明した。即ち佛蘭西を永久に壓倒してその植民地を奪ひ、それによつて自國を富まし、英國を擊破してその植民地の幾分を奪取し、露西亞を撲滅してその進擊を豫防し、自國の國境を擴大し、ペトログラードやモスクヴアーの近邊にメッツのやうな要塞を築造しやうといふ目的である。若し果して獨逸が這回の戰爭を斯ういふ目的で開始したとすれば、征服者の勝利を妨害するとは、つまり歐洲をこの威嚇から救ひ出すと同じことである。さればこの戰爭が獨立戰爭の名に應はしい世界的大事業

とならんが爲には、我々は何所までも獨逸に對抗して起たなければならぬ。猶ほ這回の戰爭に就いては今一つ重大な問題がある。それは、この機に乘じて獨立的發展の權利を獲やうとして努力しつゝある各小民族の問題である。

要するに今日歐洲に於て行はれつゝある大戰爭の性質は既に充分に說明されたと言つていゝ。だから「高尙なゼルマン文明」の所有者に就いては最早是以上書く必要はないのである。

たゞ最後に私は言つておく。我々の間に軍事的掠奪の方法手段を完全に發展させた七千萬の人口を有する國家が儼存する限り、そしてその國民が上下を問はず一國を擧げて是等の方法を辯護し、是等の手段を目して國家發展の擔保と思惟して居る限り、歐洲に於て自由、平等、四海同胞等の觀念の發達を將來に期するが如きは絕對に不可能である。獨逸國民たる者は、宜しく侵略的目的の爲に造られた自國の文明が如何程道德的に墮落して居るかを實際に見る必要がある。（完）

# クロポトキンの藝術觀

上司小劍

## 一

私は學者でもなく、批評家でもなく、また一つの宣傳者でもないから、彼れの觀るところを、どうしようといふ氣はない。たゞ彼れの書いたものゝ一部を通して、彼れの藝術觀を覗ふならば、其處に極はめて透明な、水晶で造つた箱の如きものを見ることが出來ると思ふのである。

## 二

眞に彼れの藝術觀は透明である。さうして言ひ得べくんば、偉大或は廣濶の文字をも使つてみたい。さういふ文字は、往々空疎を意味し、稀薄を現はす恨みがあるけれど、彼れの偉大は

殺害であり、彼れの廣濶は玲瓏としてゐる。茫乎として其の果てを知らぬが、しかも遠いのではないといふ趣きがある。

三

彼れは萬人が皆生産者たるとともに、また藝術家若しくは藝術愛好者（眞の理解ある意味の）たらねばならぬとしてゐる。卽ち總べての人が皆一日四五時間の樂しき勞働（トラヴァイ、アグレアブル）をもつて、一般の生産に資すべき田野や工場に於ける仕事を濟ませ、其の日或は其の週、または其の年の半分からをも、藝術的若しくは科學的の欲求に費し、或は其の趣味嗜好の爲めに、それ等の日、週、年を用うべきものだとしてゐる。

四

其の折りには、それ等の欲求や想案を滿足せんが爲めに、多くの協會が興る。たとへば或る人々は文學の爲めに其の時を費さんとする。そこには作家、植字工、印刷工、彫刻家、圖案家等同じ目的の爲めに、其の愛する思想の弘布を追求する總べての人を含んだ團體（コムミュン）が組織されるに違ひない。

五

今日では職工といふものがあるので、それに一日三フラン或は四フランを與へて置けば、作家は其の著作の印刷を任かせることが出來ると思つてゐるから、印刷所がどんな風のところだといふことを知らうともしない。しかし行々は學者や作家が其の文章や詩歌を公にする爲めには、彼等相互の間及び印刷工等とも聯合しなければならぬ。

六

手仕事が恥辱でも何んでもなくなつた日には、總べての人が皆手仕事をしなければならぬことゝなつた時には、別段彼等の爲めにそれをやる人がきまつてもゐないから、作家の愛讀者はもとより、作家自身も、直ぐに活字を扱ふ術を知るであらう。さうして自身の手で印刷したものを器械から直ぐ取り上げて見る樂みを解するに至るであらう。朝から晩まで辛いと思つて働く活版小僧に取つては、虐待の責道具の如き印刷機も、贔負の作者に思想を發表させようとして、それを使用する人々にあつては、娯樂の器（うつは）ともなるであらう。

七

まづざツと、彼れはかういふ風に考へて、萬人が皆勞働することと、さうして勞働といふものが結局快樂であらねばならぬことゝ萬人が皆科學を究め、藝術を味ひ得べき教育の普及と、それ等の自由とを求め、各種の協會の一組織に重きを置いてゐ

る。

## 八

さうして藝術を感得し能ふものは、たゞ大なる觀念(イデエ)のみとし藝術をもつて直ちに創造(クレエアシヨン)と同意義であると言ひ、それにしては今の職業的藝術家等が、一二の極はめて稀れなる例外を除いて、新たなる地平線を突き破らんが爲めには、餘りに卑俗の域を脱し得ないと觀てゐる。

## 九

ラフアエルやムリロオは、其の新理想の探究が、おのづから宗教的舊傳説に適應(アツコムモデエ)することの出來た時代に於て描いた。彼等は世々の敬虔なる事業を代表したる大寺院を飾らんが爲めに描いた。あの神秘的な光景と端嚴とを具へた殿堂は直ちに都市の生活其のものと結合して、よく作家の感興を發露し得たのである。彼れは實に人民の記念物の爲めに働いて、其の同胞なる市民に對して語つた。其の代りに彼れは感興を受けることを得た。丁度本堂や、柱や、彩色(さいしき)した窓や、彫像や、粧飾した扉なぞが表白するのと同じやうに、民衆に向つて訴へたのである。

## 十

ところが今日では、畫家としての最大名譽は、其の畫布(カンヴアス)を金メツキの枠(わく)に入れて展覽會に掲げるくらゐのことである。それは一種の骨董店であつて、其處には人がプラドオに於いて見る如く、ヴエラスクエの乞食と、フイリツプ二世の犬とにつゞいてムリロオの昇天が掲げられてゐる。憐はれなるヴエラスクエよ、憐はれなるムリロオよ！　曾つては其の都市の城砦(アクロポオル)の上に生きたる希臘の彫像も、あはれやルウヴルの赤暖簾(あかのれん)の下に屏息してゐることよ！

## 十一

希臘の彫刻家が其の大理石を刻むに當つては、實に其の都市の魂(たましひ)と心(こゝろ)とを表現させようと努力したのである。其の總べての感情も其の名譽の總べての傳説も、再び彼れの作品の上に生きるのであつた。然るに今日に於ては、さういふ眞の都市は存在しなくなつて、思想觀念の交通もありようはない。即ち都會といふものは人間の偶然の聚合である。…………さればたゞ都市や州郡や國民や若しくは諸國民の聯合が、彼等の親和的生活を再現し始めた曉に於いて、藝術はこゝに共同に保有せる理想から其の感興を引き得るのである。この時に及んで建築家は都市の記念物を想案する。それは最早寺院でも牢獄でも城砦でもない。また畫家、彫像家、彫刻師、裝飾師等は何處

に其の畫布や彫像や裝飾を置くべきかを知る。彼等は皆同一の生ける源泉から、其の製作の力を汲み得て、共に與に、欣んで將來の道に進むのである、

## 十二

それまでは、藝術といふものが、たゞ世にあるといふに過ぎぬ。近時藝術家の最良なる畫と言へば、おほかた自然や村落や溪流や大海や高山を寫したものである。しかし畫家は自分に勞働しないで、田野の詩趣を描くことは出來ない。單に思考したり、想像したりしたゞけならば、渡り鳥が地上を知るが如く、たゞ飛び過ぎながら見たといふのである。畫家が其の青春の血氣で、朝早くから田を耕し、或は勤勉なる草刈る人に伴はれて、大きな鎌で草を薙ぐることを樂み、歌ふ聲の空に響く少女等と共元氣を比べる、といふやうなことがなかつたならば、どうして田野に於ける勞働の詩趣を描くことが出來ようか。土地の愛や土地に生ずる物の愛は、畫筆の先きから得ることは出來ぬ。眞にそれを愛しないで、どうしてそれを描くことが出來よう。されば今の第一流の畫家でも、この方面の作物になると、甚だ拙いのを免れぬ。生活の眞を得ずして、センチメンタルなばかりである。まるで力（フオルス）がない。

## 十三

藝術家が眞に漁業の詩趣を解するには、日夜漁夫とゝもに海上に在らねばならぬ。自ら漁り、波濤と戰ひ、暴風に苦まねばならぬ。重い網を曳き上ぐる樂み、其の網が空であつた時の失望、それ等を皆經驗してゐなければならぬ。彼れが人間の力を解して、それを藝術の作物の上に現はすには、長く工場の中に居て、工作の勞苦と快樂とを知り、强烈な窯の火焰で金屬を鎔かしたこともなければならぬ。彼れは夕陽を其の耕作の歸りに見たのでなくてはならぬ。其の壯麗な光景を描くには、自ら一農夫として、農民の中に居たのでなくてはならぬ。汝が人の感情を寫さんとするには、其の感情がまことに汝自身に滲み透つてゐなければならぬ。將來の藝術家は平民と一樣の生活をしてゐるので、其の作品を賣らねばならぬといふことはない。これ等の作品は直ちに生活全體に缺くべからざるものとなるのである。彼等が人生を待つて始めて完成さるゝが如く、生活其のものもまた彼等を待つて完成さるゝのである。されば人々は其の作品を見んが爲めに、藝術家の居るところに行くのである。

## 十四

藝術は其の發達の爲めには、無數の差等程度を介して、工業

と結合しなければならぬ。ラスキンや、社會主義者の大詩人モリスが屢々證明した如く、工業と混和しなければならぬ。總べて人間の周圍にある萬物は、街上に於いても、公共記念物の內外にあつても、純然たる美術的形狀を具へるやうにしなければならぬ。萬人が安慰と閑暇とを享有した時に於いては、必ず藝術上の組合が出來て、これ等の各組合は、其の會員の住居を裝飾することなども企てるに違ひない。エディンバラ市の青年畫家等が市の貧民病院の壁や天井を裝飾したるが如く。

十五

或る畫家や彫刻家なぞは、自身の感情を作物の上に現はして其の愛する婦人や親朋に捧げるであらう。愛の爲めに愛を皷吹されて成つた彼れの作物は、果して、單に價の貴きをもつて、俗人の虛榮心を滿足せしむる今日の藝術に劣るであらうか。

十六

以上、クロポトキンの藝術觀の一面をいゝ加減に拔き書きしてみた。要するに彼れは、より自由な世界から、より廣く大きな藝術を求めようとしてゐるのである。さうして今日に於ける藝術の衰微を說き、ルネスサンスの諸大家に及ばざることを遠しと嘆じ、學問は進步したが、藝術は文明から逃げるらしいと晒つてゐるのである。

# 社會連帶の思想

早大教授　北澤新次郎

## （一）社會連帶の本質

個人と社會に關する概念は、輓近哲學思想の發達と共に根本的の修正を加へられ、殊に十九世紀の末葉から佛蘭西に於て發達した『社會連帶』(La solidarité sociale)の學說は、獨り社會思想の上に最も注目すべき暗示を與へたのみならず、經濟學に於ても法律學に於ても倫理學に於ても生物學に於ても政治學に於ても、重要なる學說として注目されるに至つた。そして今や

佛蘭西における幾多の社會學者及經濟學者、たとへばジュール・ケーム、レオン・ブルジョア、フウイエ・レオン・ジュギー、シャール・ジードなどによつて組織的體系を與へられるに至つた。

　社會連帶は、社會を組織する個人は、根本に於て密接なる社會的鏈繫の理法によつて支配せられ、この理法の上に立つて各個人が社會に於て連帶的生活を營むに非ざれば、人類社會の完き發達は望むべからざるを主張するもので、各種の科學の證驗するやうに宇宙萬物皆相關の理法を以て發展して行くが如くにこれが人類社會に發現して社會連帶を形造るなくば、個人の發展社會の發達は期すことが出來ないと云ふのである。學者はこの學説を説明するに當つて、種々なる先行の學説と一致せしめて考へてゐる。社會連帶の思想は、曾つてクリスト教社會主義によつて宣言されたことも考へ得られる。彼等に向つて、それは福音の誡めの應用である。また經濟學者の見解に從へば、それは經濟的調和の實現であると觀ぜられ、哲學者の見地よりすれば、それは世界に於ける『社會發生』(biosociologique)の原理とも考へられ、またフウリエ、イヅーレ、フランク・ブレンタノなどの見解よりすれば、それは『和合』(entente) の法則であり『生命の合致』(union pour la vie) の法則である。また實證哲學者にとつては、それは『利他説』(l'altruisme)の單なる言葉の一に過ぎない。レオン・ブルジョアはこれに法律的形式を與へて、我々が社會全員の努力の結果たる共同の利益に參與することによつて成立せる『默約』(Quasi-contrat) の效力により、人は生得的に社會の債務者であるが故に、我々はこの債務を履行せざる可からずと説くなど、この學説は有ゆる方面よりその贊成者を得ることになつた。然かも以上の諸家に於てはこの學説に、異なつた名辭の下に根本に於て同一の主張がある。彼等に一貫した觀念は、個人と總ての他の者との間に、連帶の必然的なる繫縛を是認する所にある。彼等に從へば、この繫縛は唯總ての者に對する各々及び各々に對する總ての者の權利義務の尺度となり、また社會問題の科學的及び道德的決論たらんとする、この連帶の原因、條件、限界の正確なる課程となるものである。

　社會連帶のこの觀念は、永い間互に無交渉でゐた二つの力、即ち今日に於て卓越したる進化の程度に達した總ての國民を一致結合せしめた『科學的方法と道德的觀念』(laa methode scientifique et l'idée morale) の結果である。それは我々の社

會事象に深い緣綠を投げた、精神と良心の二重の運動の結果である。そしてそれは一方に於ては、實驗なしに受容れられた信條の先驗的組織の精神を解放すると共に、傳統と權威とによつて置かれた内的整調を、自由なる探究に負ひそして絕えざる批判に付せられてゐる整調に交換する。また他面に於ては、實現するなき概念、證驗すべからざる制裁、單に感情——善の尺度——及び理性——眞理の證徵——の一致から結果する行爲の規準の外側に求められる義務の性質に對して、更に多く嚴肅に良心を束縛するものである。この學說のこれらの主張は、世人がソリダリスト運動と稱するものに關する、更に根本的な更に一般的な原因の起原であり、この學說の生育する力となるものである。

### （二）　ソリダリストの個人と國家と社會觀

ソリダリストは國家の干渉を排斥するものではない。否、彼等は國家の强制力によつて國民の經濟的、道德的の諸生活を圓滑に進展せしめんがために、却つて國家の干渉を是認する。レオン・ブルジョアに從へば、富の生產と分配と消費の現象の動作に於ける、國家の總ての干渉に對して或る經濟學者は批難してゐる。彼等に據れば、この現象を支配する法則は、人間の立法者にも負はず、また他の者が何等の變更もなし能はざる自然法であると云ふ。けれどもソリダリストに從へば、人類の國家生活の間に圓滑なる連帶が行はるゝためには、國家の干渉は固より正當である。哲學的に云へば、人は本來自由である。然し一面より觀れば、國家は總ての進步の源泉であり條件である『生存競爭』(lute pour l'ecistence) に於けるこの自由の實行を、彼に保障する上に或る限界を置かれねばならない。假へば個人の所有權は、それ自ら人間に固有の權利である。個人の所有權は啻に自由の結果であるのみならず、また自由の保障である。それ故に所有權は絕對である。或者の所有權は他の者の所有權によつて限定されてゐる。然しながらたとへば課稅の先取が無ければ、そこには個人の所有權の社會的配當は決してあり得ない。また國家は個人の自由と所有權を防禦するために必然なる手段を採る。そしてその必要に應じて彼は總て彼の義務を履行し、そして彼の權利を行使する。國家の干渉は、彼の義務の履行と同時に、彼の權利の行使である。この限界に於て國家の干渉は許されねばならない。これらの諸點を超過した國家の總ての干渉は、今度は國家が人間の自由と所有權の上に襲擊と簒奪

とを加へることになるであらうと、ソリダリストは云ふ。

これに反して或る社會主義者に、經濟生活の現象に於ける國家の干渉を要求する。科學の驚嘆すべき發達も、人間に經濟的の幸福を増加しなかつた。更に科學による世界の變事は、多くの殘酷なる貧困を齎した。それ故に或る社會主義者は、個人の財産權の干渉を國家に要求し、更に共產主義者は個人の財產權を全然否認せんとしてゐる。之に反してソリダリストは、個人の財産權を是認し、從つて之れが結果たる不平等をも是認する。彼等は不平等なる者の間の相互連帶を豫想し、各國人の特質を無視せんとする無差別觀に反對する。彼れは唯國家の干渉を個人的自由と財產權の保障の限界に於てのみ認むるに過ぎない。ソリダリストに從へば、生存競爭に於て弱者の强き破壞に於ける力の過剩を矯正せんとすることは、性質の無差別を供給する幻影である。若し人間の自由が原則であるならば、それに就て『生存權』(droit à l'exitence) は必然に總て他の者に對して先行するものである。そして國家は總て他の者に對して、それを保障せねばならぬ。若し個人の所有權が自由の結果の實現であるならば、それは唯自由の延長に過ぎない。個人の所有權に對する國家の干渉は、不正義による財物の取得の場合に於てゞあらねばならぬ。

それ故に、その存在理由が人々の間に正義を打建てるにあると考へられてゐる國家は、その干渉の權利を有し、その結果として社會的平衡を打建てるために干渉の義務を有してゐる。社會に於ける各々の連帶を無視せんとする利己主義は、唯權威によつてのみ打勝つことが出來る。そして勞働に於て、及び生產物に於て、彼の適法なる配富を各々に對して採らしむることは尠く共ソリダリストの説く理想である。

## （三）　社會哲學としての連帶主義

由來科學的眞實と道德的眞實とは、人類の社會生活に於ける兩立し難き背反である。然らば如何にしてこの二つの間の調和が可能であるか。これは社會概念の更新が、用意され完成される科學的方法と道德的觀念の嚴密なる一致によつて得られるのである。そしてソリダリストに從へばそれは或る著述家が道德と科學との決定的なる離反、そのもの丶社會的破産を光榮を以て宣言した同じ時代に於ける、單純なる事柄に過ぎない。

彼等に從へば總ての眞實は、社會學的領域に於ても、また他の諸科學に於ても、唯事物の不偏なる檢證に於てのみ得られるである。たとへば經濟的及び社會的現象は、爾來人の知る如く、形而下的化學的並に生物學的現象として、避くべからざる法則に支配されてゐる。然し現象はこ丶では、更に錯綜してゐる。それ故にそれに就ての觀察は更に困難である。實驗は唯稀に試み得られるのみである。然かも現象の錯綜と彼等の研究の困難は、正確に彼等の鏈繫を何等變ずるものではない。總ての

演繹的學説と總ての哲學的空言の徒らなる敷衍は、この錯綜せる社會事業を説明するに無價値である。自然の社會法則は、唯更に高度に於ける形而下的法則生物學的法則、及び生活と存在に伴ふ形而下的法則の表現に過ぎない。それ故にこの自然法の外側に於ける、及びこれに反對して試みんとする總ての努力は畢竟空虚であり、虚無である。天才が彼等の夢想の幻影のうちに、この全社會を改造せんとする改革者の努力は、古代埃及の昔から現代に至るまで繼續して來た現實と運命とを正確に繰り返すに過ぎない。

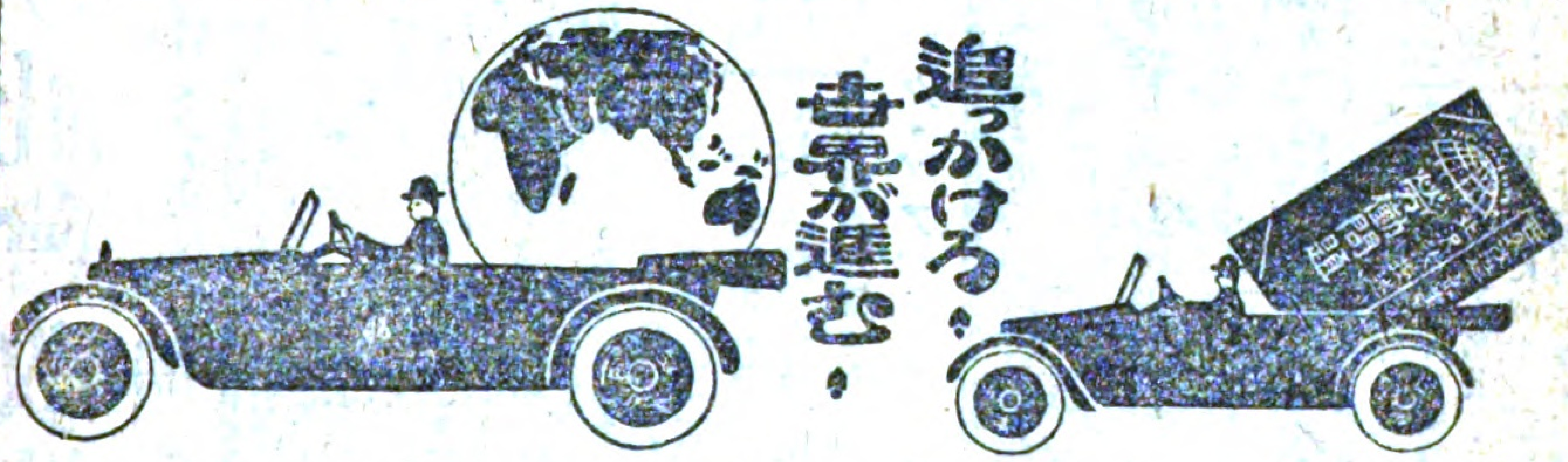
然し社會法則が構成されるには、科學は充分に彼の方法と方式とを發見することが出來なかつた。彼の目的、彼の特性、彼の固有の性質は、明白に認識され決定されねばならない。然し人間と社會の關係の問題は、特別なる性質に屬してゐる。これは單に智的體系に於て眞實を求むべきものではなく、道德的體系に於ける眞實に屬するものである。形而下世界の法則の發見は、物質生活の變革を許容した。道德的並に社會的の世界の發見は、社會生活それ自身の變革でなければならぬ。人間は科學によつて自然を説明する單なる智惠であつてはならぬ。彼は同時に良心であらねばならぬ。理性が存在する故に、彼は眞理を探究する。良心が存在する故に、彼は善を追求する。そこで彼はそれを實現せんとする義務を感ずる。そして彼及び他の者に理性と良心があると云ふことが考量されることゝなる。社會は獨り經濟現象の必然的動作に於て、無頓着に現存するものではない。そして今や社會科學は他の一切の科學と共通の方法によつて、社會現象に於て人類の道德的觀念が表示しそして要求するものを確實に形造るために、個人と人類社會の關係の問題の解決を强ひられるに至つた。彼はこの問題の解決を、形式の下に、傳統的本質の下に、單なる自然の實在の下に、換言すれば形而下的實在、道德的實在、人間の存在及び人類の必要、能力感情の下に、これを求めるであらう。そしてソリダリストに從へば、これに依つて人類は、絶えざる變化——それは遂に形而下的智識的道德的の更に高き形への恒久的の進化の——關係にある環境に生き、先祖に從つて生れ、そして彼等の遺傳に從はれて生れた熱情あり、理性あり、良心ある總てのものを恢復することが出來るであらうと云つてゐる。即ちソリダリストの信條に從へば、科學的眞實と道德的眞實の調和は、人間の間に建設すべき最良なる平衡の現實に於ける客觀的條件を決定する。彼等に從へば、眞實——即ち理性の承認を以て——の條件に於ける、善——即ち道德的感情の滿足——の實現に就て、方式は決定的に置かれ、人類社會の完き發達は、この方程式の上に立たねばならぬものであると云ふのである。(一九二〇・四程・一四・夜——主としてLéon Bourgeois Solidarité に據る

本論は直接クロポトキンの思想を評論したるに非ずと雖も、彼の思想と密接なる關係あるを以て、特に參考として北澤教授の執筆を乞へり(記者)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

電車シーリーズ

# 世界改造叢書




既刊十種 以下續々發行 一三五判各壹冊 正價四拾錢 郵稅二錢

| | |
|---|---|
| 人種問題 | 大隈侯爵述 |
| 戰後の經濟問題 | 平沼博士述 |
| 教育の改造 | 中島半次郎述 |
| 勞働問題 | 北澤新次郎述 |
| デモクラシー | 高橋淸吾述 |
| 普通選擧 | 關和知述 |
| 勞働問題の曲折 | 關太郎述 |
| 過激派物語 | 五來素川述 |
| 國際聯盟 | 內ケ崎作三郎述 |
| 婦人問題 | 宮田脩述 |

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三 早稻田大學出版部

(賣捌) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野 (其他)

# 藝術一家言

谷崎潤一郎

## その二

里見氏の二三の短篇を讀んだあとで、さて翻つて漱石氏の「明暗」を見ると、わたしは少からず教へられるところがあるのを覺える。前者の作品にはいろ〳〵不手際なところや、性急なところや、描寫の不充分なところ、形の歪んだところなどがあり、物に依つて夥しい出來不出來はあるが、しかし上に擧げたそれらの作品などの一行にも、作者の感激の迸つて居ない部分はない。作者が氣を弛めたり、いや〳〵書いたと思はれるやうな部分は何處にも見出だされない。精悍な馬は自分の蹄の音に驚いて夢中で驅け出すことがあるものである。若し里見氏の缺點を擧げれば、もつとドツシリと落ち着きに落ち着いて欲しいところをも、夢中で驅け去つてしまふ嫌ひのある事だが、それは偶々この作家の精悍無比な氣質の現はれであつて、寧ろ彼が非凡な駿馬であることを證據立てゝ居るのである。その精悍さが適當に制御されたなら、此の作家の將來は恐るべきものとなるであらう。ところで「明暗」の方はどうであるか？あの長篇のどの一行にでも、前者のそれに匹敵するほどの力の籠つた、緊張した部分があるだらうか？云ふまでもなく彼等の間には年齡の相違もあり、氣質の相違もあるのだから、私は決して前者の精悍を以て後者を律しようとはしない。けれども何等かの形に於いて前者の精悍さに拮抗し得るところの力が——語を換へて云へば藝術的感激が溢れて居なければいかにスケールが大きくつても、構圖が立派であつても、斷じて傑作とは云へない筈である。例を西洋に求める迄もなく、試みに紅葉や鏡花の傑れた作品を取つて見れば、到る所に其の力は感ぜられる。

ちよいと見ると感激がないやうに思はれる森鷗外氏の作品などにも實は一種の力が白金のやうに堅く冷めたく壓搾されて、カッキリと嵌め込まれて居るのである。否、漱石氏自身のものでも、その初期の作品の或る物の中には、たしかに其れがあつたと云へよう、が、殘念ながら「明暗」には其れがないのである、あつても甚だ稀薄なものに過ぎないのである。

私が斯う云ふと漱石贔負の人は「そんなことはない、『明暗』にも其れだけの力が立派に出て居る。それがお前には分からないのだ」と云ふかも知れない。さうしたら私は「いやお前こそ分らないのだ」と云ひ返すより外にない。――こゝまで來ると結局水掛け論になつてしまふが、藝術の翫賞は先づ何よりも感覺に訴へるものであるから、感覺の鋭敏の度合に依つて、人々の味はひ方が違ふのは已む得ないことである。一人が此のビフテキはうまいと云ひ、一人がまづいと云つて爭つたところで際限がない。そんなら物のうまいまづいは全く主觀的なもので共通な標準はないかと云ふのに、必ずしもさうは云へない。甲の感覺は乙のより鈍いとか鋭いとか云ふのは、やはり一定の標準のある證據で、砂糖の甘さや唐辛の辛さは、程度の相違こそあれ誰の舌にも甘さと辛さとを感じさせる。(それをも疑へば疑へるけれども、極端な懐疑家でない限りはそれを信じる。信じなければわれ〳〵は生きて行かれない道理である。)たゞそれらがいかに甘いか、いかに辛いかの細かい問題になつて來ると、其處に人々の意見の相違が生ずるのだが、一つ物を甲がうまいと云ひ乙がまづいと云ふのは、生れつきにも依るけれども、感覺の熟練の有る無しにも依ることが多いと思ふ。昔の江戸ッ兒は東京灣の魚と相模灣の魚とを喰ひ分けることが出來た。さう云ふ人の味覺はつまり鋭敏なのであつて、生れながらにそれほど鋭敏な人もあり、いろ〳〵の魚を喰ひ馴れて居るうちに自然と會得する場合もあらう。此れは喰ひ物に限らず、專賣局の役人は世界中に何百種とある煙草の香を嗅ぎ分けて其の産地を中てるとか、音樂家はわれ〳〵には分らない調子の狂ひや音程の相違を聞き分けるとか、凡べてその道に依つてそれ〳〵のエキスパアトと云はれる人があるものである。さうして餘程の鈍根でない限りは、誰でも熟練に依つて或る點までは感覺を鋭敏にさせることが出來、今までまづいと思つて居たものゝうまさが段々と分つて來て、かすかな色あひとか風味とか云ふものを感じ分けられるやうになる。或るうまさが、なぜわれ〳〵にうまいと感ぜられるか?――それはたゞ神が知つて居るばかりで、

われ〳〵自身には説明し難いことであるが、兎に角われ〳〵の感覺は無限に新しいうまみを發見して行く可能性を具備して居る。人間の精神が常に向上し進歩して已まないと同じく其の感覺も進歩し發達する。既に進歩があり、發達がある以上は、人に依つて優劣があるのは當然のことで、感覺で判斷するからと云つても全然主觀的な價値しかないとは云はれない。藝術を鑑賞する心の働きは、單純な視覺や味覺に比べればずつと複雜な高級な性質のものではあらうけれど、それが一種の感覺であることは同じであつて、昔からの偉大な藝術家は皆その道の達人であると云へる。勿論支那料理は絶對に御免だと云ふ食通があるのと同じく、或る作家にはどうしても理解されない或る作品があり、人に依つて好惡もあることだから、時としては達人同士の間で意見を異にする場合もあらうが、一流の藝術家の感じ方は先づ大體に於いて一致するものとして差支へない。トルストイが沙翁を罵つたやうな例は極めて稀である。カーライルは「なんちのバイロンを閉ぢてなんちのゲエテを繙け」と云つた。しかしゲエテは「予とバイロン卿とあるのみ」と云つた。そこでカーライルよりもゲエテの方がより達人であるとすれば、われ〳〵は一と先づゲエテの批判を信じてバイロンを偉い詩人だとする。かう云ふ風にして或る點までは標準が保つて行かれないだらうか？

話があまり横道へ外れたやうだが、此れは大切な問題であるからもう少し書いて見よう。喰ひ物のうまいまづいとか、衣服の柄の好い惡いとかは、一時的のものであるから其の判斷も容易に決する譯であるが、藝術の價値は永遠であるからさう手輕には行かない。少くとも十年か二十年過ぎてからでなければ決し難い。ほんたうの藝術は、年所を經れば經るほど、多くの人に繰り返し繰り返し讀まれゝば讀まれるほど、ます〳〵眞實の響きを傳へるので、それが傑れた作品である事が自然と明かになつて行く。さうして其の時になつて始めて、それが發表された當時の世間の批評が中つて居たか居ないかゞ分り、それを褒めた人は具眼の士とされ、くさした人は理解がなかつたと云ふことになる。「シルレルの手袋はゲエテには嵌まらない」と云ふ諺が獨逸にある、それはシルレルよりもゲエテの方が偉大だと云ふ意味であるが、今日になつてこそ其の偉大さがほんたうに分るのである。ゲエテが沙翁やダンテに比肩し得る最大の藝術家であることは、もはや今日では誰も疑はうとはしない。そこで我れ我れはゲエテを萬世の師表と仰ぎ、此の大先生の云つた

ひとなら間違ひはあるまいと思ひ、自分の意見が太先生の意見と衝突した場合には、自分の方が間違つて居るのぢやないかと云ふ風に反省する。ボオドレエルの「悪い華」が出た當時、多くの人は毀譽褒貶に迷つたに違ひない、が、彼と同時代の最大の藝術家たるユーゴーは何と云つたか？「ダンテは地獄を見て來た詩人であるが、君は地獄に生れた詩人だ」と、さう云つて彼はボオドレエルを推擧した。――此の言葉は、今日になつて見ればボオドレエルの境地を眞によくも理解した、動かすべからざる名言であつて、ユーゴーが褒めたと云ふことは、「悪の華」の價値をして九鼎大呂よりも重からしめると同時に、ユーゴーその人の感受性がいかに鋭敏であり、博大であるかを證據立てる事實である。要するに多少の時を措きさへすれば、それがほんたうの藝術であるか、どのくらゐの價値があるかに就いての、一般の意見は定まつて來るものであつて、一面から見れば「時」が公平な批判者ではあるけれども、ユーゴーのやうなその道の達人は「時」を待たないでも物の眞價を洞察することが出來る。現在の物を現在の人が批評する際に、誰の云ふことが中つて居るか、誰の感覺が勝れて居るか、まるで標準がないやうに見えるけれども、しかし藝術的感覺の鋭不鋭と云ふことは立派に在り得るのであつて、「時」が立てば、自ら其の優劣がハツキリと分つて來る。だからわれ〳〵は藝術を批評する場合に、（創作でも同じだが、）「時」と云ふものを忘れてはならない。十年二十年の後、百年二百年の後があることを忘れてはならない。輕薄な批評家を罵つた杜子美の詩に、

楊王盧駱當時體。輕薄爲レ文哂未レ休。
爾曹身與レ名倶滅。不レ廢江河萬古流。

と云ふのがある。「なんぢら身と名と倶に滅ぶ。廢せず江河萬古に流るゝを。」――かうなつては批評家もおしまひである。同じく杜子美が李白を憐れみ慰めた詩の中に、「千歳萬歳名。寂寞身後事。」とも云つて居る。「寂寞身後事」と思ふと、淋しいやうな氣もするけれども、苟くも藝術にたづさはる者は、千秋萬歳の名を考へ、身後の事を思はなければなるまい。批評をするのにも目先のはやりすたりに囚はれずに、眼を四方八方に配つて、時の悠久と云ふことをシッカリと念頭に置いて、ひろく味はひ深く觀るやうにすれば、自然と其人の感覺も鋭敏になり、後人に嗤はれないだけの覺悟も出來、信念も湧いて來る。それだけの信念がなくて批評をするのは自他を誤まるばかりである。で、若し私の批評が間違つて居ると云ふ人があれば、私は

それに對して「孰方の感受性が正しいか後世になれば分る」と答へるまでゝある。繰り返して云ふが、物のうまいまづいは理窟で說破する譯に行かないものだから、學者の意見だからと云つて必ずしもあてにはならない「ひろく味はひ深く觀る」と云ふのは、概念的に物を多く識ることではなくて感受性の鈍くなるのを防ぎ、それを出來るだけ鋭敏に研ぎすます意味である。さうして藝術のことは、學者よりも矢張り藝術家の感覺に賴つた方が先づ以てたしかである。藝術家は理窟を云ふのは下手だけれども、うまいまづいを中てることは學者より上手である。往年、紅葉と露伴とが並び稱せられた時代に、露伴を以て紅葉と同じ高さに、若しくは共れ以上に持ち上げたものは多く學者側の人々であつた。が、今日になつて見ればどうであるか？取試みに明治二十年代に書かれた「風流佛」や「一口劍」を以て同じ時代の「夏痩」や「伽羅枕」に比べて見るがいゝ。兩者の徑庭はもはや識者を俟たずして明かではないか。學者が露伴氏を褒めたのは、その物語の中にある一種の觀念が氣に入つたからであつて、つまり藝術に感じたのではなく思想に感じたのである。（斷つて置くが、私はあの頃の小說家としての露伴氏を論じて居るので、露伴氏の全體を批評して居るのではない。「讕言長語」や「幽情記」や「運命」の作者としての露伴氏は、私の最も敬慕して已まない人である。）「夏痩」や「伽羅枕」の中にはどんな觀念があり、どんな思想があるか、學者に云はせたらあの中には思想らしい思想などは何處にもないかも知れない。が、あれを讀めば理窟なしに無限の感興が津々として盡きないのを覺える。春風駘蕩たる恍惚境へ惹き入れられる。春風駘蕩と云ふ形容詞は、紅葉山人の場合に於いて特に適切な言葉であるが、すぐれた藝術には、たとへ思想問題や社會問題を取り扱つたものであつても、何等かの形で理窟なしに人を動かす氣力が溢れて居るものである。さうして其の力は、思想の力や論理の力よりももつと強く、もつと直接に人間の胸臆へ或る神韻を傳へる。そこが藝術の有り難いところである。

漱石氏のものでも、前期の作品には、たしかに藝術的感激を以て書いたと思はれるものが少くない。「猫」や「坊つちやん」などは、暫く讀まないが、今讀んで見てもきつと惡くないだらうと思ふ。「それから」を讀んだ時は、私は最も漱石氏に傾到した一人であつた。キザだと云はれる「虞美人草」や「草枕」にしても、近頃讀み返して見たが、「明暗」よりは遙かにいゝ。殊に「草枕」は傑作の部に屬すると思ふ。キザと云ふことは一時の好き

嫌ひには關係するけれども、物の眞價には影響しない。多少材幹の秀でた者は動ともすると生意氣に見える如く、傑出した作家は或る時期に於いてキザになりたがるものである。「虞美人草」の如きは邪道に落ちたものかも知れぬが、凡庸作家には陷ることの出來ない邪道であつて、キザはキザでも、薄ツぺらな、内容のないキザとは違つて居る。若し漱石氏があのくらゐでキザを止めてしまはずに、もつと思ひ切りキザになつて、傍若無人にその才氣を渙發させたら、後來恐くかたまらずに濟んだかも知れない。泉鏡花氏の如きはキザの方では隊長であるが、その傑れた作品を見ると、キザだキザだと思ひながら結局征服されてしまふ。彼處まで行けばキザなどはてんで問題にならない。

そんならなぜ、傑作でないところの「明暗」を持ち出して、云はずともよい惡口を云ふのであるか？――私は死んだ夏目先生に對して敬意をこそ表すれ、決して反感を持つては居ない。にも拘らず、「明暗」の惡口を云はずに居られないのは、漱石氏を以て日本に於ける最大作家となし、就中その絕筆たる「明暗」を以て同氏の大傑作であるかの如くに推賞する人が、世間の智識階級の間に甚だ少くないことを發見したからである。實は私があれを讀んだのも、漱石氏が亡くなつた當時大塚博士が何かの雜誌で推賞したのを覺えたからである。その外、私の親しい友人のうちにも「明暗」を傑作だと信じて居る者が多いやうに思はれた。それだけ私があれを讀んだ時の失望の度は大きかつた。「こんなものが何處がいゝのだ。なぜこんなものを大騷ぎするのだ。」――わたしはさう思はずに居られなかつた。「日本の文學は幼稚ではあるが、しかし明治以後の作家を數へても漱石氏よりずつと偉い人が少くも二三人は居る筈である。決して同氏を許して最大とする譯には行かない。況んや「明暗」以上の作品なら幾らでもある。」さう思つて、少しはムカツ腹を立てたくらゐであつた。ところがちやうどその折に、生前漱石氏と親しく往來して居た某氏が訪ねて來たので、私は直ちに憤懣の語氣を以て惡口を云つた。すると某氏は漱石氏を辯護するやうな意味で斯う云ふのであつた。「それは或はさうかも知れない、實は私もあれは餘り傑作ではなからうと思つて未だ讀まずに居る。と云ふ譯は、あれを書く時分に夏目さんはいかにも氣乘りがしないやうな樣子だつた。『明暗』と云ふ題にして置けば執方へ轉んでも間違ひはないからねえ、などゝ云つて居たくらゐで、稿を起すまで腹案がハツキリ極まつて居ないらしかつ

た。新聞に約束があるから仕方なしにやるやうなもの丶、小說を書くのはイヤでイヤで溜らない、ちつとも早くイヤな仕事を濟ましてしまつて、悠々と詩を作つたり書を畫いたりして樂みたい。———それが晩年の夏目さんの僞りのない氣持であつた。夏目さんの藝術の究意地は、小說でなくて漢詩や書畫の方面にあつたのだ。」———さう云はれて、私は俄かに張り合ひが拔けて、何となく淋しい心地がした。あれほど西洋文學の造詣の深かつた人でも結局東洋趣味に降參しなければならなかつたのかと思ふと、惡口を云はうとした氣力も失せて、今更の如くその心事に同情を寄せずには居られなかつた。既に作者自身がイヤ〱書いたのだと白狀して居るほどのものを、わざ〱取り上げて追究するのは餘りに心なしの業であるから、私は好んで惡口を云ひたくはないのである。が、また飜つて思ふに、世間の多數の人が、殊に智識階級の人々が、今日でも猶「明暗」を傑作と信じ、あゝ云ふものを傑れた小說と考へて居るのだとすると、それが頗る滑稽な事實のやうに感ぜられるので、やはり何か知ら云つて見たいやうな氣もするし、云ふ事が滿更無意義ではないとも考へられる。「明暗」が一個の通俗小說として讀まれて居るなら問題にならないが、高級な藝術品として汎く眞面目に讀まれて居るのだとすれば、それに就いての批評をする事は、多くの人に私の藝術觀を訴へるのに此の上もない機緣となる譯である。

（以下次號）

# 賀川氏と東京思想團

△思想界の人氣男である賀川豐彦君は四月廿五日を以て神戸貧民窟から久かた振りに上京した。何しろ、戀愛詩人とか、煽動詩人とか、勞働詩人とかて謠はれておる。賀川君のことゝて、素破らしい人氣を呼んだ。思想聯盟の歡迎、新聞記者、文藝家の歡迎、青年會館の演說と前後十日間滯在中一瞬の暇なしであつた。

△彼は、年齡未だ三十三四歲に過ぎないが、色が眞白く、擧止輕快、洒々として應酬する手際はなか〱鮮かなもので、あれては思想家中の第一等の政治家だと皮肉つたものもあつた。全く其通りで眉宇に才氣が溢れておる。

△彼は萬世橋ミカドで開かれた歡迎會席上で「近頃の筆禍事件は第一線に立つ社會主義者が觸れずに、第二線にある基督敎傳道者が續々として死骸を横へるのは全く一部である、森戸君にせよ、帆足君にせよ、限呼君にせよ、自分にせよ皆これ基督敎徒であるのはどうしたことか」と陳べた。眞にどうしたことかだ。

△四月二日、銀座パウリスタに於ける歡迎會は、近來稀に見るの大盛會であつた。文藝家よりは厨川白村、有島武郎、北原白秋、江口渙、廣津和郎、沖野岩三郎、相馬泰三、加藤一夫、宮地嘉六、宇野浩二、土岐哀果の諸氏思想家側よりは、森戸辰男、堺利彦、北澤新次郎、木村久一、室伏高信、高畠素之、井箆節三、加田忠臣、大杉榮氏等五十四名で珍らしい會合であつた。

△その五十四名の出席者中、眼鏡の御厄介になる近視眼者が二十九名、後の二十五名も耳が切れておるとか、鼻が缺けておるとかで大抵は片輪の部類——に屬するものだつたがタツタ一人の完全無缺の天女があつた——大橋房子孃——

△よく飮み、よく議論するのは國家社會主義のアタマン高畠君で、一番笑ひ上手なのが堺利彦君、諄々として聽者に何をか訓へつゝあるのが森戸君と有島君。

△土耳古帽の大杉君はあれでなか〱人好きのする深みある男だ。君の吃音る所なぞは流石に神近君の利刃を飛ばせる程に愛嬌に富んだものだ。

△室伏君が馬場君を捉へて德富君を皮肉つて見たり、眞柄孃を出しに使つて堺老を輕く揶揄する所なぞは皮肉の堂に入つたものであつた。

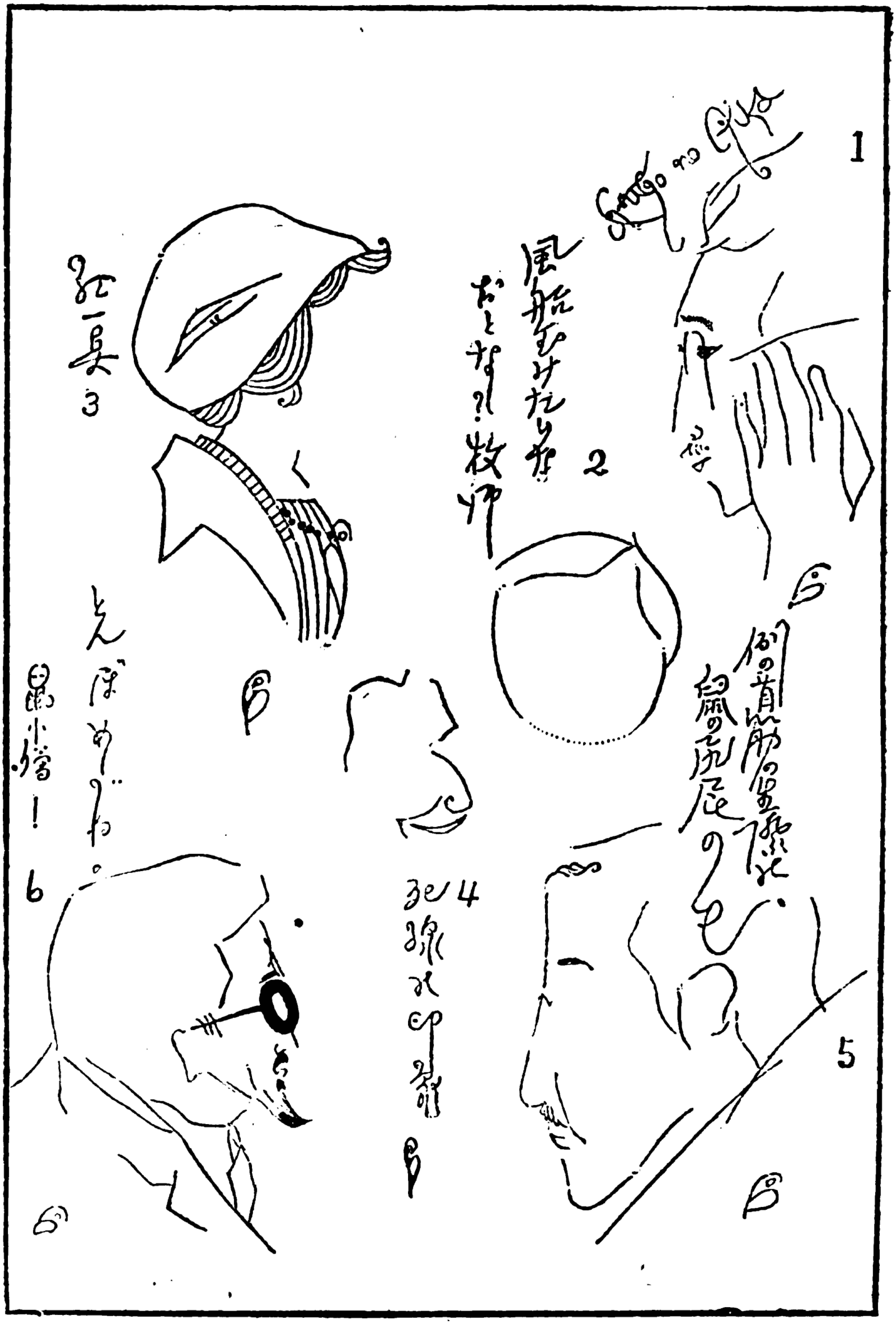
△何にしろ、當夜は思想家は勿論のこと、思想に興味を有つ文藝家、新聞記者、大學敎授役人に至るまでを網羅し、それに鮮人の有志吳相淳氏まで見えた。誰に氣兼するといふでなし、喧嘩がしたければ仕放題、議論なら、罵倒なら何でも來いの無禮講。賀川君なぞは關東武者の暴れ方に少々辟易していたゲナ。

△房子さんは額に似ぬおいたな方で、別頁のスケッチは——當夜紅一點君であつた——孃の缺けたもの、コレでは色男の賀川君も型無し、沖野加藤の牧師さん、厨川、有島の長老方、一つ抗議は出ますまいか。決して「改造社」の罪ではない。我社は「極樂」にも「地獄」にも關係なき永世中立主義者で、マイナス資本主義の頭領である。

△スケッチ說明

1 土岐哀果　2 沖野岩三郎
3 大橋房子　4 賀川豐彦
5 厨川白村　6 加藤一夫

## 賀川豐彦氏歡迎會にて　大橋房子畫





# 死線を越えて（第五）

賀川豊彦

## 十九

榮一が知らぬ顔して宅へ歸つたのは晩の七時であつた。父はお梅と晩酌をして居た所であつたが榮一の歸つたのに驚いた樣子であつた。父はすぐ『笑はどうした』と尋ねた。昨日田舍からすぐ使が尋ねて來たから父には知れて居たのだ。然し榮一は答へ無かつた。榮一は重い頭を抱へて鶴子を訪れた。鶴子は榮一がまた瞼を腫らして居るのを見て、

『今日もまたどうかしたの？』と尋ねた。

『ア、また悲劇を演じて來たの』

『誰と？』

『お父樣と』

『どうしたの？』

『私は妹を隱したのですよ』

『何處へ？』

『いや』

『云つて呉れ無い？』

『いや耻しくて云へない。あなた大抵想像出來ますよ。出來るでせう』

『大抵想像は出來るけれど。またあなたお父樣と何か衝突なしたのでせう』

『ア衝突しましたよ』

『ね、あなた、妹さんをどうなしたの？』

『神戸へ置いて來たのですよ』

『神戸へ？　何時の間に？　あなたもいらつしやつて？』

『今日、今歸つた計りです』

『今日？』

『あなたも面白い人ね。妹さんをどうなされたの？　神戸へ連れていつて？』

『下女にして終つたのですよ』

『下手だ？　まア非道いのね』

『非道いつて、そりやア、あなた事情を知らぬからですよ』

『私にその理由を聞かして下さい。云はれない？』

榮一は段々話を始めた。そして涙を流して悲しいと云ふ風を裝うて（もし泣かないと同情が無いと云はれると思つたから）鶴子の同情を求めた。そして、その結論は戀であつた。

榮一の胸はもうまるで平均を失つてしまつたと云つても善いであらう。戀しい鶴子が德島を立つと云ふ日になつても別に悲しいとも思は無かつた。勿論その日學校へ出ても快活に小供等と遊べなかつた。

晩の八時頃ヒヨツコリ榮一は鶴子の家へやつて行つて、戀人が別れる時にする樣な眞似を一時間計りした。そしてその中の二十分は沈默で後の四十分は公然の夫婦だと世界に廣告して廻る事の出來なかつた事を恨む樣な話を繰返したに過ぎなかつた。然し二人共涙は流した。

中洲へ見送つて行つた時、女のお友達が大勢皆美しい當世流の髮を結つて綺麗な顔をして來て居た。その中にはミセス、テーラーも居つた。女學校の先生も居た。同級生も居たし下級生も居た。男の見送りは牧師と榮一のみであつた。

榮一は鶴子のお友達の美人を一つ見ようとでも思つたか、鶴子が入つて居る二等室へ行つて、大勢美しい女の居る前もかまはずに、

『手紙を忘れない樣にね、』と云ひ置いて出かけた。鶴子は『まだ出帆までには二十分位あるでせうから少し話してらしやい』と強るとはなしに強いたが、何だか男らしくないと思つたから出て來た。

二等室の出口を跨いでゐる時、

『あの綺麗な男のお方はどなた？』と鶴子に問ふ者があつた。『あの方は市長のお息子さんですよ』と鶴子が得意に答へて居る聲を聞いた。

出帆の眞際になつて色の白いマガレットの鶴子は、綺麗な絹物に纏はつて甲板に立つた。そして特別に榮一の方を見て居る樣に思はれた。

烟を殘して船は出て行つて終つた。榮一は家へ歸つて直ぐ床へ入つた。そして鶴子の顏を想像してみようと思つたが横向きの顏の輪廓なら少しは似顏も畫けるが眞向きの輪廓はどうしても現すことが出來なかつた。出來なかつた計りぢや無い鶴子の顏を忘れて了つた心地がした。その代りに色の黑い背の低い髮の赤い妹が俛いて泣いて居る幻が現はれる。

それで榮一は『鶴子が早や逃げて了つた』と小さい聲でひとり言を云つた。

## 二十

あくる朝夢を見た。

『サアピとか云ふ亞米利加ヴアジニア州の農夫の夢を見た。此度亞米利加と獨乙との間に起る戰爭は隱謀者があるので、此隱謀者は三十八日斷食すれば捕まる。此隱謀者が捕まると獨亞の戰爭は勿論世界戰爭と云ふものは全く無くなる。だから『斷食して見よ』と云ふのであつた。それでサアピは夢の通り『斷食』してみると三十八日の斷食は別に困難でなく、隱謀者も安々と捕へられて獨乙と亞米利加は勿論世界に戰爭がなくなつた。』と云ふ夢であつた。

何だか標準も付か無い夢だなと思つたが夢の事から瑞西と白耳義は中立國だから、戰爭が嫌ひな人民は瑞西と白耳義とへ歸化すれば善いのだ。早く歸化權を得た方が善い。歸化さゝぬ？誰が？　……？　………何だ？　偶像だ。ヘーゲルだ！幽靈の樣な者だ……など夢の樣に考へて居た。

いつに無い朝寢をしたので父は戸を開けて神樣を拜んで居るいつもならば『榮一起きて戸を開け』と云ふのだが今日に限つて默つて居る。默つて居るからこちらも寢て居る。

「新聞！」と云ふ聲が玄關の方にして、バサと新聞の入つた音がしたから、こいつは一つ新聞でも讀んで遣らう。哲學とか云ふ[illegible]臭い勉强し無くとも新聞を讀んで一生送る方が氣樂で善い。世界に新聞計り讀んで一生を送る人は多い　なに新聞計り讀んで居ては飯が食へぬ……然し一寸新聞を讀まう。『一寸新聞を讀みます』と頼む樣に自分に云つて見て寢卷きのまゝ玄關へ急いで飛んで行つて踏んだまゝ新聞を讀み始めた。

論說は何だか中華民國の危機とか云ふもの……アゝ老子莊子の國が危いと云ふのか？……亡びようが亡びまいが、我邦にはちつとも關係はねえ。……亡びても我邦さへ生きて居りさへすればそれで善い。敵がせめて來て僕を殺しても僕の幽靈は殘る。幽靈が殘つたらそれで善い。中華民國の危機とか云ふのは世界に威張りたい連中があつてそんな連中が捏造した遊び事だまア我輩には關係はねえと一頁を瞥見して、二頁を返したが倫敦電報とか紐育電報とか何とかかんとか云ふ電報で埋つて居る。その中には前代未聞の大夜會など云ふ文字も見えて居た。少し此那夜會に出席して西洋の美人と舞踏して見たいと云ふ氣も起つた。三面を見ると、大森の水死美人とか亦々華嚴の瀧とか、少女誘拐せらるとか云ふ文字で充されて居る。水死美人を讀んで見ると戀人の心變りを氣にして水死したのだと書いてある。此那に女に惚れられると幸な物だと思うた。華嚴の瀧を讀むと失戀したと書いてある。失戀したのなら時を待つて第二の

美人の戀を得たら善いだらうに、一寸と戀人の心を引からうと思つて奇妙な輕業をやつて生き損ひをするのだねとも考へたが…然し尤な處もあると頷いた。

此那文句を讀むと戀と云ふものは奇妙な者だ。戀して居る人は仕合せだ。折々此那事件が起つて戀に値を付けて吳れるからなど思つて、直ぐ鶴子と自分の關係に思ひ及んだ。新聞に接吻した。

四頁の廣告を見ると新刊の哲學書や小說の廣告が出て居る。岩永健著『ロッチエの研究』とか云ふのは長々しい効能書きを書きそへて定價一圓七十錢で販賣致しますと出て居る。此廣告を見ると何だか自分は生存競爭の敗者の樣な氣がする。少し社會改良とか家庭改善とか云ふことを止めて二三年も勉强すれば之れ位いの著作は何でも無いがと思ふ。それから鶴子に自分は近い中に哲學の著作を一冊出すと云つた事も思ひ出す。然し今となると心臟が鈍れて筋肉の所々が痙攣する樣にも思はれるから哲學の著作は一頁も出來ぬとも感じる。胸糞が惡くなつたから新聞を寸々に引き裂からうとしたが、まアまアと一頁を返して見ると初め氣が付かなかつた新刊紹介と云ふ欄がある。その中に岩永健著ロッチエの研究と云ふ見出しで批評が出て居る。『行文難澁にして讀者をして何處に論意あるかを疑はしむ』と書いてある。榮一は『アゝ之だ。我輩が書いても此那批評しか受ける事が出來なかつたらどうする。社會から見捨てられたらどうする。氣體の惡い？』と新聞を疊の上へ投げ付けて置いて仲の間へ歸つて來た。仲の間へ這入りかけるとお梅が神樣を拜みに行くのとハタと出會した。お梅は、

『まだ上げんので…』と呟いて椽へ出た。榮一は默つて衣服を着換へながら『馬鹿々々しくて小學校の教員などに滿足はして居られねえ、社會から見れば自分等一文の値が無いのだ』など考へて居る。朝飯も今日は止めにして哲學の本を一冊讀み上げて終はふと思ひ立つた。思ひ立つと慌てゝ蒲團をグル〳〵と卷いて玄關の押込へつき込んで、二階のスタデーへ飛び込んで机にもたれた。

何を讀んで善いやら解らぬ。まア此間宣教師から借つて來た基督教々理史でも讀んでキリスト教を唯物史觀の立脚地から敎理の變遷でも研究して見てやれと云ふ氣になつた。がハーノックとオーアとどちらを開くかが問題になつた。宣教師は曾つてハーノックを異端だから用心しろと云つて居たからハーノックを開く事にしようかと思つたがハーノックは五冊に成つて居る。

今日一日に讀んで終ふにはオーアの方が都合が善い。オーアのは僅か三百六十頁。一日には易い仕事だと考へた。然しハーノックのは厚いだけ果がある。まア兩方共と二冊を二冊ながら机の上に置いて兩方の一頁を開いて見る。

ハーノックの方はスベ〳〵の紙で印刷がハッキリして居る。オーアの方は日本紙の樣な雅味のある紙に大きな字で印刷が出來て居る。

『どちらを讀まうか？ え、ハーノックにせえ果のある方を』とオーアをブック、ケースに押込んで頭を抱へてハーノックを讀み始めたが、『之を讀んで何にする？ 之を讀んで名譽でも買へるか？ ハーノックを讀んで居ると鶴子に云ふなら鶴子は『あなたは學者だ』と云つて接吻の一つもして呉れようが、もう鶴子も廣島へ行つて終つた。……そうだ鶴子は今頃汽車に乘つて岡山あたりへ行つて居るだらう。岡山から西は僕は知らぬ。鶴子は景色が善い景色が善いつて喜んで居るだらう。明日は手紙が來る。その中には多分、

『戀しい君と別れて内海の夕陽見ん力もなく、自然を樂しむ餘裕もあらばこそ、唯南を望んで、君の美しき姿を幻に現はし、翼あらば飛び行きて抱きもせんなど思ひつゝ、思はず知らず袖を濡らしつ……』位いの文句が書いてあるであらう。さうすると言文一致で出來るだけハイカラに、

『甲板の上に立つて居た君の……戀しい人のその面影！ 目を閉ぢても目を開いても目先に現はるゝは君が姿？ 嘗て君がスタデーで與へられた接吻、どうして忘れる事が出來ませう』夕べが來る每に遊びに行く處が無くて勉强室を開いて物乾を見ると、主が去つて開かれぬ二階立の家。君は永遠に去つたかと思つて泣く。……』と云ふ風に書いてもやらうかと心は先から先へ亂れて行く。讀んで居る事は何が何やら薩張り解らない。

『之ではならぬ、僕のジニアスは哲學だ。哲學の研究を女などに障げられてはならぬ』と思ひ直して讀んで來た處をまた始めから讀み直すと少しは解つて來る。大分解つて來た嬉しいと思つて居ると、

『榮一樣、蒲團を疊んで入れんでかい？』と玄關でお梅が叫んで居る。またお梅が生意氣なことをぬかして居る。あれだけ疊んで置いたら結構じゃ無いか。放樂といてやれ、と聞えぬ振して本を讀んで居ると吉三郎が上つて來る。

『若旦那樣が蒲團を疊んで押込みへ入れてお置きなはれと仰しやつていらしやいます』と云ふ。

矢張り知らぬ顔して本を讀んで居る。下女が上つて來る。

『若旦那御飯をお召上りになりますかつて：：そして玄關の蒲團を疊んで入れて置きなされます樣に仰いました。』と傳達して來る。それでも默つて居る。下女も默つて返事を待つて居る下女は可哀相だと思つたから

『あなたは下へ降りて行つても宜敷いですよ』と無意味な返事ではあるが兎に角爲て、下女を下に降す。

『お梅は僕の蒲團まで檢査して居るのか？　日に日に。腹の立つ野郎だな。えい』と立ち上つて下に降りる。玄關に現はれるとお梅が今蒲團の偶から偶へ目を配つて疊んで居る。榮一はつと進んで行つて、

『失敬な！』とお梅から蒲團を取り上げて疊むか疊まんかに押込に押込んでピシャンと戸を閉ぢて終つた。

お梅は『フム。おかしい人。人が疊んで上げるつて云ふのに疊まさんて。勝手にするが善いわ。その變りになんぼ汚れても洗濯はして上げまへんぞ。』と嘲笑つて居る。

父が出て來た。父は出て來るや否や持つて居る長烟管で榮一の頬を耳からかけて擲りつけた。

『ア痛た』と榮一はそこへ倒れた。然しすぐ飛び起きて家を出た。その日一日歸らなかつた。晝食も食はずに山へ登つて瞑想してゐた。そして晩は九時頃まで勢見の繪馬堂でうろついてみた。が、寒くて仕方がないので歸ることにした。大麻山で三日斷食した元氣は今は何處かに消えて榮一は哀れに閉ぢられた門の前に立つた。雨がしよぼしよぼ降つて來る。門はいつまで經つても開くことは無い。榮一は女の樣に泣いた。一時間程して下女が便所に出て來たので下女を呼んで內へ入れて貰つた。

## 二十一

昨日の雨が未だ止まなかつたが六時頃に『廣島にてさる人』と云ふ名前で、女の手紙が來た。勿論それは鶴子からである。鶴子は御身の事が戀しくて堪えられぬ。此樣に戀しくては廣島で三年も勉強を續ける事が出來るかと思ふなど書いて來た。然し此手紙を見るに別に永遠に夫婦にならうとか公然許婚しようなど云ふ文字は一字も見え無い。のみならず、未だ自分を慕ふ情が足らぬと思つた。

が、鶴子と自分の關係を思つて、父と自分の關係、お梅と自分の關係を思ふと今にも消えて了ひたい樣な氣がした。

そして鶴子の樣な美しい女に對して自分の樣な美しく無い童

遇に居る者は、どうしても、永遠の夫婦にはなれぬと云ふ氣がした。

色々考へて居ると『如何でも善い。アヽ死にたい……死ねねば人でも殺してみたい……』と云ふ氣が唯起る。自分ながら此樣な危險な情緒が何故起るかと不思議に思ふ程である。此那情緒が起つて來るとマッチを取つて家でも燒いて見たいと思ふ氣になる。で、臺所へ行つてマッチを取つて來て玄關の障子を燒いて見ようと云ふ氣になつた。然し玄關はあまりだと思つたから仲の間の障子に一寸と付けて見た。本當に燒けたならと心配したが『アヽ燒けても善い灰になつても善い自分も燒けて灰にならう。此那世界に生きて居るより灰になつてみた方がフンヤりと心持がいゝだらう』と思ふ。仲の間の南から二枚目の障子に火を付けた。ぼーと燃えたが障子の格子も壁も家もと思つたに、燒けも燃えもしない。上まで燃えて行つて鴨居の所で止つて終ふ。之じやも一枚燒いて見て遣らうと思つたから南から三枚目の奴にも付けて見た。之れは前よりも好成績で紙の燃え樣も盛であり、障子の燻つたのも甚しかつた。も一枚と思つたが此上燒いて眞に家を燒くと、町内を騷がしても面白くないと思つだから止めた。序に鶴子からの手紙に火を付けて燒き捨てゝ了つた。

幸に此那亂暴をして居る間お梅も父も吉三郎も益則も出て來無かつたので善かつた。何に出て來ても血を見るまでさと思つたが、それでも出て來て喧嘩するより喧嘩しない方が遙かに善いと自分に祝詞を云つて家を出た。然し今日も學校には出席しなかつた。

家を出て何處へ行かうか？今日は雨降りだ。昨日の樣に奴が原で坐禪を組むと云ふ事は出來ぬ。それかと云つて大麻山の眞似をする勇氣も無い。一つ之れから小松島の方へでも遊びに行かうと思つたから德島橋を渡つて、縣廳の前を通つて、富田橋を越へて、德島新報の前へ差かゝつた。

軒下に吊してある新聞を見ると田舍新聞に善くある下手な小說の挿畫が三面に入つて居る。下手な挿畫の下に粹な話と云ふ見出しで。

「話は少し古いが此間富田橋竣工祝賀會の白糸亭に開かれた折大和樓の三七、錦樓の鳴門は市長から祝儀を澤山戴いたが散會後二人共三宣亭へ市長に呼ばれて翌朝早くコソ〳〵と歸つて行つたとか、粹な市長にはありさうな事だ」

と云ふ意味が出て居る。榮一は今更ながら世界と云ふ處は自

由勝手のきく所だ。金さへあれば千人の美人でも一度に抱いて寝る事の出來る世界だ。僕は今迄道德と云ふ圍を知らず知らず設けて苦しく思つて居たが、世界はもう疾くの昔に此圍ひを破壞して居るのだ。人間は昔から自分を解放して居る。まア不思議なのは世界だと考へながら重い足駄をトボ〳〵と「中の町」の方へ運んだ。

然し目に浮ぶのは障子に付けた火の燃え立つ様子……ペラ〳〵……ボーと馬の走る様に燃え立つたがポツと消えた時には浦島が玉手箱を開いた時の様な心持ちがした。あの燃え方！何だか目の前にちらつく。あれはあれなりで消えた様に思つたがすぐに家を飛び出したから消えたと思つても或はまた燃え立つて今頃は大火事になつて居るかも知れぬとも考へてみた。

然し警鐘の鳴らぬのは火事の無い證據だ。それでも火事をやる様な事をしたから自分に如何様な難題を父やお梅が持ちかけるかも知れぬ。また警察の手を借つて如何様な慘酷な事を自分にするかも知れぬ。すると自分は小松島へ遊びに行つても先の見え透いて居る禁固の身だ。縛め上げられた身だ。今頃はお梅や父がどんな事を巧んで居るだらう。それが知りたい。幽靈であれば飛んで歸つても聞くのだが、然しどうも仕方が無い、肉が付いて居る幽靈ぢや、と思つて居る時にザアと烈しく雨が降つて來る……あちらの屋根こちらの軒に、そしてまた榮一が持つて居る番傘の上に小石を投げ落す様に降る。人力車の轢る音も急いで菓子屋の小僧が戸を半分閉める音も雨の音には勝らない。之では如何することも出來ぬ。此雨に小松島まで行く勇氣は無い。然し何處へ行かう。まア歩くだけ歩く事にしようと、ゆつくり出來るだけ暇を取る様に歩いて居ると、横町から小學校の生徒が二三人。重い傘を持つて袴を半分雨に濡らして學校へ出掛けて居る。淋しい。

もう十一時にもなるかと思つたがまだ七時半だ。二軒屋まで行かうと大道の角の派出所までやつた來た。到底小松島へ行く事が出來ぬのはわかり切つて居る。わかり切つて居るなら丈新町の叔母の内へでも久し振に遊びに行かうと思ひ付く。叔母の所へ？　あの穢い小い家に、小供の大勢ある貧相な叔母の處へ、あの愚痴な無學な哀れツぽい叔母の處へ？　よした方がいゝだらう、よした方が。叔母とは一時間か三十分は話も出來るか知らんが三時間四時間とは話は出來ぬ。叔母の話は大抵極つて居る。

「な榮一様、内が此那に貧乏しても親類で誰一人顧て呉れる人

は無しな。芝生の兄さんもあんな金持でも一錢の金も貸して與れず。偶に遊びに行つても泊つて歸れとも云つて與れず、德島本町の兄樣は市長になつたり代議士になつて豪い出世もしたけんど今になつては一言半句四季の挨拶に來て與れんわ。食ふに困つて二圓なり三圓なり貸して與れと云うて行つても內にはそんなお金は無いから此度はお斷り申しますと反付けられると云ふ工合でな。內の父さんはあの通り仕事はせずにブラ〱して居ると此那浮世に生きて居るのが眞にいやになりますわ……』相も變らぬ事を田舍辯で說き立てられると堪つた者じゃ無い。此間道で會つて遊びに來いと云つたからあまり行かぬのも氣の毒じやと思つたので行つて見た者の默つて聞いて居ると泣き言計りだ。泣き言聞かせて貰ひに來たのなら二十一日の緣日に瀧の大師堂へでも行つて、道側に泣いて居る遍路乞食の話を聞いた方が遙かに勝つて居ると思つた位で閉口した。叔母の內へ行くのも善いが泣かれる。覺悟は善いか？ 君は面白く無いこと計り家で爲て居て外へ出てまで面白く無いことを經驗する必要があるか？……

などと自分に尋ねながら大道を步いて行つた。大道を步いて居る事は知つて居る。然し何だか外は眞暗がりの樣な氣がする眼もキン〱光らして兩側と前とは見て居る。家が兩側にあつて人間が商買して居る。商買して居る中には古道具もあり時計屋もあり質屋もあると云ふことは知れて居る。がハツキリ此處は質屋で此處が菓子屋だと云ふ區別はつかぬ。何間步いても玉の上を步いて居るか風に乘つて步いて居ると云ふ調子でポカリポカリと步んで居る。肥車がやつて來た。矢張り氣が付かなかつた。

『ホレ、危ない！』と聲をかけられて、氣が付いた。

今迄暗かつた客觀世界がポツと明くなつて此處に理髮店がある此處に着物屋がある。アヽ此處に八百屋がと區別が付く樣になつた。それで叔母の處へ行かうと決心した。派出所の角まで引返して大工町の第二の曲りを左に這入ると丈新町。左側に並んで居るのが松浦の長借屋である。長借屋の一番こちらが叔母の宅で格子戸を開けて這入ると叔母が丁度掃除をして居る。

『ア、榮一樣で、今日は、どしたんで？ 學校はやめたんで？』と驚いて尋ねる。

『何ぞ、用事でもあるんでか？』と返事せぬ中に續けて尋ねる。

『いや別に用事も無いのですが、頭が變になつて神經衰弱でも起つた樣ですから此頃は學校を休んで居るんです。今日は雨降

りなり内に居つてもあまり面白くないから遊びに來たのですよ――』と云ふと、叔母は笑ひ乍ら、

『それじや、まアお上り』と云つて、榮一の上つて行く處を、

『榮一樣、兄さんは今度、大分コレ貰うたそうで……』と母指と人差指とで輪を造つて示す。

榮一は苦い顏して『知りませんよ』と輕く答へると、

『知らんと云ふ道理があるでかい。同じ家に住んで居つて』と榮一にすり寄つて背中を叩く。

『ほんとに知りませんのですよ。』と實際のことを云ふ。叔母はそれでも

『あの富田橋と濟の土手で……榮一樣は喇口だから化けて居るのだらう』と來る。そう來られては堪らぬ。

『實際知らぬのですよ。富田橋や土手で賄賂を貰つたのですかお父樣が？』

『さう云ふ話じやな』と苦笑して妙な振りして云ふ。

『さうですか、全く知りませんでしたよ』

『さうで、知らん方が善いなア。内では叔父樣がそんな話を聞いて來るんでよ。それに大城の方から來とる土方の頭が宅へ此頃きて居る人でな。折々話が出てな、兄さんは甘い事をして居るつて噂をするんですわ――』

『そんなに甘いこと行くでせうか？』

『そらなんでも牛屋島の榊を知つて居るだらうな。それ馬詰の隣村の牛屋島の榊…うちの花が嫁入して居た家でわ』

『ア、知つて居りますよ』と榮一は答へたが小學校時代の昔を思ひだす。從姉の花さんがなる程牛屋島の榊へ嫁入して居た事がある。然し離緣せられたが――

『あの榊が此頃土木に手を出して居るんでよ。兄樣とも昵懇の間じやから甘い事そこらあたり誤魔化して居るんだらうな。…此那事おまさんの前で云ふと怒るかも知らんけんど…まア榮一樣此處より二階へでも行かんで今日は皆學校へなり外へなり出て留守じやからない、まア二階へでもお出でなはれ……』

『エ有難う』と默つて急な小さい段梯子を上つて叔母について行く。

『火でも入れるわな。御免なはれよ掴みさがしてあるけんど』と叔母は云ふ。叔母の云ふ通り取り亂してある。六疊と四疊の二つを打ち通した室に窓の方には二つの小さい机が並んで居る之れは叔母の親類が女の子を女學校へ出すので月に幾何か叔母を補助する積りで子供を預けて居るがその二人の女學生の机

である。その机の上は勿論のこと壁の側の行李支那鞄などは書もせず衣服は疊みもしないで取り散らしてある。榮一は坐敷の眞中へ坐る。叔母は火の無い火鉢を前に据えて坐る。

『煙草喫まぬから火は入りませぬよ』

『さうでか、下にも火が無いやらあるやら解らんけんそれじやもう火は入れんでよ……』と淡泊りした叔母は、氣輕なことを云ふ。

『然しお父樣もよくもそんな事が出來るものですね。』とまた云ふと、

『さうしても善いでせんか。市長になつたらそれ位の事はせな。千二百圓やそこらの年俸であんな大きな家に住んでは會計が立つて行かぬでは』と叔母は何でもないやうなことに云ふ。

『然しですよ叔母樣。市には市參事會員や市會議員と云ふものがあつて中々小さい橋をかけるのでも大勢が相談してするのですがね——』

『そんでも、金の匂ひを少し、かざますと直ぐ云ふ事聞くでわ今時の人は皆利口じやからな金の多い方に付くのじやがな。それでなくとも、受負仕事はらちがあかぬと云うて市長が自分手に取り締ると云ひ出したらそれ切りでないで』と說明して叔母は瘦せた頰に得意の色を輝かす。

榮一は自分の側に捨てゝあつた女學世界を引き寄せて見る。目次を見ると中々面白相な事が書いてある。叔母はそれを見て

『今時の人は女の子でも雜誌や小說つて、色々な本を買うて讀むんぢやな。お金が入ることとぢやな隨分。それ東京ポックとかパックとか云ふ本があるでないで面白い本じやな。少し古いんぢやけんど、歌留多取りの歸りに惚れた男を待つて居る女を、また惚れて居る男を畫いてあつたがなか〳〵甘いこと書いてあつたな……あの本は何處へ行つた知らん、此あたりにあつたと思うたが……』と立ち上つて机のあたりを探す。色々な雜誌を引つ繰り返し引つ繰り返しても見えぬ。

『見えぬわ——』と云つてまた元の所へ歸つて來る。

榮一は熱心に女學世界を見て居る。

『榮一樣。何んで面白いことでもないでか？ 面白いことがあれば明かしてつかはれ』と雜誌を覗き込む。

『さうですね——』と忙然した答をして、世界各國の女學生氣質と云ふ題の所々を讀んで、ともすると叔母の宅に居ることを忘れる位い熱心になる。米國の女學生の自由な戀愛談の所を讀んでクス〳〵と笑つて居る。

『何がをかしいので？　云つてつかい』と叔母は顔を見上げる。それでも榮一は續きを讀んで行く。叔母も少し馬鹿氣て來たから、

『榮一樣今日は叔母樣の家で御飯喫べて御歸りなはれよ。御馳走はないけんど内へ歸らんのならよ』と立ち上つて梯子段の所まで來て云ふ。

『有難う』と唯簡單に答へて置いて讀み續ける。叔母が下へ降りて行くと榮一は考へた。

『も少し丁寧に返事すれば善かつた。貧乏の中でも甥だとこそ思へば甕飯も食へと云つて呉れるのに、昔と違つて飯を三杯多く食はれても困る今ぢやに……心からか何か知らぬが一緒に食へと云つて呉れると嬉しいものだ叔母も可哀相だ、叔父が女郎買ひをして妾宅騷ぎをした計りに破産したのだから、大城の大井と云へば近村で誰知らぬ金持ちであつたのだが、明治の變り目にとう／＼破産して了うたのだ叔父は因果としても叔母は罪が無い、可哀相だ、然し我家も屹度大井のやうになるに違いない』など考へながら女學世界のあちらこちらを渉り讀みした。色々な想像が浮ぶ。この前叔母の内へ來た時に叔父が居た「狸つき」の話をして眞面目になつて自分も「狸つき」を信ずると云つた事から、叔母が叔父は近頃唯信心計りで鹽場の濱の大神宮さん計りに參りに行つて少しも仕事をせず暇があつたら何やら呪ひの樣な眞似をして居ると云うた事を思ひ出す。さうすると五分刈の頭に白い髮が大分のびて口髯も三四分荒らく生やした眼尻の皺が特別に多く深く寄つた顎の三角になつた、頬の細い銅色の叔父が唯ぶら／＼用事も無いのに町を歩いて居る樣が夢のやうに現はれる。何となしに淋しい。衣服に付いた垢の匂ひがする。壁に立てかけてある襖の破れが目につく。机の下の反古がいやに穢いと感じて來る。天井の隅の煤にまみれた蜘蛛の巣や、唯三四寸ブラリと下つて居る麻糸が非美術的だといやになる。疊が穢いと思ふ。窓から裏の方をずうと見ると便所や物干場や芋畑やそれから向ふの藥湯の烟筒が秩序も無く配列せられて胸が惡くなる。雨空の澄みきらぬのも心地惡い。早く何處かへ行きたいと思はれてくる。然し行く處は無いと考へる。また續けて雜誌を讀む。少しは面白い。そして晝の來るのを知らなかつた。

晝には香の物と汁と御飯とで食事を濟ましたがそれから何をして善いか知らなかつた——午後の長い間を。また二階へ上つて雜誌でも讀んで居る中に日は暮れて呉れると思つて二階へ上

つて雑誌を讀んで居ると女學生が歸つて來た。午後四時だ。時間の立つのも早い物だと今更ながら感じて、これはあまり長く居ては叔母に善く思はれぬ。そこらあたりをよく云うて歸つて行かうときまり惡く叔母の家を出た。然しそれから先は何をして善いやら全く解らぬ。何處へ行つて善いやらも全く解らぬ。雨は小止みになつたが小止みと共に夜が近くなつて居る。まア仕方はない。今夜は何處か宿屋へでも？ そうだ。宿屋は善い思ひ付だ。金も二圓二十錢計り持つて居るから上等でなくても中等の宿りで五十錢かそこらはまだ餘る。處で何處へ宿らう？ 二軒屋！ 二軒屋にしよう。然し今から宿り込むのもあまり早くて何だか變だ。勢見の金比羅へでも遊びに行かうか‥‥と思ひ付いたので勢見の方へスタ〳〵行つたが全く無意味だ。自分は無意味で歩いて居るのだと思ふと自身手に可笑くなつて笑ひ乍ら石段を上つた。繪馬堂へすぐ這入つて菓子を買つて居る店へ腰を降した。羊羹の一つも食つて見た。然し甘いと思つた切りで唯‥‥つまらんと思つた。繪馬堂から德島全體を見降しても景色の事も何にも感ぜぬ。家が無意味に並んで居る。人間が無意味に動いて居る。あちらこちらから煙が無意味に立つて居る。榮一は『僕の樣に日にも日にも遊んで彷徨いて暮すと別に不愉快な事もない。大臣になつて乾兒を大勢連れて威張るより大分面白い。此那に氣儘にうろつくのが大分面白くなつて來たわい。‥‥など考へた。

あまり長くも此處には居られぬ菓子屋の婆アさんも店をしまひかけた。どれそれぢや歸つて行かう。歸つて行くのぢや無い何處かへ行かう。然し宿屋へ行くのは未だ少し早い二軒屋の端まで行つて見よう。『どれぼつぼつ』と石段を高下駄で降りた。下の巡査派出所では、巡査が何かコツ〳〵書いて居る。無意味なことをして居ると心の中で笑つて、呉服屋の前へ來ては無意味な人間が裸體を耻かしがるので着物がゐるのだと心の中で思ひ乍ら町の端へ來たがまだ日は暮れない。も少しも少しと思ふうちにとう〳〵法華橋まで一里を來て了つた。もう大分暗くなつた。これから歸れば丁度宿屋に入るに都合が善い。『どれ』と舞ひ戻つて場末を町の方へと歩いて行く、町へ入ると精米所がある。精米所の隣りが鍛治屋——二軒の家の前は野良だ。三軒目から向側がある。鍛治屋の隣りが木賃宿。ア木賃宿へ今夜宿つて見よう、經驗的に。然し少し耻しい‥‥絣（かすり）の袷に鳥打帽を被つて居ては。然し勇氣が無い樣な事では困る。なに家々に燈のついて居る時だから別に見る人もない。一町計り通り過ぎ

たが引返して、
『御免なさい。今夜泊めて下さいませんか』と頼むと、眞赤な顔をした四十恰好の髯の男が角火鉢の前で晩酌して居たが、
『狹いけんど泊りたければお泊りなはれ』と榮一の顔を覗きながら答へた。そして
『御飯はすんだかい？』と問うた。それで、
『まだすみませぬ』と答へると
『ゆきひら貸して上げるけん、向ふの火鉢で火を起して御飯をお炊きなはれ』と云つて呉れる。
『お米や炭は？』と尋ねると、
『お米、何合入るで三合食ふかい？』と問ふ。
『え、三合位い貰ひませうか』と云ふと、暗い佛壇の下の米櫃から米を三合出して呉れる。行平鍋に入れて『それを裏の井戸へ行つて洗うて來なはれ』と渡して呉れた。

裏へ出ると女の人が竈の下の火を見詰めて居た。榮一が出て行つたので一寸と見た。榮一は生れて初めて米を洗ふことだと思ひながら井戸から水を汲み上げたが向ふを見渡すと水田に細い雨が落ちて勢見の山がボーと見える。悲哀な濕りツぽい景色にまた何とも云へぬ雅致がある。

米を洗ひ乍ら『僕は實にローマンチツクな人間だ。ローマンチツク……自由意志……悲哀なのだ─然し─僕は何と幸福な目に會つたのだらう。幸福だ。僕は此那美しい一瞬間を經驗する事が出來た。僕は雨の夜に自分手に米を炊く』など考へた。

米を洗つて、内へ持つて入ると、例の主人が『それ炭を上げるでよ。二錢のもあつたらいゝだらうな』と炭を呉れる。
『こちらの室に火鉢があるでわ』と二尺計りの土間を置いて隣つた室の障子を一寸と開いて呉れた。

開けると室は十疊敷計りのものだ。三分心のランプが一つ眞中に吊つてある。隅から隅まで善く見えぬが向ふの方には六人の男と女が三組になつて抱き合つ寢て居る。中には子を中にして居る者もあり、裸體になつて着物を薄い薄い蒲團の上に置いて寢て居る者もある。蚊が居るが蚊帳はつらぬらしい。こちらの入口の隅に鐵の火鉢がある。主人は、
『あの火鉢で──』と示して呉れた。幸い火種がある。二錢の炭を入れて火を起した。大分待たねばならぬと榮一は隅に向つて坐つた。然し矢張り三組の男女が眼の前にちらつく。

十七八分すると沸いて來たので、蓋を取つて善いのか惡いのか知らぬが、取らぬと火が消えるから、取つて沸くのを眺めて

居た。
『暇だ。暇だ。』と頭の中から叫ぶ。『哲學問題はあまり苦し過ぎる。唯客觀の現實を樂まう』と答へて置いて米粒が角力を取つて居る樣に動くのを感心しながら見て居た。『暇だ、暇だ。』と頭から叫ぶ。飯が焚ける。食はふか……と茶碗と箸を借つて來て主人が持つて來て吳れた梅干と干魚を菜にして食ひ始めた。
食ひ始めた時に、坊主頭の五十恰好の男が細い目をして這入つて來た。顏は銅色で酒氣を帶びて居る。然し何處かに愛嬌がある。
榮一を見て一寸驚いた樣子であつたが、榮一はぶしつけ無い顏もせず、
『今晩は』とこちらから挨拶をした。それで向ふも、
『今晩は、善く降ります』と答へた。男は坐敷へ上つて火鉢の側に座つて煙管に火を付けながら、
『失禮ですが、あなた樣はどちらで？』と問うた。
『え、こちらで御座ります。然し生れは神戸で――』
『さうですか？　神戸と云ふと海を一つ越へてですな。』
『あなたさんは？』と榮一が尋ねると、
『越中で御座ります。』
『隨分遠い國で御座りますね。何をして居らツしやいますか』と尋ねた。尋ねられて視線を炭火の方へ轉じながら、少しの間默つて居たが、廻りを一寸と見渡して、
『はい、何です、殖林事業の遊說で、田舍廻りをして居ります唯今の處では』と一寸息を切る。
榮一は、殖林事業の遊說……大きな事を云ふ男だなと思ひながら、その男を見ると破れたシヤツに處々つぎの當つて居る筒袖の袷を着て別に人品のある男でもない。
『遊說とはどう云ふ處を？』と大きな聲で聞くと、
『大きな聲をせん樣に、皆が寢て居りますからな。』と制して大きな聲で會話を避けようとして居る。榮一は此老人の動作が不思議で堪ら無かつた。筒袖の男は低い聲で、
『殖林の勸誘で御座りますから家々を尋ねて行くので御座りますがない。あの村で三日、此村で五日と家々を訪問して殖林の道を講じて居るので御座ります。』
『さうですか、それは善い思ひ付ですね。』と贊成の意を表すると、
『あなたはどう云ふ御職業で居らツしやりますか』と問ふから
『え、まだ學生で御座りまして職業も何も無いのです、近頃腦

が悪いのでブラ〳〵して居ります。』
『さうでいらツしやりますか今日は何處から？』と尋ねられて、榮一は答に困つた。
　暫時二人は沈默したが雨がまた烈しく降つて來たらしい、戸の外には恐ろしい音がする。榮一は何とは無しに感情が興奮する様に覺えた。然し胸には悲壯な血が湧く。小さい聲で、
『此處に寢て居る人達はどう云ふ人達ですか？』と頭を對手の頭にすれずれにして聞くと、
『え、皆、乞食です』と一寸後を見返つて、自分は乞食と同宿して居ても地位が違つて居るよと云ふ態度で返事をした。
『皆夫婦なのですか』と聞くと、
『いや、寄るとあアやつて寢るので、夫婦とか何とか云ふ六ツかしいことはあの仲間には無いのですな。』
『さうですかね』と驚いた様子で榮一は答へた。語をついで榮一は尋ねた、
『乞食だけですか？　これらの人は？　よくやつて行けますね。』
『そらまた日に一升も一升五合も米を貰ふ事は普通ですからな。そしてそれをまた此處らへ來て賣るのですが一合三錢か四錢かに。』
『フム、』と榮一は感心して居る。話の方が飯より甘い。然し飯も魚の干物で案外甘かつた。四杯食つて、明日の朝の分に少し殘した。
男は稍大きな聲をして
『あなたは明朝は何處へ？』と問ふ。
『さ何處か知れませんが、彷徨くのがすきですから。』と答へたが、
『遊説をして廻つても私を信用して呉れぬので困りますわい。』と男は獨り言の様に云ふ。
　榮一は茶碗と箸とを隅に片付けながら、
『何故です？』と尋ねた。
『こんな振してはどうしようもない。』と榮一の新しい綛の衣服に目を付ける。
『何でも善いでせう。自分の主義さへ通れば。』と笑ふ氣味で云ふと、世の中の人は心の中は讀まんでな』と答へる。
『世の中の人は皆馬鹿と思はねば事業には取りかゝれませんよ…：自信が必要ですね。』と榮一は老人の心を讀んだかの如くに云ふと、男は改つた口調で、
『全くさうですな。これで私も越中の高林寺の僧侶で御座りま

すが、今時の坊主が酒色に溺れ居るのが歎はしいので乞食の眞似でもいゝから、日本の爲め國の爲めなら決して身を厭はずに遣つて一つ外の人の思ひ付いて居らぬ殖林事業の遊說をしようと寺を出たので御座りますが……もうこれ寺を出て今年で十年難行のありだけはして來ましたが……實際どうも世間の人は馬鹿としか思へませんな。』と述べたてる。

『さうですか、中々熱心に奮鬪せられたのですね。』

『隨分やつて來ましたな。』

『然し殖林と云ふのは一體どう云ふのです。』

『私の云ふのはいや何に、面倒なことはないので、日本の國は材木國であるのに、材木を段々伐つて了ふなら景色を害するのみならず今に都會などは空氣が惡くなる。それに家を建てる木は少なくなる。それで色々な木を植える必要があるが——桐は一番目に立つて育つ木で三十年すれば早や物になるから桐を家のもの一人に付いて一本づゝ、殖えてはどうですか——と說いて廻るのですが——日本に五千萬人の人口があるとしますと一人に付いて一本づゝ植えるなら五千萬本の桐の木が生へる理由で、之が三十年して一本五圓に賣れるとしますが五五二十五の二億五千萬圓の大金になりますからな。戰後の日本が貧乏で困つて居る時に此那金儲の道を忘れて居ると貧乏する一方じやと思ひましたので、日清戰爭が了んで、すぐ思ひ立つて國を出ましたが……いや世の中の人は耳が無いので困りますわい——』

と眼の下に皺をよせて冷かに笑つて、俛いたまゝ烟管に烟草をつぐ。

障子の向ふに主人の罵る聲が起るが、唯、罵る聲計りで罵られて居る者は誰れか知れぬ。主人は酒の醉が廻つたのだ。

榮一は烟に卷かれて唯苦笑した——此老人にもまだ若々しいドン、キホーテ式愛國心があるかと思つて。

『いや、ドン、キホーテ式は實際此那封建時代の老人の頭に多く湧くのだ。武士道は根本的にドン、キホーテ式だから寂しい人生だと、此老僧の獨孤な情熱の生涯を何とはなしに冬枯れに會つた桐に比した。桐の葉が一枚一枚舞ひ落ちると青細い灰色がかつた幹が眞直につッ立つて、枝も僅か三四本幹の先についたなり西風に震ひ上つて居るのが眼の前に浮ぶ樣だ。が何だか老僧は詐欺師の樣に思はれてならぬ。然し木賃宿階級の社會は之だから愉快だと思はざるを得ない。

『それで効果はどうですか?』

と問うた時に急に二階から落ちる物音がして女の泣き叫ぶ聲

がする。主人の聲で

『此の畜生奴が！』と物狂はしく聞える。榮一は障子を開いて立ち上ると、佛壇の横の梯子段の下に女が泣き倒れて居る。二階から三つ四つの荒々しい顔が、眼計り光らして下を覗いて居る。皆土方の連中だ。主人はすました顔してまた盃に酒を注いで居る。

二階から覗いて居る顔が、

『どしたんな、一體？』

『ひきずり落したんぢやわ、二階へ逃げて來よつたのを、あしこまで上つて來た奴を。』と話して居る。

老僧は落付き拂つて烟草を薫らして居る。ちつとも騷ぐ樣に見えぬ。

『毎晩あれなんです――困つたものです、下等社會は。』と云つて少し高く止つて居る。

新見はゴールキイの小説をパノラマで見る感がした。胸が壓迫せられる樣に重い。然し木賃宿の内は何か活氣が滿ちて居る。生命の水が湧いて居る樣だ。

『あれ所じやないのです。一昨日の晩なぞ、そら非道い喧嘩しました、息子が歸つて來ましたので。なんでも此處の主人は此處のお神さんと後から一緒になつた樣ですな。息子は先の女の子の樣ですから……』

榮一はまだ老人の夢の樣な經驗談を聞きたいので、

『遊說の結果はどうですか？』と再び尋ねると、

『今の處は駄目ですな。どうも私を乞食の樣に思つて信用して呉れませんからな。』

開いた障子を閉ぢようと向ふを見ると主人は甘さうに飲んで居る。新見は喉が乾く樣に思うた。六人の乞食は靜に眠つて居る。

『つまりあなたの風體を見て信用しないのですか？』

『まア、そんな者ですな。之れが一月前までは袈裟があつたのですが、木賃で一晩泊つて財布も何にもかも取られたので袈裟だけ殘つた奴を旅籠賃の代りに置いて今は此那襤褸の筒袖一枚になつたものですからな。人が信用して呉れんのも尤もですわ。』

『それじや、あなたの衣物と私の衣服を交換しませうか？』と云つて見た。

『冗談じや御座りませぬ。虱の居る樣な襤褸とあんた樣のやうな立派な絽と――』と相手にならぬ。

『さ替へましよう。あなたさへ、おかまひ無くば。』と矢張り眞面目に主張する。

『冗談じや御座りませぬぜ』と大きな聲で斷る。

こいつは一つローマンチック風を吹かしてやれと榮一は考へたので、

『何だえ。君、一枚や二枚の着物位い。裸體になつても知れてるじや無いかね。君は遣ると云ふものをよう貰はぬのかい？それじや人に遣ることも知らないだらうね——』と一寸と俠客風を吹かしてみた。老僧は頗る眞面目に、

『感心した、あなたに。さう云はれて貰はぬ理由には行かね。よし貰ひませう。……然しあなたは豪い。世界にあなたの樣な見上げた人は一寸少ない……』と嘆賞して居る。

榮一はシャツもズボンも脫いで褌一つで火鉢の前に座る。老僧も衣服を脫いだ。二人は顏と顏を見合せて小氣味よく笑つて暫く默つてゐた。外は雨が急しく音をたてゝ降つて居る。榮一は『ローマンチックな眞似をした。他人の爲めに着物を脫ぐと云ふ聖人の眞似をした。我輩も聖人の中だ。』など笑ひ乍ら其晩は煎餅蒲團にくるまつて寢た。





# 工場より貧民窟へ

賀川はる子

日本屈指の富豪の數代前の令孃が、如何に貧乏であつても、箕に一二杯の金はあるであろうと云はれたと聞ましだが、この箕の中の唯一つの一分金さへ終日働いても稼げなかつたのは私で、私が今より十六年以前、始めて神戸の、印刷會社に傭はれた時には日給僅に十二錢でありました。

この工場は或倉庫であつたものをその頃代用して居ましたので不便は申す迄もありません。二階は小さな窓から漸く僅の光線を入れますが、階下は日中電燈の必要がありました。斷らした中で男女混同して百五十人程が、或は印刷部、或は植字、製本、鑄造、罫引と分れて働きますが、女工は製本部に最も多く印刷部には全く居らないのであります、私が通勤してから間もなく一幼年工は印刷機のベルトに着物の端を卷かれて怪我を致しました。

朝は八時から六時までは定時でありますが多忙を極めてきますと女工も夜業十時十二時年末などはよく徹夜さへするのであります。

年少者は八歳と云ふ女工もありました、學校ならまだ尋常の一二年であるものが、朝は必ず時間に出て來て一定の仕事を致します。流石に節分とか祭日とか物日には早引が仕度ひので、課長にその事を賴みに參りますが、課長は嚴重でなかなか歸宅を許して吳れませんので假病をします、入口から公然と外室の出來ぬのは勿論で、窓から出て頭痛膏を買つて來て、頭が痛むので歸宅を許され度と云ふのです、課長が見ると頭痛膏を貼つて居るので許すのです。それに味を占めて度々その苦計をするのです、遂にそのことを課長が知りまして、後は一錢の資金を投じてこの計は効を奏さなくなりました。

私は四五月頃の夕方を非常に喜こぶのですが、永い間冬の日短で、工場内は四時過ぎから電燈の下で仕事をして居て六時の

歸途は全く暮れて終つてゐます。冬が漸く過ぎ去ると、太陽がまだ西に入らぬ前、靜々たる落日を身に浴びながら、家路に向ひます、これは終日工場に閉ぢ籠つて居る私には何とも云へぬ喜こびであるのであります、日光を喜こべる私は工場生活の賜だと思つてをります。

女工の賃銀は、數ケ月目に三錢四錢昇給しますが、幼ない女工は半月の收入が貳圓に足らない者もあります、家庭に依つて少々は違ひますが、子供は勘定日に二三十錢位の小遣を貰つてあとは悉く家計に入れて、幼い子供の晝も夜も働いて得た工賃は、家賃になつたり、米代の幾分になつたりするのであります。時に赤い衿の一つや髮飾りの樣なものを買つて貰ひますれば非常な喜こびで又半月精出して働くのであります。

年長者になりますと、家庭を持つて夫と共に工場に出て居るものもあります。そうなると朝も他人より早く起きて家事を濟ませ工場へ出て來ては夜業までするのでありますから漸く身體を休める時と云へば夜が更けます。

こんな働き者は、赤い衿位では、滿足されないで正月の晴着には高價の物を飾り度く賴母講をたてたり、無理な金融をしてその重荷が一年中の苦しみとなる樣なこともあります。

一體この人達は一日一晩どんなにして暮して居るかと云へば勿論無駄噺はしてはならないと云はれてゐますが、栅の雛人形の樣に十時間も沈默も出來ませんので、賃銀の不平を云つたり日曜の休日に見て來た安芝居の批評や、時々の流行唄を小聲で歌つたり、しますが、課長の見廻りがあると、食べかけの昆布や豆が臺の下に隱され口をつぐんで如何にも精を出してゐる樣に裝ふのです。

時には課長の前に呼び出され、不出來な書物を差し出されて「お前達は噺してばかり居るのでこんな物が出來るのだこれで納まると思ふか」と、大喝一聲に縮み上り「以後は注意致します」と引き退りますが、十三時間も十五時間も働いて疲勞の限りを盡して完全なものが出來るかどうかを考へて貰い度と心に思ふのであります。

伎倆に就ては相當に自信を以て居ります。或者は量に於て他人を壓し、或者は質に於て我は勝ると思つてゐます、別に奬勵されなくとも各自に競爭をして手腕を振ふ時もあります。そんな時こそ仕事に沒頭して、平常の樣に食事の時を待ち兼ねたり時計ばかり見て歸る時間を忙いだりすることはなく、自分の指の微妙に動く熟練の結果をよろこびます。

　私が十七歳から七年間の工場生活には隨分悲慘な家庭を見ました。二年餘共に働いて居つた十五と十三歳の姉妹がありました、兩人共中々の精勤者で六ケ月皆勤をよく續けて賞與の反物を貰ふ程でありましたが、この二人は母と多くの妹達のために出來得るだけ多く働いて十五日目の勘定日には少しでも多く得樣とあせつてゐました。或頃から健康を害して身體が疲れ易いと困まつてゐましたが、醫師の診察も受けず、會社も缺勤せずに居ました。私が毎日出勤簿を記しますとき、かつて缺勤の印を入れたことのなかつた、その少女松井はるゑの名の許に、或日休の印を入れなければなりませんでした。妹だけが淋しく通勤してゐました。姉の病氣は急には回復出來ないと妹から聞きまして私共は案じてゐましたが、驚くことには、それから一週間を出ないで、可憐な少女は苦しい工場生活と、悲慘な家庭から逃れ出てこの世を去つて了ひました。悲しみはこれに止まらず、妹もまた三十日を經ないで、姉と同じ病に倒れて、永い眠について了ひました。

　リョーマチで苦しんだ娘もありました。九歳の時から同じ工場に働きましたが、四年後にリョーマチを病んで兩手の自由を失ひました殊に一方はひどく形が見憎くなりまして口の惡い女工達は癩病だと云つて彼女の傍を遠ざかります、彼女はかこちました、人に嫌はれても痛みを辛棒してでも働かねば私と年老た父とは過せぬからと、涙ながらに語ります。

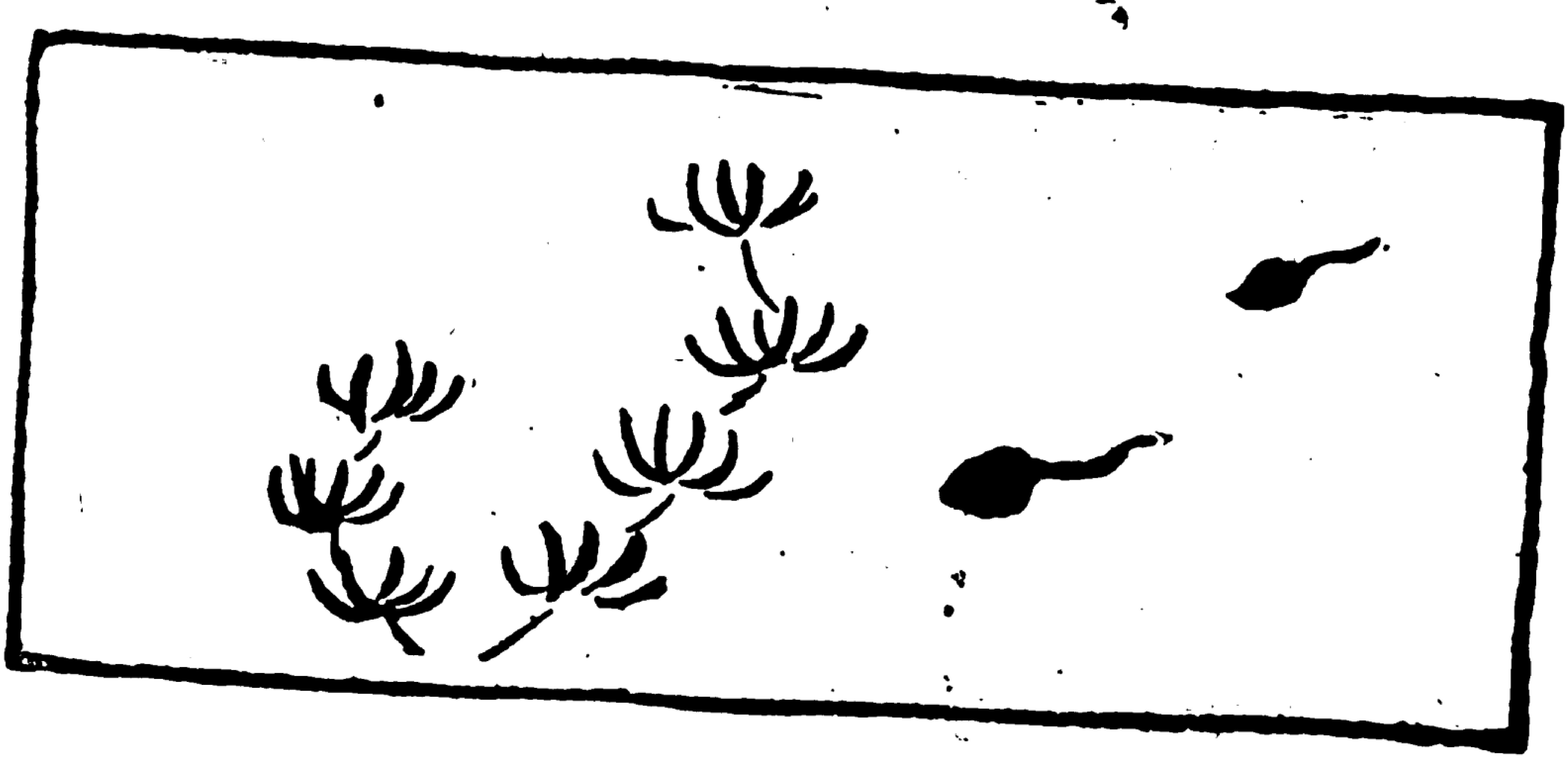
　又一女工は、同工場に働く男子に嫁ぎました、この夫は、非常な飲酒家で評判者でした、若き妻は、忽ち母親となりまして今では三人の子供を持つてゐます、夫の飲酒は三人の可愛い子供の親となつても止まらず、自分の手に入る賃銀は、妻子の待つ家庭へ持ち歸る途中、酒の爲めに悉く消して了ふので妻もそれには全く困つてゐます。今日でも貧に窶れた彼女が幼い子供を右と左に連れ背に一人を負ふて、會社の支拂日にはその門口に夫の歸りを待つて居る姿を私は見受ます。

　貧民窟へ來て貧乏なるものが如何に人類を苦しめつゝあるかを更に深く感ぜしめられました。神戸新生田川の東部、俗に云ふ新川の貧民窟は八千人の貧困者が、衣食住のいづれもに窮した生活狀態であることをもし一歩をここに入れるならば直ちに背かれることと思ふのであります、二月の寒空でも垢に縞目もわからない薄い物を僅ばかり纏ひ、子供も婦人も帶なしです、男子が婦人の着物を着たり、着物がない爲め寢床から出られないと云ふ樣なものもあります。家は古い木で建てられた四疊半

或は三疊、甚だしいのは二疊よりない一室の借家で一日七錢から十二錢位の日家賃を晩方家主が廻つて集めてゐます、こんな狹い家に親子五人位の家族が一枚の蒲團に卷まつて顫へながら一夜を明すのであります。一日の勞働に疲れた者がこんな家にその體を休ませなければならないのです。拾ひ集めた古木や、道端に捨てゝある古下駄を焚きますので家は黑く煤け、雨降には雨洩りがするので、その煤を傳ふて家の中へ黑い雨滴が落ちます、共同便所は溢れて道路にまで押し寄せます。

悲慘なのは病人です、死の終りまで醫藥に親しめず、一度醫師の診察を受け度、一包の藥だけでも飲み度と願つても出來ずに死ぬ者もあります。不景氣の時に死ぬ者こそ氣の毒で葬式が出されないので茶箱に死體を詰めてその家人が火葬場へ運ぶと云ふものもあるのです。この[illegible]の空箱へ入れてありました、木箱を小さくして棺桶にしてあるのですが、それには煙草專賣局と書いてありました。

私が實際に於て經驗した、工場生活と、貧民窟の生活の、この二方面の共通點は、貧乏そのものであるのであります。これが根本的の防貧策としては、所謂勞働問題が解決されなければならないと思ひます。外に勞働問題の解決を見、内に貧民窟の改良が實施さるゝに至つて、神戸の貧民窟が一掃され、此處に新しき天地を出現することであらうと思ふのであります。私はこの具體的の改造を切に願つて止みませぬ。



# 死の幕の彼方

近松秋江

肝腎の學課が留守になるので、小說の方には脇眼を振らぬやうにしてゐたのだが、明治二十六年の夏私が中學校の一年から二年に進級した時の暑中休暇には、かねて新聞の廣告などで見て置いた博文館發兌の帝國文庫第一編曲亭馬琴の八犬傳を讀む機會を得た。それまでにも賴山陽の日本外史は小學校の時から夙に愛讀の書であつたし、稗史のたぐひは殊に好きであつたが、小學校ではいつも一番の成績で、そんな物を讀むには綽々たる餘裕があつたけれど、中學校に入つてからは、一年の時から幾何だの代數などに苦められて、とてもそんな物を讀んでゐる餘裕はなかつた。

やうやく樂しい暑中休暇が來た時に、父に八犬傳を買ふたのだからお錢を欲しいといふと、まだ中學校に入らない以前は、私の讀書力の進むのを愛でゝ種々な稗史を投げてくれた父が、

「そんな物は學校が濟んでから、年を取つてから何時でも讀める。」

といつて却々うんと云つて定價四拾五錢のお錢を出してくれさうになかつたのを、年齢相應な生意氣な理屈を云つて、遂々買はしてもらうことにした。その時の

嬉しさ！ そしてその暑中休暇には八犬傳三篇の中二篇しか讀まなかつた。翌年の夏には、もう疾に中學の學課に辛抱しきれないで、學校を止めてゐた。學校を止める時には、父は一應「もつとよく考へてから止めた方がよからう。」といつたのを、それほど大騷ぎをして、その頃一縣に一つしかなかつた、而も全國で頗る好評のあつた岡山縣立中學校に五六十人中五番の好成績を以て入學し、自分も夢のごとく意外ならば、父兄や郷友まで驚いたほどであつたのを、私は深い前後の思慮もなく止めてしまつたのだ。

中學校を止めた一年の夏はずつと父の傍にゐた。私の故郷は岡山縣の片田舍で誠に不便で仕樣のない處であつたから、都會好きの父は晩年には岡山の街にゐて暮してゐた。十里ばかり隔つた實家には長兄夫婦に、偶に父のところに來るだけで母も主にそちらにゐた。私と父とは四つの釣手を二つづつ吊るといつたやうにして一つの蚊帳に寐てゐた。私はその頃はもう八犬傳の第三編をも讀み了つて、今度は矢野文雄氏の經國美譚を讀んでゐた。蚊に惱まされ讀みづらいので、早くから蚊帳を釣つて父も私もその中に入つて横はつた。父はその時まだ五十四才であつたが、虚弱な質であつたし、氣持ちも年よりは十年くらゐはどうしてもふけてゐたやうである。

父がまだ田舍の家にゐた頃でも、どうかすると、父の傷ましいまでに老衰した形容が歴々と眼に立つことがあつて、その時、もう父は近いうちに死ぬであらう。假ひこゝ十年や十五年には死なぬとしても、必ず死ぬる日が來るにはちがひない。さうした時に——父のあの傷ましいまでに窶れた姿や顏や眼が永久に消へ失せてしまつた時に、私はどんな心持ちで父の死に對するであらう。それは必ず遠からぬうちに私の上に落ちて來る運命にちがひない。それを思ふと私は氣が遠くなるまで、身も世もない心地がして、もはやそれ以上に、それから先きの事を想像してみるに堪えなかつた。そしてその忌はしき妄想を強ゐて思ひ消さうと努めながら、やつぱり父の老いた眼元や姿を凝乎と見守らずにはゐられつた。

市街に住むやうになつてからは父も携はつてゐる事業などのことで心が緊張してゐるせゐか、今までになく元氣づい

てゐたが、それでも蚊帳の中に二つ寢床を並べて私は一心不亂に蚊帳の外に置いたランプの火光で經國美譚に讀み入つてゐると、父は眠つてゐるのか現でか、俄かに劇しい咳嗽に苦められて、絶え入るやうに咳嗽をはじめる。それが、いつまでも續くので、私は本から眼を離して向うに横つてゐる父の方を見る。父は薄い夏の褥の上に骸骨のやうな身體に鼠色の縮の單衣の寢卷を着て海老の如に曲りながら、傍で聞いてゐられないほど切なさうな息をして咳き入つてゐるのである。

晝間は經營してゐる店の方にゆき、夕刻歸つて來て夕飯を濟まし、しばらく表の方の間で好きな煙草を吸ふてゐるかと思ふと、

「もう蚊帳の中に入らうかの。」

といつて私を誘ふて蚊帳をつる。父は煙草を吸ふてゐる間も、それから蚊帳の中に入つてからも暫らく煙管で灰吹をこん／＼と叩いてゐるが、その間も何を考へてゐるのか、毎時凝乎と考込んでばかりゐた。

そして灰吹を叩く音が止んで寢入つたかと思つてゐると、その傷ましい咳嗽の發作が起つてくるのである。絶え入るやうな劇しい咳嗽の聲は私の胸にまで響いた。

私は經國美譚の佳境に入りつゝ、またしては氣になるので時々本の上から眼を放して父の痩せた海老のやうに曲つた寢姿を見やるのである。そのうち咳嗽も靜まつて、いつか寢入つたやうである。

私は、今まで、こんなことを書いて來たが、これから父を中心にして、父のまはりにゐた、今はもう、父と同じやうに夙に世を過ぎてゐる人々の印象を誌して置かうと思ふのである。私は、自分が成人してから多くの人間を見、多くの人間に接した。けれども、それは、自分がまだ稚くて、感情の純粹であつた頃に接見した人間の印象とは甚しく異つたものである。その頃見た人間のしてゐたことや、いつたことには、單に私と利害の關係を超越してゐたのみならず、何

となくユーモラスなところが多かつたやうに思ふ。それは、二十數年間の蒼い夢のやうな幕を隔てゝ思ふからであるかも知れぬが、私には其等の人々の容貌風采が今でも尚ほ明歴と眼に見るやうに記憶に殘つてゐるのである。

父の腰刀の如に、父の手先になつて常に動いてゐた甚藏といふ人間があつた。私はその人間のことをいつまでも忘れることが出來ぬ。彼は道樂肌の人間であつたが草深い田舎の者にしては商才があつて、目先きの利く巧慧な人間であつた。油斷のならぬ狡い處もあつたが何事でも話しが早解りした。父は時々甚藏を信用しなくなることもあるが、どうも他の者では間に合はぬといつて又しては甚藏に事を投げて用に使つてゐた。甚藏の嘘といつて大嘘吐きが村中の通り者であつたが、嘘を云つてゐるなと知りながら、口の先きが巧いので離れでも、うつかり話しに引入れられてしまう。私の三人の兄の結婚に關して彼の關係のないのはなかつた。そして甚藏自身は何度女房を持ち替へたか知れない。彼の女房で最初に私の記憶にあるのは、隣り村から來てゐた。いふまでもなく普通の順序によつて結婚したのではなかつた。その頃私の子供心に聞いてゐたことを後に思ひ出してみるに、兩方でひどく慕れ合つてゐた仲にちがひない。それでゐながら又この夫婦ぐらゐよく喧嘩をする者もなかつた。女房はお由といつて、私の子供の眼にも田舎の者にしては一寸垢汁ぬけのした小意氣な女であつた。

「甚さんがまた夫婦喧嘩をした。此度はなかく〳〵念が入つてゐるから一寸では仲が直りにくい。」

といふやうなことがいはれて、甚藏が暫く私の家へ來てゐるやうなこともめづらしくなかつた。それも喧嘩の原因はいつも嫉妬で、女房は大の嫉妬燒きであつた。甚藏はまた道樂者で浮氣をよくした。夜々中私の家の戸を叩き起して、甚藏がひどい夫婦喧嘩をしてゐるので直ぐ一寸來て頂きたい。といつて、寢てゐる父を呼びに來るのを私はよく知つてゐた。一度など亭主の甚藏が天秤棒を擔いで他から商買にいつてゐて戻つて來ると、女房のお由は、「おかへんなさい。」と常のとほり愛相よく出迎へて、甚藏が肩から荷を下ろして、天秤棒を外すのを手傳ふやうにしながら、突如その天秤棒を引手繰つて、いやといふほど亭主の向脛を打ん毆つた。甚藏も手を出すのは早い方であつたが、女房には屢く打た

れてゐた。その時の活劇の光景を彼は落語家のやうな面白い語調で私の母などに繰返して話して聞かせてゐた。

「おかへんなさい。と、毎時とちがうて、今日はえらい御機嫌が好いよ。と、少し不思議に思ひながら、手を出して天秤棒をとらうとするから、此方は何の氣もなく渡すと、突如此處のところを、眼を廻はすほど打つた。……」

彼はさういつて、自分でも面白いやうに激昂した調子で笑ひながら話した。

また一度は、尺八を以つて亭主の肱のところを折れるほど打ん毆つた。その時であつたと思ふ。甚藏は、もう此度といふ此度こそは、どうあつても勘忍ならぬといつて、遂に別ればなしになつてしまつた。その時も喧嘩の起りはやつぱり嫉妬であつた。夫婦喧嘩は犬も喰はぬといふが、甚藏夫婦はとり分け愛の變形たる嫉妬が原因で毎時喧嘩をはじめ、到頭それが昂じて仕舞に別れるやうなことになつてしまつた。女房のお由は眉を落して齒を染め、華奢な物腰に單衣の頃はよく黒と白との辨慶格子を着てゐたのが今も眼に殘つてゐる。その頃未だ七つか八つの私の絲髮にした頭を撫でまはしながら。「鹽辛さうな顔をして。」といつて、絲髮を摘んで數へたりしてゐた。

甚藏が父の代理で、兄の嫁を聞合はせにいつたのは、尺八で女房に肱のところをいやと云ふほど毆られて暫く私の家に來てゐた時であつた。何か事があると、蜂の巢をつゝいたやうに仰山になる甚藏であつたが、女房にはよく劣けてゐた。およッさんおよッさんといつて、村中で評判の女であつたが、遂にそのおよッさんも甚藏のところから隣り村の母親のところへ歸つてしまつた。甚藏は村では、たつた一軒しかない荒物屋を營んでゐる者であつたが、商買をしてゐる家に一日も家内がなくては立ちゆかないといふので、その後私の父の媒介でこれも近い處の町から二人の男の子の連れ子のある後妻を迎へた。先の女房には子はなかつた。甚藏は道樂者であつたから、自分にも子は出來なかつた。此度の女房は先のお由とちがひ、今こそ逼促はしてゐるが、色香こそなけれ、身元もよく、讀書算の術にも暗からず、氣質から物のいひ様物腰まで大家の御寮さんといふても耻しくないおかみさんであつた。けれども時々向腹を立てゝ、まるで狂人のやうになる甚藏は、そんな貞良な女房をも又しては苛責して出すの引くのといふ悶着をおっぱじめてばかりゐ

た。此度は先のおよしの時と違ひ夫婦喧嘩ではなかつた。此度はいつも甚藏の方から何か氣に入らぬことがあると云つて一寸したことにも疳癪を起しておとなしい女房を打つたり毆いたりした。村内にはその女房の遠縁でおぢさんといふ名目に當る老人があつて、その老人の方から甚藏とも元々まるきりの退いた仲でもない緣つゞきの夫婦であつた。何か甚藏のところに悶着が持ち上るとその老人が驅付けていつたが、そんなことくらゐで甚藏の疳癪は收らなかつた。そして仕舞には私の父のところへ持込んで來た。ある時など子供の私は寒い／＼冬の夜半母の傍に寢てゐて、ふと物音に眼を覺ますと、裏の戸を叩き起して、戸外から聲をかけて七十をもう五六も越した老人のそのおぢが姪にあたる甚藏の女房と連れ子の弟の子をつれて來たのであつた。私は隣の部屋の話し聲にふと眼を覺まされた。私の傍にゐた母は、おろ／＼聲で、

「お前などは内で毎時無理ばかり云ふけれど、益さんを見なさい。お前よりはまだ三つか四つも小いのに、本當のお父さんが無うて、他人の父親の世話になつて居ると、あのとほりぢや。どんな夜々中でも出てゆけといはれゝば、お母さんに從いて貰はれて來た親の家から出て行かねばならぬ。……」

溫々と寢てゐる私に云ひ聞かせるやうに、さういつたかと思ふと、あとは獨言のやうに、

「いや、ほんとに甚藏といふ人にも困つたものぢや」と、母は舌打ちをしてゐた。

座敷の方では、七十幾つの老人のぼそ／＼した話聲が洩れて甚藏が今夜の中に親子共出てゆけといつて、收りませんのでといふやうなことを私の父に向つて話してゐるらしい。兄の方の子は去年から大阪へ丁稚奉公に出してあつた。

戸外は山里の冬の夜風が大きな魔物の息するやうに、がた／＼と戸を搖つてゐる。――私は幼いころの冬の夜風の山里に荒れ狂ふ物音を、いつまでも忘れることが出來ぬ。長い／＼冬の夜その風の吹き狂ふ物音で屢々圓かな夢を破られた。その風は何處から吹いて來るか知らぬが、消魂しい物音に、ふつと夢を覺まされて枕の上に耳を立てゝゐると、子供心にも神經のせゐか、遠くの方から丁ど人の足音が忍び寄ると思はれて、さば／＼と近づいてくると思つてゐると、それ

が緣側の雨戶や入口の戶に來て颯と打突かると、まるで戶外から家の內に入らうとして隙間を見附けて搖つてゐるに違はない音がする。恐ろしい者でも押入つて來るのではないか、蒲團を引被いで寢床の中に深くもぐつてゐると、一と仕切り戶を搖つたあとは、又ざあツと水の退いてゆくやうな音を立てゝ遠くの方へ吹き狂ふてゆくらしい。どこへゆくのであらう。おほかた向ふの山から彼方の山へ吹いてゆくのであらう。そして搖られた入口の大戶が何時までも泣くやうな音を立てゝ、靜かな暗の中に鳴つてゐる。その戶の鳴る音に私の幼い神經は倍々冴えて暫く眠られないことが屢ゝあつた。私は寒い、暗い冬の夜長に山里を吹き荒んで通る風の音の心細さを、いつまでも忘れることが出來ない。――

私はその風の音と母の今云つたことゝが寢覺めの心に沁みて暫く悲しさに胸が塞がつてゐたやうであつたが、それでも健かな子供の神經はそのまゝ鎭まつて、いつの間にか又すや〳〵と寢入つてしまつたらしい。私は、母親とゝもに養父の家から追ひ出された、可哀さうな男の子の夜半に私の家に來てその母のそばに坐つてゐることも夢現の間に聞かされたのみで、その後のことは知らなかつた。

そんなことが度々あつたが、甚藏はその後岡山の市街に出て別に商買を營むやうになつてから、あとには女房母子の者が狂人のやうな亭主が始終留守がちになつてゐるので結句水入らずの氣樂にその日〳〵を送つてゐた。

甚藏は一人で居られる人間ではなかつたから岡山の市街ではある料理屋の仲居をしてゐた女を早速女房にして置いた。私の記憶はその頃の事が最も明かである。甚藏は私の父と九つちがひで、その時分が四十三四でもあつたらう。

中學校を退學した翌年の正月私は商業學校に入る志望で大阪に行つた。商業學校はその頃の私の目的の一つで、且つその方針は最も父の同意を得易い見込みがあつたので、中學校を退くにもその事を以つてすると、父は「それも可からう。」と云つてくれた。それで直ちに決行したのであつた。大阪には正月早々から三月の末頃までゐたと思ふ。勿論ま

東京を知らぬ時分であつたし、大阪では夢のやうに若い盛りの春三月を過した。それは今から二十六年の昔になる。その頃の大阪の市街を流れる大川の水は思做しにか今よりも奇麗にあつたやうな氣がする。米俵や酒樽を積み重ねた三十石が泰平の御代を象るやうに靜かに流れる水の上を往き交うてゐた。私は岡山の市から同じ志望を抱いて來てゐた同じ年頃の三四人の青年といつもその大川にボートを浮べて遊んでゐた。寒い〳〵と思つてゐるうちに直き春が來て、生駒や六甲の山々が薄紫の霞を罩めるやうになると、大川の緣に立ち並んだ柳が浅黄色に萌えそめて、それが暖い春雨の降るごとに、見る〳〵繪の具を溶いて流したやうに靑くなつていつた。私はさうして遊びながらも勉强を怠らなかつたから、入學試驗には學科の方は優等の成績を以つて通過することが出來たが、體格が惡いと云ふのでいけなかつた。私は失望して、その日の中に行李を纏めて大阪から鄕里へ歸つてしまつた。梅田驛から汽車に乘つてゆくと、丁度その時の私の心持ちとぴつたり合つてゐるやうに、陰鬱に曇つた春の天から濕つぽい春雨がしと〳〵と大阪郊外の菜の花の野面にふり注いで、冷たい風が窓硝子の中まで吹き込んできた。緩い傾斜地の南の方に海の見える風光明媚の住吉御影あたりも今日は朦朧たる雨に煙つて、沖は灰色に掻き曇り、芭蕉が西施の悲むに譬へた象潟の雨の景もかくやと思はれた。六甲の山も深い煙雨の彼方に姿を密め、菜の花は降りそそぐ雨の雫を拂ふ風力は凄じい勢ひで丈の伸びた麥の野に靑葉の波を揚げて吹き狂ふてゐる。淡路島も立ち騷ぐ波の彼方に雨に鎖されて見え分かず、沖に立つた燈明臺がひとり黄色に混濁した波の中に揉まれてゐた。私は喪失した心を抱へて凝乎と其等の外景に見るともなく見入つて過ぎていつた。

岡山の父の處に歸ると、父は、私の大阪の方の事情を話して聞かしても別段何とも思つてゐなかつた。「さうか、それならそれでよい。もう何處へも行きなさんな」と、いつたきりであつた。私はそのまゝ父の傍にゐた。

甚藏はその頃父の營んでゐたある商店の方に勤めて、近い町に住んでゐた。歸つて間もなく私がそこへ遊びにゆくと、甚藏はゐなかつたが、今度持つた女房がゐて、

「宅は今ゐませんですが、……あなたは大將の若さんではありませんか。」

と、人づきよさゝうに云ふ。

「えゝさうです。」といふと、女房は、

「まあお上んなさい。あなたの事は宅からもよく聞いて居ります。昨夜もさう申して居りました。大將の處の若がお歸りになつた。そりや活潑なお方だつて。」

　産れは備中の方の田舍から出て來たのださうであつたが、長い間藝者の出入する料理屋にゐたので人愛相が好かつた。

「あゝさうですか。」といつて、私は暫く上り口に腰を掛けてゐた。

　父は不自由をも意に介せず、岡山では大抵男所帯でゐた。私のほかに私のすぐ上の兄が一緒にゐた。そこは詰り兄の家にするつもりで差當り一軒家を借りて居つたものらしい。――その兄も死んだ、父も死んだ、甚藏も死んだ。私は死んだ人間の事を思つてみたいのであるから、此の追憶を書いてゐる。死を隔てゝ見る時、凡ての物と人と悉く詩となる。私は此の故に必ずしも死を厭はない。憎かりしもの、醜かりしものも一度で死の幕の彼方に、世に在りし頃の影を沒すると、其等の物が私には悉く點塵の醜さもなければ、憎しみもない、たゞ懷かしい、優しいものゝ如く考へられる。死を不淨として忌むは、永劫の唯一瞬間を占むるに過ぎない肉體の上について云ふに過ぎない。醜き肉體の消滅と同時に殘るものは淨化されたる、その追憶である。況して感情の清純であつた少年時代に遭遇した人間の追憶は、取りも直さず清純なること白紙の如き少年その人の創作である。私は、私の少年時代の腦裡に深く明かに印象を留めてゐる其等の人々の容貌風采、言語動靜、氣質性癖といふやうなものが、果して其等の夙に死んで去つた人間が彼等自身に固有に持つてゐたものか、或はまた私の少年の頭によつて主觀的に創造したものかさへ、そこに明瞭とした區別がないやうにも考へられるのである。

　初めは父と兄とその甚藏と私と四人で、後には父の古い親戚の者である不幸な中年の婦人を呼んで家事の世話をさし

てゐたこともあつた。その不幸な婦人についても私は明かな印象を殘されてゐるけれど、今は追憶が多岐に亙るから强いて割愛して置く。——その婦人は暫らくゐたが、人が好いばかりで、父や甚藏などゝいふやうな日常の事につけても氣の早い人達には間に合はぬといふので、終はどうして歸つたか、遂に歸つてしまつた。ゐる處はやつぱり市中で近くはあつたが。

その婦人の事は今割愛すると云つたが、私は、やつぱり少し書いて置きたいと思ふ。その婦人は父の家の舊い本家の人間の妻であつた。その本家の人間の一生がまた私にとつて一つの悲しい謎である。その人間は父とはもう大分血緣の薄くなつた從兄弟の關係であつたが、何代の昔から前後に隣りしてあつた本家分家の仲であつた上に、父は幼時から男にも女にも兄弟のない、そして父親にも早く別れた人であつたから、父とは十歲ぐらゐ年下のその本家の伜を兄弟と同じやうに愛して大きくなつた。それは色の白い、薄紅味のある顔で、眼にたゝぬほどの痘痕があつて、上品な、靜かな物の言ひ振り體のこなしをした人間であつた。私の母は後によく云つてゐた。「お父さんには兄弟がよかつたから、それは本家の阿兄さんを、若い時から弟のやうにして、まあ、あのくらゐ仲の好い兄弟は本當の兄弟といつてもよいくらゐであつた。」昔の人で筆蹟なども美しい古風なものであつたが、元はかなりな田地持ちであつた古い家の傳統を享けて生れたゝめに靜な人間であつた代りに性質が善良過ぎてゐて、若い時から種々な事を企てゝは毎時も失敗ばかりしてゐた。後には九州のある島に去つてしまひ、何をしてゐたか故鄕にも十幾年ぶりかに一度歸つたきり、遂に歸つて來ず、最後は九州の方でも好いこともなかつたと思はれ、鐵道も通じない山陰道の方の、ある田舍の村役場から行路病者となつて土地の避病院に入れられ赤痢のために敢えなくなつたといふ通知が原籍地なる鄕里の村役場からその本家の實の弟の處へ屆いたのは、つい數年前で、私の父が死んでから既に二十年も經つてからの事であつた。死ぬる近年までは、それでも一年に一度の年賀狀だけは父の相續者たる兄の許へ越してゐたが、後にはそれさへ越さなくなり、偶に何かにつけて聯想がふいとその人間の上に及ぶと、

「この頃あの人間はどうしてゐるぢやろ。」

といふ、まるで、もう遠い夢の中の人のやうに思ひ出されるくらゐのものであつた。そして、何か夢のやうな不確實な事を目論んで實行も出來ず、實行仕かけても直ぐ失敗する人間の代名詞のやうにその人間の名が嘲笑的に屢々私の兄によつて用ゐられてゐた。そして向うの村役場からの通知狀によつて、最後に何をしてゐたかといふ謎が始めて解けた。九州の方の島に行つてゐたのが、後にはその地をも去り、賣藥行商人になつて風琴を彈きながら、鐵道も通はない山陰道の片田舍を村から村へと渡り歩いてゐたのであつた。死んだあとに遺された所持品は、たつたその手風琴が一提と銀貨入の中に錢が壹圓參拾幾錢とあつたそれつきりであつた。

　私が母から、そんな事につけ折々聞かされてゐたのに、その人間がまだ二十餘りの時分であつた。その人間とは一つ年上で、又兄弟のやうに仲の好かつた甚藏、その二人が明治の初年、今の時節にかうして田舍に燻つてゐてはつまらいと云つてまだ汽車の通じてゐない時分の事、彼等は村を飛出して、異人が來て神戸がそろ〳〵開けようといふ時分播州のある港から船に乘つて兵庫に行つた。その時丁度商用で大阪の方に上つてゐた父のところへ鄕里から知らせがあつて、二人の者を取抑へて連れて戾つてくれといふことで、父は兵庫で心當りを探して若い二人の居處を突止めると、彼等は差當りの口過ぎに舟人足になつて石炭を擔いで船に積込んでゐた。父はそれを連れて村に戾つて來て、男泣きに泣いて彼等に强い意見をした。母はその事を話してゐた。話の面白い甚藏も時折りその事を話して笑つてゐた。

「それを思ふと大將の御恩は一生忘れられません、二人が眞黑な顏をして石炭を擔いで居るところを丁ど好い具合に見付けられた‥‥」

　父はもう二十餘年の前に世を過ぎてゐた。若い時分から眞の兄弟と云つてもないくらゐに色々な面倒を見たその人間が、後にはする事爲すこと恐く失敗に了つてしまうのは、單に運の惡いばかりではない、本人の性根に確乎した處がないのだと云ふことに見切りを付けて、父も後には蔭では冷笑を交へて彼の噂をするやうになつてゐた。殊に九州の方に

行つてしまつてからは、向うからは朝鮮の牛を輸入しないか、見込みがあるが、とか、昆布をどうしないか、とか云ふやうなことを云つて來ても、父は其等の手紙を見たなり、

「彼奴の云ふこと何をかいふやら。」

と吐き出すやうに云つて、碌〻返事も書いてやらなかつたらしい。そのうち父は死んだ。けれども口ではそんなに罵倒してゐた人間の事でも内心では父は決してそんなに憎んではゐなかつたに違ひない。その人間は人に憎まれるやうな處は藥にするほども持つてゐなかつたのだ。先きに死んだ父は、彼が思ふも哀れな行路病者としてもう六十幾つの老後を乞食同然な死に態をしたことは知らずにゐるが、私は、兵庫で船人足をしてゐた彼を連れ歸つて男泣きに泣いて強い說論をした時の父の胸の中を想像して、今でも其等の事をふと思ひ浮べると父及び彼の爲に、私は靜かな暗涙を禁じ得ないのである。併しながら殆んど一生途國に迷ふてゐた彼も死んだ後は再び故鄕に歸つて來た。遺骨と壹圓三拾幾錢の入つた蝦蟇口とが、あちらの村役場から此方の村役場をさして送り屆けられた。そして今は、父と同じやうに墓石を並べて先塋の傍に土となつてゐる。佛說の輪廻の說が眞ならば、基督の說く天國の再生が眞ならば父と彼とは再び何處かでめぐり會ふこともあるだらう。さう思つて私は、生涯惱みの多かつた彼等のために心の中で冥福を祈つてゐるのである。

甚藏は、父がある事業を始めて自分も其處に使はれるやうになつてから、時々幼馴染のその人間の事を云ひ出して頻りに懐かしがり九州の方へも手紙を書いて、歸つて來て昔のやうに私の父の傍にゐて共に仕事をすることを勸めてやつたが、その時も碌に返事を越さなかつた。娘の子の一人ある女房は岡山の實家の身寄りに殘して置いて行つてゐたので、父も甚藏も女手のない處から、その置き去られた彼の妻を不憫に思つて父の處に呼んで家事の世話をさしてゐたのであつた。その時久しぶりに會ふまで私はもう何年か永い間その婦人を見なかつたが、いつも一身上にごた〳〵した事の持ち上る夫に連れ添ふてゐるお蔭で、彼女はその時から顧みて十年ぐらゐも前だつたら、田舍の私の家へ暫く來

てゐたことがあつた。その頃彼女はまだ三十前後でもあつたか。草深い田舍の人間ばかり見馴れてゐる子供の私の眼にも、町育ちのその婦人が垢脫がして美しく思はれた。いつも丸髷に結つて藍色と茶などの微塵格子の、襟のかゝつた着物に茶博多献上の帶をよく締めてゐたのが眼に殘つてゐる。それが私の父を阿兄さんと呼び、母をお姉さんと呼んでゐた。私達はまた彼女をお姉さんゝゝと云つてゐた。私は、私の父母をめづらしくもお姉さん阿兄さんと呼ぶ奇麗な人の出來たことが子供心にも賑かであつた。氣のさくい、よく氣の付く女であつた。それが、どうであらう。十年後に久し振りで見た時には、これがあの女であつたかと思つたほど年を取つて、見違へるやうに汚くなつてゐた。十年前には、ずらりとしてゐたと思つた背格向が妙に猫背になつて婆さんゝゝしてゐる。唯一つ十年前と變らぬのは、私の父を、やつぱり「阿兄さんゝゝと呼んで、父に對しては素直で、飽くまでも敬ふてゐた。十年前に「阿兄さんゝゝ」といつてゐた彼女には若々しい美しさがあつたが、今はもうその若さも美しさも彼女の顏や姿の何處からも跡もなく消え失せてゐた。異性に對して狡猾で、淫蕩で、その上口の惡い甚藏はその舊友の妻に對しては、自分の節制と愼みとからでなく、いくら淫蕩な彼でさへ、放縱な心を唆る何等の眼を惹く點を持つてゐなかつたくらゐ彼女は全く女としての艷を失つてゐた。そして甚藏は、彼女の臺處まはりの事を、何をしても遲鈍なので、蔭で「蛞蝓が錨を下ろしたやうなものだ。」といつて嘲笑してゐた。その比譬には、しかし父も贊成であつた。

「擔へば棒が折れる。揃ひもそろつた夫婦ぢや。」

と、父も笑つてゐた。甚藏も同意して哄笑を發してゐた。實際甚藏が敏捷で、狡猾で、多辯で、才氣喚發してゐるに引替へ九州に行つてゐる彼の舊友は遲鈍で、溫順で、寡默で、靜かな人間であつた。

私がまだ其處から中學校へ通つてゐる時分であつた。甚藏もまだ此方で、その內緣の女房を持つて居らず、甚藏とは年は十五六も違つてゐたが若い盛りの私の兄と二人は私の父の眼を忍んでは愉快な處を探し歩いてゐたらしい。そして、どうかすると、今日は一つ陽氣にやらうかと云つて料理屋から口取りだの燒魚だの、甘い物を取つて酒宴を開いて

ゐた。それだけは父が道を開いたのであつた。併し一度父がやると、他の者は公許された如くやり出した。近い處に藝者屋もあるし、怪しい女を置いてゐる小料理屋などもあつた。そんな女は毎日家の前を通つて風呂にいつた。甚藏と兄とは表の店の間に坐つて道をゆく女の品評をよくしてゐた。顏を知つた藝者は聲を掛けて通つていつた。

一度父の留守の間に彼等は又酒宴を初めたが、酒があつて肴があつてみると、何かも一つ物足らない氣がして、父の歸つて來るのを、戰々恂々で、たうとう藝者を呼んで來た。

徒戯者の甚藏は陽氣に哄笑を發しながら、

「鬼のゐない間に洗濯だ。やらう〳〵。」

父も藝事は好きで、淨瑠璃は素人にしては巧い方であつたが、甚藏も騷がしい聲でよく語つてゐた。兄はまた天稟の美音を持つてゐて、後には淨瑠璃の稽古をして、多勢の前に出て語つても素人ばなれがしてゐるくらゐになつたが、その頃はまだ若かつたけれど、流行歌を、なんでもござれで歌ふのは好きであつた。甚藏と兄とは、父のいつもゐる座敷に酒宴を開いて其處で藝者に三味線を彈かして好きな物を歌つたり語つたりしてゐた。私もそこにゐて、口取りの金團や蒲鉾を食べて悦んでゐた。酒の好きな丁稚の仙公だけ詰らなさうに店番をしてゐた。例の本家のお姉さんだけは一人で最初から、

「阿兄さんの留守にいいんですか？」

と云つて、不安な顏をしてゐたが、甚藏は氣を咎めながらもやつてゐた。すこしすると、彼等が好い氣になつて燥いで歌つてゐるところへお姉さんは燗徳利を持つて來たついで、

「もう好いでせう、もう好いでせう。」

と面白くない顏をしていつた。そこにゐる若い二人の藝者が變な顏をして三味線の手を止めたりした。

「あゝ〳〵」と、甚藏は生返事をしながら「まだ鬼は歸つて來ん。もう少しくらゐは好い。」といつては、語つたり歌つ

たりしてゐた。

後にはお姉さんが、額を顰めて頼むやうに云ひ出した。

「もう〳〵これで宜しい。あんまり長うおると、却つて面白くありません。どうぞ甚藏さん、これだけでお仕舞にして遣あさい。」

彼等はそれでも、容易にもう好いとはいはなかつた。私も、もつと愉快をつゞけたいと思つてゐた。するとお姉さんはまた座敷に顔を出して、

「もう宜しい〳〵。阿兄さんもうお歸んなさる。」警告するやうにいつた。

それで遂々、歸したくなかつた藝者だけをかへしてしまつた。藝者さへゐなければ、酒宴だけなら父が開祖であるから、父が歸つてきても別條はなかつた。藝者をかへして箱を形付けてしまうと、それと入れちがひに父が戻つて來た。父が座敷に入つて來ると其處には酒盛りがはじまつてゐる。父はそれを見ると好い機嫌で、

「ほう、やつとるな！」

酒と放歌とで昂奮した顔をした甚藏は、

「今日は休日で一杯やつてゐます。」

「偶には好い〳〵。詰らん處へ遊びに行たりするより御馳走だけなら錢はかゝらん。」

といひながら、父はお姉さんに手傳つてもらつて着物を着更へて、

「どれ、そんなら、御馳走にならうかの。」

甚藏も、兄も、お姉さんも氣もない顔をしてゐたから、父は、自分と入れちがひに、今までそこに坐つてゐた藝者が歸つていつたことは夢にも氣付かなかつた。父は丁度年頃の兄が悪い處へ足踏みをしないかといふことが一つの氣づかひであつた。

そのお姉さんが歸つてから當分また男ばかりで不自由をしてゐたところへ、油斷も隙もない甚藏がその內緣の女房を拵へて近い處へ家を持つた。その女は、飽くまで堅氣の上に世路に窶れてゐる例のお姉さんと異りそれより十ばかりも若くて仲居などをしてゐた女だからよく氣が付いた。

「大將が不自由だから時々いつて見て上げ。」といふので甚藏の此度の女房は時々來ては洗ひ物をしたり、拭き掃除をしてくれてゐた。

私も一度そこへ行つてから、後には度々遊びにいつてゐた。私はたゞ遊びにいつたのだが、父の店にゐる若い者が誰れも彼もよくそこへ行つてゐた。道樂者の甚藏に仲居さしてゐたその女房。そこは若い人間が集つて來るのに最も都合のよい處であつた。——その年の秋の終りに父が死に、尙ほ一二年して甚藏が父の店にゐなくなつた頃には私も其地にゐなかつたが、その女房は肺病で亡くなつたといふことであつた。甚藏は更にまた他の女を內緣の女房にして置いた。そして岡山の市でも遂に面白い目も出ず、やつぱり生れ在所の村へ引上げて戾つて來る時に先の連れ子をした少しの落度のない本當の妻は何かの因緣を付けて叩き出してしまひ、その後へ街で一緒になつた內緣の女房をつれて戾つてきた。それは私が鄕里にゐなくなつてからの事で二三十年間に亙つての事である。その甚藏も十年ばかり前に死んだ。——

兄はその年の夏の初懇望する所があつて近い處へ養子にゆくことになつた。父は五人の子をそれ〴〵に落着けるために常に心を勞したのであつた。養家の樣子を見にゆく時にも甚藏は父の代理をした。

「髮は少し薄いやうだが、惡い器量ぢやない。あれなら上等です。」

といふ報告を訊きながら、父は、

「髮の薄いくらゐ、禿でさへなければいゝ。」

その他、人手を以て血統の事、親戚の關係、身上の事など訊き合はして、「そのくらひならば、まあ可らう。」といふことになり、愈々向ふの側の媒介者が最後の決答を求めて來た時に、父は、

「遣はしませう。」と、

確答を與へた。その時傍には私がひとり居た。市から半道ばかり距つた市外の養家で婚儀や披露の酒宴があつて、あとは市の父の處で新夫婦は住むといふ條件であつたから一週間ばかりで兄夫婦は此方へ戻つて來た。その時父の座敷で親しい十人ばかりの客をした。甚藏は萬事の膽煎役であつた。

それからすぐ蚊の多い暑い夏が來た。父と私とは早くから蚊帳の中に入つて横になつた。私は寢這ひながら八犬傳や經國美談を熱心に讀んでゐた。父の苦しい咳嗽が夢を斷つやうに私に響いた。兄夫婦は中一つ置いた次の間に青い蚊帳に寢てゐた。

私は九月の初めに父にも誰にも無斷で東京に行つた。そして三月めの十二月の二十三日に電報に接して、その夜の汽車で東京を發して戻つて來ると、父はもう死んでゐた。兄は結婚生活を滿十年しただけで、後にアメリカへ行つて客死した。兄の死後も、本家の賣藥行商人と同じやうに唯一壺の骨となつて歸つて來たのみであるが、彼等の記憶は冷い一壺の骨の灰を以ては説明出來ないくらゐに鮮かに私の腦裡に永く生きてゐるのである。（九年三月廿九日）



# Cの話

武者小路實篤

Bの姉が死んだ時、Bは姉は姑に殺されたのだと云つた。なんでも姙娠中に、つはりのひどいので死んだのださうだが、姑との折合が大變面白くなかつたのでそれが死んだ元因で、折合さへよければ、死なずにすんだらうと云ふのだ。元よりそれは丈夫な時ならなんでもなかつたらう。弱つてゐる時の、一陣の風だつたのだらう。しかし風が吹なかつたなら、死なずにすんだかも知れない。もしさうとすれば、姑は嫁と同時に、やがて生れるはづの可愛いゝ孫も殺したことになる。Bは姉の姑が珍らしく、嘘つきで、如才なくつて、姉に對して、一々皮肉を云ふ。その意地の惡い皮肉で姉は倒れたのだと云つた。

僕はその姑を知つてゐる。太つた人で、決して惡い人には思へなかつた。しかしBにさう云はれて見るとそんな氣がした。そしてBの姉に同情した。Bの姉を自分は內々尊敬してゐたから。そしてその夫を輕蔑した。

自分はその後、會社に務めたら偶然、Bの姉の夫のCにあつた。その人は後妻をもらつて、その間に子供も出來、夫婦仲もよささうに見へた。今度は嫁と姑の喧嘩もなくつてすんでゐるらしい。自分は段々Cに厚意をもつやうになつた。そしてその家には時々遊びに行つた。細君にも逢つた元氣さうにしてゐた。

或日何かの話で、嫁と姑の話になつた。その時、Cは不意に眞面目になつてから云つた。

「嫁と姑の關係には僕もこりたとがある。君はBを知つてゐるさうだから、聞いたらうが、僕の先妻と僕の母の間の衝

突には弱つた。兩方とも人はいゝのだ。自分の母だが、僕の母は決して惡い人間ぢやない。むしろよすぎる人間だ。そして姑には一通りでない苦勞をして來た。だから嫁には出來るだけ優しくしやうとした。併しそれが反つてよくなかつた。僕の先妻も稀に見るいゝ奴だつた。僕は女であの位正直な女を見たことはない。それがいけなかつた。君も少しく經驗があるだらう、女同志の關係と云ふものは實に厄介なものだ。兩方が自分の正しいことだけ知つて、相手の正しいとには氣がつかないのだから。自分だけ勝手に正しいことをしてゐて、それが相手の心にどうふれるかわからないのだから困る。そして自分の努力だけがわかるので、すぐ自分はこんなに務めてゐるのにと思ふ。其處でつい不平を起す。もうさうなると手がつけられない。自分の母や、妻だつた女の惡口を云ふのはいやだ。しかし僕は二人の氣持をよく知つてゐる。二人とも少しも惡い處はないとしか自分には思へないのだ。しかし二人の關係はさけられないのだ。先妻は本當の母に育てられたことは殆んどない。つはりのひどいのは遺傳と見へて、B君のすぐつぎに姙娠した時にしくぢつて死んでしまつた。だから僕の先妻も姙娠をこわがつてゐた。それで繼母の手で育つたので、僕の家にくる時、僕の母が僕にたいする態度を見て、始めて本當の母の心がわかつた。私もそんな方の子供になれるのは嬉しい。私も本當の母さんだと思つて、甘へさして戴くと云つたことがあつた。實際母も先妻も、本當の母と娘にならうと思ひすぎた。それがいけなかつた。其處に無理があると云ふことをお互に知らなかつた。その無理をお互に自分の方法で乘り越えやうとして失敗したのだ。母の方は形の方でそれをのり越えやうとし、妻の方は精神でそれをのり越えやうとして失敗したのだ。

母は僕にたいするのと同じ態度で嫁に對しやうとした。しかしそれは精神がぬけて居るので妻の目から見るとわざとらしく見へた。そしてお務めのやうに見へ、虚僞のやうにさへ見へた。そして相づちをうつのにたちろぎたくなることが多かつた。「なぜお母さんは私にあんなにおつとめになるのでせう。もつとお氣樂にして下さるといゝのに」と妻が云つたことがある。

「あれがお母さんの性質さ、氣にしないがいゝ。しかしお母さんも苦勞して來たのだからどうしてもお務めの癖がつい

てゐる。だからさう云ふ時に、「お前もお務めをしておけばいゝのだ」

「だつて私、そんな空々しいことは出來ませんわ」

母も妻も家の平和の爲には自分を犧牲にしてもいゝ決心をもつてゐる。それを自覺しすぎてゐる缺點もあるのだらうか、それで一寸したことが氣になる。一體どうしたら嫁がよろこんでくれるのだらう。母は段々見當がつかなくなつた。僕の母は始め僕にたいするやうに妻が病氣になると、氣にして日に何度となく見舞ふ。それが病氣してゐる妻には五月蠅いのだ。さう思ふのはわるいと思つても、氣樂に寢てゐられない氣がする。熱があつてやつとうと〱してゐる時に母に聲かけられる。すまないと思ふが五月蠅い、そして怒るわけにはゆかない。そして母が病氣を氣にして女中と話をしてゐるのを聞くと、蜜のやうな言葉に、あてつけのやうな針がふくまれてゐるやうな氣がする。あゝ身體の弱い細君をもらつては息子が可愛さうだ。かう云はれてゐるやうな氣になる。そんなことはないと云つても、妻はそれを信じない。女には自分の思ひ込んだことに疑問を入れる餘裕がない。そして自分の思ひ込んだことを眞ちがいとは思へない。

例へばへんな例だが。母は神經質で注意がゆきわたる。そして非常にいろ〱のことを氣にする質だ。僕が少しでも憚りにながく居ると母は氣にして、憚りの前に立つて、腹でもくだりはしないかと注意する。そしてそれでも辛棒出來ないで「どうもないかい」と聲をかける。僕は子供の時からやられてゐるから、別に氣にしない。母もそれが癖になつてゐるし、本當に心配して聞くのだから、惡いことゝは思はない。しかし僕の妻はそれをやられる度に、ぞつとするらしい。妻は憚りに長く入つてゐる方だから、「憚りに入つても落ちついてゐられない」と何時かこぼしてゐた。僕が說明しても、妻はおちつくことが出來ないのに參つてゐる。「まさか憚りのなかゝらお母さんに口をきくわけにもゆきませんわ。子供ぢやありませんものね」

「お母さんは子供のつもりなのだから」

「それでも」と妻は笑つた。

その後も妻が病氣だと母はそれをくり返してゐた。僕は母に注意しやうとも思つたが、妻が出來てから今迄のやうに母に氣樂に饒舌ることは出來なくなつた。まして怒ることは。妻のくる前にはよく僕は母に怒つた。自分の云ひたいことは何でも云つた。しかし妻が來てから、何か云へば後押に妻がゐるやうにとられさうな氣がして氣になつた。

その內、僕は會社の用で一ケ月位、旅行して歸つて來たら、二人の間はもうとり返しのつかないやうに離れてしまつてゐた。

兩方でさけるやうにして、顏を逢はせると兩方の顏がこわばつてしまう。二人ゐた女中がまた、兩方にわかれて片方は母に、片方は妻につき切りで、元氣に話す。それが一方ではあてつけのやうにとれる。つい聞き耳をたてる、笑ひ聲さへ意味ありげにとれる。自分の方のことはわからない。自分の方は無邪氣に笑つてゐるつもりだが、相手の方は無邪氣とは思へなくなる。自分の表情はわからないで、相手の表情だけがわかる。こんなに自分はつとめてゐるのにと云ふ氣があるので、之以上は出來ない。それでは生命がつゞかないと云ふ氣になる。ついあてつけが出る。

「何處そこの嫁は奇麗だ」と母が無邪氣に云つたとすると、妻には「お前は不器量だ」と云はれたやうにとれる。「あすこのお嫁さんは人がいい」と云ふ噂が出ると、「どうせ私は人がわるい」と反抗したくなる。

母の方でもさうだ。そして「私だつてさうつとめて許りはゐられない」と云ふ氣になる。

僕は間にたつて兩方の家の爲を思つてゐること、惡氣のないこと、人のいゝことを說明しやうとしたが、兩方の誤解をます許りだ。

母には「嫁の夫だと思はれ、妻には母の子だと思はれる。「あなたには本當のことはお分りにならないのよ」と妻は云ふ。

「私はこの齡して自分の性質をかへるわけにはゆかない」と母も云ふ。

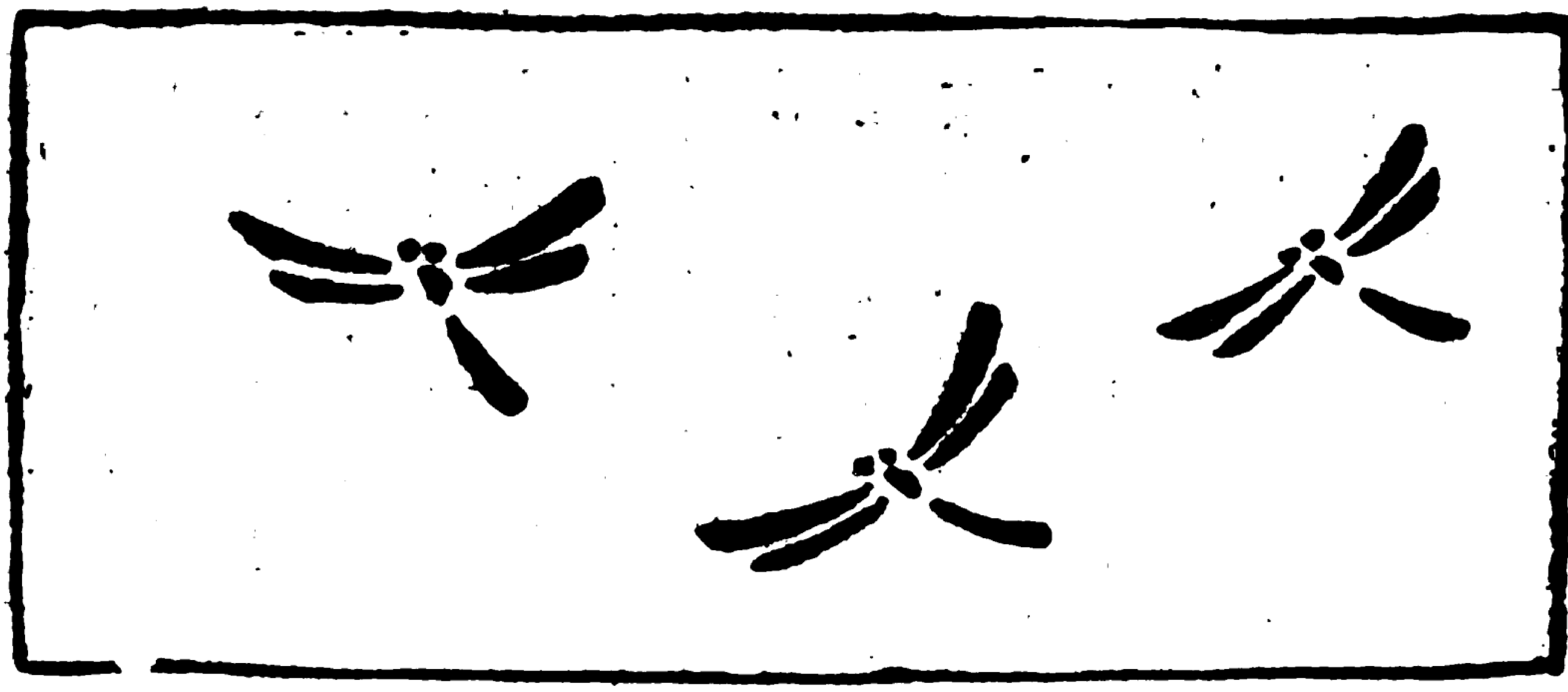
僕はもうくわしいことは云はないが、もうさうなつては手がつけられない。兩方が人がいゝだけに、なほ手がつけら

れない。どうにかならないものかと思つた。僕は兩方に厚意をもつてゐるのだから腹は立たないが、それだけなほ間にたつて困つた。仲裁しやうと思つて、怒つたり、なだめたり、說明したりすればする程、益々兩方で僕を敵方のやうに思つて、心細がるのがおちなのだから困つた。しかし僕はそれで妻が死んだとは思はない。あれは矢張り病氣のせいだと思つてゐる。さう思はないとつらいからかも知れないが、病氣のせいだけにすることが出來るものを他人のせいにすることは出來ない。他人のせいにする位なら自分のせいにした方がまだ本當だ。

　今度は自分も經驗がつくんだからうまくいつてゐる。僕は始めつから妻にかう云つた。僕の母は昔ものだから、御機嫌さへとつてくれゝばそれでいゝ。母が何に云つても氣にしないがいゝ。なるべく心のなかを嬉しく出來る時だけ母に逢ふやうにして、さう出來ない時は用があるやうな顏して自分の室に入込むがいゝ。妻はそれを實行してゐる內に、母と仲よしになつた。それは子供が澤山出來たせいもあるだらう。先づ無事に行つてゐる。

　兩方とも厚意を持ちあつてゐる。しかし七分三分の兼ね相ひの時を、どうかするとある。何しろ女は家に許り入込んで氣がちらないし、箸の上げ下しまで氣になるし、怒らしたら、分別はとんでいつてしまうのだから、それに本當の親子ならすぐ忘れるやうなことを、いつまでも忘れずにためておくのだから、たまらない、いざとなると、いつでもぶちあけて相手と戰つて勝つだけの惡口の材料をたくわへておかないと氣がすまないのだから。うまくいつてゐる內はいゝが、わるくなり出したら切りがない。女は男より生理的に出來てゐるせいか、自然にちかい氣がする。すぐ動きのとれない處に入りたがる。相手のことを一々氣にするくせに、相手に自分がさうさせることには氣がつかない。自分の方に都合のいゝこと許り考へてゐる。それでなほ自分を苦しめてゐる。だから自分のすることは何時でも正しいそして相手がいつでも惡い。僕はまだ自分の方がまちがつてゐることを本當に氣がついた女に逢つたことはない」Cはさう云つて笑つた。

　自分もそれに贊成しないわけにはゆかなかつた。そしてBの姉に對して同情を失ないはしなかつたが、Cの母も憎めなくなつた。（終り）（一九二〇、三、一）



# 續おせいの失敗

岩野泡鳴

## 五

萬が一の心當てを賴みにして、翌日の約束時間におせいは田口のところへ行つた。誰れが先づ出て來るかと、おづ〳〵がらす戸を明けると、玄關のまに机を置かれてゐる雄作が、それでも、待ちかまへてゐたかのやうに立つて來た。

『どう？』かの女はずッとひそめた聲で、小くびを手つだはせながら聽いて見た。

『駄目』と、渠はその心配さうな顏つきに於いて初めから見せてゐたことを半ばはその口のうちで云つた。

『…………』どうせこの賴みがはづれてしまつたのなら、さう小さくなつてゐるにも及ばないと思ひ、おせいはそのまゝつか〳〵と、田口の例の太い底ぢからのある聲がしてゐる茶の間へ、もう、勝手は分つてゐるので、寒さに少しからだをちぢこませながらだが、ふすまを明けて這入つた。お象が火鉢のそばからぎよッとしてこちらを尻目にかけたが、それを知らないふりで、『今晩は。』

『なんだ、畜生！』田口もちやぶ臺に向つて食事のできるのを待つてるやうすであつたが、いきなりこちらを見て怒鳴つた。『ここは貴さまのうちぢやアないぞ！』

『だから』と、ちよツとまご付いて、こちらも思はず言葉の調子が高くなつたが、その高さをつゞけて答へた、『挨拶をしてゐるぢやアありませんか？』

『案內もなしに！』

『ぢやア惡うございましたが、ね――』こちらは雄作の母ではないか、さうつけ〳〵云はないでもよささうなものだがと、心ではむツとした。

『來るのは仕方ありませんが、ね、もう少し人並みにして貰はなけりやア、うちでも困りますよ』と、お粂もはたからこちらを馬鹿にしたやうな言葉であつた。

『…………………』おせいはそれにはわざと返事をしなかつた。ここでも、もう、お餅を註文してあると見え、その話をしてゐたのを玄關で聽いたが、それがつけて來たら、雄作は――あれだけ云つて聽かしてあることだから――少しはこツそりとこちらへも屆けるかしらんとばかり考へられた。

『それに』と、田口は少し聲をゆるめて、『あの家が競賣に附されかけてると云ふぢやアないか？』

『さうです、わ。』直接にも一度賴んで見ようか知らんと云ふ氣をおびき出されたので、おそる〳〵だが、『何とかして下さい、な。』

『馬ア鹿！』田口は矢ツ張り取り合はなかつた。『お前にやア、どうせ、あの家は持つて行けないのだ。うツちやつてしまへ！』

『そんなことが出來ますか？』もう、直ぐ反抗しなければならなくなつた。そして、たとへ渠の不斷に云つてる通り、田口家の爲めではないにしても、田口家を繼ぐべき子供の爲めにはなることを再び念の爲めに云つてやりたかつた。が、『また敎訓か』と云ひ返されるのが面倒くささにさし控へた。そして、うそにも機嫌を取つて置く方がましであつたので、少し聲を和らげて見せて、

『わたしはそれで苦勞してゐるんですから、ね。』
『財あれば財を憂ひ、宅あれば宅を憂ふだ。』
『それこそまたお說敎ぢやアありませんか？』
『なアに』と、田口は横を向いて、憎いほどこちらを馬鹿にした口調で、『丁度、お前を冷かすにやア適當したお經の文句、さ。』俄かにこと更らしみた怒りごゑになつて、『そんなものア早くうツちやつて、一本立ちになつてしまへ。易者にだツて、乞食にだツて！』
『ふん』と、おせいは鼻であしらつてしまつた。なる時が來れば何にでもなる、さ。然し、斯う研究のひまさへないのでは、易だツて、進みやうがないではないか？それにしても、こちらが渠のやうすを考へて見るに、餘ほどお袋の手まへを氣がねして、渠が不本意のことまでも云つてるらしかつた。そこにまだこちらのあと〳〵までの賴みがつなげるやうに思へた。いよ〳〵困まれば、何とか泣き付いて見ることができるだらう——と。
　そして食事を一緒によばれてから歸つて來て見ると、大川と中島とが酒の出てゐる部屋で喧嘩をしてゐた、互ひに外聞の惡いほど大きな聲を出して。
『何とおつしやつても、ね、わたしは承知できません！』
『ちやア、おれの力づくで取つてやる！』
　中島はこちらの歸つたのを氣付いたのでわざと大きくなつたのか、どうだか分らないが、立ちあがつてその嚴丈な兩手を大川のからだに持つて行かうとしてゐるところへ、おせいは中廊下のふすまを明けて丁度割り込んで行つた。いつも秘密室のやうに締め切つてるのも妬ましかつたのだが——。そして、
『どうしたと云ふんです、ね、まア、棟梁さん』と、先づ中島を制した。自分のつもりでは、他の一方の、これも立ちあがつて、逃げ出しかけたのを無事に逃がしてやらうとしたのであつた。これも憎い女だけれども、おととひ、こちら

がこわい目に會ひかけたのをとめて呉れたのに對して恩返しをする爲めにだ。『そんな亂暴はしないでも！』

『亂暴でも何でもありませんが—。』中島は兎に角また膝をあぐらにおろした。

『一體、どうしたと云ふの？』おせいもそのそばに坐わつて、今度は大川の方を見あげた。

『…………………』大川さんもおづ〳〵してだが坐わりに來て、『棟梁が無理です、わ。この節期に拂ひ出すものをみんな渡せと云ふのですもの。』

『あなたも帳面をわたしらに見せないのは行けませんが—』こんな時だと一つ突ッ込んで置いてから、『棟梁さんだッて』と、笑ひにまぎらしながら、『うちで拂ふぶんをこの押し詰つた場合に持つてお行きになつちやア、困ります、ね。』

『お說の通り、わたくしも押し詰つてをりますので—』

『…………………』向ふへ戻して行くのは來月からの約束になつてるのだがと思ひながら、おせいがよく聽いて見ると、中島はこちらの家にかねをかけた上に、少し調子に乘つて、無理をしてまでまた別な家を二百五十圓で買つたのである。その結果が二進も三進も行かなくなつて、子分どもに暮れの小使ひをやることもできず、正月の餅もつけないと云ふのだ。

『實はその爲めにけふは一つ、奥さんにもお願ひして、わたくしがこの家の爲めに義俠的に盡しましたに免じて、若しこの營業から融通ができませんとすれば、田口さんにでもちよツと一ときこの急場を救つていただきたいものですが—。』

『田口はとても—』斯う、おせいは先づ云ひ切つてから、『實は、わたしの身でもまたおかねの入用ができましたので—』この件をどうせ云はねばならぬとすれば、今が却つて丁度よからうと思つて、うち明けたのである。

『そりやア、また困りました。なア』と、中島は案の定おこるどころではなくなつてしまつた。『そんなことがございましたのなら、前以つて一と言云つて貰ふ筈でした。さうしたら、わざ〳〵かねはつぎ込む、そのつぎ込んだ家は抵當流

れになると云ふやうなへまなことはなかつたのです。こりやア、困りました、なア!」
「棟梁の腕まへで何とかできませんか、ね」と、大川さんも云ひ添へて呉れた。「今取られてしまやア、あぶ蜂取らずぢやアありませんか?」
「そりやア、さうです、わ。だから、わたしも成るべく棟梁さんの手をわづらはせないでと心配して見ましたが、ね、最後の心當てであつた田口の方も駄目ですから――。」
「然し、田口さんはこの家を所有してをられますではございませんか?」
「それが名義だけだツて、ね、向ふぢやアどうなつてもかまはないと云つてますから!。」
「…………」中島は醉ひもさめてしまつたやうにまじめになつてゐた。そして暫らく考へ込んでゐたが、
「實に、困りました。然し、仕かたがありません。どうせ、うちの方も心配しなけりやアならぬついでですから、何とかして見ましよう。」斯う云つて、この夜はそこ／＼に歸ることになつた。
　それを玄關で二人が見送つてしまうと、大川さんが
「うまくやれました、ね」と云つた。
「…………」おせいも首をすくめてにこりとして見せたが、もう、自分のこの相ひ手は二度と氣をゆるすべき女でないと云ふことを自分の心に注意してやつた。
　十二月も、もう、あと二日と云ふ日になつて、政直も一緒になつて皆がつけて來た餅を切つてゐると、中島を尋ねて來た人があつた。大川さんが出て應對してゐるのをおせいもそれとなく聽いてると、中島の親戚の人で、今回、この家の爲めにかねを出すことになつたので、見に來たのだが、中島も來てゐることになつてるがと云ふのだ。
　かねを出すと聽いては、こちらも私かに一と安心しないではゐられなかつた。
「ちやア、わたしが呼んで來ましようか?」かの女は飛び出して行つて、大川から云はれない先きに自分から斯う口を

出した。

『では、おそれ入りますが――』さう上品な男でもないが、可咲らしかつた。

『ちやア、あなた、早く頼みますよ』と、大川も云つた。

『…………』おせいは自分の受けた氣ぶんで直覺的にこれはきツとまとまる相談だと見た。さうすれば、こちらの都合がいいばかりでなく、中島さんの方もまたいいだらうと。

渠のうちへは大川の戀づかひも同樣のことを既に二度もつとめたが、今回のは決して自分にも不愉快の使ひではなかつた。が、行きついて見ると、中島のかみさんがいつになくその亭主と同樣なやすツぽい顏を不機嫌にして、

『またおかねの無心だらう？あなたがたの爲めにうちでも困つてます！』

『…………』こちらはちよツと面くらつてゐた。

『何をぬかすんでい』と、中島がそのかはりに飛び出して來た。これは當り前の言葉ぶりで、『何か用ですか？』

『あなたの親戚だと云ふ人が來て待つてられますから。』

『ちやア、直ぐ御一緒にまゐります。』

渠のみち〳〵の話によると、どう云ふついでかは知らないが、渠が京橋の八丁堀あたりを歩いてゐると、突然呼びとめられた。

『どうした――そんな不景氣な顏をして？』

『ちやア』と、おせいは合ひ槌を打つて、『あなたも隨分心配をしてらツしやつたのです、ね？』

『さうです。丁度これができないなら、いツそ、くびでもくくつて死んでやらうかと考へてをりました。そこへ、丁度うまい具合ひにぶつかつたので』と、中島も安心したと云はぬばかりに笑ひながら、『さう困つてるなら、おれが出してやらうとのことで――豆腐屋ですが、とほ緣に當ります。』

「斯う云ふのが神だすけでもしよう、ね」と、おせいはこの信仰にはうらはらがなかつた。そして棟梁のうちでもさう困つてたのなら、さし當り、大川さんと相談して、こちらにできた切り餅を少し屆けてやるのが情誼だらうと考へた。

六

けれども、歸つて見ると、大川さんは豆腐屋を客間の方へ入れて、自分勝手に、もう、酒を出してゐた。そして棟梁もこちらへ相談なしのを當り前のやうに見て、

「ヤア、氣が利いてる、な。斯う云ふところは確かに大川に限ぎる」と賞めた。

「…………………」それでは、こちらを氣が利いてゐないと云つてるも同前ではないか？折角、迎へに行つてやつたのに—人を馬鹿にと思つたので、おせいはつんとして自分の部屋へ這入つてしまつた。これをいいしほにしてか、向ふからも呼びに來なかつた。そして何をまたどう云ふ風に相談したのか、豆腐屋が歸つてからも、向ふのものらが話を秘密にしてゐるやうだから、こちらも意地になつて、少しも聽き糺さうとはしなかつた。兎に角、矢ツ張り、この家さへ何とかして抵當流れになるのをまぬがれさへすればいいと云ふ考へばかりでだ。

すると、豆腐屋が歸つてから間もないと思はれる頃、やがて日が暮れようとする時にだが、同じ客間で聽き慣れない女の聲が怒鳴つてるのに氣が付いた。

「どうしてもあいつに云つてやることがあるんだ！　あいつをお出しなさい！」

「そんなことアねいツて云ふに、ぶんなぐるぞ！」

「いいや、けふこそわたしも勘忍ぶくろの緒が切れたんだ！」

「馬鹿云ふな！」

「…………………」どうも、棟梁に對してそのかみさんが何かおこりに來たのらしいので、おせいは若しか大川

さんとのあひだがらを感づいてしまつたのだらうと思つて、あまり事を大きくさせない爲めに出て行つて見た。するといきなり、そのかみさんに自分の胸ぐらをとツつかまつてしまつた。

『この婆々アめ、よくも、よくも、人を踏みつけにしやアがつた、な！』

『ど、どうしました、わたしが』と、おせいはびツくりしながら向ふの手をふり切らうとしたが、向ふの力はつよかつた。それを中島が直ぐ立つて來て、

『よく話し合つたら分る、馬鹿』と云つて、大川と一緒に引き分けて呉れた。

『一體、どうしたことです？』

『とぼけるない？　教育もあると云ふのに、かねの爲めにこんな無學なおやぢとくツ付きやアがつて！』

『そ、それが思ひちげひだ』と、中島は辯解らしくだがまた怒鳴つた。

『…………………』この時は、もう、皆が坐わつてゐたが、おせいは胸の動悸を押し靜めながら、先刻、向ふがいやな顏をしたのも、ちやア、大川のことをこちらと思ひ違つてる爲めだと分つた。馬鹿々々しくもあるが、このいきどほりが納まりかねたので、『わたしは淫賣ちやありませんよ』と云つてやつた。『如何に貧乏をしてゐましても、ね、これでも武士の生まれで、小學教員もして來ましたし、この後もまだ多少の望みは持つてゐますから、ね！』

『そりやアさうです』と、中島がはたから證明して呉れた。

『ちやア、どいつがだまくらかしてゐるんだ、うちのおやぢを？』かみさんはそのこわい目を今度は大川の方へ向けたが、まさか、こちらもそれだとは云へないので、

『そんなことアわたしが知つたものですか？』

『わたしだツてたゞこの營業掛りを引き受けてるばかりで、それが疑ひの種になりますなら、いつからでもやめてしやひます』と、大川は胡麻化してゐた。

『やめられちやア却つて困ります』と、中島が答へてから、またこちらに向つて、『どうか、奥さん、このことはこれッ切り許していただきたいものです。わたくしの家内もあまり心配してをりましたので、ついこんな失禮なことを致しましたのでしよう。然し、今回、あの豆腐屋の熊本(くまもと)がいよ〳〵わたくしどもに一と肩入れて呉れることになりまして、この家も熊本が責任を持つて呉れますから、この際、わたくしの方から返り證文をさし入れて、田口さんの名義を假りにわたくしの名義に書き換へていただきたいのです。』

『そりやア、間違ひのないやうにならね。』

『無論、間違はない爲めの返り證文ですから。』

『…………』おせいは何(なん)だか不安心になつて來たのだが、ただその場をつくろふ爲めに、『なんでも、お互ひに都合のいいやうにお願ひします、わ。』

『これでわたくしも』と、中島は微笑になつて、『あす、熊本から少しかねを受け取れますから、おかげで後ればせながら正月の餅もつけます。』

中島のかみさんもこれを聽いてゐて、段々心が落ち付いたかして、皆と一緒に仲直りの酒をしるしに飲んでから、その亭主をつれて歸つた。

その翌日、おせいは早速、砂糖半斤をわざ〳〵自分で買つて、それをお歳暮にして、大川には内證で二三軒さきの地主へ行つた。そしてそこの老主人に面會して、斯う〳〵云ふわけで今度持ち家の名義を書き換へることを中島と云ふ者から通知して來るかも知れない。が、その時は、その者になら地所を貸さないと云つて呉れ。さうすれば、兎に角、田口の家をあんな者に取られる恐れはないからと頼んだ。すると、地主も

『田口の老人が生きてなさる時に丹精した家ですから、わたくしもそれを他人の手に渡させたくはありません』と應じて呉れた。『その代り、隨分とどこほつてる地代は成るべく早くかたづけて下さい。』

「それはわたしも年中心配してゐますんですから」と答へたが、この點は自分から藪へびを出したやうにも思へた。そしてうちへ來てから、大川を說いて、

「この月はほかの月と違つてますから、ねい」と云つて、無理に地代を一ヶ月分だけ多く出させることにした。

その他の諸拂ひもうまく行くのかして、大川さんはそれらのことに就いても別に不足を云ふやうすもなかつた。そして正月のお屠蘇やおにしめの用意もできた。

そしてとう／\おぼつ飾りの日になつたが、その午前には中島がちよツとやつて來て、

「うちの子供にも買つてやりましたから、政直さんにも」と云つて、立派なこのぼりを一つ、糸をも添へて呉れた。

「政ちやんはいい物をいただいたの、ね。」おせいは貰ふ物は何でもありがたかつた。そして隨分亂暴な大工さんだけれど、斯うして時々子供を見て呉れるのを嬉しく思つた。

「おととひはあの馬鹿が飛んでもない失禮を致しまして――おかげで、きのふ、やツとかねができましたから、あれも落ち付きました。この家のことも歲が明けましたら、うまく行くやうになりますから」とも、中島は云つてゐた。

「どうか、なにぶんに、ね。」おせいはこのことには自分の心で取り澄ましてゐたのである。いよ／\となれば、地ぬしの反對があるので、さう向ふの自由ばかりにはなるまいから。

中島さんが大川に營業の方もうまく歲を越せることを聽いてから安心して歸つて行くと、暫らくしてから、雄作がやつて來て、意外にも一圓札を何枚か重ねて出して見せた。

「こんなに、どうしたの？」おせいは見ると直ぐ不思議がらないではゐられなかつた。

「おかアさんが困ると云つてたから。」

「そりやア困つてゐないこともないが、ねー」置き炬燵のやぐらへちかにかじり付いてる自分の兩手をおほつてゐる、その古ぼけた麻の葉の蒲團――これも自分がかた付いて來た時からあつたのを、段々洗ひさらし、切りつめつつ持つて

來たのだ——のうへで、自分の鼻さきへ置かれたそのおかねをじッと見詰めながら、無論嬉しくないことはなかつた。まさか、子供がよそで泥棒して來たのでもあるまいから、筋みちさへ立つてるものなら、このまま受け取つて置いてもいいがと思つた。渠の方を見て、『一體どうしたおかね？』

『…………………』雄作は少し青ざめた顔いろをして、返事がなかつた。

『まさか』と、おせいも自分の胸にどきッと來たものがあつた。このまへに渠が來た時にかけたこちらの苦しまぎれの謎と云へばなぞを、子供だから本氣に實行したのだらうと思ひ當つて見ると、先づ、子供に對して自分が母としての罪惡教唆の責任を免れたくなつて、『お父アんの物を泥棒して來たんぢやアないだらう、ね？』

『いいえ。』雄作は身ぶるひをまでしながら、わざとらしい無邪氣さを見せてうち消した。『泥棒はして來ません。』

『ぢやア』と、かの女は少し安心して、『どうしたの？』

『向ふのおかアさんが——お拂ひをするおかねが足りないから——郵便局から——出して來いと云つたのです。』

『そんなことを子供にさせたり！』

『さうして——おとうさんは、これも子供におぼえさせる一つの經驗だから、面白からうッて。』

『ぢやア』と、おせいは半ばがッかりして、『おッかさんに持つて來て呉れたんぢやアないの、ね？』

『僕が落したと云やアすむからと思つて、持つて來たつもりだけれど、いけなけりやア直ぐ持つて歸ります。』

『まア、いいや、ね、それぢやア』と、かの女は何げなく云つて、ちぢめてゐた脊を延ばした。そして急いで兩手を蒲團のしたから出して、手早くお札を數へて見ると、十五枚あつた。そして渠をなだめるやうにして、『折角、雄ちやんが持つて來て呉れたんだから。』

『十五圓だ、ね』と、そばで見てゐた政直が云つたので、

『誰れにもしやべるんぢやアないよ』と、かの女は叱るやうに云つて聴かせた。それから、また雄作に向つて、『ぐづぐ

づしてゐると分るから、ね、けふは早くお歸りよ。おッかさんも一緒に送つて行つてあげるから。』大川さんに對しては『ちよッと、また用事ができて子供が呼びに來ましたから、宮仲まで行つて來ます』と云ひ殘して家を出た。
電車を大塚終點で下りると、雄作を一と足さきへ行かしめて、おせいは自分で終點のあたりの歲末景氣を見がてら、雜誌屋やおもちや屋をのぞき步いて、暫らく時間の經過を待つた。それから、神社の鳥居をくぐつて敷き石の道をゆツくり進んで行くと、石段のところでお兼が急いでやつて來るのに出會つた。
『今、ね、雄ちやんがおかねを十五圓すられたか、落したかしたんですよ！』きツと、この件でだらうと思つたところ、果して向ふから聲をかけて、
『へい！』おせいは驚いたふりをして見せた。『さうして』と、何くはぬ顏をかしげて、『あつて？』
『あるもんですか！』
『困りました、ね。』この受けかたが自分にも少しわざとらしく聽えたので、つい、ちよッと自分の目を來た方の道へ轉じて、『どこへ落したんでしよう、ね？』
『落したかすられたか、分るもんですか！』
『どうしたと云ふんでしよう、ね？』
『こんなぼんくらぢやア、雄作も困つた子供ぢやアありませんか？』
『あんな子供にまかして下さらなかつたら、いいんでしたが、ね。』
『なんでも、郵便局で受け取つてから、それをふところへつッ込んだまま、おもちや屋を見てゐたから、その時取られたのかも知れないッて云つてるんです。』
『…………………』おせいは雄作も人が惡くなつて、うまいことを云ふのを、末おそろしくは思はないでもなかつた。『ほんとに、それぢやア、ぼんやりしてゐたんでしよう、ね。』

『まア、念の爲めに郵便局やおもちや屋を調べて來ます、わ。あとで、また、ゆツくり、ね。』

『わたしも以後そんな落ち度のないやうに雄作に注意しますから』と云つて、おせいはお粂と反對の方へ別れた。そして田口のうちへは、自分の心におそれをいだきながら、それでも相變らず何くはぬ顏をして行つたのである。お粂がゐないだけに、田口と自分とが水入らずのさし向ひになれるのを一つの樂しみにしてだ。

# 七

然し、田口からは早速、

『また何の用があつて來やアがつたんだ』と云はれた。

『さう、あなた』と、おせいは日ごろの不平を十分自分の渠を見つめた目に持たせて、『奧さんの手まへも入らない時にまで、わたしをさう叱らないでもいいぢやアありませんか？　子供もゐますのに？』實際、雄作は玄關の机の前で小さくなつてるのを、自分がこの茶のまへ這入る前に見て置いたのだ。

『その子供が十五圓と云ふかねをどうかして來たんだ！』

『今、聽きましたが、ね――』

『誰れに聽いた？』

『あなたの奧さまに、ね』と、冷かし氣味になつてゐた。如何に若い女だからツて、それにみだらな文句の多い三味線なんか習はせていい氣になつてるから、子供にまで馬鹿にされるのだと云つてやりたかつた。が、田口の見當は別な方にあつたらしい。斯うつづけて怒鳴つた、

『まさか、お前が橫取りしたんぢやアなからう、ね？』

『冗談を！』おせいは、はツと思つた刹那に自分も怒つて見せた。『如何にわたしだツて、親として子供にそんなことを

させられますか？』

『然し子供がかねを受け取つて來るところを途中で出會つて、ふいと氣まぐれを起すことが、圖々しいお前なんかに對しちやア直覺的に考へられないこともない。』

『馬鹿をおツしやい！　わたしがすりか泥棒ででもあるやうに！』證據を握られてゐるのでもないから、相ひ手になつてゐなければいいと思つて、話を別な方へ向けた、『わたしの方はそれどころぢやアないんですよ、家が流れかけてゐて。』

『丁度、結構ぢやアないか、そのまま流してしまやア？』

『ふん！』おせいは先づ鼻であしらつてから、『あなたはさう呑氣でゐられましようが、ね、わたしは一生懸命ですから、ね。』

『…………………』田口はまたこの方には相ひ手にならなかつた。

『地ぬしの方へはきのふ行つて、どうしても中島の名義では地所を貸すことにして呉れるなと頼んであるからいいけれど』と、獨り言を云つてるやうにして渠にも聽かせた。渠が相談に乘つて呉れなかつたから、これも中島へまかせたこと。さうすると、中島が自分で變な豆腐屋をつれて來て、家の名義の書き換へをすると云つてること。返り證文を出すと云つてるが、そんな物は當てにならないだらうと云ふこと、などを。

『そんな面倒くさいことよりやア、いツそのこと、あの中島に安く買つてしまつて、多少でもかねを握つて手を引く方がましだらう。』

『家があつての營業ぢやアありませんか？』

『ふん、お前の物だから、おりやアどツちにならうがかかり合ふ必要はないが、ね、ぐづぐづしてゐるうちにやア、營業はおろか、あの家まで取られてしまふにきまつてる、さ。』

『まさか――』

『然し、雄作の云ふところぢやア、お前を大工が出齒を以つて追ひまはしたと云ふぢやアないか？』

『そりやア、あの大川が惡いんですよ、なか／＼喰へない女ですから、ね。』斯うは答へたが、そんなことを、もう、雄作がしやべつてゐるのでは、渠がまたいつ、どんなことを思ひ逬つて口からすべらすかもしれやアしないと思つた。出齒の一件だツて、何も追ひまはしたのではない。ただ大工が持ち出さうとしたところを大川がとめてしまつたのである。で、自分としては豫防線を張つて置くつもりで、『子供の云ふことなんか當てになりますもんか？』

『然し、大川だツて、中島だツて、――今となつて見りやア――おそらく、同じ穴のむじな、さ。』

『まさか、そんなずるい大工でもないやうすです、わ。子供にだツて親切で、時々、物を買つて來て呉れますから。』

『そんなことでお前ぐらゐをだまくらかすのア誰れにでもできる、さ。――ところで、その大工は子供に物を呉れるが、お前は子供の物を横取りしてイるのか？』

『いつ、わたしがそんなことをしました』と突ツかかるやうに云つて見たが、ひよツとすると、雄作が何かこちらの喰ひ辛抱なことをでもしやべつてあるのぢやアないかと思ひ出せた。堤さんから子供たちのたツた二錢ばかり買つて貰つたおいもを、少しづつだが、おすそ分けさせたこともある。また、雄作に對しては殊に、田口やお粂から貰ふ物を少しでも持つて來いと云つたが――。

そこへお粂が失望のやうすをして歸つて來た。田口はそれに向つて、

『あつたか？』

『あるもんですか！』

『無論、おれが行くだけ無駄だと云つた通り、さ。』

『あなたは』と、お粂はまだ立つてゐながら、こちらへ出しぬけに聽いた、『雄ちやんに途中で出會つたのぢやアない？』

『また、あなたまでがそんなことを！』おせいは今度はうまくとぼけるひまもなかつた。まだ泥棒とも横取りとも云はれないさきに、自分から氣をまわしてそれを否定してしまつた。そしてこのへまを取りつくろふ爲めに、かの女を見つめながら、『ぢやア、子供に聽いて御覽なさい、な！』

『若し子供が承知のうへでしたことなら、聽いたッて白狀するわけはありません。』お粂は奥へ行つてコートをぬいで來てから、いつものところへ坐わつて、田口に、『郵便局でも、こんな子供に取りに來させちやアあぶないもんだがと思つたさうです。案の定、さうでしたかと云つてました。おもちや屋なんかは急がしくッて、そんなことア氣が付かなかつたッて。』

『…………』田口は返事をしなかつたので、おせいが受けて、

『これから、あんな子にまとまつたおかねなんかあつかはせないやうにして下さいよ。わたしまでが疑ひを受けるやうぢやア、つまりませんから。』

『あの子の云ふことはまだ曖昧です、ね』と、お粂はまだ田口に言葉をかけてゐた。『なんぼ何だッて、今受け取つたかねを直ぐ落すなんて！　それに、また、あんなところにすりなんか來てゐるとア、まア、思へませんから、ね。』

『そりやア、どうだか知れません、ね。』

『お前がそのすりでありやア』と、田口は半ば冗談にだらうがこちらへ答へた。

『失禮なことをおッしやい！』おせいはわざとにもまじめ腐つて見せた。

『時間だッて、出た時から勘定すりやア、二時間半もかかつてます。探してゐたと云ふのが本當なら、そのあひだの子供の心が思ひやられて可哀さうでもありますが、若しさうでないとすりやア、——何をしてゐたんだか分りません、わ。』

『兎に角、どうなつたのか分らないとすりやア、災難と思つて一回だけは許してやつて下さいよ。』おせいは斷う押し付

けるやうに云ふよりほかなかつた。『わたしからも、今後は氣をつけるやうに云つて聽かせますから。』
『何もお前から云つて貰ふにやア及ばないんだ』と、田口はまたこちらをのけ物のやうにした。『こッちが引き取つた以上は、こッちで自由に仕つける。以前にやア、子供をお前にまかせてあつたから、子供のことをおれはわざと干渉しなかつた。今度はおれの方で雄作を引き取つたのだ。命令が二途に出ると、子供をふた股膏藥にして、よくない!』
『そりやア、分つてますが、ね。』
『分つてりやア、もう、歸れ! こッちもけふはまだ急がしいんだ。』
『歸れとおッしやりやア、歸りもしますが、ね』と、おせいは晩めしまでゐさせて貰へないのを名ごり惜しく思ひながら、『然し、子供の親としちやア親としての人情がありますから――』
『人情があれば、成るべく來ないやうにするのが當前だ!』
『さうですか、ねい?』おせいはをかしなことを云はれるものだと思つて、暫らく默つてゐた。
お兼は、赤ン坊をおんぶしてゐる女中と共になつて、臺どころの用――ここでもおにしめだらう――を手つだひ初めた。田口はまた二階へ立つて行つた。
おせいはこッそり玄關へ行つて、雄作に
『默つてるのだよ、わたしはどこまでもお前のおッ母さんだから、ね』と、一と言云つてから、お兼にいとまを告げた。
そしてみち〳〵考へて見たところでは、向ふは雄作がかねをこちらへ持つて來たとは思ひも及んでゐないのだから、せめては雄作の爲めに都合のいいことであつた。若しこれがばれた時には、こちらだけわる者になればよかつた。然し、こちらのわる者も向ふではただそう想像してゐるだけで、別に證據も何もないのだから、警察なんかへ持ち出すことはできない。
して見ると、あの十五圓は、まア、不時の儲け物で――棟梁や豆腐屋が引き受けたと云ふ家の爲めには出すにも及ば

ないし。つまり、大川へも無論知らせないで、死んだ文子の紀念貯金のうちへ加へ入れて置けばいいのであつた。

## 八

お正月が來ても、然し、おせいにはお雜煮の味が自分の胃ぶくろをふくらませたと云ふ感じだけで過ぎてしまつた。一月の十日が來るまでにはこの家がどうなるかと云ふことばかりを私かに心配であつた。そしてこの心配は大川さんには云へなかつた。ただ二階の慶應大學生には、その後も度々田口のことや中島のことを惡いやうに云つてあるのだから、そのつゞきとしてこれをもこッそりうち明けた。そして若しこれが爲めに騷ぎでも起つたら、

『そのときやア、あなたもわたしに加勢して下さいよ』と頼んで置いた。

ところが、六日になつて、こちらからはまだ雄作の件で氣が引けて田口へは年始にも行かなかつたのに、向ふからお衆がやつて來た、而もひとりの女をつれてだ。おせいはあの件で何か談判をされるのではないかと先づぎよッとしたのである。が、若しそれなら、確かな證據を見せろと云つてやるつもりの腹をきめて、自分の部屋へとほした。すると、意外にも、別にこの家を引き受けてやらうかと云ふ人があるのを知らせに來たので、そしてそのつれの女がそれであつた。

『島村さんとおッしやいますが』と、お衆もおもての方へ懸念して聲低く云つた、『旦那さんは山林局へ勤めていらしつたので高等官の恩給を貰つてらつしやいますが、或商買の店を人にゆづりまして、今度お國へ歸ることになつていらしつたのですの。然し、この奥さんはまだお若いので、思ひ返して、何かすることがあれば矢ッ張り東京にゐたいとおッしやるし、わたしもお友達としてこッちにゐて貰ひたいし。それでふいとここのことを思ひ出して、お話をして見たの。さうしておつれ申したのですが、ね。田口にも云つて見ましたら、至極いいだらうと申しましたから。』

『この田口さんの奥さんとは越後にをりました時からおつき合ひを願つてをりますのですから、』島村さんは信州のもの

で、その主人は土佐だと云つてゐた。

『土佐へお行きになつちやア、ちよツと出ては來られません、ね。』おせいが斯う云つたには、ちやア、丁度いいから、それを思ひとまつて、こちらの爲めになれよと云ふした心を先づほのめかしたのであつた。身なりから見ても、お兼よりは立派だから、退職高等官の奥さんと云ふのも本當だらうと信じた。ただ、その亭主が既に恩給を貰つてるほどの年輩になつてるのに、女の方が而も美人で、このやうにまだ若く、お兼と丁度おツつかツつらしいところを見ると、これも亦前の女房を追ひ出して、自分がそのあとへ這入つた手合ひではないだらうかと、多少はまた妬ましい氣もしたけれども。いろ〳〵向ふの話も聽き、こちらからも中島や大川の仕うちに對する不平を語つたあとで、島村さんに、『ちやア、どうか、旦那さんに來ていただいて、直接にさうかけ合つて貰ひます、わ』と、もたれ込んで答へた。

『わたしも、ちやア』と、お兼は嬉しがつて、『島村さんを紹介がてら、田口の代理として地ぬしのとこへ行つて、よくわけを云ひ含めて來ます、わ――大工に先きまはりをされちやア困りますから、ね。』

『そりやア、念には念を押すのもいいでしようから、ね、わたしからも中島を相ひ手にして呉れるなとは云つてありますが。』おせいはそれから、大川へも渠等がちよツと會つて置いて貰はなければ、もう、たとへ僅かのあひだにしたところが、こちらの義理やばつが悪いからと云ふことを云ひ出して、渠らが餘り乘り氣になつてゐないにも拘らず、大川さんを呼んで來た。そして笑ひながらお兼に向つて、『あなたにやア島村さんが朋輩なら、これはまたわたしの朋輩ですから。』

『よくいらツしやいました。』大川さんは例のおじようずだが人のうちをわが物にしてゐるやうな挨拶をした。『わたくしは大川と申しまして、ふつつかながら、あなたがたのお蔭でここの帳場を受け持つことになりました者でございます。』

『どうかよろしく、ね』と、おせいも、はたから、おもて向きは、親しみある云ひ添へをした。が、人の帳場を占領したのは向ふの自分勝手からであつて、こちらの正當に許したのでないと云ふ不平が胸に一杯であつた。そしてあす、あ

さつてのうちには、きツとその勝手な挨拶ぶりの鼻を明かさせてやるぞと云ふ心頼みができてた。だから、大川が話の調子に乘つてこちらのことを

『どうもなか／＼氣のきつい奥さんで、番頭やお三どんが隨分困ります』などと云つてても、別に頓着しないふりをして笑つてゐた。そしてこちら二人が渠ら二人を送り返した時、こちらは玄關で渠らに

『ちやア、ね』と、そのあとを目から目へ念を押した。

『あんな若い女どもに取りまかれてゐちやア、田口さんもまゐつてしまうのア當り前でしようよ。』大川はあとで直ぐ斯う笑つて、その淫亂な目つきをこちらへ向けた。

『だツて』と、つい、おせいもその方へ氣が向いて、島村と云ふ女なら、如何にも憎いほど美人だが、お兼なんかをと、田口の昔からの物好きがここでも考へられた。

貯金のあることは渠等にも云はなかつたが、大切な書類をここのものに盜まれたら困ることをうち明けた時、

『ちやア、わたしが今預かつて行きます、ね』と云つて、お兼は無理にも出させて、こちらと中島との間に取りかはした契約書と警察から下りた營業許可書と工事檢査濟みの證とを持つて行つたツけが――。

『ちやア、頼みますが、ね』と、答へたものの、こちらはそれを渡したくもなかつたのだ。大川や中島が契約書を書き換へると云つて、それを奪ひ取らうとしてゐることは事實だが、さうかと云つて、自分がそれを持つてゐなければ、中島らに取られる恐れはない代りに、お兼がまたどんな氣を起してどうしてしまうか分らないのである。

然し、また考へて見ると、中島の話が初めはよかつたけれども、今となつては、さきの中尾や堤のよりも一層惡い。だから、今度のことにして、若しお兼が自分のずるい野心からそのかげで絲を引いてゐるのでありさへしなければ、これが最後ちやうの目のいい話であるらしい。

そして、かの女が直ぐ自分で易を見て見ると、矢ツ張り、妙なもので、自分の考へどほりであつた。その翌日を樂し

みにして待つてゐると、果して島村の主人と云ふのがやつて來た。團十郎のやうに顔の馬鹿に長い人であるので、初めはおせいもびツくりした。が、こんな男にあの奇麗な奥さんがついてるにやア、きツと、おかねが目あてであらうから、この方にはこちらも信用を置いていいのだらうと頼母しかつた。

先づおせいは自分だけで會見して見ると、渠は

『おれが引き受けるなら、』斯う〳〵するが、それは承知かと聽いた。きのふ、大體の話があつた通り、毎月、中島への返しなる二十圓と家賃としての二十圓と、都合四十圓を、まア、大きな家賃として出し、その上に親子二人をこの家に置いて養ふと云ふのだ。さうなれば、地代も營業税も向ふが納めるのだから、こちらとしてはながねんの心配もなくなるのである。で、大きな心持ちになつて、

『無論、承知します』と答へた。

『それでは、大川なんか相ひ手にしなくともえいから、早う大工を呼んで來い。』

『…………』おせいは、隨分横柄な、氣みじかさうなおやぢだから、中島とは直ぐ衝突してしまひはしないかと思つた。が、斯うなつては自分の爲めでもあるので、また佐久間町へ行つて來た。そして席を客間に改めて中島と島村とを引き合はせたら、島村さんが先づ口を切つた、

『おれはけふは田口の代理で來ただけだが、一體、君がこの家につかつたかねはいくらだ？』

『いくらと申して――』中島さんは少し面くらつたやうすであつた。

『曖昧なことは許さん。はツきり云へ。』

『…………』一方はもじ〳〵してゐた。

『それに、あの大川と云ふ女は一體なんだ？　初めからお前の目かけであつたのか？』

『いや、どう致しまして。』

『それでは、ここへ來てからくッ付き出したんか？』

『まさか、そんなことでもないでしようが』と、おせいは見かねて口をさし挾んだ。田口やお彼からすべてのことを聽いて知つてるのだらうとは思つたが——。

『お前は默つとれ』と、島村はこちらへ命じてから、また中島に、『一體、お前らはまだこの家へ這入つて來る權利もないのに這入つて來て、不都合なことをしとるのぢやぞ。裁判所へ出るまでもなく、警察へ行けば直ぐ分ることぢや。』

『…………』こちらは尤もなことを云つて呉れるとは思つたが、あまり手きびしいので喧嘩にならなければいいが、とそして、『それでも、隨分骨を折つて下すつたんですから、ね。』

『少しお手やわらかに願ひますが』と、然し、中島さんはおとなしく出て、『金錢上のことは契約のうへに出してございます。』

『そりや分つとるが、その上にお前らの要求があるか？』

『ありません。』

『よし。それでは、四百圓とはお前らの儲けを多分に見込んであるとしても少し高いと思ふが、兎に角、それを契約通り二十ケ月に成しくづせば異存はない、な？』

『ございません。』

『それだけ聽けば、けふはこれで歸るが——お前らがここへ這入り込むと云ふ權利は契約面にもないのぢやから、こちらの都合によると、あすにも立ちのいて貰ふからそのつもりでをれよ。』

『そこは少し——どうも——』と、中島さんには最後に何か云ふことがあるやうすであつたので、大川さんも飛び出してこちらと一緒になつて、

『まア、今少し』と引きとめようとしたのだけれども、嶋村はさッさと歸つてしまつた。

『三百なんか、誰れがよこすやうにしたんだ？』中島さんはその目を光らせてこちらをばかり睨らんだ。

『あなたはすツかり何でもしやべつたのです、ね！』大川さんも亦こちらに向つて顔いろを變へてた。

『…………………』おせいは、大川が目かけと云はれたのは當り前のことだから、それをおこつてゐたツて左ほどおそろしくもなかつたが、中島が三百と云つたのにはこちらもはたと思ひ當ることがないでもなかつた。で、自分の考へが今更ら間違つてたことを渠にもあやまるつもりで、渠の機嫌を取る氣味になつて、『ほんとに三百でしようか、ね？』

『三百でなけりやア、あんな物の云ひやうがあるか？』

『ちやア、あのお躰の計略です、わ』と、おせいはかツきりと云つてしまつた。一つには、中島があのこわい目でまた出齒騒ぎでも初めたらと云ふ恐れの爲め、また一つには、田口の女房をふてぶてしいと思ふ疑ひの爲めにだ。そして大川さんから、

『あなたはきのふ何かあの人たちにだまされたんです、ね』と云はれた時には、

『さうかも知れません、ね、わたし』と云ふ方へばかり心がほんとうに向いて行つて、斯うしてゐるうちにも、今のおやぢが若し地ぬしへ立ち寄つて、また、こちらに都合のよくないことをきめてしまつては困るからと考へ付いた。『早速、ちやア、地ぬしへ念を押して來ます、わ』と云つて、やツとその場のおそろしい豫想は切り拔けた。そして實際にそこの玄關へ驅けつけて、『今、顔の長い人が來てゐませんか』と聽き糺して見ると、

『そんな人は――まだ』との、ぼんやりした女中の答へであつた。

『…………………』おせいはそこの坐敷へあがり込んでまた老主人に會ひ、『若し島村と云ふ男が來て、うちの地面の借りぬしになると云つたら、どうか相ひ手にしないで置いて下さい』と頼んだ。

『では』と、主人は呑氣にも『その島村と云ふのも大工の中島と同類ですか？』

『いいえ！』こちらはその丸で見當違ひなのをまじめに否定して、『云はば、まア、かたき同士です、わ、ね！』

『それぢやア、あまり要領がをかしいぢやアありませんか？　あなたは、こないだ、中島をかたきのやうに云つてゐました。』

『それが少しまたわけがありまして、ね、矢ツ張り、中島さんの云ひぶんの方がいいやうですから。』

『わたしの方はどツちでもあなたのいいやうに致しましようが、まだ事が起つて來ないのだから、まア、もツとよく氣を落ち付けて熟考して御覽なさい』と云はれた。

『これでもわたしは考へて考へぬいてるつもりですから』と答へて歸つて來た。そして大川さんにこツそり、おそるおそる『棟梁は』と聽いて見ると、

『今豆腐屋さんを呼びに行きました、わ』との答へだ。『契約書が今の人の云ふやうぢやア間違ひだから、矢ツ張り、書き換へなけりやアいけないツて。』

『さうですか？』おせいはそれが自分の手もとにないのをこの場合は安心して高をくくつてゐた。

『あなたもそれは素直に承知した方が無事でしようよ――やがて豆腐屋さんも來るでしようから、ね。』

『豆腐屋は豆腐屋、わたしはわたしですから、ね！』

『そんなことをおつしやつたツて――』

『まア、その時にやアその時の考へが出ます、わ、ね。』おせいとしては、さて、いよ／＼と云ふ時に反對すればいいのであつた。

　自分の部屋へ來て、直ぐ炬燵へかじりついて考へて見るに、あの契約を書いた時には、どうにでもしてこの家が立つてゐればいいとばかり、ただ無學な大工の云ふままに自分は筆を走らせたのだか、實は、それがどう云ふ効力や結果を產むものであるかを自分もはツきりとは知つてゐなかつた。ところが、今、島村さんの云つたところによると、四百圓

を二十ケ月に返すやうにしさへすれば、なにも中島や大川を氣がねまでしてこの家へ入れて置くにやア當らないのであつた。これは中島さんらには不利益にこそなれ、こちらには少しもそんなことがないわけである。

ここに先づ氣が付いて向ふの爲めに書き換へを云ひ出させたのはあの豆腐屋であつたらうが、こちらの爲めには島村さんがあつて初めてこのいいことを敎へて吳れたのだ。が、このいいことをあの文面によつて知つたお兼は、四百圓だけ出せば濟むつもりで、三百代言を出しにして、つまり、この家へ乘り込んで來る計略としか思はれない。して見ると、こちらは男を寢取られたうへにも、また家まで取られてしまうわけではないか？　で、書類をかの女に預けたことは、中島らに取られるおそれがなくなつた代りに、かの女自身に橫取りされてしまひはしないかと云ふ疑ひを生ぜしめられたのである。

なほ疑ひを進めて見ると、きのふの美人に對してけふのおやぢが亭主だとは——無論、そんな無理な夫婦も、近い話が田口とお兼とのやうに、世間にはないこともないが——まア、ちよツと不思議だ。來るものも、來るものも、揃ひも揃つて不釣り合ひな亭主を持つてるとは！　だから、矢ツ張り、中島さんが無學でも看破つた通り、あの島村は女の亭主だと云ふのはうそで、ほんの、三百代言であつたらう。道理で、最初に向ひ合つた時から、こちらはいやな人だと感じられたが、この家を、もう、自分のうちだとでも思つてるやうに意張り散らして、その話の最中に、政直がこちらの膝をつツ突きながら、頻りに

『よう、おツ母さん、なにか——』と云つた時、島村は

『少し靜かにせい』などと、あの長い顏をしがめて政直を叱り付けたりした。

『…………………』あんな癎癪持ちらしいこわい人に比べては、まだしも中島さんの方がどれだけ扱ひ易いかも知れない。あんな者を二度と再び來させない爲めには、早くあすにも宮仲へ行つて、お兼に渡した書類を取り返して來なければならぬが、どう云ふ風に云つて返して貰はうかと云ふことにまた心配があつた。

# 九

さうかと云つて、今迫つてる事に對する覺悟も亦心配であつた。

島村と中島さんとが會見したのは午後の二時ごろであつたが、四時になつて、中島さんは果して豆腐屋をつれて來た。そしておせいも客間へ呼び出されて行つた。

『あなたは一體』と、今度は豆腐屋さんがあたまから意張つた口調で、例の薄い髮の毛を五分刈りにしたちよッと尼のやうなおとなしい顏をこわくして見せながら、『何の爲めにそんな三百なんか呼んだのです？』

『ぢやア、あなたは』と、おせいも覺悟してゐた反抗が眞ッ向に出て、火鉢にかけてた自分の兩手をふるはせながら引ッ込めて、相ひ手をにらみ付けた、『なぜ一旦書いてしまつた證文を書き換へさせようとするんです？』

『必要があるからだ！』

『必要があるなら、わたしの方にも必要があります！　全體、この家を誰れのものだと思つてるんだ、途中から飛び出して來たりして！』

『さう、奥さん、喧嘩越しぢやア話ができません。』中島は向ふと一緒になつてこわい顏をしてゐたのを和らげた。

『……………』おせいはそれをいい氣持ちに感じたが、なほ豆腐屋の方をにらんでゐた。

『熊本さんも、もッとおだやかに出て貰はないと、な。』

『僕も少し出すぎたと思ひますから、取り消しますが――。』

『……………』かの女は自分の心も少し落ち付いて來たのをおぼえたが、云つて置くのはこんな時だと思つて、『わたしの家を乘ッ取らうとする人なら、わたしやア誰れにだッて決して承知しませんから、ね！』

『わたくし達は決してそんな不都合は致しません。』

『それが確かなら』と、かの女は中島の重ねての證言を得たと受け取つて、熊本の方へもそれを聽いたらうと云はねばかりの笑ひを見せて、初めて當り前の言葉ぶりになつて、『わたしにやア何もかれこれ云ふことアないのです、わ。あの島村をだツて、實際にわたしが呼んだんぢやアないんですから。田口の方から勝手によこしたんです。』これは少し田口の爲めには云ひ過ぎだが、この場はそれを事實として自分の力にした。ここにゐないものにはそれが分る筈はない。そして今ゐるものをさうおこらせては、然し、また、そのあとが面倒になるからと見て、またずツと折れた調子になつて、『實は、わたしも困つてしまひましたから、その證據にやア、あの人が歸ると直ぐ、また地ぬしへ』と、つい、口がすべつた。が、第一回に地ぬしへ行つたことは自分の胸に秘めてあることとで、ここでは云はれないのだから、ちよツと言葉が行き詰つた。そして『實は』から云ひ直して、『直ぐ地ぬしへ行つて、島村と云ふものが來て若しうちの家の爲めに地所の貸借のことを云つても、一切取り合はないで置いて下さいと頼んで來たほどですから、ね。』

『然し、田口さんも今更らどうすると云ふんでしよう』と、中島さんはこちらをなじるやうであつた。

『わたしの考へぢやア』と、わざとにも笑ひを見せて、『田口は家をいツそのこと賣り渡してしまへとまで云つてるんですから、今度のことはあの人ぢやアありませんよ。きツとお兼が自分の野心から絲をあや釣つてるんです、ね。』

『家を賣るにしても』と、中島はまだほんとうには打ち解けてゐないらしい、『今ぢやア、わたくし達に相談なしぢやア困ります。』

『無論、だから、わたしやア相ひ手にしてゐませんでしたわ、ね。』

『あの男は二百圓までは一どきに出してもいいが、あとの二百圓は月々にしたいとも申しました。多分、さうかねがないのでしよう。然し、若しあなたがそんなことでわたくし達を承知させようと思つちやア間違つてをります。若しわたくし達がどうしてもこの家を出ると云やア、四百圓は義俠的な實費ですから、そこへもツと正當な利益を書き入れて、即時拂ひにしていただかなけりやア――。』

『…………………』こちらは、中島がさう云ふ附け加へを正當といふほど義俠的をふりまわすのはをかしいと思つたが、もう、そんなことを爭ふべき場合でもないだらうと見て、『どうせ、わたしもあの人をそれだけの資力がある人とも思へませんから——。』

『だから、兎に角、契約書を書き換へることにし給へ』と、豆腐屋さんもまだそこ意地が殘つてるやうに中島へ知慧をつけた。

『兎に角、契約書が間違つてゐるさうですから、ここへ持つて來て今一度見せて下さい。』

『それが——今、ここに——ないのですが、ね。』無理に笑ひにまぎらして、おせいは云ひにくかつた。たとへここに持つてゐたとしても、この場合、何とか云ひまぎらせこそすれ、出す筈がなかつた。お衆に渡してあるのも心配だが、それを取り返して來て、中島らに見せれば、このやうすでは、きッと取り上げられてしまうのだらう。そしてまた書き換へるとなれば、はたに悪知慧をつける人も來てゐることだから、こちらの不利益になるのが分つてゐる。だから、まア、手もとにない方がまだしもであつた。

『多分、田口さんのところにあるのでしようが、あなたはそれを取つて來なければ困ります。』

『さうです、ね——』おせいは、向ふから押し付けるやうに云はれるだけ、こちらもあとは無言の口をとがらせて、矢ツ張り不承知のやうすを見せた。そして皆の顔いろをうかがひながら、ただもじもじしてゐた。

するど、豆腐屋さんがまた口を出して、而もこちらを再び威すやうに、

『それがないと、わたくし共もこの家のお世話はできません——この十日には抵當流れになるのを、わたくしがかねを出して取りとめようと云ふわけでしたが。』

『幸田さん』と、この時、大川さんも出て來て、『取つておいでなさいよ、さう強情張らないで。わたしがゐる以上は、決してあなたがたを困らせるやうなことはさせませんから。』

『さう、ね。』おせいは、つまり、そこがどちらに對しても心配なので、きのふは、ふいとお粂に云はれた通りの氣にもなつた。そしてけふは、また、島村の意張り散らして行つたやうすから見て、お粂がひよッとすると、こちらが雄作の十五圓を横取りした復讎に、この家を占領しようとするのではないかと疑ひ返した。そして、矢ッ張り、あの飛び入りの島村よりも、この中島にたよつてる方がましかと考へてるのだ。

『何とかそこはうまくあなたの口でおッしやれば、向ふでも返して呉れるにやア違ひありませんから。』

『さう、ね——わたしと政直とが兎に角たべて行けさへすりやア——。』この點が最も心配であつた。

『そりやア、あなた、もう、さうくどくど云はないでも、みんなが承知してゐるぢやアありませんか？』

『でも、ね』と、こちらは大川の立つてるのをじろりと見上げて、加勢を頼むつもりで、『よく念を押して置かないと——。』

『そりやア、あなたがたの世話をすることは』と、中島さんも十分呑み込んでると云ふ顔つきになつて口を添へた、『初めからわたくし達が承知の上ですから。』

『ぢやア』と、少しおせいは力づいて、『政直とわたしのことは確かに間違ひはありませんでしよう、ね？』

『今申す通り、確かに間違ひありません。ですから、これから直ぐ田口さんへ行つて、契約書を取り戻して來て貰ひたいのです。』

『さうです、ねい——』

『それがないと、わたくしも資本をつぎ込むのに困ります』と、豆腐屋さんも云ひ添へた。

『…………』おせいはまだ決心しかねてゐたところへ、この熊本の云ひ添へがあつたので、一層また不安心になつた。中島とだけの關係なら、もう、多少はその心持ちも分つてゐるが、豆腐屋さんなる者がこちらから云へば矢ッ張り三百代言くさいところがあつて——。『ぢやア、あなたもこのことだけは確かに誓つて下さいますか？』

『誓ひます。』

『ちやア』と、こちらはとう〳〵向ふの飽くまで威すやうな返事に押し伏せられてしまつて、止むを得ず、『これから行つて來ます、わ』と答へた。そして

『早い方がいいです』と、向ふにせき立てられたので、晩の食事をしないで出かけた。

すると、お兼はこちらを見るが早いか、おこつてゐて、

『あなたは駄目、ね。折角、わたしがいい人を紹介してあげたのに、矢ッ張り、あなたのくせの半信半疑を出して！』

『そんなおぼえはありませんが、ね』と、おせいは先づ辯解した。と云ふのは、たとへ自分の心にはさう思つてゐたにしても、言葉のうへには少しもさうけ取られるやうなことを云はないで歸した筈である。

『だッて、島村さんはおこつていらッしやいましたよ。かねは出してもいいが、幸田と云ふ女があア要領を得ないのでは駄目だッて。人を信じたやうな、信じないやうな曖昧なところへ飛び込んで行つても、また堤さんのやうに、追ッ拂はれちやア馬鹿を見るからッて、ね。』

『わたし、なにも堤さんを追ッ拂つたわけぢやアありません、わ。』

『あなたはとぼけてゐるんでなけりやア、自分で自分のことが分らないんだから――。』

『ぢやア、兎も角、あの書類を返して下さいよ』と、おせいはそれをしほにして、何げないふりで云ひ出して見た。

『ぢやア、矢ッ張り、あの大工や大川に丸め込まれてしまうつもり？』

『さうでもありませんが、ね――』

『つまり、さうなんでしよう。あなたもよく〳〵馬鹿な人、ね！　島村さんの考へぢやア、あの證書さへ握つてればたッた四百圓であの大工どもを追ひ出せるのですよ。』

『さうも行きませんから、ね』と、こちらこそ自分が中島らに對する義理もあることを知らぬお兼を馬鹿にしたつもり

であつた。そしてそれを強める爲めに、中島の云つたことをそツくり持つて來て、『若し直ぐ立ちのくなら、四百圓の上にまだもツと貰はなけりやアと云つてますから。』

『そりやア、向ふの勝手な云ひぶんであつて、こツちぢやア契約通りを實行すりやアいいんぢやありませんか？』

『それができるくらゐなら、わたしも心配致しませんが、ね。』斯う高をくくつて、おせいは島村が一とき拂ひは二百圓までならと云つたのを、その意張りかたに照り合はせて、私かにあざ笑つてゐた。

『然し、あなたの爲めをおもやア、今、わたしがあなたに書類を返すのは危險です、わ。』

『それではわたしに困ることがあるんですから』と、おせいは、しまひには、契約書をこちらが持つて歸らない場合の中島らの怒りを想像して、そのおそろしさに自分の聲をまで顫はせた。そして、自分は泣きたいほど本氣になつて、向ふは田口が三百をよこしたと云つておこつてること。それをなだめるには、云はれた通り、どうしても證書を持つて行かなければならぬこと。それでも、自分らの身の上のことは豆腐屋までも受け合ふと云つてること。それが實行されなければ、また、その時になつて自分には自分の考へがあること、などを語つた。そして自分がお銀に野心があると見ての憎みや疑ひには、少しも云ひ及ばないですんだことを肩が一つおろせたやうに思つた。

『どうしましよう、ね、あなた』と、お銀は、今までそばに來て、默つてたばこを吹かしてゐた田口の方へ初めて言葉をかけた。

『…………………』こちらはまた渠に對しても今一度同じやうなことを以つて辯解しなければならぬかとまで付いてゐたが、渠は案外簡單であつた。

『本人がさうして呉れいと云ふんだから、返してしまへ。その代り、どうなつたツてかまうもんぢやアない。堤の時なら、若しあの堤が不都合な考へを出したツて、おれがそれをさしとめて置けるが、今度の大工にやア、おりやア初めからいい結果を期待はしてゐないんだ。』

『まだそれに、別に惡いことを仕向けて來もしませんから』と、おせいは田口の寧ろよく分つた返事によみ返つた氣がして、また強情張つた辯解も出た。

『どこまで馬鹿な人なんでしよう、ね、あなたは！　わたし、もう、どうなつたツて知りませんよ』と云つて、お兼は奥の部屋へ出た。

　そのあとでおせいは田口に向つて、お兼にもわざと聽えてもいいつもりで、

『わたしやア島村さんだツてかまひません、さ。けれども、また堤のやうに若し惡い人であつちやア――。』

『お前にやア、いいも惡いも分らないんだ。どうせ、心が腐つてると云はうか、根本から疑ひ深いんだから、ね。』

『そんなことがあるもんですか？』斯う、おせいは一言のもとに否定した。そして自分だツて、この正直な心には善惡の見分けが付くし、進んでまた善にも惡にもそのどツちかへの分量がある、その多少をも見分けてかかつてるものだと、私かに誇らしく思つた。

『これですが、ね』と云つて、お兼はまた茶のまへ這入つて來て、『よく見て御覧なさいな、あなたの云ふ親子扶養の件などアちツとも書いてありませんから。』

『そんな筈アありません。』

『筈はないがあなたのお箱ですから、ね！』

『…………』おせいが受け取つて見ると、自分の渡した時に自分が封じた箇所は破つてあるが、書類は確かに三枚あつた。そのうちの契約書を讀んで見ると、如何にもこの通りだ――

『一金四百圓也　右者工事費と認定すること實證也　大正六年一月より二十ケ月に毎月下宿營業の利益より二十圓づつ支拂ひの件契約如件』とあつて、中島と自分との名に實印を押してあり、收入印紙も張られてゐる。そして文句も自分の手には相違ないが、自分と政直とに對する扶養の義務のことは出てゐないのだ。

『こんなことだけ書いた筈ぢやアなかつたんですが、ね』と、おせいは自分ながら不思議であつた。
『その場で讀み返して見たツて』と、田口は意地惡い口調で、『またあとで讀んで見たツても、兎に角、讀みさへすりやア直ぐ氣が付いた筈だ。それをお前はぼけてゐて分らなかつたんだぞ。』
『まさか、わたしがぼけても――』とまた反抗したが、然し、おせいも自分でよく讀み返しもせず、あとからまた一度も出して見なかつたのは自分の落ち度だと分つた。『これぢやア、どうせ、不安心ですから、向ふが書き換へると云ふをいいしほに、今度は書き加へさせます、わ。』
それにしても、お互ひに興がさめてしまつて、おせいは他の話をしつつ長居をしてゐることができなかつた。

一〇

契約書は取り返したくせに、中島は熊本がまだかねの工面ができないからと云つて、こちらをもつれて裁判所へ行き十日の競賣日を一週間延ばして貰つた。そしてこちらが二葉會社へ五ケ月間納めて、ここ三ケ月を中絶してゐる無盡のかけ金をも出してしまはなければ、豫定のかねが足りないと云つた。その上にも、まだ何とか工面しろと云ふので、田口の方から毎月貰ふぶんを二ケ月だけ前金にして貰つた。
それでもまだ皆がこれでも足りないと云はないばかりの顏をして、大川さんまでがこちらに向つて、
『あなたは大分貯金をしてゐる筈ぢやアありませんか』と云つた。
『そんなことがあるもんですか？』おせいは苦しまぎれに斯う眞ツ赤な嘘をついたが、そのうへに何だかおそろしくもなつて來た。契約書は取られたままになり、頼みの一つであつた無盡のかねも卷き上げられ、このうへに文子の紀念や雄作の骨折りなる貯金まで出してしまつては、萬が一、若しこの家を追ひ出された時にどうすることもできないのであつた。

渠等がその初めからそんな計略を以つて這入り込んで來たのであることが、ヤツと、この三四日のやうすで俄かにおせい自身にも確かめられて來た。自分が島村をこさせて中島を怒らせなかつたら、それも斯う早くは事が起らなかつたかも知れぬ。いや、こんな事にさせる口實を與へなかつたかも知れぬ。それが自分には實に後悔の一つにもなつた。が、今となつては、泣きたくも泣かれないはめに落ち入つてゐた。遠く離れてゐるものも、近くそばにゐるものも、みな自分の敵であつて、自分は八方ふさがりのやうだ。誰れと云つて相談する相ひ手がなくなつてゐた。止むを得ず、易の先生のところへ行つてまたそれを訴へると、先生もまたかと云はぬばかりで、

『その件なら、どうせ、おれが聽いても駄目だ』と云つた。が、それでも、『最後までは踏みとまつてゐなさいよ』と云ひ添へて呉れた。

『わたしもその腹はきめてゐますから』と、こちらも答へた。さうだ、もう、最後には追ひ出されるにちがひないと云ふことを覺悟の前で、今一遍自分の對抗策をやつて見る機會を考へてゐるのだ。

ところが、そんなことを考へながら、或時、おせいが便所から出て、手を洗ふ時。そこのがらす戶のうらに竹の葉が繁つてるので、がらすを暗くしてゐるそのおもてへ映つた自分の顏をふと見ると、自分の兩方の目が血ばしつてゐた。そしてこれなら、田口らには旣に氣違ひだと云はれてる通り、その眞似も十分できるだらうと思へた。

丁度、この時、わざとこちらのさけてゐた大川が、これまでになく、こちらの部屋へ遊びに來た。これまでは、つまり、人を馬鹿にしてここへ來たことがなく、用事がある時は向ふの室へこちらを呼び寄せたのに、今や少し不思議であつた。すると、果してこんなことを云ひ出した、

『あなたもこのままぢやア』と、何だか親切さうにだが、『やがて追ひ出されてしまひますよ。それよりやアどうです、わたしも棟梁の云ふことを聽いてますから、あなたも今度の人に――？』

『わたしは、ね』と、おせいは聽くなりくわツとして、先づ自分のこの血ばしつた目を以つて相ひ手を睨み付けて、『そ

んな淫賣ぢやアありませんよ』の呼びを投げ付けた。『あのなま意氣な豆腐屋なんか、聽いても呆れます！』

『さう直ぐおこつてしまつちやア、わたしの親切づくが通じません、わ、ね。』大川はわる度胸をすゑてるかして、なほ笑ひながら、『わたしやアただ向ふの心をあなたに傳へてあげるだけです、わ』

『そんなことア眞ツぴらです』と云つて、おせいはまた相ひ手にしなかつた。そして自分の束髮を——染めた髮の毛がその根もとから殆どすべて白がのきぢを延ばしてゐるのを知つてるまま——わざと、さんざんに解き亂だして、家をそとへはだしで飛び出した。そして、

『大川さんは利口です。だから、わたしの家を奪ひ取るつもりぢやアないでしよう。利口は拔け目がないのです。淫賣なんかしないでしよう』などと、反對にもじつたことをわめきながら、通りへ出た。そして巡査の交番まで行つて、『うちへ惡人が三人も這入り込んでゐますから、どうか御處分を願ひます』と訴へた。

巡査がうちまで自分について來たので、自分はそれをわざと玄關で突ツ放して、引ツ込んでしまつた。氣の利いた巡査なら、それからあとをよく調べて皆を叱るだらうと思つて。そして大川がひとりで頻に何かくど／＼辯解してゐるのは、叱られてゐるらしかつた。二階の大學生もこんな時には出て來て吳れる筈だのに、これは矢ツ張り薄情なせいか、顏も出さなかつた。

兎に角、これが爲めにまた中島と豆腐屋とが寄り合つたが　中島はこちらに向つて、

『あなたがまたそんなことをするなら、田口さんに云つて、この家のことはお斷わりするより仕かたがありません』と云つた。

『ぢやア、さうして下さい。』おせいはそれでもかまはなかつた。

『然し、それであなたはすみますか、わたくし達の骨折りを無にして？』

『ぢやア、どうともして下さい。兎に角、わたしはこの家を離れませんから。』

『なにもわたし達があなたを出すとア云つてませんぢやアありませんか？　わたしこそ』と、大川は少し閉口したやうすで、『迷惑です、わ、あんなことを布れまわされて！』
『何を云つたか、わたし、ちツともおぼえがありません、わ。』
『それだから、なほ困りますよ。』大川はこちらの機嫌を取るやうに笑つてだが、こちらを全く氣が觸れたと思つてるのを、おせいはせめてもの心やりと見た。そして、うわべではあやまるかたちで、
『御迷惑なことを云つたのなら、許して貰ひます。』
『あなたはここをどこか知つてますか』と、豆腐屋は人を馬鹿にしてだ。
『えい』と、おせいはそれをわざとさよと〳〵して見せながら受けて、自分ではお客さんのひとりと變な關係があつたのを文子に見付けられたのもここなら、秋元の姉と繪を見合つたのもだと思ひ出した『ここは、なんでも、おぢイさんの居間らしいです、ね。おぢイさんのたましひがまだ殘つてますから、ね、まさかの時ア、それが助けに出て來ます。』
　豆腐屋も中島もぎよツとしたやうすでこの部屋中をそれとなく見まわしたので、おせいは自分の意味にこれからも多少の効力が出るだらうと見た。そして私かに、自分はこの家のぬしとなつても、千年萬年飽くまでこの家を離れるものかと云ふ念力を込めた。
『あなたにかかつちやア、とても誰れだツて叶ひません』と云ふ笑ひになつた。そして『あなたがたの身の上は今後も決しておろそかには致しません』と、中島が云つたツけ。
　そして一月の十六日には最後の相談にまた田口が呼ばれたが、豆腐屋の出しや張つたあげ足を取つて、
『僕はまだ三百代言は勿論、辯護士をも賴んだおぼえはありません』と怒り出したので、おせいは
『まア、まア』と仲を取つて、『斯うなつちやア、ただわたしの身の上だけを賴んで下さいよ』と云つた。そして田口もおだやかに歸つた。

そしてその翌日には、お兼も田口の代理で裁判所へ來て、印形を押す時に、『あなた、これで押してもあとで困るやうなことは起りませんか』と念を押した。こちらは皆がゐるところだから、そんなことを云ふだけでも感情を害しはしないかと恐れて、

『えい、大丈夫ですから』と、丁度、地ぬしにも答へた通りを以つてした。そして無事に家の書き換へがすんだ。この時、返り證文を直ぐ取つて置く必要があると思つたので、おせいはおほ急ぎで自分が筆を執り、中島と豆腐屋との云ふ通りにしたためたが、お兼には――また何か反對するだらうと思つて――面倒だから見せなかつた。

『買受家屋返書　右者大正六年一月十七日貴殿より買受けたる家屋の代金千貳百圓を大正六年一月十七日より向ふ參拾ケ月迄に支拂濟相成候節は右の家屋を御返上可致候　依て契約如件』として、中島太郎吉印、幸田せい殿とある。

うちへ歸つてから、おせいはこれを今度はよく讀んで見たのだが、矢ツ張り、扶養の件は這入つてゐないのであつた。今更らまた書き直さうと云ひ出すのも、折角をさまつたことにまた物云ひをつけることになつて穩やかではないと見た。それに、『右者』とあつてもどこの家とは書き出してないが、これもお互ひにはどうせ分つてることである。また、この値段を千貳百圓としたのは、たとへ形式上の賣買にとどまつてる書き入れに過ぎないとしても、あんまり安過ぎるが、これを兎に角毎月の營業利益から拂つて行くわけで――ここには自分は前の取り消された契約の二十圓づつと云ふのを、まだ、これからの月額であると思ひ込んで――向ふ參拾ケ月とは殆ど三年間のことだから、その支拂ひずみには十分のゆとりがあると見て、今度は心配よりも寧ろ樂しみになつた。

そして皆がうツて變つてよくして吳れるので、自分も尋常なゑがほを見せるやうになつて、時々見まわりに來る豆腐屋さんまでが自分にはいやなやつではなくなつた。そして殊に、この年うへのものにいたづらにでも多少の氣があつたのかと思ひ出すと、どうせ承知なんかはするつもりがないにしても、あのあたまの毛の薄い生意氣な男が私かに自分の心に親しみをも與へる。

『奥さん、もう安心ですから、氣違ひや幽靈じみた眞似はおよしなさい』と、渠は冗談をも云つた。

『…………………』おせいはてツきり自分がおぢイさんの話を八疊の客間でした時のこともいまだにこたへてゐるのだと思へた。

ながねんの苦勞を先づこれで一段落と思つたので、おせいは皆の勸めに從つて、——自分はまだ實際に氣が進まなかつたが——先生より貰つた櫻陰女史と云ふ名を以つて、易の赤看板を出した。櫻は櫻川町から取り、陰はさくらのかげで女にはふさはしい名だと云ふのであつた。

『早速、見て貰ひたい』と、中島さんや大川さんが賴んだけれども、

『身うちも同樣の人にはこツちも慾や氣まぐれが出て當らないものだ』と云ふ先生の說を受けついで、斷わつてしまつた。そして看板を出してから三日目に、やツと一名、女の客が來たので、そんな時には使つてもいいことになつた應接室で見てやつた。すると、それが不確かさうな顏をしながらだが、おぼし召しを十錢包んで行つた。それでもこの初めての收入が嬉しかつたので、皆に見せて自慢した。そして政直をも喜ばせる爲めにそのお小使ひにしてやつた。

然し、おせいが今こんなことをしたツて詰らないと思ひ返したのは、意外にも、中島の女房子どもが皆で入り込んで來た爲めである。

『そんな約束ぢやアなかつたんですが、ね』と、初めはこちらが主人がほをして不平を云つても見たが、割り合ひに小さくなつてるので許して置いた。すると、段々に向ふが却つてはばを利かすやうになつた。そして中島の女房お浪が最初に衝突したのは、大川と燒き持ちからの爲めであつた。それに、また、大川が少しも帳面をつけてゐなかつたことが分つた。這入つたおかねをただ締まりなく出してゐたので、月の末になつて、勘定が何が何やら滅茶々々で。あとから、あとから、方々の書き附けが追ツかけて來た。

『これぢやア、とても、あなたにまかせちやア置けません』と、中島もおこつてしまつた。そして大川はこちらも私か

には望んでた通り追ひ出されてしまつた。

『あなたはどうせお勝手や帳面の方はできないんですから』とまでぶしつけに云ふやうになつてた者が、却つてこんなありさまであつたのだ。それにしても、こちらは今更らまた中島の考へが分らなくなつた。

## 二

『…………………』おせいが氣づいて見ると、うツかりとあの大川のやうな女に營業をまかせて安心してゐたのは、中島としても無謀であつたではないか？　今月この家として借金の方へ入れるぶんは初めてのぶんだが、それが出なかつたのである。これだけ客がゐて、そんなことでは、大川がきツとちよろまかしてしまつたに相違ない。ところが、それはそれとしても、これからは大川の代りにお浪さんを立てようとしてゐるのだ。

お浪は大川でないとしても、また、その亭主や豆腐屋とぐるになつて、營業の利益があつても無いとやうにばかりこちらへ報告してゐては、渠等が得をするばかりで、こちらはいつまで立つてもこの家を買ひ戻すわけにならないのである。これはどうしても自分がかねの出入りを握つて爲なければはツきりしないと云ふことが分つたので、中島に向つて、おせいはまた衝突の覺悟をきめて、

『これからはわたしがもと／＼通り帳場に坐わりますから』と申し出た。『お浪さんだツて、矢ツ張り、大川さんと同樣にまだ不慣れでしようから、ね。』

『では、わたくしのかかアはあなたの女中になるのですか？』

『そんなわけぢやア――』おせいは意外なことを云はれて、ちよツとまご付いた。が、もう、云ひ出した以上はと思つて、『然し、わたしが會計をしませんと、ね、あなたがたに返して行く借金のらちが明かないぢやアございませんか？』

『借金はあなたの方から返していただけばいいので――この家はただあなたと政直さんとを養つてあげるのが責任で

す。』

『えッ！』かの女は茶の間の火鉢のふちへ來て、しやがんで火に兩手をかざしてゐたのだが、びツくりした拍子に腰を落して、かた手を疊へ突いてしまつた。そして日ごろ、自分の心のうちにばかり無理にも押さへてゐた最後の疑ひといきどほりとを一ときにおもてへ出して、『ぢやア、あなたはこの家を奪ひ取つたつもりですか？』

『いや、奪ひ取つたのぢやアございません。買ひ受けたわけです。』

『どうしてです？』

『どうしてツて――』

『隨分失敬ぢやアありませんか』と、こちらは向ふの云ひぶんなんかを聽いてるひまがなかつた。自分は向ふに養つて貰はないでも、自分が家を自由にしてゐさへすれば勝手に立つて行けること。そしてその家を決して本當に賣り渡したのではない、二葉會社の競賣を免れる爲め、お互ひの便宜上、假りに讓り渡した形にしたのであること。若し本當に賣るとすれば、そんな安い金額ではない、手を入れる前のかたちにおいても、おぢイさんのゐた時から、千五六百圓の價うちがあつたこと。若しまた、たとへ家は向ふの物になつてるとして見たところが、この營業の權利はこちらが持つてゐるのであるから、さう向ふの勝手にはならないこと。乃ち、家を取つたと思つてるのも間違ひであるのに、そのうへにも間違つて營業をも向ふが自由にしてゐては、こちらをしてどこから家を買ひ戻すかねを出させようとするのかと云ふこと、などをつづけざまに責め立てて見た。

　そのうちで一番あとの件に自分の異議がぶつかつた時には、自分ながら、これまでさんざん心配し、疑ひとほして來たことの根本問題であるのが分つて、自分がこれをうツかりと、半ばは氣が付きながらも、おろそかに附してゐたことを一ときに目がさめたやうに後悔した。が、もう、おそかつた。

『わたくしの方では正當な手つづきを踏んでやつたことですから』と、中島は澄まし込んでゐた、『それが御不服なら、

裁判所へなりどこへなり出していただきましよう。』

『あなたは今更らそんな水くさいことを！』おせいは呆れたと同時にまた仰天しないではゐられなかつた。『あなたがさうなら、わたしも證文を書き換へて貰ひます。證文が間違つてるんですから！』

『もう、そんなことはあのかねを出して呉れた熊本に對してもできません。』

『そんなことがありますか？』おせいは悔しさの餘り、からだぢうが顫えてゐたのをまぎらすつもりで、火鉢のうへにたぎつてる自分がもとから使つてた鐵瓶を手に取るが早いか、これをこの部屋の眞ン中へ投げ付けた。ゆげをみなぎらせて、ころがつた鐵瓶の湯が一面に疊のうへへ流れた。

『奥さん、そんなことを云ふと決してあなたがたのお爲めになりません。』

『爲めも何もあるもんですか？』おせいは殺すなら殺せと云はないばかりに中島をにらみ付けて、『お前らが勝手にぞろ〳〵と子どもまでつれて這入つて來やアがつて、こツちを養つてやるツて、馬鹿々々しい！　主客が顚倒してゐます！もう分つてる、大川を出したから、今度はわたし達を追ひ出さうとするんだ！』

『そんなことアありません！』

『いいや、すツかり分つてしまつた！　お前らは泥棒だ！　家泥棒だ！』かの女はまた束髪を亂だす爲めに兩手をあたまへ上げ、立ちあがるが早いか、裾を直さないで茶の間を玄關の障子のところへ出て、直ぐばた〳〵とはしご段をあがつた。そして例の大學生を初め、二階の部屋々々を――客の留守なところもあつたが――のぞきつつ、大きな聲で、『中島らはとう〳〵わたし達を追ひ出すんです！　この家を乘ツ取つたんです！　わたし達は餓ゑて死ぬばかりです！　これから巡査に訴へて來ますから』と布れまわつた。

が、どいつもこいつも薄情なのだらう、平生はこちらに向つておじようずを云つてながら、こんな危急の場合を――ただきよろりとしてふり向いたばかりで――一人だツて何とか云つて呉れるものもなかつた。それにも亦癇癪を起して

いそいで二階を下り、玄關を飛び出さうとした時に、水道事務所へ勤めてゐるお客が二階を飛び下りて來て、

『奥さん、まア、お待ちなさい。先づ、わたくしでいいことなら伺ひましようから』と云つた。

『泥棒がゐるんです、うちに泥棒が』と答へながら、おせいはそれをしほに引き返した。そして再び玄關をあがつてその客を自分の部屋へ來て貰はうとして先きに立ちかけると、茶の間からお浪の聲で、こちらへ聽えよがしに、

『こッちがかねを出して買つてしまつた家を、冗談ぢやアない、自分で自由にしたいなんて』と云ふのが聽えた。

『お前なんかの知つたことぢやアありません！』こちらは廊下に添つた障子を明け、顔をその方へ出してお浪をにらみ付けながら、『かねなんかこッちが出してこそゐれ、まだ一文だッて取りませんから、ね、家は買つたんぢやアありませんよ！』

そのわけをまた詳しくこちらの部屋で語つて聽かせたら、お客さんは中島の方へはこッそりと、わざ〳〵公番へ行つで來て呉れた。が、交番でも、もう知つてゐて、

『あすこの事情は裁判へ出てもその結果はあらかじめ分らない、とても警察で取り扱ふ事件ではない』と云つたさうだ。

こちらのうッかりしてゐた落ち度からとは云ひながら、斯う失敗してしまつた悔しさを辛抱してゐるばかりでも大抵の骨折りではなかつた。親子二名がただ無方針にここを飛び出しても仕かたがないので、たべてゐることだけは保證されてゐるのをせめてものたよりに、まるで隱居のやうにされて二疊の部屋にばかり立て籠つてゐることになつた。が、このたださへ不眠性になつてる自分の目もからだもます〳〵自分の意志には從はなくなつてしまつた。

然し、この商賣は大工なんかがただ几帳面に物を切りはめて行くやうなものではないから、今に見ろ、あの何も知らない中島やお浪が手こずつてしまつて、さじを投げ出す時が來よう。こちらはそれを早く意地づくで見てやりたかつた。

すると、果して一つ面白いことが起つた。と云ふのは、あの支那人の目かけだが、それが一ヶ月以上の宿料とたびたびの立てかへ金とをうッちやらかして置いて、どこかへ喰ひ逃げをしてしまつた。そしてあとへ殘して置いた物とては

行李一つしかないのだが、その中には月經の血がついて固まつた綿と切れだけが這入つてゐたと云ふ。

『だから、云はないことぢやアなかつたんだよ』と、おせいは政直を相ひ手に多少氣持ちのいい不平を漏らした。あの女は來た初めからかね拂ひが少しあやしかつた。それを大川のゐる時にも一度注意してやつたのだが、大川は自分も人にくッ付いたりしてゐたところから、その同病を憐れみ合つたとでも云ふのか、すッかり信用してゐた。そして田口を最後に呼んだ時、菓がこちらの手でむいて出した林檎を、意地惡くも喰べないで、

『お前は手もきたないだらうから』と云つたのを、大川は

『ぢやア、丁度、それにいい人がゐます、わ』と受けて、あの年の若い目かけを代理に出したりした。

けれども、おせいの考へでは、若し自分なら、なくなつたおちイさんからもそそはつてたことゞもあるし、客の方で少しでもかね拂ひがあやしくなると、直ぐ立てかへなどをさし控へるばかりではない。また、その客の出たあとの荷物や行李を、時々、手をつけたとは分らないやうに調べて見るのである。

今や、然し、毎日のやうにこちらへ癖くせをつけ出したものらは、その支那人の目かけが喰ひ逃げをしたのまでこちらのせいにした。

いろんなことを毎日ふたりでぺちや〱しやべり合つてたのだから、きッと、あなたが知慧を附けたのだらう』ッて

――

『飛んでもないことを』と、おせいは心で怒つたが、おもてでは、自分か自分の子かが毆ぐられても詰らないからと思つて、ただ長いものには卷かれてゐた。

が、その事件の爲めに、たださへ虐待されてた二人が一層困らせられて、袋どころへこちらから御はんをたべさせて貰ひに行かなければ、いつまでもその用意をして貰へないのだ。客にでさへまる三日間食事を出さなければ訴へられても仕かたがない規則だのに、うちわのものに喰べさせないとは以つてのほかであつた。たま〱たべに行つても、政直

までがこちらと一緒に悔しさとゐさふらふのやうに氣の引ける爲めとで、物が喉へ這入りかねた。

しまひには臺どころへも氣が引けて行けなくなつたので、止むを得ず、毎日のやうに、こツそり、政直においもを買つて來させて、それを二人でたべてゐたけれども、さうなると、また政直は『御はんをたべたい、御はんをお呉れよ』と云つて駄々をこねるのである。可哀さうでもあり、たまらなくもなつて、おせいは渠をも田口のところへ頼むことにした。そして自分も決心をして、先づ自分の所有物として賣り拂へるものは古道具屋や古着屋を呼んで賣り拂つた。

それから、自分の身に必要な物だけをまとめて、いよ／＼この家を易學上のをんな友達のもとへ出るとなつた時、現在臺どころで使つてる皿小鉢を遠慮なく二つ三つづつうら庭へ持ち出して、おぢイさんの時代から並べてある植木鉢の臺石(たいし)にぶつけて、氣持ちよく幾たびにもうち毀わした。そして皆に向つて、

『わたしは、もう死んだも同様ですから、ね、幽靈になつても、きツと、この家は取り返して見せます』と叫んだ。

（今一回題を改めて次號に）



# 笑ひ

菊池 寛

大御所秀忠公は、寛永九年正月二十四日亥の刻江戸城西丸の正寝にて、大漸した。わづか四五日の患ひであつた。病革まると、三代の君家光公を病床に召されて、土居大炊頭利勝、藤堂佐渡守高虎を侍座せしめて、何くれとなく遺誡を垂れた。會津正宗の脇差を、お片身として、家光公に譲られた。此脇差は、神君東照宮關ヶ原の陣に、お差料とせられたもので、徳川家に取りては、二つとなき重寶であつた。

御發喪については、重臣の間に、議論があつた。今天下泰平とは云へ、元和の御世を去ること遠くにない、大御所の俄な御他界が、如何なる變事の緒になるやも測りがたい、暫らく喪を秘して、相當のお手當をしてから、喪を發しても遲くはないと、井伊掃部頭などは、熱心に主張した。それに同ずるものが多かつた。が、闊達な家光公は、仔細なしとばかり使番を飛ばして、諸大名の家々に、急な薨去を觸れしめたのである。

遺骸は、親近の小納頭小姓達の手で、湯灌があつて、「お肌付」と云ふお棺の中に收められた。同じ正月の二十七日三縁山増上寺へ移されるまで、薨去になつたと同じき表御休息の間に、安置せられた。親近の士や特志な諸大名達のお棺前のお通夜が、毎夜續いた。

二十六日の晩の事である。城内のお通夜は、今日が名殘であると云ふので、前夜よりも

人數が倍にもなつて居た。

お小姓では、秋元但馬守泰朝の組下のものが、今宵はお通夜の順番に當つて居たのである。十五になる光之丞も、お棺に向つて左側の襖近く席末に列つて居た。お小姓と云つても、今年の春から將軍家のお傍に召出されたので、西丸に居られた大御所には、まだお目見得さへ濟んで居なかつた。從つて、大御所のお顔も、御能上覽の折に、遠がけに見たばかりで、評判の大きいお耳が遠目にも大きく見えたのを、覺えて居る位である。で大御所が死なれたことを、特別に悲しいとも何とも思はなかつた。たゞかうして、白綾子に掩はれたお棺の前に、皎々と燃えさかつて居る銀燭の火影や、その火影に照された諸大名からの供御の數多い櫁や、それを前にして默々と正座して居る伊達陸奥守政宗や、土居大炊頭利勝や、立茂將監宗茂や、松平新太郎光政や、淺野但馬守長晟など聞えた大名達のいかめしい物々しい顔を見て居ると、なんとなく神々しい心持がする丈である。

彼は神妙に申の刻から、坐り續けて居た。仲よしの天野左吉郎が、遲れて來て肩を並べて、横に坐つて居るのだが、ヒソ／＼話一つしかけなかつた。默つたまゝ神妙に坐り續けて居た。

が、半刻も坐つて居る中に、段々一座のいかめしい悲壯な容子にも、馴れてしまつた。

初は、死なれた大御所様のことや、上樣でも大御所樣でも、萬人一樣に免れ難い宿命である死と云ふことや、それに連れて長久手で忠死をした自分のお祖父樣の新在孫兵衛宗房のことや、つひ此間死んだお祖母樣のことなどを、取り止めもなく考へて居たのであるが、そんな陰氣な考はいつの間にか、消えてしまつて、大御所の薨去で當分の裡御法度になつた殺生が、何時になつたら許されて、好きな追鳥狩や鷹狩が出來るやうになるかしらなどゝ考へて居た。白山の鷄聲ケ窪の櫟林の中に、いつでも山鳥が澤山居ることを、ぼんやりと思ひ出したりした。さうすると、隣に坐つて居る、左吉郎がつひ此間手に入れた鷹の働き振が吹張通であつたかどうかを、急に訊いて見たくなつた。で左吉郎の袖を引いて、そつと訊かうかと思つたが、左吉郎が案外眞面目に濟まして居るので、つひ話しかけることが出來なかつた。

お廊下に置いてあるお土圭が、九つを打つてから、いかめしく構へて居た人達も、何時の間にか居ずまゐを少しづゝ崩して居た。光之丞の二間ばかり横に居る加藤肥後守忠廣などは――父親が餘り偉すぎて父子の段が違ひすぎた爲に、お城内でも時々後指を指されることを光之丞も噂に聞いて居たが――正座して居る膝を、宵からモジ〳〵させて居たが今では膝を横に崩してしまつて、倒れない爲に、支へに右の手を傍の火桶にもたせて居る。もつとひどいのは、伊達政宗である。諸大名の前列にありながら、ドツカリと人も無げに、胡座を組んで居る。が、此人は兼々禪宗に歸依して居る爲に、當人は座禪のつもりで居るのかも知れなかつた。一つしか開いてない眼をも、ピタリと閉ぢてしまつて、身動きもせず坐つて居るらしい。お送葬萬端の、奉行を仰せ付かつて居る松平右衛門太夫正綱も、宵の謹嚴一絲も亂れなかつた容子から見ると、よつぽど形が崩れて居る。が、一座を見渡したところ、遉に政宗にならつて、胡坐を組む者は、一人もない。が、皆正座の形を崩づさない範圍で、足を寛げやうと出來る丈、工夫を凝らして居るのである。

九つのお土圭が鳴るのを合圖にお茶とお菓子とがお坊主に依つて人々の間に配られた。宵からの坐り續けに疲れて居た人々は、殆ど飢えて居たやうにお茶を喫つた。それを機會に何處からともなく雜談の緒が、切られた。それが一座中に擴がつて行つた。

大抵は、殉死をした森川出羽守の話で、持ち切つて居た。

「遺書が、又一段と見上げたものぢや。辭世の歌か詩を殘したいが、左樣なことに手間取つて、お供に遲れてはならぬゆえ、え殘さぬと云ふ遺言が、十首百首の辭世にも勝つて奥ゆかしい」と、光之丞の直ぐ前に坐つて居る旗本の松平五郎が隣に居る酒井長門守に話しかけた。長門守は、大きく肯きながら、

「羽州殿はたしか、御生前には、久しく御勘氣であつた筈ぢやが」と、訊き返した。

さう訊かれると、松平五郎は、會心の問に接したと云はぬばかりに、

「それぢや。七年と云ふ長い間の勘氣であつたのぢやが、御危篤になつてから、我々が最後のお目見得を申したときに

大御所様お自ら「森川は」と云ふお言葉があつたのぢや」

「なるほど」と、長門守は感に堪へたやうに云つた。

「何樣、お小さい頃からのお遊び相手で、ふとした事から、お氣に觸れたもの丶、始終お心にかけて居られたのぢや。それを洩れ聞いた森川は、即座に殉死の心を決めたと見えるのぢや」と、松平五郎は、相手の長門守ばかりでなく、周圍の者にも、それとなく聞かせるやうに話した。四五人の者が、それに應じて、低い然しながら心の籠つた感嘆の聲を上げた。

光之丞は、さうした話を聞いても、餘り感動はしなかつた。それよりも、一座の空氣が寛大になつて、雜談が出來るやうになつたのが嬉しかつた。

「左吉郎殿！」と、そつと友達の方を、呼んで見た。光之丞同樣退屈し切つて居た左吉郎は、渡りに舟と云つたやうにそつと座をすべつて、光之丞の傍へ、ゐざり寄つて來た。

「あれから、お鷹に行つた？」

「うむ！」と、左吉郎は大きく肯いた。

「何う？今度の鳥は。鋭い？」前よりも、もつと低い聲で云つた。お通夜の席で、狩の話などしてはならないと思つたからである。

左吉郎は、得意さうに大きく肯いた。

「三羽ほど、鶴にかけて見た。一羽は取り逃したが、二羽は見事に仕とめた」

「ほゝう！」と、光之丞は危く大きい感嘆の聲を出さうとした。どんな鋭い隼でも、鶴にはしば／＼仕損じ勝であるからである。

「御禁止が開けたら、お供しよう」と、左吉郎は、光之丞の耳許近くさゝやいた。

一座が、再び靜になつたので、二人ともその儘口をつぐんだ。

お坊主に依つて、其處此處の燭臺のお蠟が剝ぎかへられた。夜がだん／＼更けて行くことが、お疊の冷える事に依つてゞも分つた。火桶は、二人に一つ宛位の割に出されて居るのだが、量の少い埋火は六十疊に近い大廣間の空氣を、温めるのには足りなかつた。早春の夜の空氣は、可なり冷めたかつた。

松平右衛門太夫が、氣を利かして、お坊主が、上品にホンの僅かしか、炭をつがないのを、「ずんとつげ。十二分についで廻はれ。寒氣が身に滲みて參つたほどに」と、注意したので、お坊主達は初て氣が付いたやうに、ありとある火桶に、炭をうづ高くついで廻つた。四半刻經つか經たぬ裡に、どの火桶もどの火桶も、桐の胴が焦げるはかりに、かつ／＼と炭がをこつて來た。

かうして、寒氣はやつと防いだものゝ、お通夜の席には、寒氣よりも禁物のものが、その代りに皆を襲ひ始めて居た。それは云ふまでもなく睡魔である。宵からの二刻三刻は、皆緊張した心で座り續けた。が、九つを過ぎてからは、さうした緊張が、いつの間にかだらけてしまつた。その上に肉體上の疲勞に搗てゝ加へて、急に温くなつた部屋の空氣が皆の心にも身體にも、ものうい倦怠を釀し始めて居た。が、それでも今宵初て、お通夜の順番に當つた秋元但馬守の組下の小姓衆などは、大事なお通夜だと云ふので、晝の間自宅で充分に眠つて來て居る。又、お名殘りと云ふので、殊勝にお通夜を志願した伊達政宗や松平光政や淺野長晟と云つた外樣大名はやつぱり充分に準備があると見えて、割合ハツキリとした容子をして居る。一番參つて居るのは、土居利勝や松平正綱や、勘定頭の伊丹播摩守と云つた連中である。大御所が薨去になつて以來、緊急な政務の打合せや、御葬送萬端の事務で、夜も日もなく働き續けて居る。身體がグタ／＼になつて居る。松平正綱などは、御用繁多で二十四日以來、邸へは一度も歸らないほどである。が、今宵は御遺骸に取つては、江戸城におはす最後の夜と云ふので、最後の御奉公として、お通夜の席に列つて居るのである。が、眠いことは、追ゝ眠いらしい。伊丹播磨守などは、その眠氣を拂はうとして、先刻から機會のある毎に、御靈前に進んで居

る。まだ充分盡きて居ない蠟燭を、つぎ代へたりお燒香をしたり、何かと御靈前の世話を燒いて居る。が、かうした人々にも劣らず眠いのは、一番前列に並んで居る僧侶達かも知れなかつた。餘の僧侶達よりも、一二寸高く大きい頭顱を聳て丶居るのは、天海大僧正である。その右に坐つて居る、ずんぐりとした肩巾の廣い坊主は、金地院宗傳であつた。その左に坐つて居るのは、增上寺の良阿道山の二僧であつた。半刻每に讀經が始まるのである。が、背から見ると、その聲が半刻每に、眠むさうなものうい聲に變つて居る。時々交代はして居るもの丶、二十四日以來のお勤で、どれもこれも綿のやうに疲れて居るのである。

丑の刻に、又觀無量壽經が上げられた。九つ頃までは、御經が讀まれることが、皆の心持を幾何か引立て丶居たのであるが、皆の倦怠と疲勞とが加はるに連れて、逆にそれは子守歌のやうに皆の眠氣を誘ふのであつた。單調な變化のない催眠的（ドロウジイ）な音聲を聞いて居ると、皆はつひ足元から引きづり込まれるやうに、トロ〳〵としかかつたりした。が、大事なお通夜であることを思ふと、ハツとして急に居ずまゐを正したが、頭中に擴がつて居る砂を嚙むやうな眠むたさは、何うにも拂ひ除けることは出來なかつた。

讀經の聲が止むで、又元の靜けさにかへると、一座は前よりも一際烈しい睡魔に襲はれかけて居た。默つて居ては、とても防げないと思つたのだらう、坐中何處からともなく、又雜談の緖が切られて居た。

光之丞は少しも睡むたくなかつた。母親が、今日の勤仕を心配して、昨夜から早く床に就かされた。今朝も朝食を濟ませると、直ぐ又寢床の中へ追ひやられた。その上、家を出る時に、大事なお通夜の席で、うた丶寢するやうな粗忽があつてはと云ふので、出入りのお醫師に賴んで氣付藥を一服飮んで來て居る。從つて子の刻が來ても丑の刻が來ても、少しも眠むたくはない。むしろ、かうした諸大名達と列席して居るので、何となく興奮して眼が冴えて行く位である。たゞ默つて坐り續けて居るのが、如何にも苦痛な丈である。一座に雜談が始まつたので光之丞も相手欲しやで、隣に坐つて居る左吉郎の方を見た。左吉郎も、常から大きい二つの眼をクル〳〵と刮いて居る。

「眠うはない？」光之丞は小聲で訊いた。

「氣もない」と、左吉郎はハッキリとした聲で答へた。

「數多い一座の衆ぢや、何人おぢやるぢやらう」と、光之丞は話をしかけた。

「百人も、いや百五十人もおぢやるぢやらう。大名衆も二十人位は見える。あの白髮の背の高い人は、誰ぢやろ」と、左吉郎は、眼で土居大炊頭の直ぐ後に坐つて居る老人を指し示した。

「立花宗茂ぢやよ。筑後柳河の」と、光之丞は答へた。

「碧蹄館で手いたい戰さした御仁ぢやのう」━と、左吉郎は一寸感激した眼付をした。二人は又默つた。その中に雜談の聲も亦、一齊に止んでしまつて居た。もう雜談などで紛らせないほどの眠むたさが、皆の心を襲つて居るらしかつた。

　ふと見ると、坐禪をして居る筈の伊達政宗の頭が、妙な動き方を始めて居る。頭が上下に三四寸づゝ動いたかと思ふと、ドッと前のめりにならうとすると、ハッと驚いたやうに直立する。さうした運動が、五六回繰り返されて、前へのめり方がよつぽど烈しくなると、ハッと立直つて閉さして居た一方の眼を開けて不思議さうに、周圍を見廻してからまた靜に目をつぶる。が、暫くすると又頭を妙に、前後に動かし始める。が、政宗のかうした妙な動き方に對して、周圍に坐つて居る人々は殆んど無關心であるらしい。直ぐ左に坐つて居る松平正綱も、頭をうつむけたまゝぢつとして居る。たゞ政宗のそれのやうに、頭が上下に動かない丈である。

　光之丞は、政宗の眠りこけて居るのが、如何にも可笑しかつた。子供の時から、幾度政宗の勇名を聞かされたか分らなかつた。此正月初て本丸へ登城して、御廊下で正宗を遠目に見たときも、鎭西八郎爲朝や朝日奈三郎義秀の武者繪を見たやうに、勇ましいやうな頼もしいやうな心持がした。一つしかない眼が、爛々と光つて居るやうに思つた。その勇ましいいかめしい政宗が、子供か何かのやうにタワイもなく眠りこけてゐる。光之丞は、それを左吉郎に教へてやりたくなつた。

「あれ、伊達殿を見られい！」と、左吉郎の袴の腰板をそつと突きながら云つた。

「うむ！　知つて居る。伊達殿ばかりではない。大炊頭殿も、鳥居殿も、板倉殿も先刻からやつておぢやる」と、左吉郎はニコリと顔だけで笑ひながら云つた。さう云はれて光之丞も、左吉郎に名指された人々を、一通見廻して見た。土居大炊頭も政宗ほど、烈しくはないが、うつら〳〵と頭を動かして居る。板倉内膳正重昌も、ともすれば前へ落ちかゝる上體を、時々ハッとして取り止めて居る。そんな人達を見て居る中に、光之丞は眠りかけて居る人々を、物色することに興味を感じ始めた。彼は、左吉郎に負けないやうに、一座の中で眠むさうな人々を、眼で探し始めた。

「見られい！　小笠原左兵衛佐殿もぢや」と、彼はやつと新しいのを一人見付けたので、左吉郎に報告した。

「うむ！　その後に居る片桐殿もぢや」と、左吉郎も新しいのを見付けて居た。

二人は、いつも城中で、いかめしい物々しい顔をして居る諸大名や役人達が、タワイもなく眠りこけるのを見るのが面白くて堪まらなかつた。

二人の興味を唆るやうに、此處にも彼處にも新しい催眠者が出來て居た。二人は、皆が眠りこけてしまつて、自分達二人だけが、醒めて居たら、どんなに愉快だらうかと思つたりした。

「あれ見られい！　加藤肥州殿を」と、左吉郎は何か大發見をでもしたやうに、光之丞の袖を引きながら、教へて呉れた。いかにも、加藤肥後守は、他の人達と比べると、もう正體がないと云つてもよいほど、だらしがなかつた。身體の右に置かれて居る火桶に、右の肱を突きながら、上體をスッカリ火桶の上にもたせて居るのである。顔は十分見えないが、蠟燭に照されて居る横顔から察すると眼は、もうぴつたりと閉されたまゝ動いて居ない事は、確だつた。そして、頭が左右に動揺しながら、段々下へ下がつて行く。政宗のそれよりも、一段と下がり方が、ひどい。グッと下がつて、火桶にさしてある火箸に、額が當りさうになる。が、其處まで行くと、迫に火桶の火氣が夢現にもあつく感ずるのだらう、頭がまたふら〳〵と上へ上つて行くのである。

脊ふくれの元來間の抜けたやうな顔が、殊更光之丞達の興味をそゝつた。二人は、まんぢりともせず、ねむりこけて居る加藤肥後守を見詰めて居た。

「あゝ危い！　あゝ危い！　もう少しだ」と、左吉郎は心配さうに、同時に何かを期待して居るやうな聲で云つた。光之丞が、氣が付いて見ると、如何にも肥後守殿の頭が、グツと下がつてしまつて、今にも火箸に突き當りさうになつて居る。

「もう少々！」さう云ひながら、左吉郎はクスリと笑つて、光之丞の腰板をつゝいた。さうされると、光之丞も可笑しさが、口までこみ上げて來たが、大切な場所だと思つたので、グツト噛みしめた。が、今にも額が火箸に當りはしないかと、一心に加藤肥後守の方から眼を放さなかつた。頭は、だん／＼下がつて、火箸まで一二分と云ふ所まで行つたが其處で暫らくたゆたつて、又ふら／＼と上がつて行つた。左吉郎と光之丞は、お互に顏を見合せて、ふつと吹き出さうとしたのを、やつと堪へた。

が、見て居ると、加藤肥後守の頭は、又ふら／＼と、タワイもなく下がつて行つた。横顔の筋肉がだらけ切つて、身體全體が崩れさうになつて居る。

「今度は危い！」と、左吉郎がまた小聲で云つた。光之丞も、今度こそ火箸に額を、ぶつつけるに違ないと思つた。それを期待するやうな好奇心と、氣の毒だと云つたやうな心持が交じつて居た。が、全體としては可笑しさが、一番勝つて居た。宵から退屈し切つて居た心が、やつとなぐさみを見付けたやうに、大事なお通夜の席に居ることなどは、つひ忘れてしまつて、今か／＼と云つたやうに、その方を見詰めて居た。

「あゝもう少々、一分ばかり」と、常から剽輕な所のある左吉郎は、肥後守の頭の動くのに連れて、そんな註釋のやうな事を云つて居た。が、二人の少年の期待を裏切つて、加藤肥後守の額はなか／＼火箸に當らなかつた。

「やつぱり正氣が少しは殘つて居るのだ。お場所がお場所だから」と、光之丞は心の中で、そんな事を考へた。で、其

の方を見て居るのにも飽いたので、眼を轉じて旗本の人達が集つて居る方を、眺め廻はさうとしたが、丁度その時であつた。チャリンと金屬と金屬の觸れ合ふかすかな音がしたと思ふと、左吉郎がクスクスと笑ひながら自分の腰を、頻りにつゝいて居るのを感じた。

見ると、果して加藤肥後守殿は、到頭最後の所まで行つたらしい。而も、可なり強く打ち突けたと見えて、火箸が倒れた機みに、炭火が二つ三つ火桶の外へ飛んだと見え、必死になつてそれを捻み上げやうとして居る。が、他人に氣付かれないやうに、手早くやらうと思つて居るので、可なり周章て切つて居る。火を捻み上げては、耳を捻んで居る。が耳を捻んだかと思ふと、また火を捻み上げて居る。が、周圍の人は、初からの徑路を知らないので、皆偶然火箸が倒れたのだと思つて居る。眠むさうな眼で、氣の毒さうに見て居る。が、前からの筋道を辿つて居る光之丞と左吉郎とは、それをぢつと見て居るのには、堪へなかつた。左吉郎は、こみ上げて來る可笑しさを、噛み殺さうとして居るのだが、何うにも堪まらないと見え、俯きながら、ク、、、、と烈しい含笑ひを續けて居る。が、剽輕な彼は、自分で笑ふことに苦しめられて居ながら、尙右の手で光之丞の袴の腰をつゝいて居る。光之丞も初はグツト堪へて居たが、光之丞の含笑ひに誘はれると、何うにも辛抱が出來なかつた。必死になつて、右の股を捻ねつて見たが、何うにも辛抱が出來なかつた。彼は、ぷつと吹き出さうとするのを、やつと取止めたが、それが一寸高い含笑となつて外へ洩れるのは、何うとも仕様がなかつた。

丁度此の時に、加藤肥後守と同時に、坐睡から醒めた者がある。それは、お目付の松倉甲斐守であつた。彼は、つひ居睡りしたのを、後悔しながら誰かに見付けられはしなかつたかと思つて、周圍を見廻はした、周圍の大名や旗本達は半醒半睡の有様で、誰一人氣付いたものはないらしかつた。が、彼はその時ふと、クス／＼と云ふ少年の笑ひ聲を耳にした。彼はきつとなつて其方を見た。自分の二間ばかり左に、二人の少年が面を伏せながらクス／＼と笑ひ續けて居るのであつた。彼は、自分の坐睡が笑はれて居るのだと思つた。彼は可なり侮辱されたやうに思つて、暫くは其方を睨

み付けたのである。

＊　＊　＊

三縁山へ御遺骸が送られてから、間もなく、新庄光之丞と天野左吉郎とは、大目付からの御用召を受けた。御用の筋は思ひがけなく、お通夜の席の彼等の行狀に就てのお尋ねであつた。

「其方共は、崇徳院様の御靈前で失笑いたしたと申すものがあるが、屹度左様か」と、大目付の本多豊前守は二人の少年を見すえながら、厳然と訊ねた。

「失笑いたしました。」と、光之丞は素直に手を突いた。

「其方もか」と、豊前守は默まつて居る左吉郎に向つて云つた。

「毛頭覺えムりませぬ」左吉郎は、やゝ顫へながら、さう答へた。豊前守は、

「左様か」と云つたまゝ、それを追求しようとはしなかつた。却つて、再度光之丞に云つた。

「其方は覺えがあるのぢやな。しかと覺えがあるのぢやな」

豊前守の心持が、少年の光之丞にも解らないことはなかつた。が、光之丞は可笑しくて堪らないことがあつたから笑つたので、又笑つた以上それをさう云ふのだと、心の中で思ひ定めたので、

「しかと相違ありませぬ」と、ハツキリと返答した。

＊　＊　＊

翌日、上使が立つて、新庄光之丞に死を賜ふた。罪狀には、次きのやうな文句が書かれて居た。

崇徳院殿様御大漸にて上下謹愼致し居る折柄、御恩顧を蒙ること一方ならざる小姓の身にて、御靈前お通夜の席にて不謹愼の振舞有之候條御時節御場所を辨へさる重々の不屆にて、縛り首にも致すべきの所、祖父新庄孫兵衛以來の勳功を覺召され罪一等を減じ、切腹仰付らるべきもの也。

寛永九年二月七日

かうして、無邪氣な少年の光之丞は、不臣の惡名をさへ負うて、弱年にして殺されてしまつた。が、お通夜の席で、眠りこけて光之丞を堪らなく可笑しくさせた大名や旗本達は、何のお咎もなかつた。それ丈ではなく、皆口々に、お通夜の席で笑ひこけた不謹愼な少年を非難したことであらう。

――四月十三日――



# 極樂

菊池寛

京師室町姉小路下る染物悉皆商近江屋宗兵衛の老母おかんは、文化二年二月廿三日、六十七才を一期として、卒中の氣味で、突然物故した。穏やかな安らかな往生であつた。配偶(つれあひ)の先代宗兵衛に死別れてから、おかんは一日も早く、往生の本懐を、遂ぐる日を待つて居たと云つてもよかつた。先祖代々からの堅い門徒で、往生の一義に於ては、若い時からしつかりとした安心を懐いて居た。殊に、配偶に別れてからは、日も夜も足りないやうにお西樣へお參りして居たから、その點では、家内の人達に遉はと感嘆させたほど、立派な大往生であつた。

信仰に凝り固まつた老人の常として、よく嫁いぢめなどをして、若い人達から、早く死ねよかしに、扱はれるものだが、おかんはその點でも、立派であつた。一家の者は、此の人のよい、思ひやりの深い親切な、それで居て快活な老婦人が、半年でも一年でも、生き延びて呉れるやうにと、祈らないものはなかつた。從つて、おかんが死際に、耳にした一家の人々の愁嘆の聲に、微塵虚僞や作爲の分子は、交じつて居ない譯だつた。

おかんは、淨土に對する確かな希望を懐いて、一家の心からの嘆きの裡に、安らかな往生を遂げたのである。萬人の免れない臨終の苦悶をさへ、彼女は十分味はずに濟んだ。死に方としては、此の上の死に方はなかつた。死んで行くおかん自身でさへ、段々消えて行

く狹霧のやうな取止めもない意識の中で、自分の往生の安らかさを、それとなく感じた位である。

宗兵衛の長女の今年十一になるお俊の――おかんは、彼女に取つては初孫であつたお俊を、どんなに心から愛して居たか分らなかつた――絶え間もない啼り泣の聲が、初は死にかけて居るおかんの胸をも、物悲しく掻き擾さずには居なかつた。が、おかんの意識が段々薄れて來るに從つて、最愛の孫女の泣き聲も、少しの實感も引き起さないで、靈を氷い眠にさそふ韻律的な子守歌か何かのやうにしか、聞えなくなつてしまつて居た。枕元の雜音が、だん／＼遠のくと同時に、それが快い微妙な、小鳥の囀か何かのやうに、意味もない音聲に變つてしまつて居た。その中に、鉦の音が何時とはなく聞えて來た。その鉦の音が、彼女が生涯に聞いた如何なる場合の鉦の音と比べても、一段秀れた微妙なひゞきを持つて居た。御門跡樣が御自身叩かれた鉦の音でも、彼女をかうまでは有難く快くしなかつた。その鉦の音が後の一音は、前の一音よりも少しづゝ低くなつて行つた。感じられないほどの、わづかな差で段々衰へて行つた。それが段々衰へて行つて、いつしか消えてなくなつてしまつたと同時に、おかんの現世に對する意識は、烟のやうに消失してしまつて居た。

× × × × ×

再びほんのりとした意識が、還つて來る迄に幾日經つたか幾月經つたか、それとも幾年經つたか判らなかつた。たゞおかんが氣の付いた時には、其處に夜明とも夕暮とも、晝とも夜とも付かない薄明りが、ぼんやりと感じられた。右を見ても左を見ても、灰色の薄暗が、層々と重つて居た。足下にも汚れた古綿のやうな暗があつた。それを踏んで居るおかんの足が、何かたしかな底に付いて居るのか何うかさへ、彼女には分らなかつた。たゞ行手に丈は、右や左や上下などよりも、もつとあかるい薄暗があつた。ほの／＼とした光明を包んだやうな薄暗があつた。おかんは、左右を顧みないで、たゞ一心に行手を急ぐより外はなかつた。

到頭冥土へ來たこと丈は、ハッキリと意識された。が、極樂へ行く道だらうか、地獄へ行く道だらうかと、おかんは歩き

ながら、疑つて見た。が、さうした疑惑は、ふと足を止めた時などに、閃光のやうに頭を掠めるだけで、彌陀の本願を信じ切つて居るおかんは、此の道が極樂へのたゞ一つの道である事を信じて居た。彼女は、口に「南無阿彌陀佛〳〵」と、繰り返しながら、一心不亂に辿つた。長い〳〵道であつた。それと同じやうに、長い〳〵時であつた。薄暗の中には、夜も晝もなかつた。氣が付かない中に、幾何歩いて居たのか、分らなかつた。氣が付いてからも、幾何歩いたかも知れなかつた。距離で計ることも出來なかつた。時で計ることは尙更出來なかつた。たゞ一生懸命に、長く〳〵歩いたと云ふ記憶だけがあつた。不思議に足も腰も疲れなかつた。現世に生きて居た頃には、お西様へ往復して歸ると家の敷居を跨ぐのにさへ、骨が折れたほどだつた。が、今では不思議に、足も腰も痛くない。

幾何歩いたかも、丸切り見當が立たなくなつてしまつた。たゞぼんやりと、生きて居た頃の時間に引き直せば、十日かそれとも半月も歩いたかも知れないと思つた。不思議に、少しも空腹を感じなかつた。幾何歩いても、足も痛まなければお腹も空かなかつた。從つて、さう云ふ事に依つて、歩いた道程を計る譯にも行かなかつた。たゞ薄暗の中を、前途の薄明を賴りにして、必死に辿るより外には、仕様がなかつた。

何等の區劃もなく無限に續いて居る時と道とを、おかんは必死に懸命に辿り續ける丈であつた。が、どんなに道が長く續いても、勇ましく進むことが出來た。周圍は暗かつた、背後を顧みると累々とした闇が重つて行く。が、前途丈には、ほの〳〵とした光があつた。どんなに、此道が長く續いても、何時かは極樂へ行けるのだ。有難い御說教で、幾度も聞かされた通お淨土へ行けるのだ。配偶（つれあひ）の宗兵衛にも十年振に、顏を合はせることが、出來るのだ。さう思ふと、おかんは新しい力を感じて來て、老の足に力を入れて、懸命に歩き續けるのだつた、闇とも霎とも土とも分らない道の上を。何日經つたかも判らない、いや日で數へるのでなく月で數へても、幾月經つたかも判らない、いやもう一二年も經つて居るのかも知れない。歩きながら、そんな事を考へたほど、おかんは歩き續けた。長い〳〵道だつた。が、おかんは勇氣を失はなかつた。から、根よく歩いて居る中に、何時か極樂へ着くのに違ない。さうした望み丈は、決して失は

なかつた。

おかんのさうした望みは、到頭實現する時が來た。さうなるまで、幾十里歩いたか幾百里歩いたか、それとも幾千里と云ふ長い道程を歩いたか分らなかつた。兎に角、行手のほのぼのした闇が、ほんの僅かづゝ、薄紙を剝ぐやうに、僅かづゝ白み始めて來た。おかんは、さうなるに從つて、尙更足を早めた。老の足の續くかぎり一散に歩き續けた。一歩は一歩づゝ闇が、薄れた。闇の中に、乳白色の光が溢れるやうに遍照するのを感じた。初は不透明であつた光が、だん〳〵透明になつて行くと、それが止め度もなく、明るくなつて行つて、日輪月輪の光を搗き交ぜたよりも、もつと強い光の中におかんは、ふら〳〵と立つて居る自分を見出したのである。眼がくら〳〵して、最初は物の相が、ハツキリとは見えなかつた。が、漸く眼を定めて見渡すと自分の立つて居る足下には、燦爛と輝く金砂と銀砂とが、鴨川石か何かのやうに惜しげもなく撒き散らされて居るのを見た。頭上を見上げると、澄み渡つた大空に金のさゝべりをとつた紫雲が、瓔珞と棚引き渡つて居た。おかんは、到頭お淨土へ來たのだと思ふと、胸の底から嬉しさがこみ上げて來た。

氣が付くと自分の立つて居る所から、半町ばかり向ふに、お西樣の勅使門を十倍にもしたやうな大きさの御門が立つて居た。おかんは、その門が屹度極樂の入口だと思つたので、急いで門の方へ行つて見た。門の扉は八文字に開かれて居た。おかんは、オヅ〳〵とその大きく開かれた御門の中には入つた。御門の中の有樣は、有難い御經の言葉と寸分違つて居なかつた。直ぐ眼前に展がつて居るのは、七寶池の一つに違なかつた。水晶を溶かしたやうな八功德水が、岸を浸して湛へて居る。しかも、美しい水の底には、一面に金砂が敷かれて、降りそゝぐ空の光を照り返して居る。水を切つて、車輪のやうに大きい眞紅や雪白の蓮華が、矗々と生えて居る。水に莅んでは、金銀瑠璃玻璃の樓閣が、巍々として連つて居る。樓閣を廻ぐつては、珊瑚碼瑙などの寶樹が、七重に並んで居る。寶樹の枝から枝へと飛び交ふて居る、色々樣々な諸鳥は、白鵠、孔雀、舍利、加陵頻迦、共命などの鳥であらうと思つた。おかんは極樂の樣を一目見ると、嬉しさに涙が止め度なく流れて來た。極樂に往生し得た身の果報が、嬉しくて堪らなかつた。御門跡樣を初、お寺樣方の

お言葉の眞實が、身にヒシ／＼と感ぜられた。よくも、彌陀如來の本願を頼み奉つたものだと思つた。もし、信心が薄くて、こんな果報を取り逃して、地獄へでも落ちて居たならば、今頃はどんなであつたらうと思ふと、思はず身體が戰き顫ふのを感じた。おかんは、感極つて「南無阿彌陀佛々々々々々」と、幾度も繰返した。その聲に應ずるやうに御姿丈は幾度拜んだかも分らない阿彌陀如來が忽然として、咫尺の間に出現し給ふた。おかんは、御佛に手を取られて夫宗兵衛の坐つて居る蓮の臺(うてな)へと導かれた。おかんは、絶えて久しい夫の姿を見ると、わつ！と嬉し泣きに泣きながら縋り付いた。が、不思議に、宗兵衛は餘り嬉しさうな顔をしなかつた。「お前も來たのか」と云ふやうな表情をしながら坐を滑べつて、おかんの爲に半座を配けて呉れた丈である。

　それでも、おかんは落着くと、夫と死に別れてから後の一部始終を話した。當代の宗兵衛が、家業に精を出す事やら嫁のお文(よん)が自分に親切にして呉れたことやら、孫娘のお俠が可愛くて／＼堪らなかつたことなどを、クド／＼話し續けた。さうした娑婆の話が何日となく續いた。一家の中の話は、幾度も繰り返し話した。知人や親類の事も幾度も話した祇園や京極の變遷なども話した。加陵頻迦が、微妙音に歌つて居る空の下で、おかんは積もる話を、心のまゝにした。宗兵衛も面白さうに聞いて居た。が、幾日／＼も話して居る中には、大抵の話は盡きてしまふた。おかんは、話が絶えてしまふと、初て落着いて、極樂の風物を心から樂しまうとした。何處を見ても燦然たる光明が滿ち／＼て居る。空からは縹渺たる天樂が、不斷に聞えて來る。おかんは、恍然としてさうした風物の中に、浸り切つて居た。樂しい日が續いた。暑さも寒さも感じなかつた。色食の慾もなかつた。百八の煩惱は、夢のやうに心の中から消えて居た。極樂の空がほがらかに澄んで居るやうに、心の中も朗らかに澄んで居た。

「ほんとうに極樂ぢや。針で突いたほどの苦しみもない」と、おかんは宗兵衛の方を顧みて云つた。が、宗兵衛は不思議に、何とも答へなかつた。

　同じやうな日が、毎日／＼續いた。毎日毎日春のやうな光が、空に溢れて居る。澄み渡つた空を、孔雀や舍利が、美

しい翼を廣げて舞ひ遊んで居る。娑婆のやうに悲しみも苦しみも起らなかつた。風も吹かなかつた。雨も降らなかつた蓮華の花の一片が、散るほどの變化も起らなかつた。おかんの心の中の目算では、五年ばかりも蓮の臺に坐つて居たゞらう。「何時まで坐るんぢやろ。何時まで坐つとるんぢやろ」と、おかんは或日ふと宗兵衛に訊いて見た。それを聽くと宗兵衛は一寸苦い顏をした。「何時までも、何時までも、何時までもぢや」と、宗兵衛は吐き出すやうに云つた。
「そんな事はないぢやらう。十年なり二十年なり坐つて居ると、又別な世界へ行けるのぢやらう。」と、おかんは、腑に落ちないやうに訊き返した。

宗兵衛は苦笑した。

「極樂より外に行くところがあるかい」と、云つたまゝ默つてしまつた。さう聽かされて見ると、おかんにも宗兵衛の云つて居る事が、本當であることが、解つた。御門跡樣のお話にも、お寺樣の話の中にも、極樂以上の世界があることなどは、まだ一度も聽かされたことがなかつた。もう、自分達も佛になつて居る以上、それより外になり樣はないのだと思つた。また五年ばかりの間、おかんは樂しく暮すことが出來た。何と云つても、苦勞の少しもないのが、嬉しかつた。微妙な天樂の響きに耳を傾けて居ても、一日位は退屈しなかつた。が、五年ばかり經つた時に、おかんはまた亭主に訊いて見た。「何時まで、坐つて居るのぢやろ。何時が來たら、變つたところへ行けるのぢやろ」
「何時までも、何時までも、何時までもぢや」と、宗兵衛は、五年ばかり前と同じやうに、苦い顏をして答へた。おかんは、亭主が不快さうな顏をしたので、少し悄氣たまゝ默つてしまつた。また二年か三年過ぎた。毎日同じやうな平和な無事な樂しい日が續いた。おかんは、一日〳〵ぼんやりと暮した。が、初て極樂に來た時のやうに、七重の寶樹を見ても、餘り有難いとも思へなかつた。加陵頻迦の鳴いて居るのを聞いても、餘り微妙だとも思へなくなつた。が、娑婆に居た時のやうな悲しみや苦しみは少しもなかつた。其の中に、五年ばかり日が經つた。
「何時まで坐つて居るのぢやらう。何時まで、かうして坐つて居るのぢやらう」と、おかんは久し振に、宗兵衛に訊い

て見た。

「くどい！何時までも、何時までも、何時までもぢや」と、只さへ無口になつて居る宗兵衞は、無愛相に云つたまゝ、瞑目してしまつた。

　無事な平穏な日が、五年經ち、十年經ち、二十年經ち、三十年經つた。もうおかんが、極樂へ來てからも、五十年近くの日が經つた。最初は、あのやうに壯嚴美麗に感ぜられた七重の羅網も、七重の行樹も、何の感銘をも、おかんの心に與へなかつた。加陵頻迦の鳴き聲も、もう此の頃では、うるさく耳に付き出した。五十年近くの間、毎日同じものを見て居るので、見るものにも、聞くものにも飽いてしまつたのである。

「ほんまに、何時までも、玆に坐つとるものか知らん。百年か千年か、坐り續けたら、何處か別な所へ行けるのではないかしら。」

　もう、何十年振かにおかんは、そんな疑問を宗兵衞に訊いて見た。その宗兵衞の顏さへ、年が年中五寸と離れない所にあるので、此頃は何となく鼻に付きかけて居る。

「くどい！。何時までも、何時までも、何時までもぢや」と、宗兵衞は何十年か前に云つた答を繰り返した。

　ものうい倦怠が、おかんの心を喰ひ始めた。娑婆に居る時は、信心の心さへ厚ければ、未來は極樂淨土へ生れられんのだと思ふと、一日〳〵が何となく樂しみであつた。あの死際に、可愛い孫女の泣き聲を聞いた時でも、お淨土の事を一心に念じて居ると、あの悲しさうな泣き聲までが、いみじいお經か何かのやうに聞えて居た。娑婆から極樂へ來る迄の、あの氣味の惡い、薄闇の中を通る時でさへ、未來の樂しみを思ふと、一刻でさへ足を止めたことはなかつた。あるな單調な長い〳〵道を辿つた時でも、心だけは少しも退屈しなかつた。不退轉の精神が、心の裡に燃えて居た。ところが、その肝心の極樂へ來て見ると、如何にも苦も悲しみもない、老病生死の危もない、平穩な無事な生活が、永遠に續いて行くのである。が、おかんには、今日と同じ日が何時まで何時までも續くかと思ふと、立つて居ても堪らないやう

な退屈が、ヒシ〳〵と感ぜられるのであつた。が、おかんが退屈しようがしまいが、お介意なしに同じやうな平穩な平和な光明の滿ち溢れた日が、毎日〳〵續いた。

それから、また十年も經つた頃であつた。その頃になると、おかんと、宗兵衞とはかたみ代りに、欠伸ばかり續けて居た。或日のこと、おかんはふと氣が付いたやうに云つた。

「地獄は何んな處かしらん」

おかんに、さう訊かれた時、宗兵衞の顏にも、華やかな好奇心が突嗟に動くのが見えた。

「さう？。何んな處だらう。恐ろしいかも知れん。が、玆ほど退屈はしないだらう」さう云つたまゝ宗兵衞は、默つてしまつた。おかんも、それ以上は、話をしなかつた。が、二人とも心の中では、地獄の有樣を各自に、想像して居た。

又五年經ち十年經つた。年が經つに連れて、おかんは極樂の凡てに飽いてしまつた。五十年七十年の間、蓮の花片一つ落ちるほどの變化さへなかつた。宗兵衞とも餘り話をしなかつた。凡ての話題が、彼等に古くさくなつてしまつたのである。彼等がまだ見た事のない「地獄」の話をする時だけ、彼等は不思議に緊張した。各自の想像力を、極度に働かせて、血の池や劍の山の有樣をいろ〳〵に話し合つた。

かうして、二人は同じ蓮の臺に、未來永劫坐り續けることであらう。彼等が行けなかつた「地獄」の話をすることをたゞ一つの退屈紛らしとしながら。

——四月十四日——

# ■編輯室より■

■本號のクロポトキン著作總評は、大體に於てクロポトキンの思想を一とわたり紹介し、批評し得たと思ふが、何分普通號では紙數が思ふやうに取れないので、止むを得ず『田園工場及職場』伊藤野枝氏譯と、クロポトキン思想研究の參考として添へる筈であつた『社會連帶の思想』北澤新次郎氏の二篇は、遂に次號に延期することになつた。又大杉榮氏の『クロポトキンの社會科學』の一文も、次號へ廻すことになつたのは、殘念であつた。併し六月號は此等の眞摯なる研究と評論と、更に本誌特殊の計畫とを羅らして、深綠の讀書界に提供したいと思ふ。又堺利彦氏の『藝術的社會主義者ウイリアム・モリス』も、頁數不足の爲め來月廻しになつたことは、重ね重ね遺憾であつた。

■本號に寄せられた柳宗悅氏の『朝鮮の友に贈る書』は、朝鮮問題に關して種々なる禁令のある此際とて、其全文を掲載することが出來ないのを遺憾とする、併せて筆者及び讀者の御寬恕を乞ふ、尚今後朝鮮問題や、彼地の事情に就ても追々紹介して此頁大問題の圓滿なる進行を期したいと考へて居る。


毎月一日發行一回

改造定價

| 册數 | 定價 | 郵税 |
| --- | --- | --- |
| 壹册 | 七十錢 | 二錢 |
| 半ヶ年 | 四圓二十錢 | 不要 |
| 壹ヶ年 | 八圓四十錢 | 不要 |

外國行郵税は一部十四錢増大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依頼願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事
▼御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂

大正九年四月二十七日印刷納本
大正九年五月一日發行

本號定價　金七十錢

編輯發行兼印刷者　東京府中目黑七七〇　横關利藏太
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番　秀英舍
發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

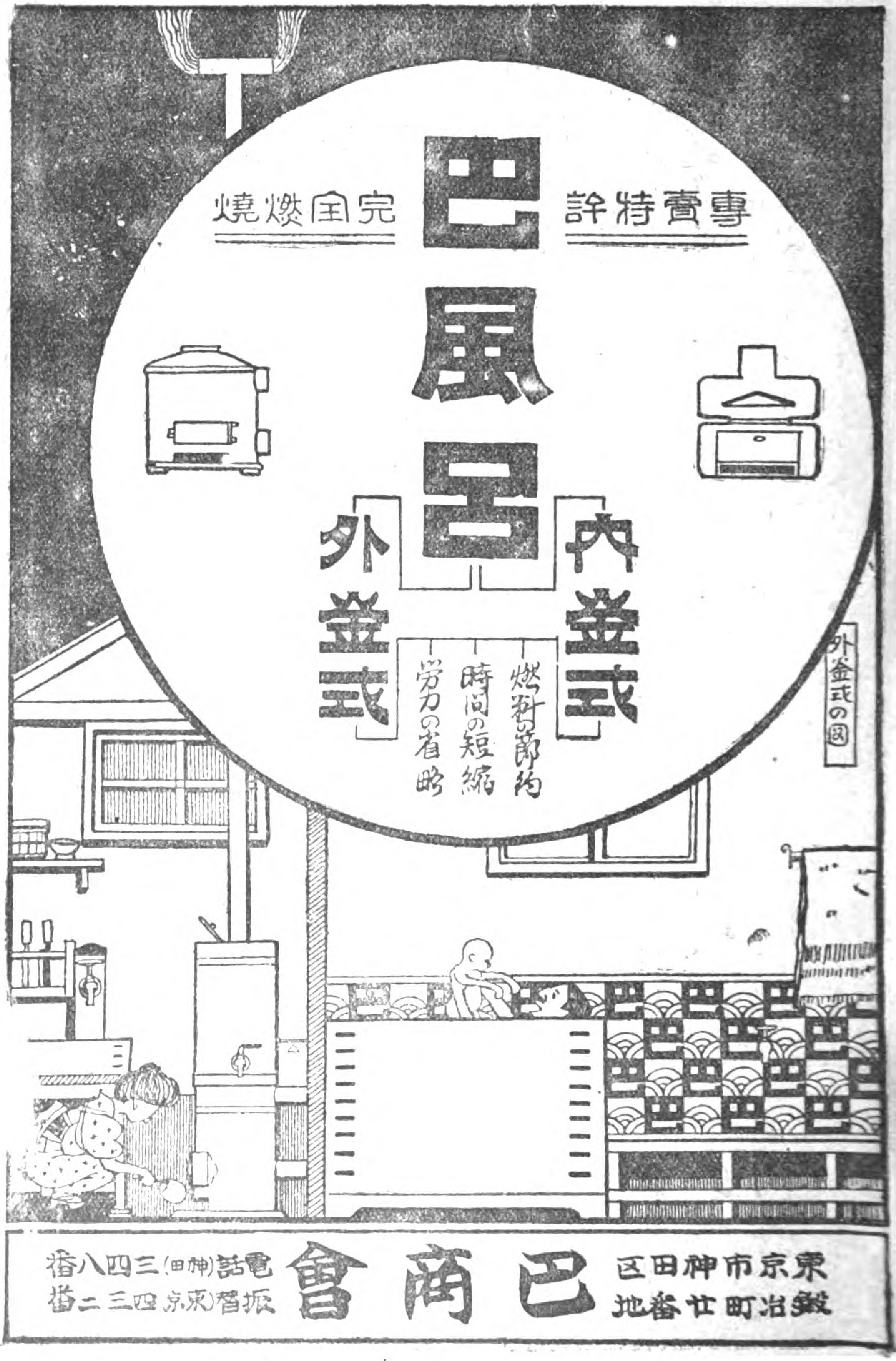
# 四月號正誤

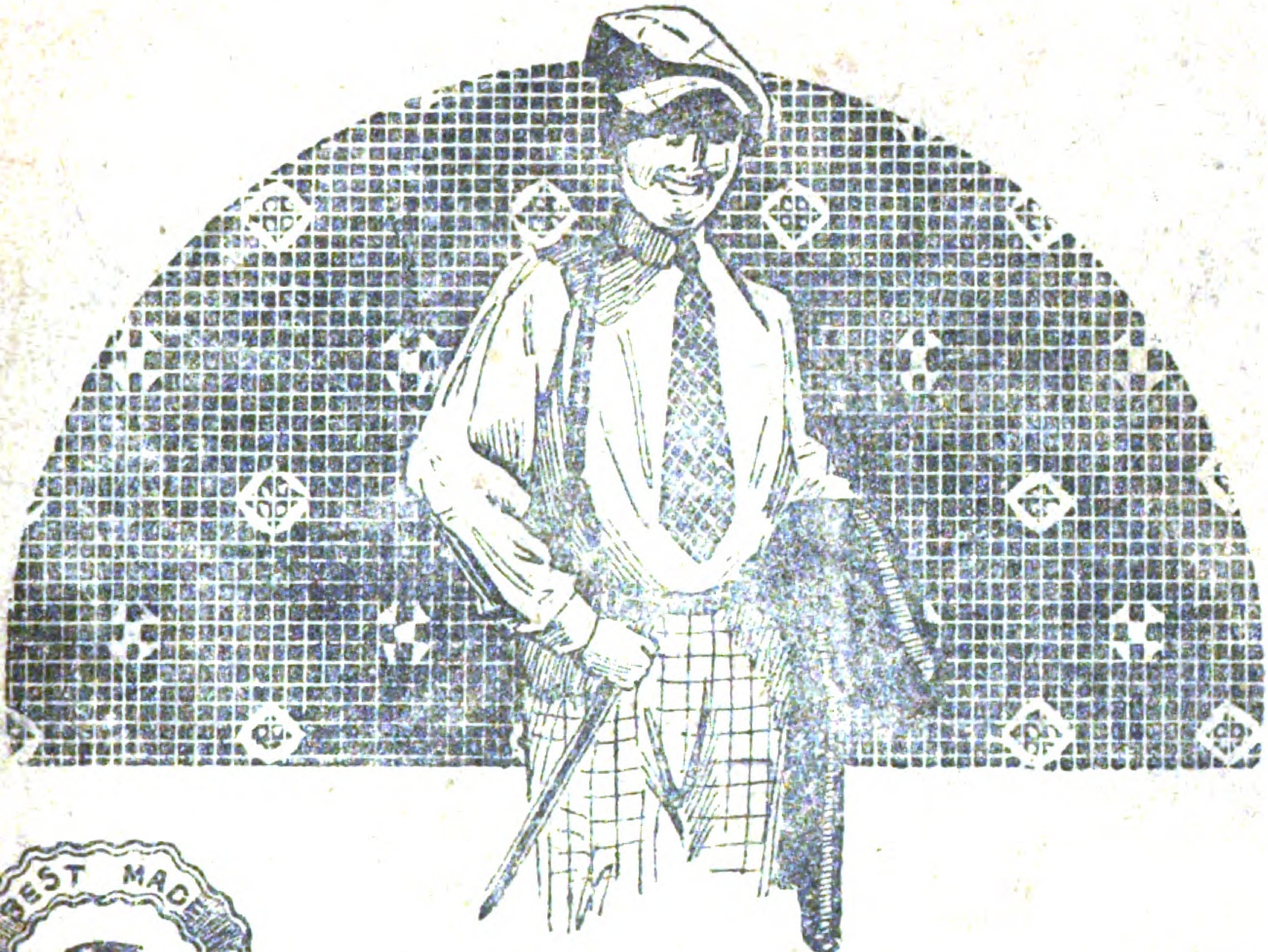
## 思想問題と哲學的精神

### 朝永博士の論文

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
| --- | --- | --- | --- |
| 三 | 八 | 結果が | 結果か |
| 四 | 一 | 大部で | 大部分が |
| 五 | 五 | 量に於て夫である‥が | 量に於て大である‥か |
| 五 | 一六 | 世界共者の下概念的にの上に括弧を脱す | |
| 五 | 一九 | 世界觀中 | 世界觀や |
| 六 | 三 | 當爲の要求を充たす世界で<br>あらねばならぬ世界 | 當爲の要求を充たす世界<br>あらねばらぬ世界 |
| 六 | 九 | Hypostasiruuy | Hypostasirung |
| 六 | 一八 | 實在性 | 實體性 |
| 七 | 一六 | 自意的 | 有意的 |
| 八 | 七 | 標準なるものと | 標準とするものと |
| 九 | 三 | 碌の圏域 | 等の圏域 |
| 九 | 六 | 邪途 | 邪逕 |
| 一〇 | 一一 | 認定 | 認容 |
| 一〇 | 一二 | 利 | 知 |
| 一〇 | 一四 | 特殊の | 特殊學の |
| 一〇 | 一六 | 彼れの物理學に | 彼等に |

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
| --- | --- | --- | --- |
| 一一 | 一四 | 「ピゴツト」 | 「ピゴツト」、 |
| 一一 | 一六 | 基督、教哲 | 基督教、哲學 |
| 一二 | 二 | Drachensaat | Drachensaat」 |
| 一二 | 七 | ‥ではないから、第一に | ‥ではないから、第二に |
| 一三 | 七 | 哲學精神的 | 哲學的精神 |
| 一四 | 三 | 大自然、巨大 | 大自然、「巨大 |
| 一五 | 一〇 | 人性は眞面 | 人生は眞面 |
| 一五 | 一五 | 凡屑 | 凡庸 |
| 一六 | 三四 | 而して國家の下、なるものの上に括弧を脱す | |
| 一六 | 五 | 持 | 待 |
| 一六 | 六 | あらう | ある |
| 一七 | 一六 | 反 | 到 |
| 一九 | 一八 一九 | 即ち | 殊に |
| 二〇 | 三 | 共通例 | 其適例 |
| 二〇 | 五 | とは哲學の | ことは哲學の |
| 二〇 | 六 | 附加 | 附和 |
| 二〇 | 一一 | 價値判斷たり | 價値判斷の標準たり |
| 二一 | 一六 | こととある | ことである |
| 二二 | 四 | 此論 | 比論 |
| 二二 | 一三 | ライエルマツヘン | ライエルマツヘル |
| 二三 | 四 | 專攻者に | 專攻者に |


專賣特許
巴風呂
完全燃焼
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番



BEST MADE CAP GUARANTEED

赤帽印新製品
レース模樣ネクタイ
風輕に。
十目の視るところ

發賣元 南商店